

学習院大学史料館所蔵史料目録 第三号

中川善之助寄贈文書
(上)

序 文

今回目録に収めた文書は、かつて本学法経学部（のち法学部）学部長を勤められ、また民法学者として著名であった故中川善之助氏が、その研究史料として収集・所蔵されたものを氏の御遺族（中川綾子氏）から昭和五一年当館に寄贈されたものである。

その内容は、氏が永年東北大学に勤務された関係から仙台藩関係の古文書が多く、他に隣接する会津藩関係のものも若干含まれている。また京・大阪など畿内町方関係のものも多く、なかでも相続・養子関係文書が目立っている。明治以降のものでは、中川氏初期の代表的業績の一つである末子相続論と関連した信州諏訪地方関係の文書が多い。そのほか氏の草稿類も若干含まれている。また戦後のものとしては氏が委員として関与された民法改正、著作権、社会福祉、老人福祉関係の史料も含まれており、日本史研究者のみならず、法学、社会学研究者にも寄与するところが多いと思う。

本来当館では所蔵史料目録の作成刊行を第一次作業としてすすめているが、諸種の事情から今回は目録のほかに史料を併録することとし、仙台藩・会津藩関係の冊子類を除くほとんどの古文書類を収録した。

なお、この文書は本学法学部教授遠藤浩氏の御斡旋によって当館に入ったものであり、本書の作成には主として篠沢治子・齋藤洋一・高沢憲治・須田由美子の諸氏があたった。

昭和五三年三月二五日

例 言

一、本書は、昭和五十一年に令夫人中川綾子氏より学習院大学史料館に寄贈された、故中川善之助氏所蔵文書の目録と史料の一部である。

一、文書目録は、利用上の便宜を考慮して独自の分類を施し、文書は各分類ごとに編年することを原則とした。そのさい、外国固有の年号表記は日本年号に改めた。

一、文書の作成年代のうち目録作成者が推定したもの、および文書名のうち目録作成者がつけたものには（ ）を付した。なお、一括した方がよいと判断した文書群は、総括表題を【 】で示した。

一、文書の差出（作成）人・受取（宛名）人は、次の様な方法で示した。「A↓B」の場合は、Aが差出（作成）人で、Bが受取（宛名）人ということ。単に「A」の場合は差出（作成）人のみ、逆に、「↓B」の場合は受取（宛名）人のみ判明することを示す。

一、文書の形態のうち縦は縦帳、横は横帳、巻は卷子を示す。また、形態の下の（板）は木版印刷、（謄）は謄写印刷（印）は活字印刷・その他を示す。なお、判型の判明するものはその判型をあわせて示した。そのさい、判型の判明する活字印刷については（印）を省略した。

一、史料は、仙台藩・会津藩関係の冊子を除く古文書のほとんどを収録した（本書未収録の古文書は、※で示した）。

一、史料筆写は、通例の古文書筆写要項に従った。なお、闕字は一字あけ、平出・擡頭は二字あけで示し、変体仮名は江のみを残し、他はすべて平仮名にした。また、虫損・破損はその状態によって□□「」で示した。

中川善之助寄贈文書(上) 目次

目録の部 1

A 古文書 3

冊子類

状・綴類

a 武家関係

b 町方・村方関係

c 丸屋相統一件

d 堺道具屋関係

e 譲り状(小川通上鍛冶町関係)

f 譲り状(石原屋関係)

g カヤ芸妓営業一件

絵図・地図

B 印刷物・その他 23

中川善之助原稿類

末子相続・諏訪地方古文書調査関係

印刷物・その他

史料の部 45

古証文集

離縁出入につき返答書

武家関係

町方・村方関係

丸屋相続一件

堺道具屋関係

小川通上鍛冶町関係

石原屋関係

カヤ芸妓営業一件

中川先生のことども 253

遠藤 浩 253

目
録
の
部

A 古文書

冊子類

文書 番号	年 代	文 書 名	形態 数量
※一	(延宝三年～明治三年)	(敵討・仕置その他留書)	横 一
※二	(延宝五年～文政七年)	(仙台藩触留)	横 一
※三	(元禄六年一月～宝暦二年五月)	服忌合	横 一
四	(元禄八年二月～明治八年一月)	古証文集(質地・借金証文などの写)	縦 一
※五	(宝永六年三月～安永九年六月)	法禁 卷之中(仙台藩触留)〔仙台叢書 二〕に収録	縦 一
※六	(宝永七年一月～六月)	(仙台藩評定所記録)	縦 一
※七	(享保一三年)	落穂集 上下(写)〔大道寺友山〕〔改定史籍集覧 一〇〕などに収録	縦 二
※八	(享保～元文)	(江戸・仙台勤方条目)	縦 一
※九	(寛保元年)	律令要略書 乾 坤(沼尾鄰蔵本)〔氏長序〕〔近世法制史料叢書 二〕に収録	縦 二
※一〇	宝暦四年写	南留別志(源充実写)〔获生徂徠〕〔日本隨筆大成』第二期八卷などに収録	縦 一
※二	(宝暦一年一月二月)	(仙台藩評定所記録)	縦 一
※三	(安永三年～安政五年)	諸願達編集	縦 一

※三 文化八年正月写

※四 (文化一四年七月七日)

※五 (文政一二年)

※六 (天保四年~六年)

一七 嘉永六年七月二日

※六 (明治三年)

御礼廻并五節句御定之覚〔藤原尚中〕

御法度書 (会津藩) 卷一・卷二・卷三合卷

御法度書 (会津藩) 卷四・附録合卷

御触留 (仙台藩)

〔離縁出入につき返答書〕〔武州新座郡下内間木村百姓岡右衛門他一名↓奉行所〕

手控 (北海道開拓關係記録、昭和七年松原甲介写)〔伊達邦成記〕

横 一

縦 一

縦 一

縦 一

縦 一

横 一

状・綴類

a 武家關係

一九 元和元年一月一五日

二〇 元禄一四年五月

二一 宝永四年六月二三日

二二 宝永七年一二月九日

二三 享保元年八月

二四 享保七年

二五 (享保一二年三月)

二六 元文三年二月

二七 元文五年二月八日

〔嗣子目見願〕〔松木半兵衛↓浜田利左衛門他二名〕

〔隠居・家督相続願〕〔松木半兵衛・松木庄左衛門↓主殿他三名〕

〔平原六兵衛扶持方証文〕〔奥瀬内記他三名↓平原六兵衛〕

〔平原久兵衛跡式相続証文〕〔漆戸玄蕃他四名↓平原久兵衛〕

〔目々沢三内跡式相続一件書〕

〔智養子貰請許可願〕〔平原久兵衛↓目付中〕

〔伊達安芸養子一件書〕

〔平原久兵衛由緒書〕〔平原久兵衛↓築田物集女他一名〕

〔隠居・家督相続願下書〕〔平原久兵衛↓目付衆中〕

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

5 a 武家関係

※六 文化二年三月

元 文政九年七月

三 天保三年閏一月

三 嘉永五年六月

三 慶応四年六月二十六日

三 (欠年) 九月六日

三 巳年一二月

三 (欠年) 二月

三 (欠年)

三 (明治五年) 五月

元 明治一一年五月二七日

元 明治一一年七月五日

四 (明治一一年)

b 町方・村方関係

四 元禄五年七月

四 宝永六年七月七日

(平原家系図)〔久兵衛吉長↓金藏〕(断簡)

(隠居引移りにより隠居分等につき申渡)〔実徳↓古内幸次郎〕

(跡式相続願写)〔平原庄兵衛↓目付〕

(今朝之進据物切取立願)〔組据物切鈴木弥寿長↓三太夫他一名〕

(弟の養家先養子除き願書)〔佐藤有見信秀↓広人他三名〕

(名跡相続願)〔大畠官兵衛↓小泉長門他一名〕

(縁組願書)〔奥田養浩↓松田翁他六名〕

(養女差遣わし願書)〔榎本万平↓山田幸右衛門他一名〕

(松田彦惣判鑑札)

(世襲の卒を士族編入の太政官布告の廻状)〔針生彦三郎↓二日町伍長衆中〕

綴

(離婚につき条約書)〔伊東祐信保証人氏家竹之助↓熊谷升直代理高泉庄寛〕

状

(離婚につき送籍請証)〔一三小区戸長船越孝里↓八小区戸長中〕

(士族高泉兼広家戸籍)

状

(分地制限などの公儀触請状)〔下総国相馬郡伝兵衛他四二名↓名主五郎兵衛他三名〕

状

(跡式相続出入和談につき一札)〔歌津村肝入善左衛門他二名↓新城

状

一

状

一

状

一

状

一

綴

一

札

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

二

7 b 町方・村方関係

英 安永四年九月八日
 不通養子証文之事〔実父新藤真慶他三名↓島池九兵衛〕
 ※吾 (安永六年)
 強訴御条目 〔牧民金鑑〕下卷七二八〜七二九頁とほぼ同文〕
 卷

英 天明四年五月一日
 〔捨子発見につき届書〕〔平野屋嘉兵衛他一名↓奉行〔東番所〕〕
 状

英 天明四年五月一六日
 〔夜番人同道出頭届書〕〔平野屋伊兵衛↓奉行〕
 状

亥 天明四年五月一六日
 〔捨子一件につき夜番人詫状〕〔播磨屋勘助他二名↓奉行〕
 状

亥 天明四年五月一八日
 〔捨子養子に貰請願書〕〔貰人和泉屋平右衛門他三名↓奉行〕
 状

空 天明四年五月一八日
 〔捨子養子に差遣わすにつき一札〕〔平野屋嘉兵衛↓年寄今宮屋伝兵衛〕
 状

空 天明四年五月一八日
 〔捨子貰請につき一札〕〔撰州東成郡天王寺村和泉屋平右衛門他一名↓塩町四丁目平野屋嘉兵衛〕
 状

空 天明四年五月一八日
 〔捨子貰人へ差遣わすにつき丁内廻状〕〔年寄〕
 状

空 天明七年三月
 〔彈出奔につき離縁一件吟味願書〕〔安房国長狭郡寺門村利右衛門〕
 状

空 寛政一〇年四月
 〔実父病身につき親里への引越許可願〕〔久右衛門後家まつ他六名↓村役人〕
 状

空 寛政一一年正月
 〔下質送議定一札、ただし裏面に村内取締触書写あり〕〔酒詰村下質送人八左衛門他一〇名↓台宿村五郎兵衛〕
 状

空 寛政一三年正月
 〔不縁帰村につき宗門帳除籍依頼状〕〔濃州不破郡表佐村庄屋与左衛門他一名↓坂田郡下坂中村役人〕
 状

空 享和二年三月
 〔久右衛門後家他方へ再婚につき取戻吟味願書〕〔組合徳右衛門他四名↓杉浦縫右衛門〕
 状

名↓杉浦縫右衛門)

状

- 己 文化二年二月
 (相統養子貫請証文)〔川原尻町茨木甚三郎↓亀城河原町垂水栄治郎〕
 状 一
- 七 文化二年七月二十五日
 (離縁につき出産養生・小児養育料請取証)〔和泉屋好兵衛他二名↓
 田中市兵衛〕
 状 一
- 三 文化二年七月
 (離縁につき出産養生・小児養育料受取証)〔摂州東成郡下辻村芳兵
 衛他二名↓田中市兵衛〕
 状 二
- 三 文化七年三月二〇日
 (相統人幼少につき大工職印札ならびに仕事場先村々預け証)〔襄輪
 村大工徳兵衛他一名↓菱江村大工与兵衛〕
 状 一
- 四 文化七年三月二〇日
 (大工職印札ならびに仕事場先村々預り証)〔菱江村大工与兵衛他一
 名↓襄輪村大工徳兵衛〕
 状 一
- 五 文化一〇年一二月
 (養親死去につき不通養女・遺物金引渡し一札)〔伊丹屋宗八他一名
 ↓八文字屋半左衛門〕
 状 一
- 六 文化一〇年一二月
 (養親死去につき不通養女・遺物金請取一札)〔八文字屋半左衛門↓
 伊丹屋宗八他一名〕
 状 一
- 七 文化一五年六月
 (不通養子貫請証文)〔南都下三条林小路養子親安兵衛他一名↓多賀
 村八左衛門〕
 状 一
- 八 文政六年一月二五日
 (捨子不通養子貫請証文)〔三栖村之内六軒町養子親百姓庄兵衛他一
 名↓材木丁組過書町年寄・丁中〕
 状 一
- 九 文政九年一月
 (荒道具質改所よりの借銀返済一件出訴願下げにつき返済方一札)
 〔二条川東讃州寺町年寄長兵衛五人組五兵衛他一名↓荒道具質改所〕
 状 一
- 〇 文政一〇年二月
 (養養子先不縁の次男再縁につき実父よりの一札)〔江戸日本橋西川〕
 状 一

六 文政一三年閏三月

岸松本十三郎他一名↓新官村上村常右衛門他一名

状

〔年季奉公人請状〕〔苦竹村原ノ町奉公人三太郎他二名↓小谷屋新右衛門〕

状

六 文政一三年一二月

不通養子手形之事〔松原村祖父嘉七他二名↓名柄村島屋徳兵衛〕

状

六 天保三年八月一四日

〔喜六養子喜太郎不縁一件落着につき一札〕〔大安寺村取暖人喜兵衛他一名↓芝新屋町堺屋喜六〕

状

六 天保三年八月

〔養子不縁につき取替証文〕〔大坂南久太郎町小山屋重郎兵衛他一名↓芝新家町堺屋喜六〕

状

六 天保三年八月

〔養子不縁につき是迄の旧功料請取証〕〔小山屋重郎兵衛↓堺屋喜六〕

状

六 (天保三年) 八月八日

〔堺屋一件取決めにつき書状〕〔京屋嘉吉↓治兵衛〕

状

六 (天保三年) 八月一六日

〔品物不足につき伺状〕〔京屋嘉吉↓まつ屋利兵衛〕

状

六 天保八年四月

〔不通養子貰受証文〕〔下立壳御前通東へ入扇屋金治郎他二名↓大坂屋常七〕

状

六 天保八年五月

〔不通養子貰受証文〕〔夷川小川西入町大石屋安兵衛他二名↓大坂屋常七〕

状

六 天保一〇年四月

不通養子一札之事〔実父八百屋庄七↓大和田屋彦三郎〕

状

六 天保一〇年四月

〔不通養子貰請証文〕〔加島村浜ノ町養父大和田屋彦三郎他一名↓八百屋庄七〕

状

六 天保一〇年九月

〔奉公人年季中解雇により同商売等差留の請状〕〔請人井筒や伊助他二名↓主人俵屋万兵衛〕

状

- 三 天保一〇年九月
 〔跡式処分出入につき願書〕〔安房国長狭郡北風原村永井幾右衛門代
 名主伝右衛門↓地頭役所〕
 状 一
- 四 天保一一年四月九日
 〔不通養子貫請証文〕〔元誓願寺七本松東へ入町貫主和久屋岩治郎他
 一名↓北野梅林坊〕
 状 一
- 五 天保一二年八月
 不通手形之事〔娘親小取村長兵衛他一名↓島屋よし〕
 状 一
- 六 天保一三年一二月
 養子娘証文之事〔二条川東新生洲町父山形屋礮吉他七名↓岩井おま
 き〕
 状 一
- 七 天保一三年一二月
 〔娘養女に差遣わすにつきこれまでの養育料請取証〕〔山形屋礮吉他
 七名↓岩井屋おまき〕
 状 一
- 八 天保一四年六月二日
 〔帳外娘の水死体取片付入費引受書〕〔葛上郡名柄村親類徳兵衛他二
 名↓同郡朝妻村役人中〕
 状 一
- 九 嘉永二年九月
 〔養子差遣わすにあたり両家往来音信の取決め〕〔橋本鍵屋久左衛門
 他一名↓大坂小橋屋権右衛門〕
 状 一
- 一〇 嘉永二年九月
 〔養子貫請にあたり両家往来音信の取決め〕〔大坂小橋屋権右衛門他
 一名↓橋本鍵屋久左衛門〕
 状 一
- 一一 嘉永三年一月
 〔養子貫受証文〕〔大宮仏光寺下町大坂屋伊三郎他二名↓尾張屋定七〕
 状 一
- 一二 嘉永四年正月
 〔離縁につき人別受取状〕〔宮城郡高城本郷肝入喜兵衛↓牡鹿郡湊村
 肝入検断清左衛門〕
 状 一
- 一三 嘉永四年三月
 〔不通養子貫請証文〕〔室町頭風呂之辻子養子親伊勢屋甚助他一名↓
 和久屋伊三郎〕
 状 一

惣代小川織部他一名↓星野一郎兵衛他四名)

二七 安政五年五月 一 生不通養子娘証文之事〔富小路通綾小路下ル町実父若狭屋栄助他六名↓八百屋おとよ〕 状 一

二八 安政五年五月 (一) 生不通養子娘に差遣わずにつきこれまでの養育料受納書)〔実父若狭屋栄助他六名↓八百屋おとよ〕 状 一

二九 安政七年三月 年季奉公人請状之事〔新田村人主治右衛門他一名↓部原村江沢潤助) 状 一

三〇 安政七年閏三月 (夫と死別につき人別送り戻し一札)〔相谷村庄屋文左衛門・西明寺↓中島村役人衆中・且寺) 状 一

三一 万延元年五月 (村内風儀不良につき取締方仮議定一札)〔忠右衛門他一六名) 状 一

三二 万延元年五月 (一) 生不通養子娘に差遣わずにつき樽代・追加樽代受納証)〔大坂屋宇八他二名↓近江屋常七) 状 一

三三 万延元年六月 (養子貰請につき人別請込証)〔高野領荒河小路村庄屋田中清右衛門↓海士郡日方組鳥井村役人衆中) 状 一

三四 万延元年一二月 一 生不通養子娘証文之事〔仏光寺通岩上東へ入実親丸屋ゆか他四名↓高台寺門前鷲尾町井筒屋きく) 状 一

三五 万延二年正月 (不通養子貰受証文)〔黒門丸太町上ル町武藏屋市三郎他二名↓尾張屋定七) 状 一

三六 万延二年正月 (縁組につき人別送り状)〔遠田郡中津山村肝入伝四郎↓牡鹿郡湊村肝入検断長南丈八) 状 一

三七 (文久元年) 九月五日 (捨女子丁内にて養育方下命につき伝達書)〔年寄↓丁人・家守中) 状 一

二三 (文久元年) 九月二三日

〔捨子預け賃等請取証〕〔榎屋万助〕

状

二三 文久元年九月

〔捨女子養女貰請につき一札〕〔屋代増之助代官所撰州河辺郡小中島村實人菊治郎他二名↓大坂塩町年寄丸屋藤兵衛他一名〕

状

二三 文久元年九月

〔捨女子の養女口入料銀受取証〕〔南農人町二丁目但馬屋安兵衛↓塩町四丁目丁役人中〕

状

二三 文久元年九月五日〜一〇月一九日

〔捨女子一件ならびに病死届〕

綴

文久元年九月五日

〔捨女子届書〕〔塩町四丁目年寄病氣につき月行司近江屋政七↓東町奉行所〕

文久元年九月二三日

〔捨女子養女貰請願書〕〔小中島村實人菊次郎他三名↓東町奉行所〕

文久元年九月

〔捨女子養女貰請願人引合書〕〔大坂塩町四丁目丁役人↓小中島村庄屋茂右衛門〕

文久元年一〇月二〇日

〔養女病死につき届書〕〔菊治郎他三名↓東町奉行所〕

文久元年一〇月二九日

〔病死の養女死骸片付につき一札〕〔菊次郎他三名↓奉行所〕

二三 (文久元年)

〔捨女子を實主へ遣わした際の諸人用控〕

横

二三 文久元年一月

一生不通養子娘証文之事〔荅貫町松原下ル下長福寺町越後屋安次郎他五名↓柳屋おやす〕

状

二三 文久元年一月

〔一生不通養子娘に差遣わすにつき樽代受取証〕〔越後屋安次郎他五名↓柳屋おやす〕

状

二三 文久元年一月

〔樽代受取証〕〔越後屋安二郎他一名↓柳屋やす〕

状

二三 文久三年五月

〔妹婿養子との財産相続争いにつき歎願書〕〔小路村清藏他一名↓地

方奉行観智院・真藏院

一三 文久三年一〇月

一生不通養子娘証文之事〔城州伏見墨浦組枳屋町実父越前屋清次郎他六名↓川村屋万助〕

状

一

一六 文久三年一〇月

〔一生不通養子娘に差遣わずにつきこれまでの養育料受取証〕〔実父越前屋清治郎他六名↓川村屋万助〕

状

一

一五 慶応元年一〇月

一生不通養子娘証文之事〔大坂大宝寺町中橋筋南江入山崎町実兄阿波屋安右衛門他四名↓紅屋亀次郎他一名〕

状

一

一四 慶応元年一〇月

〔一生不通養子娘に差遣わずにつきこれまでの養育料受取証〕〔実兄阿波屋安右衛門他四名↓紅屋亀次郎他一名〕

状

一

一四 慶応元年一〇月

〔養子娘につき人別送り状〕〔大坂山崎町丁役人↓京都祇園町丁役人〕

状

一

一四 慶応二年一二月

〔唐人屋跡式譲り請一札〕〔譲請主唐人屋忠七他二名↓喜多村松次郎〕

状

一

一四 慶応四年六月

一生不通養子娘証文之事〔不明門通五条下ル上平野町実父清水屋長右衛門他六名↓東井屋おいお他一名〕

状

一

一四 慶応四年六月

〔一生不通養子娘に差遣わずにつきこれまでの養育料受取証〕〔実父清水屋長右衛門他六名↓東井屋おいお他一名〕

状

一

一四 慶応四年八月

一生不通養子娘証文之事〔押小路通富小路東へ入町実母林屋ゑい他三名↓広島屋おまつ〕

状

一

一四 慶応四年八月

〔一生不通養子娘に差遣わずにつき樽代受取証〕〔林屋ゑい他三名↓広島屋おまつ〕

状

一

一四 慶応四年八月

〔一生不通養子娘に差遣わずにつき請書〕〔林屋ゑい他一名↓広島や

状

一

一四 辰年二月

おまつ)

(調達金献上そのほか奇特筋につき褒美金下賜・苗字御免状)〔↓名張町福喜多太兵衛〕

一四 午年九月

(縁組につき帯代・手当金請取一札)〔実母すて他二名↓井口繁平〕

一五 (欠年)

(葬式の仕方・片身わけ等につき遺言状)〔繁太郎↓七郎右衛門他七名〕

一五 明治二年八月

一生不通養子娘証文之事〔上京二十三番組上一文字町養父山崎屋嘉七他五名↓万屋おふき〕

一五 明治二年八月

(一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまでの養育料受取証)〔山崎屋嘉七他五名↓万屋おふき〕

一五 明治二年八月

(一生不通養子娘身元引受につき一札)〔みき養父山崎屋嘉七他三名↓万屋おふき〕

一五 明治三年正月

(縁組につき人別送り状)〔南境村肝入保蔵↓湊村肝入核断志摩屋清六〕

一五 明治三年二月

茶立女奉公人請状之事〔年季給金受取証・印鑑証共)〔実父山野屋久吉他三名↓近江屋常七〕

一五 明治三年一〇月

相続人送り手形之事〔江州坂田郡新庄馬場村庄屋半右衛門他一名↓町代衆中〕

一五 明治四年二月

一生不通娘証文之事〔江州坂田郡長浜横町実父桐畑儀平他五名↓土田喜兵衛〕

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

一

状

三

状

一

状

一

- 一五 明治四年二月
 一六 明治五年正月
 一七 明治七年一〇月
 一八 明治九年七月
 ※三 明治九年一〇月二〇日
 一九 明治九年一月二六日
 二〇 明治九年一月三〇日
 二一 明治九年二月二日
 二二 明治一六年一月
 二三 明治一六年二月二日
 二四 明治一六年七月一六日
 二五 明治二五年五月

(一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまでの養育料受取証)〔実父
 桐畑儀平他五名↓土田喜兵衛〕

(養男に縁組につき身元受証)〔湊村百姓伊予次他一名↓飯肝入検断
 清六〕

(新戸取立許可願ならびに許可書)〔福田林蔵他二名↓宮城県権令宮
 城時亮〕

(養女貫請につき持参金受取証)〔河内国讃良郡砂村福井定次郎↓和
 州北田原村上尾幸次郎〕

地券〔宮城県↓陸前国宮城郡高城本郷持主内海直之丞〕

(娼妓稼ぎにつき約定書)〔上福島郡木村音松他二名↓江島常七〕

(養女に差遣わすにつき一札)〔兵庫県川辺郡別所村松本弥平他三名
 ↓養父江島常七〕

(借入金返済方につき約定書)〔浅田鹿造他二名↓江島常七〕

雇人身元定約〔仙台区北田町佐藤つな他二名↓福田栄治郎〕

(娼妓植田エン私生児病死による火葬取計方につき一札)〔実兄植田
 安次郎↓江島常七〕

(離縁につき手切金及び養育料受領証)〔菅原サン他二名↓今野嘉吉
 他一名〕

(借入金確証ならびに芸者稼業契約書)〔松本うた・木村弥造↓江島
 常七〕

状 一
 状 一
 状 一
 状 一
 状 一
 状 一
 綴 一
 綴 一

- 一七 (明治二八年) (第四回内国勸業博覧会出品人往復船舶賃金割引証)〔宮城県〕
- 一七 (欠年) 一月二十六日 御日待面付覚 (傘連判に関する新聞切抜き共)
- ※一七 (欠年) 服忌日数分略
- ※一七 (欠年) 早見服忌令 (止善堂蔵板)
- 一七 (欠年) (東京洋服同業組合所定期証書・契約証)

c 丸屋相統一件

- 一五 享保四年九月六日 (養子貰請状)〔黒門通一条上ル町養子親井筒屋善兵衛他二名↓川勝寺村出在家町井筒屋九郎右衛門〕
- 一五 天明七年四月 (家内不如意につき暮方差図依頼状)〔五条新町南入松葉屋滝他二名↓九郎右衛門・一家中〕
- 一七 寛政九年六月 (糸割符店丸屋相統につき縁類・別家連印請書)〔井筒屋辻井九郎右衛門他七名↓倉光弁左衛門他一名〕
- 一七 (寛政九年) 閏七月 (糸割符店丸屋相統一件につきあとより印形依頼につき一札)〔吉田甚兵衛他五名↓辻井九郎右衛門〕
- 一七 寛政九年八月 (丸屋相統の養子を実父連帰る一件訴訟につき口上書)〔九郎右衛門他二名↓数主税〕
- 一八 寛政九年一〇月二六日 (丸屋相統出入一件につき親類・別家取決め書)
- 一八 寛政一〇年二月二〇日 (丸屋相統出入以後親類互いに申談すべき旨の済状)
- 一八 寛政一〇年二月 (丸屋源太郎死後相統出入一件和談につき届書)〔川勝寺村伝右衛門〕

札 七七

綴 一

状(板) 一

状(板) 一

状(印) 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

状 一

一三 (欠年) 四月二十六日

他五名↓教主税)

(吉辰養子引取祝儀につき挨拶状)〔田井九右衛門↓辻井九郎右衛門〕

状 状

d 堺道具屋関係

一四 正徳五年二月五日

帳切之事〔坂上隼人〕

状

一五 享保六年十一月一日

帳切手形之事〔藤井勝之進〕

状

一六 明和六年二月

奉公人請状之事〔南大工三町目請人和泉屋松右衛門他二名↓道具屋市左衛門〕

状

一七 明和八年正月

奉公人請状之事〔請人河内屋五郎兵衛他二名↓道具屋市左衛門〕

状

一八 明和八年正月

奉公人請状之事〔奉公人不奉公一件の取計方不埒につき詫の奥書あり〕〔泉州深井安村請人南村市郎右衛門他二名↓道具屋市左衛門〕

状

一九 天明三年正月

(銀子借用証文)〔預り主河内屋安右衛門他一名↓道具屋市左衛門〕

状

二〇 天明五年正月

(田畑譲り状)〔田畑譲り主米屋庄右衛門他一名↓道具屋市右衛門〕

状

二一 天明六年三月

奉公人請状之事〔受人大坂屋利兵衛他三名↓道具屋市右衛門〕

状

二二 天明七年二月

(銀子借用証文)〔摂州遠里小野村庄屋喜兵衛他七名↓内町貞齋〕

状

二三 寛政元年四月

(銀子借用証文)〔島屋新七↓道具屋市右衛門〕

状

二四 寛政三年九月六日

帳切手形之事〔入方梅園佐次右衛門〕

状

二五 寛政三年九月一日

帳切手形之事〔照洞院〕

状

一六 寛政六年三月

奉公人請状之事〔請人茶碗屋太兵衛他二名↓道具屋市右衛門〕

状

一七 寛政六年一二月

(銀子借用証文)〔遠里小野村庄屋三十郎他五名↓道具屋市右衛門〕

状

- 一六 寛政九年一二月 御田地引請一札之事〔引請人金田村利右衛門↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 一七 寛政一一年五月四日 〔蚊帳借用証文〕〔河内屋庄兵衛↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 一八 寛政一二年七月 下作請負一札之事〔網屋甚蔵↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 一九 (寛政) 〔蒲団借用証文〕〔榎並屋藤兵衛他一名↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 二〇 文化元年一二月 〔畑地譲り状〕〔譲り主河内屋小いさ他三名↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 二一 文化九年一二月 〔本銀返畑地譲り渡証文〕〔譲り主和泉屋庄左衛門他二名↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 二二 文政四年一二月 〔銀子借用証文・別紙共〕〔予州岩城三原屋長七↓道具屋市右衛門〕 状 二
- 二三 文政七年二月 〔銀子借用証文〕〔住吉丸由蔵他一名↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 二四 文政七年二月 〔銀子借用証文〕〔住吉丸由松他一名↓道具屋市右衛門〕 状 一
- 二五 文政一三年九月 〔銀子借用証文〕〔木屋弥平他一名↓金屋九兵衛〕 状 一
- 二六 天保五年六月 〔銀子借用証文〕〔沢之口村治介他三名↓道具屋市左衛門〕 状 一
- 二七 嘉永元年七月 〔銀子借用証文〕〔井川与三兵衛他一名↓柴屋三郎兵衛〕 状 一
- 二八 安政六年五月 〔田地質物証文之事〕〔質置主伝兵衛他一名↓信十郎〕 状 一
- 二九 文久元年六月 〔奉公人請狀之事〕〔和泉屋新助他一名〕 状 一
- 三〇 文久三年八月 〔銀子借用証文〕〔升屋音吉他一名↓年寄道具屋市郎右衛門〕 状 一
- 三一 文久四年正月 〔田地建家屋敷畑質物証文之事〕〔質置主仁兵衛他一名↓李太良〕 状 一
- 三二 子年三月 〔金子借用証文〕〔梅香院納所他一名↓帰依講世話人中〕 状 一
- 三三 戌年一二月 〔金子借用証文〕〔梅香院代勤兵衛↓帰依講世話人中〕 状 一

e 譲り状 (小川通上鍛冶町関係)

- 三六 享和二年七月四日
〔地屋敷譲り状〕〔高島屋儀右衛門↓小川通上鍛冶町年寄庄兵衛・五人組町中〕
状 一
- 三七 文化一二年一二月一四日
〔家屋敷譲り状〕〔高島屋半兵衛↓小川通上鍛冶町年寄平左衛門・五人組町中〕
状 一
- 三八 文政四年八月一四日
〔家屋敷譲り状〕〔高島屋こう↓小川通上鍛冶町年寄藤兵衛・五人組町中〕
状 一
- 三九 文政八年五月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔高島屋まつ↓小川通上鍛冶町年寄平左衛門・五人組町中〕
状 一
- 四〇 文政八年五月二四日
〔家屋敷再譲り状〕〔高島屋たみ↓小川通上鍛冶町年寄平左衛門・五人組町中〕
状 一
- 三一 弘化二年九月一四日
〔家屋敷譲り状〕〔菱屋喜兵衛↓小川通上鍛冶町年寄庄助・五人組町中〕
状 一
- 三二 嘉永元年八月四日
〔家屋敷再譲り状〕〔高島屋まつ↓小川通上鍛冶町年寄庄助・五人組町中〕
状 一
- 三三 嘉永四年一二月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔富田屋吉兵衛↓小川通上鍛冶町年寄庄助・五人組町中〕
状 一
- 三四 嘉永四年一二月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔高島屋まつ↓小川通上鍛冶町年寄庄助・五人組町中〕
状 一
- 三五 明治三年三月
〔家屋敷・地屋敷譲り状〕〔八文字屋ゑい↓小川通上鍛冶町年寄庄次郎・町中〕
状 一

三六 明治五年一月
〔家屋敷譲り状〕〔岩佐利兵衛↓小川通上鍛冶町戸長松田龜次郎・町中〕 状

f 譲り状 (石原屋関係)

三七 文政八年五月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋宇八↓堺町通八百屋町年寄伝助・五人組町中〕 状

三八 文政一〇年二月四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋むめ↓八百屋町年寄伝助・五人組町中〕 状

三九 文政一〇年二月四日
〔家屋敷再譲り状〕〔石原屋宇八↓堺町通八百屋町年寄伝助・五人組町中〕 状

四〇 天保三年九月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋宇八↓八百屋町年寄伝助・五人組町中〕 状

四一 嘉永三年六月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋むめ↓八百屋町年寄彦兵衛・五人組町中〕 状

四二 嘉永三年六月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋卯八↓八百屋町年寄彦兵衛・五人組町中〕 状

四三 元治元年三月二四日
〔居宅家屋敷再譲り状〕〔石原屋卯八↓八百屋町五人組彦兵衛・忠次郎・町中〕 状

四四 元治元年三月二四日
〔家屋敷譲り状〕〔石原屋卯八↓八百屋町五人組彦兵衛・忠次郎・町中〕 状

四五 明治六年
〔地屋敷売渡につき町中への念書一札〕〔売請人鹿島弁蔵・売主橋本卯八↓堺町通八百屋町戸長越智忠次郎・町中〕 状

g カヤ芸妓営業一件

四六 明治一七年三月一五日
実子アル者養女貰請願〔吉川清兵衛他三名↓大阪府北区長鹿島弥兵衛〕 綴

四七 明治一七年三月一八日
〔養女に差遣わすにあたり実家絶家の節は復籍の積りの連帯約定証〕 一

三六 明治一七年三月

〔実親小沢佐助他四名↓吉川清兵衛〕
〔養女に差遣わすにあたり実家絶家の節は復籍の積りの約定証〕〔実親小沢佐助他二名↓養親吉川清兵衛〕

状
—

三九 明治一七年三月

〔養女芸妓営業希望につき実親連帯依頼確証〕〔実親小沢佐介他一名↓吉川清兵衛〕

状
—

四〇 (明治一七年)

〔養女芸妓営業希望につき実親依頼連帯確証〕〔実親小沢佐助他四名↓吉川清兵衛〕

状
—

四一 明治一八年六月一五日

〔金円借用証文〕〔↓吉川清兵衛〕

状
—

四二 明治一八年一二月三〇日

〔金円借用証文〕〔↓吉川清兵衛〕

状
—

四三 明治二一年四月二七日

〔養女の縁にて借金につき取決め証書〕〔小沢左介↓吉川清兵衛〕

状
—

四四 明治二一年四月二七日

〔金円借用証文〕〔小沢左助↓吉川清兵衛〕

状
—

四五 明治二一年六月二一日

〔借用金円受取証文〕〔小沢与一他一名↓吉川清兵衛〕

状
—

四六 明治二三年三月六日

〔金円借用証文〕〔小沢与市他二名↓吉川清兵衛〕

状
—

四七 明治二三年三月六日

〔借金返済しない内は以後新規借金頼まない旨差入証〕〔小沢与市他二名↓吉川清兵衛〕

状
—

四八 明治二七年一二月二七日

〔カヤ身請につき芸妓営業中の負債償却金等受取証写〕〔吉川清兵衛↓豊田お艶〕

状
—

四九 (明治二七年)

〔養女芸妓廃業の内祝金受取証〕〔↓吉川清兵衛〕

状
—

五〇 明治二七年一二月二八日

〔金円請取証〕〔小沢佐助他一名↓吉川吉兵衛〕

状
—

五一 (欠年)

根書〔大阪府下東成郡西玉造村東雲町実兄小沢与一他二名〕

状
—

絵図・地図

二五	天保六年	信濃国大絵図 全	絵図(板)	一
二五	(文久)	文久改正信濃国細見全図〔奈良仁竜堂版〕	絵図(板)	一
二五	(欠年)	信濃国全図 附高	絵図(板)	一
二五	(欠年)	(信濃国絵図)	絵図	一
二五	明治一八年九月	長野県管内信濃国全図(三〇万分一尺度)〔長野県西沢喜太郎出版〕	地図(印)	一

B 印刷物・その他

中川善之助原稿類

文書 番号	年 代	文 書 名	形 態	数 量
二五	大正一二年五月	Über die japanische Erbsfolge	(独文タイプ)	一
二五	大正一三年一月二〇日	On Historical Jurisprudence	(英文タイプ)	二
二五	昭和二八年一〇月	身分法百年の歩み(講演要旨ならびに資料)	縦	一
二六	(欠年)	相続廃止に関するソビエトの法律	箋	二
二六	(欠年)	(自由離婚等についての覚書)	カード	一
二三	(欠年)	民法改正覚之帳(新聞連載切抜)①⑬	綴(印)	一

- 二六三 (欠年) Ein Beitrag zur Untersuchung der Ulimigentur in Japan (独文タイプ) 二
 二六四 (欠年) ON JAPANESE MARRIAGE AND DIVORCE LAW (印) 一
 二六五 (欠年) (末子相続の諸問題の原稿ならびに附図) 綴 一・四 五
 二六六 (欠年) (末子相続についての聴取ノート) 綴 一

末子相続・諏訪地方古文書調査関係

- 二六七 明治一二年 諏訪村内概況取調書〔長野県勸業課〕 綴 二
 二六八 明治一四年一月(昭和九年写) 古席系図(諏訪郡関係抄録)〔竹内勝蔵写〕 綴 一
 二六九 (欠年) (諏訪地方村々壬申戸籍よりの抜書) 綴 一
 二七〇 (欠年) 高島藩^{三手}宗門帳^{三手}現存総目録〔五味栄〕 綴 一
 二七一 大正一二年一二月 江戸時代民政史料目録〔落合小学校〕 綴 一
 二七二 大正一五年一二月 (江戸時代史料目録)〔豊平小学校〕 綴 一
 二七三 昭和元年一二月 (江戸時代史料目録)〔下諏訪小学校〕 綴 二
 二七四 昭和二年一月 江戸時代史料目録〔原村小学校〕 綴 一
 二七五 昭和二年三月二三日 江戸時代史料目録〔永明小学校〕 綴 一
 二七六 昭和二年五月 (江戸時代史料調査目録)〔金沢小学校〕 綴 一
 二七七 昭和二年 〔民政史料目録〕〔富士見小学校〕 綴 一
 二七八 昭和三年七月 江戸時代史料目録〔玉川小学校〕 綴 一
 二七九 昭和六・九年 藤森鉄蔵「末子相続に就て」(写) 及び諏訪地方調査覚書〔今井真樹
 ↓中川善之助〕 はがき 三・綴 三

二〇	昭和九年四月二八日調査	(平野村今井家古文書目録)	縦	一
二一	昭和九年六月八・九日	(宗門帳調査経過につき書状)〔矢崎源蔵↓中川善之助〕	状	三
二二	昭和九・一〇年	(諏訪地方村々宗門帳の調査書)〔矢崎源蔵〕	縦	六
二三	(欠年)	(民政資料調査目録)〔四賀小学校〕	縦	一
二四	(欠年)	江戸時代史料目録〔米沢小学校〕	縦	一
二五	(欠年)	江戸時代史料目録 其二〔北山小学校〕	縦	一
二六	(欠年)	江戸時代史料目録〔川岸小学校〕	縦	一
二七	(欠年)	江戸時代史料目録〔湊村〕	縦	一
二八	(欠年)	江戸時代史料目録〔中洲小学校〕	縦	一
二九	(欠年)	江戸時代史料目録〔湖東小学校〕	縦	一
三〇	(欠年)	江戸時代史料目録〔豊田小学校〕	縦	一
三一	(欠年)	江戸時代史料目録〔湖南小学校〕	縦	一
三二	(欠年)	江戸時代史料目録〔高島小学校〕	縦	一
三三	(欠年)	(江戸時代史料目録)〔長地小学校〕	縦	一
三四	(欠年)	江戸時代民政資料目録〔泉野小学校〕	縦	一
三五	(欠年)	乙事郷蔵所蔵江戸時代民政史料目録〔本郷小学校〕	縦	一
三六	(欠年)	(平野村江戸時代民政資料目録)	縦	一
三七	(欠年)	(宮川村民政史料目録)	縦	一
三八	(欠年)	(末子相続などの調査質問用紙)〔中川善之助〕	状	一〇
三九	(欠年)	(長野県ならびに諏訪郡略図)	地図(膳)	五〇

印刷物・その他

- 三〇〇 (欠年)
- 三〇一 日本書紀(卷第一)第二八) 縦(板) 一四
- 三〇二 享保一〇年八月 親族正名〔太宰弥右衛門撰・春輝堂〕 縦(板) 一
- 三〇三 享和二年七月 元文以来 近格図解 養実服忌弁疑(全)〔鳳翔館蔵板〕 縦(板) 一
- 三〇四 文化一一年五月 姓序考〔筆者石川東一・詞花堂蔵板〕 縦(板) 一
- 三〇五 嘉永五年版 御成敗式目〔梅沢敬典書・青雲堂蔵梓〕 縦(板) 一
- 三〇六 (明治元年) 〔戸籍認め方達書及び雛形〕〔官版〕 縦(板) 一
- 三〇七 明治二年三月 町役心得条目・村庄屋心得条目〔官版〕 縦(板) 一
- 三〇八 明治二年三月 社家制法・寺院制法・郡中制法・市中制法〔官版〕 縦(板) 一
- 三〇九 明治二年 処分則例図要〔蔡逢年〕 縦(板) 二
- 三一〇 明治二年 律例便覧〔蔡逢年〕 縦(板) 四
- 三一一 明治七年一月 金穀貸借心得(卷一)~(卷六)〔万戸堂蔵版〕 縦(板) 六
- 三一二 明治七年一月 (徴兵令)〔陸軍卿山県有朋〕 縦(板) 一
- 三一三 明治八年五月 類例訴訟提要〔山内氏蔵版・須原屋量坪発兌〕 縦(板) 四
- 第一編卷ノ二 貸借成規
- 第一編卷ノ三 貸借成規
- 第二編卷ノ二 訴訟成規
- 第三編卷ノ二 公裁成規
- 民事綜計表〔司法省編纂〕

三三 明治八年

旧四六倍判

一

三四 (明治八年)

聴訟要則類集(上)〔宮城県相愛社〕(明治一〇年四月外国郵便税表

共)

旧四六判 一・状 一

三五 明治九年

民事統計表〔司法省編纂〕

B 5 判 一

三六 明治一〇年一二月

法律雜誌(一三三)二二七号・七〇号七九号〔時習社〕

B 6 判 二

三七 明治一一年九月

立法論綱(一一三)〔英國ベンサム原著・島田三郎重訳・元老院蔵〕

旧菊判 三

三八 明治一一年一〇月刊

類纂皇位継承篇(大正五年九月転写発行)〔元老院蔵・須原屋松成堂〕

B 5 判 四

三九 明治一一年一〇月刊

纂輯御系図(全)(大正五年一二月転写発行)〔元老院蔵・須原屋松成堂〕

B 5 判 一

三〇 明治一二年五月

法学要義(卷二)〔石川県士族小池靖一訳・廻瀾堂蔵梓〕

旧菊判 一

三一 明治一三年一四月

法律志叢(一三三)一三二号、ただし二四号欠〔知新社〕

B 6 判 三

三二 明治一六年一二月

異国奇談和莊兵衛〔翻刻人春陽堂和田篤太郎〕

旧四六判 一

三三 明治一七年一〇月発行

仙台文庫叢書第二輯 塵介集〔発行兼印刷者作並清亮〕

旧菊判 一

三四 明治一七年一〇月発行

風俗画報日本婚礼式(上・中・下合冊)〔東陽堂〕

B 5 判 一

三五 明治一七年二月

類聚婚礼式(全)〔著者有住斎・東陽堂〕

B 5 判 一

三六 明治三〇年八月一明治三二年六月

諏訪史料〔編纂飯田好太郎・諏訪史料編纂所〕

B 5 判 五

卷之卷 上

卷之卷 下

卷之式 上下

卷之参 上下

卷之四 上下

三七 明治三四年三月

法理論叢第一〇編 阿蘇の永小作〔戸水寛人著・有斐閣〕

A 5 判 一

三六 明治三四年一〇月

三九 明治四一年九月五日

三〇 大正元年一二月二五日

三一 大正二年一〇月九日

三二 大正二年～大正三年

三三 大正五年三月

三四 大正一三年～昭和一七年

三五 大正一四年～

〔南信伊那史料 上 下〔佐野重直編纂〕

奥州高館沿革志〔寺崎清賢著〕

入会関係整理事例〔農商務省山林局〕

訂正古訓古事記 上 中 下〔桜園書院〕

信濃史料叢書 第一 第二 第三 第五〔信濃史料編纂会〕

信濃郷土史研究叢書第一編 諏訪研究〔編纂者栗岩英治・信濃郷土

史研究会〕

家事審判制度調査委員会〔司法省民事局〕

諏訪史料叢書〔諏訪史料叢書刊行会〕

卷一 年内神事次第旧記・諏訪神社祭典古式・諏訪上下両社年内

神事大略附上下両社御社祭古今

卷三 神長守矢満実書留・御頭帳・御頭役請執帳・諏訪社物忌令・

社令記

卷四 諏訪社御頭関係諸記録

卷五 奉令集 上

卷六 奉令集 下

卷七 水戸浪士通行和田嶺樋橋合戦諸記録

卷八 大祝職位事書・諸社勸請段・祝詞段・根元記・御七五三之

事・諏訪効験・諏訪講之式・下社惣忌令事

卷九 道の記・筑紫太宰府記・松島記・岩波六兵衛宛曾良書状・

旧菊判 二

旧菊判 一

縦(板) 三

旧菊判 四

旧四六判 一

B5判(膳) 一

旧菊判 二二

□堂主人より曾良宛書状・送岩波賢契西州詩并序・雪まるけ・五十回忌集

卷一〇 松平忠輝関係史料

卷一一 諏訪上下社造宮に関する古記録

卷一二 諏訪御符札之古書・守矢頼真書留・神長殿知行御檢地帳・天正年中神長知行之書・信州諏訪郡高辻・信濃国高島領郷村高辻帳・信州諏訪御頭帳

卷一三 相楽総三関係史料

卷一四 諏訪郡諸村並旧蹟年代記・諏方旧蹟誌

卷一五 諏訪古文書集 上(諏訪上社並社家文書・諏訪下社並社家文書・諸社文書)

卷一六 諏訪古文書集 下(諏訪子爵家文書・諸家散在文書・区有文書・寺院文書・郡内文書・補遺・附録)

卷一七 当社神幸記・御渡り帳

卷一八 二の丸一件史料 上(御一件覚書・金洞君行実附与事人・千野一件・天明壬寅之大意・無題録・二の丸一件文書)

卷二〇 洲羽国考・顕幽本記

卷二一 諏方かのか・洲羽事跡考・「諏方誌」・信濃国昔姿・諏方旧事記・古日記書抜

卷二二 藩譜私集

卷二三 藩譜私集 (中)

卷二四 藩譜私集 (下)

後漢書倭伝考註・魏志倭人伝考註・新撰字鏡 (中川善之助墨筆写)

読律書屋所蔵 御成敗式目目錄 (発行者穂積重遠)

諏方藩一村限村地図 [諏訪史談会]

(五島列島の庶民生活に関する切抜写真) (朝日グラフ二一巻一九号より)

信濃 (第六卷第二号・四号・五号・六号) 旧四六倍判 写真 一

信濃 (号数不明) A5判 一

人事調停法案委員会議録第一回〜七回 [衆議院事務局] A4判 九

民法総則改正案附法例改正案 [司法省民事局] B5判 一

民法改正調査委員会提案 [司法省民事局] B5判 一

民法改正調査委員会法案 [司法省民事局] B5判 一

翼賛政治第一二号——第八十三回帝国議会衆議院報告—— [翼賛政治会] (印) 一

官報第六二八三号 (改正民法を収載) A4判 一

漁業法案・漁業法施行法案 [水産庁] B5判 一

水産業協同組合法案・水産業協同組合法の制定に伴う水産業団体の整理等に関する法律案 [水産庁] B5判 一

農地改革執務参考第二〇号 [農林省農地部] B5判 一

三〇九 昭和二十三年九月

三〇八 昭和二十三年九月

三〇七 昭和二十三年九月

三〇六 昭和二十二年二月二二日

三〇五 昭和二十二年二月二二日

三〇四 (昭和十四年)

三〇三 昭和十四年六月二日

三〇二 昭和十四年六月二日

三〇一 昭和十四年六月二日

(欠年)

三〇〇 昭和二十二年二月〜六月

二九九 昭和八年一月八日

二九八 昭和六年三月

二九七 昭和五年四月

二九六 大正一五年

三〇 昭和二十四年

一 昭和十九年以降法律の制定、改正及び廃止の五十音順索引（未定稿）〔衆議院法制局〕 B5判 一

二 昭和二十四年一月から同年八月まで法律の制定、改正及び廃止の五十音順索引（その二）〔衆議院法制局〕 B5判 一

三一（昭和二十四年）

〔民法等の一部を改正する法律案ならびに関係資料〕 B5判(騰) 三

三二 昭和二十八年九月

明治三十年十月神奈川県戸籍編製規則（大石慎三郎氏所蔵本）〔家制度研究会・第一集〕 B5判(騰) 一

三三 昭和二十八年九月

清代台湾隆恩租之若干法律問題（抜刷）〔陳棋炎著・国立台湾大学法学院〕 B5判 一

三四 昭和二十八年十一月

明治十五年元老院會議附議戸籍規則（福島正夫凡例）〔家制度研究会・第二集〕 B5判(騰) 一

三五 昭和二十八年二月～三〇年三月

岐阜県白川村調査報告資料〔家制度研究会〕 B5判(騰) 五

二（調査者福島正夫） 昭和二十八年二月

三（調査者福島正夫） 昭和二十八年二月

五（調査者福島正夫・唄孝一・清水誠） 昭和二十九年七月

六（調査者福島正夫・唄孝一・清水誠） 昭和二十九年七月

七（調査者江馬三枝子） 昭和三〇年三月

三六 昭和二十九年二月

第一回帝國議會戸籍法案〔家制度研究会・第五集〕 B5判(騰) 一

三七 昭和二十九年一〇月

山村の「家」と資本主義―飛騨白川村の分家事件を通じて―（福島正夫・清水誠）〔家制度研究会、ただし「東京大学東洋文化研究所

- 三六 昭和二九年一月
 紀要「第六冊の抜刷」
 明治初年愛媛県戸籍法令集—総目録と主要法令—〔家〕制度研究会
 第三集 明治初年愛媛県戸籍法令
 第四集(増補) 明治初年愛媛県戸籍法令集—総目録と主要法令
 —(解題福島正夫)
 B 5判(騰) 一
- 三五 昭和二九年一月
 中国・朝鮮の「家」について〔家〕制度研究会・第八集
 一 朝鮮の「家」について—財産相続を中心として(報告者旗田巍)
 二 中国の「家」について(報告者仁井田陞)
 著作権審議会・著作権制度調査会要覧〔文部省社会教育局〕
 (民法改正関係資料及び法制審議会民法部会小委員会議事録)
 (離婚請求事件判決書)〔東京地方裁判所民事第一部裁判官〕
 著作物使用料規程〔日本音楽著作権協会〕
 扶養を中心とする家族の実態—東京都足立区大谷田町における調
 査個表集—〔家〕制度研究会・第一集〕
 B 5判(騰) 一
- 三四 昭和三〇年四月
 公的扶助制度における親族的扶養〔家〕制度研究会・第一三集〕
 一 公的扶助と扶養附資料(報告者小川政亮)
 二 親族の扶養義務についての二、三の考察—公的扶助との関
 連を中心として—(報告者西原道雄)
 B 5判(騰) 一
- 三三 昭和三〇年二月二日
 (婚姻及び離婚法改正に関する意見書の解説)〔ポール・W・アレキ
 サンダー〕
 A 5判 一

- 三〇 昭和三十一年三月二五日 岩波写真文庫一八二 香川県——新風土記——〔岩波書店〕 B 6判
 三一 昭和三十一年七月三一日 養子縁組実態調査統計表 第一回〔法務省民事局〕 (騰)
 三二 昭和三十一年 〔International Association of Legal Science の第一回国際会議資料〕 (タイプ) 三
 三三 昭和三十一年五月 戸籍簿を通じてみた家族の研究——山梨県中巨摩郡田富村今富の場
 合——〔山本登〕〔家〕制度研究会・第一九集〕 B 5判(騰) 一
 三四 昭和三十一年 農地制度関係参考資料〔農地局〕 (騰) 二
 三五 昭和三十一年一月 著作権審議会・著作権制度調査会要覧〔文部省社会教育局〕 A 5判 一
 三六 昭和三十三年六月 (INTERNATIONAL UNION OF FAMILY ORGANISATIONS
 の諸報告) (英文タイプ) (二・独文タイプ) 十二
 三七 昭和三十三年七月二五日 岩波写真文庫二六九 宮崎県——新風土記——〔岩波書店〕 B 6判 一
 三八 昭和三十四年三月三日 官報第九六五六号〔未帰還者に関する特別措置法〕 A 4判 二
 三九 昭和三十四年三月 第三回著作権政府間委員会記録〔文部省〕 A 5判 一
 四〇 昭和三十四年八月 国民年金制度概要〔宮城県民生労働部国民年金課〕 (印) 一
 四一 昭和三十四年十一月二八日 著作物使用料規程変更申請書〔日本音楽著作権協会〕 B 5判 一
 四二 昭和三十五年二月二〇日 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要
 領に対する意見書〔日本テレビ放送網社長清水与七郎↓文部大臣松
 田竹千代〕 B 5判 一
 四三 昭和三十五年二月二〇日 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要
 領に対する意見書〔文化放送社長↓文部大臣松田竹千代〕 B 5判 一

- 三六一 昭和三五年二月二日
 (日本音楽著作権協会著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見申書)〔日本放送協会会長野村秀雄↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六二 昭和三五年二月二三日
 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見書〔ラジオ東京〕
 B5判 一
- 三六三 昭和三五年二月二四日
 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見書〔日本民間放送連盟会長足立正↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六四 昭和三五年二月二四日
 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見書〔全国興行環境衛生同業組合連合会会長河野義一↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六五 昭和三五年二月
 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見書〔ラジオ東北他四七社↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六六 昭和三五年二月
 社団法人日本音楽著作権協会管理の著作物使用料規程の一部変更に対する意見書〔外国映画輸入配給協会会長長川喜多長政↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六七 昭和三五年三月五日
 (日本音楽著作権協会著作物使用料規程変更の許可申請につき諮問)〔著作権審議会↓文部大臣松田竹千代〕
 B5判 一
- 三六八 昭和三五年三月五日
 (著作権審議会開催通知)〔著作権審議会会長赤木朝治↓著作権審議会委員)〕
 (印) 一
- 三六九 昭和三五年三月一日
 (日本音楽著作権協会著作物使用料規程の変更につき議事次第及び

- 議事資料リスト)〔著作権審議会〕
- 三〇〇 昭和三五年三月 母子福祉年金早わかり(改訂版)〔宮城県〕 B 4判 二
- 三〇一 昭和三五年五月一日 国民年金 創刊号〔宮城県国民年金事務研究会編集発行〕 B 6判 一
- 三〇二 昭和三五年五月二〇日 著作権シリーズ(6) 著作権協議会・一二年の歩み——生きた著作権の解説Ⅱ各年度・年頭プラン集——〔日本著作権協議会〕 A 5判 一
- 三〇三 昭和三六年三月二〇日 増補不動産登記法別刷 不動産登記法中改正法律解説〔杉之原舜一著・一粒社発行〕 A 5判 一
- 三〇四 昭和三六年一二月 老人福祉(五)——米国の老人福祉——〔厚生省社会局施設課〕 B 5判 一
- 三〇五 昭和三六年 著作権憲章〔国際作曲家協会連盟〕 旧菊判 一
- 三〇六 昭和三六年 THE MOVABLE CHARACTER OF SHARES AND INTERESTS IN COMPANIES IN THE ROMANESQUE CODES (抜刷)〔MARIO ROTONDI〕 (印) 一
- 三〇七 昭和三七年五月一六日 (昭和三七年年度国家公務員採用上級試験専門委員辞令)〔人事院総裁 入江誠一郎〕 B 5判 一
- 三〇八 昭和三七年五月二三日 (昭和三七年年度国家公務員採用上級試験専門委員打合せ会開催通知 及び会場案内図)〔人事院総裁〕 B 4判 二
- 三〇九 昭和三七年五月 著作権制度の改正に関する関係団体の意見(一)〔文部省〕 B 5判 一
- 三〇〇 昭和三七年六月七日 (国家公務員採用上級試験専門委員打合せ会開催につき関係資料送付状)〔人事院事務総局任用局長↓中川善之助〕 B 5判 一
- 三〇一 昭和三七年六月十五日 (相続人に関する各国法規資料) B 5判 一

- 四〇三 昭和三七年六月
試験専門委員打合せ会配布資料〔人事院事務総局任用局〕
- 四〇三 昭和三七年六月
老人福祉（六）（フランス・ノールウェイ・ソ連邦・ドイツ）〔厚生省社会局施設課〕
- 四〇四 昭和三七年七月一日
国語国字 第一〇号〔国語問題協議会〕
- 四〇五 昭和三七年八月一日
国語国字 第一一号〔国語問題協議会〕
- 四〇六 昭和三七年
法制審議会民法部会第六回会議議事速記録〔法務大臣官房司法法制調査部〕
- 四〇七 昭和三七年版
大島支庁管内概要〔東京都大島支庁〕
- 四〇八 昭和三八年一月
宮崎県の産業〔宮崎県産業奨励館〕
- 四〇九 昭和三八年四月三〇日版
信託者名簿〔日本音楽著作権協会〕
- 四一〇 昭和三八年四月
〔憲法調査会第一〇八回総会議事報告及び各委員意見要旨〕〔憲法調査会事務局〕
- 四一一 昭和三八年四月
建築著作権調査連合委員会資料その九 アメリカにおける建築著作権〔ウィリヤム・エス・シュトラウス著・久々湊伸一訳〕
- 四一二 昭和三八年七月一九日
〔著作物使用料規程の一部変更認可申請書・理由書・映画規定変更参考資料〕〔日本音楽著作権協会会長西条八十↓文部大臣灘尾弘吉〕
- 四一三 昭和三八年七月二二日
音楽的著作物の私的使用に関する問題点について
- 四一四 昭和三八年七月
著作権制度の改正に関する関係団体の意見（五）〔文部省〕
- 四一五 昭和三八年八月二一日
著作物使用料規程の一部変更要領に対する意見書〔全国興行環境衛生同業組合連合会会長河野義一↓文部大臣灘尾弘吉〕

B 5 判 一

B 5 判 一

A 5 判 一

A 5 判 一

B 5 判 一

旧四六倍判 一

A 5 判 一

B 6 判 一

B 5 判 六

B 5 判 一

B 5 判 三

B 4 判 一

B 5 判 一

B 5 判 一

- 四六 昭和三八年八月二七日
日本音楽著作権協会申請の「著作物使用料規程」一部変更に対する意見書〔日本映画製作者連盟↓文部大臣灘尾弘吉〕
B 5判
—
- 四七 昭和三八年一〇月九日
もっぱら教育または学術研究の目的のために使用する場合に関する保護の例外に関して
B 5判(騰)
—
- 四八 昭和三八年一〇月二三日
〔著作権制度審議会第五小委員会審議状況中間報告について〕の送付状〔文部省社会教育局著作権課長佐野文一郎↓著作権制度審議会関係各委員〕
B 4判
—
- 四九 昭和三八年一〇月
昭和三十七年度国立国語研究所年報 一四〔国立国語研究所〕
A 5判
—
- 四〇 昭和三八年一月四日
著作権制度審議会第五小委員会審議状況について
B 5判
—
- 四一 昭和三八年一月一六日
〔著作権法改正に対する要望書・理由書〕〔日本新聞協会会長村山長拳↓著作権制度審議会会長江川英文〕
B 5判
—
- 四二 昭和三八年一月二〇日
〔著作権法改正に対する要望書写の送付状〕〔文部省社会教育局著作権課長佐野文一郎↓著作権制度審議会委員〕
B 4判
—
- 四三 昭和三八年一月二九日
もっぱら教育または学術研究の目的のために使用する場合に関する実演家の保護の例外について
B 4判
—
- 四四 昭和三八年
著作権法改正の根本問題附米國著作權法について〔法貴次郎著・東海大学出版会〕
A 5判
—
- 四五 昭和三八年
L'ÉVOLUTION DE LA RÉGLEMENTATION DE LA CONCU-
RENCE ET L'EXPÉRIENCE DES ÉTATS-UNIS (抜刷)
〔MARIO ROTONDI〕
(印)
—

- 四二六 昭和三八年
INTERNATIONAL LEGAL STUDIES AT BOALT HALL
〔抜刷〕〔School of Law University of California, Berkeley〕〔英文タイプ〕
- 四二七 昭和三九年一月二七日
著作権制度審議会第十六回第五小委員会要旨
- 四二八 昭和三九年一月二七日
著作権制度審議会第十七回第五小委員会会議次第
- 四二九 昭和三九年正月
実演家の演技著作権に関する意見書〔俳優団体連絡会〕
- 四三〇 昭和三九年二月一日
コピーライトNo三五〔著作権資料協会発行〕
- 四三一 昭和三九年二月二〇日
〔著作権関係資料の送付状〕〔文部省社会教育局著作権課長佐野文一郎〕著作権制度審議会委員〕
- 四三二 昭和三九年三月一日
老人福祉施策一覧〔社会局施設課〕
- 四三三 昭和三九年三月一七日
著作物使用料分科審議会第二回審議要旨
- 四三四 昭和三九年三月一七日
著作物使用料分科審議会（第三回）会議次第
- 四三五 昭和三九年三月二五日
著作権制度改正に関する意見書（第五次）——〔出版権と出版契約〕について——〔日本書籍出版協会会長野間省一〕
- 四三六 昭和三九年三月
国立国語研究所報告二四 横組みの字形に関する研究〔永野賢他二名〕
- 四三七 昭和三九年四月一五日
著作物使用料分科審議会第四回審議要旨
- 四三八 昭和三九年四月三〇日
著作権制度改正に関する意見書（第六次）〔日本書籍出版協会会長野間省一〕
- 四三九 昭和三九年五月一日
コピーライトNo三八〔著作権資料協会発行〕
- 四四〇 昭和三九年五月一日
実演家が放送に同意した場合における実演家の権利について——そ

—

B 4判

—

B 5判

—

B 5判

—

B 4判

—

B 5判

—

B 4判

—

B 5判

—

A 5判

—

B 5判

—

B 5判

四四	昭和三十九年五月一日
四三	昭和三十九年五月一日
四二	昭和三十九年五月一日
四一	昭和三十九年五月一日
四〇	昭和三十九年八月三一日
三九	昭和三十九年八月三一日
三八	昭和三十九年八月三一日
三七	昭和三十九年八月三一日
三六	昭和三十九年八月三一日
三五	昭和三十九年八月三一日
三四	昭和三十九年八月三一日
三三	昭和三十九年八月三一日
三二	昭和三十九年八月三一日
三一	昭和三十九年八月三一日
三〇	昭和三十九年八月三一日
二九	昭和三十九年八月三一日
二八	昭和三十九年八月三一日
二七	昭和三十九年八月三一日
二六	昭和三十九年八月三一日
二五	昭和三十九年八月三一日
二四	昭和三十九年八月三一日
二三	昭和三十九年八月三一日
二二	昭和三十九年八月三一日
二一	昭和三十九年八月三一日
二〇	昭和三十九年八月三一日
一九	昭和三十九年八月三一日
一八	昭和三十九年八月三一日
一七	昭和三十九年八月三一日
一六	昭和三十九年八月三一日
一五	昭和三十九年八月三一日
一四	昭和三十九年八月三一日
一三	昭和三十九年八月三一日
一二	昭和三十九年八月三一日
一一	昭和三十九年八月三一日
一〇	昭和三十九年八月三一日
九	昭和三十九年八月三一日
八	昭和三十九年八月三一日
七	昭和三十九年八月三一日
六	昭和三十九年八月三一日
五	昭和三十九年八月三一日
四	昭和三十九年八月三一日
三	昭和三十九年八月三一日
二	昭和三十九年八月三一日
一	昭和三十九年八月三一日

の取扱いと問題点――

著作権制度審議会第二二回第五小委員会要旨	B 4判	一
著作権制度審議会第二三回第五小委員会会議次第	B 4判	一
〔横組みの字形に関する研究〕・「現代雑誌九〇種の用語用字」の送付状）〔国立国語研究所長岩淵悦太郎↓中川善之助〕	B 5判	一
老人福祉施策の推進に関する意見〔中間報告〕〔中央社会福祉審議会〕	B 5判(贍)	一
国語審議会報告書六〔昭和三六年一〇月〕三八年一〇月〕〔文部省〕	A 5判	一
高齢者実態調査速報〔昭和三八年六月調査〕〔厚生省大臣官房統計調査部〕	B 5判(贍)	二
月間社会福祉の働き〔NHKTV放送台本〕〔NHK報道局社会番組部〕	B 5判(贍)	二
老人福祉制度の概要〔老人福祉課〕	B 5判(贍)	一
ランブと農家の生活〔菅野新一〕	B 6判	一
著作権シリーズ第一集 万国著作権条約に基づく著作権表示〔◎表示〕〔法貴次郎著・文部省社会教育局著作権課〕	B 6判	一
〔日本心理学会・日本社会心理学会における田中靖政氏報告要旨〕	A 4判	二
昭和三八年度国立国語研究所年報 一五〔国立国語研究所〕	A 5判	一
人間科学総合研究機構案〔長期研究計画調査委員会〕	B 5判(贍)	一
国立国語研究所報告二七 共通語化の過程――北海道における親子三代のことば――〔国立国語研究所〕	A 5判	一

- 四五 昭和四〇年三月
著作権制度審議会第一小委員会資料集〔文部省〕 A 5判 一
- 四四 昭和四〇年三月
著作権制度審議会第二小委員会資料集〔文部省〕 A 5判 一
- 四三 昭和四〇年三月
著作権制度審議会第三小委員会資料集〔文部省〕 A 5判 一
- 四二 昭和四〇年三月
著作権制度審議会第四小委員会資料集〔文部省〕 A 5判 一
- 四一 昭和四〇年三月
著作権制度審議会第五小委員会資料集〔文部省〕 A 5判 一
- 四〇 昭和四〇年五月
The Commission on the Constitution and Prospects for Constitutional Change in Japan〔Robert E. Ward〕 (印) 一
- 三九 昭和四〇年
日本エッセイストクラブ一九六五年規約・会員名簿〔日本エッセイストクラブ〕 A 5判 一
- 三八 昭和四二年一月一八日
国際的の所有権機関の設立に関する条約案について B 4判 一
- 三七 昭和四二年一月一八日
著作物使用料分科審議会の議決の報告について B 4判 一
- 三六 昭和四二年一月
ベルヌ条約ストックホルム改正案Ⅱ——管理規定および最終条項〔第二十條の二〕第三條——〔文部省〕 B 5判 一
- 三五 昭和四二年一月
BRPIの管理および機構に関する第二回政府専門家委員会報告〔文部省〕 B 5判 一
- 三四 昭和四九年七月
みやぎのしのぶ——中川善之助先生喜寿記念随筆集〔編集松島泰他二名〕 B 6判 一
- 三三 一月二四日
〔無料法律相談所三〇周年記念講演と映画の会ポスター〕〔宮城県社会事業協会無料法律相談所〕 (印) 一
- 三二 〔欠年〕
明治元年京都府戸籍仕法書及同戸籍雛形〔報告者堀内節〕〔「家」制

四九	(欠年)	度研究会・第六集)	B 5判(贍)	—
四八	(欠年)	昭和二四年度家庭事件審判調停・少年保護統計年表〔仙台家庭裁判所〕	B 5判	—
四七	(欠年)	(昭和二四年度東北六県家庭事件統計年表)〔仙台家庭裁判所〕	B 5判	—
四六	(欠年)	昭和三三年度予算書〔宮城県国民年金事務研究会〕	B 5判	—
四五	(欠年)	昭和三九年度予算額(老人福祉関係)	(贍)	—
四四	(欠年)	刑法論綱卷二〔林董訳・河岸氏蔵版〕	旧菊判(板)	—
四三	(欠年)	老人所得保障制度一覧	(贍)	—
四二	(欠年)	社会福祉事業に係る租税の特別の取扱いについて(意見)〔中央社会福祉審議会〕	B 5判(贍)	—
四一	(欠年)	著作物使用料規定変更案〔日本音楽著作権協会〕	B 5判	—
四〇	(欠年)	使用料規定変更に関する申請案と現行との比較表〔日本音楽著作権協会〕	(贍)	—
三九	(欠年)	領に対する意見書〔日本書籍出版協会会長代理副会長長野間省一他一名↓文部大臣松田竹千代〕	B 4判	—
三八	(欠年)	放送事業者による一時的記録の場合について	B 5判	—
三七	(欠年)	(著作権に関する規程変更理由説明書)〔日本音楽著作権協会〕	B 5判	—
三六	(欠年)	(著作権に関する規程変更理由書・参考資料)〔日本音楽著作権協会〕	B 5判	—
三五	(欠年)	(ドイツ・アメリカ・イギリス・ロシア共和国・フランス・オーストリア・ソビエト・イタリアの弁護士制度資料)〔三ヶ月章他〕	綴	八

- 四三 (欠年) 宮城県国民年金事務研究会会則 B5判 二
- 四四 (欠年) (国民年金―拠出制―ピラ)〔宮城県〕 B5判 一
- 四五 (欠年) (えびの高原観光パンフレット)〔宮崎交通〕 (印) 一
- 四六 (欠年) (貰受状・進参状) 状 二
- 四七 (欠年) 厳格市民法に於ける羅馬家族法の研究(一―八)〔原田慶吉著〕 綴 一〇
- 四八 (欠年) マールベルグ村における農地の相続(川井健・清水誠)〔家〕制度 一〇
- 四九 (欠年) 研究会) 綴 二
- 五〇 (欠年) 老人福祉事務組織表 (贍) 一
- 五一 (欠年) (民法第七二五条―七八七条英文訳とその和文補註) B5判(タイプ) 五
- 五二 (欠年) 俗慮叢書之一 中国歴代法家著述考〔孫祖基輯〕 (印) 一
- 五三 (欠年) 關於吾国近代典權習慣法之研究(抜刷)〔陳棋炎著・国立台湾大学法学院〕 一
- 五四 (欠年) 学院) B5判 一
- 五五 (欠年) 英国普通法上之不動産法制(抜刷)〔陳棋炎著・国立台湾大学法学院〕 B5判 一
- 五六 (欠年) 台中県大村郷の家族制度報告(抜刷)〔陳棋炎著〕 B5判 一
- 五七 (欠年) A STUDY OF FOSTER DAUGHTER-IN-LAW IN FORMOSA 一
- 五八 (欠年) UNDER THE RULE OF JAPAN-ESPECIALLY ON THE JUDICIAL PRECEDENTS AND CENSUS REGISTRATION (抜刷) (英文タイプ) 一
- 五九 (欠年) 〔陳棋炎著・シカゴ大学〕 一
- 六〇 (欠年) THE "ANGELO SRAFFA" INSTITUTE OF COMPARATIVE COMMERCIAL INDUSTRIAL AND LABOR LAW (抜刷) 一

四七
(欠年)

[University L. Bocconi, Milan]
Karl Marx vor dem Körner-Geschworenen

(印)
(独文タイプ)

—
—

史料の部

四 古証文集（質地・借金証文などの写）

駿州庵原郡尾羽村

三左衛門
訴訟人

代源七

差添人 久五郎

御知行所

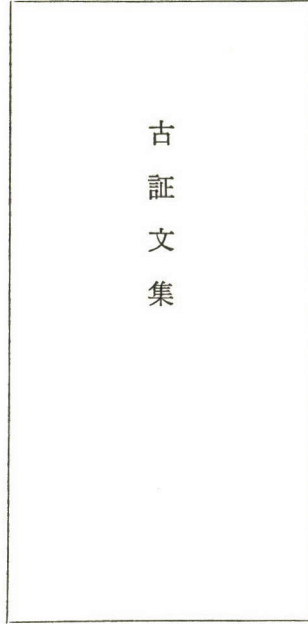
同州同郡西久保村

孫右衛門

相手方

勝右衛門

古証文集



(表紙)

(中扉)

相州庵原郡

横山村外村々文書二八六通之内

(朱)
「三八号」

乍恐以書付御訴訟奉申上候

石川大隅守知行所

右訴訟人三右衛門奉申上候は、相手孫右衛門并勝右衛門相掛り候儀ニ付左ニ奉願上候儀は、文政五年十二月拾年季証文ニ而金三拾両出金質地請取是迄同人賄居申候処、年々不足滞米有之候、

一文政九亥年十二月金五拾両取替申候、右返済方之儀は同人達而相頼候ニ付、丑年より米九俵宛拾五ヶ年之間請取相済可申対談ニ而質地書入証文請取候処是又不足米有之候、何卒御調奉願候、

一文政十二丑年十二月、同村勝右衛門方々拾年季証文ニ而金五拾両出金致し田畑請取、外所持高共孫右衛門方ニ而

賄居申候処、追々作徳米滞度々及催促候共取調無之候而

上候、以上、

右勝右衛門實入候分去ル酉年より同人賄居申候、同酉年

石川大隅守知行所

作徳米之儀は相濟候得共、去戌年分相滞度々及掛合候得

駿州庵原郡尾羽村

共相濟不申候間、何卒地所御引上被成下滞米候相片付候

天保十亥年七月三日

願人 三左衛門印

様御威光を以奉願上候、

代源 七印

一文化五年^(ママ)年正月、先々名主吉兵衛外ニ組頭三人連印書付

差添人 久五郎印

を以村入用金五両出金申候、右利金相滞其上去戌年当名

秋山荒之進様

主又兵衛方江引渡之節、右村入用出金入帳無之由当名主

元市場御役所

方より承り候、是以紛分明之事ニ奉存候、何卒御取調奉

乍恐以書付御訴訟奉申上候

願上候、右前文四ヶ条之口々不勘定数度及掛合候得共巨

御知行所庵原郡西久保村

細不相分迷惑至極仕候、然ル処去戌年之儀は同人持高不

願人 名主 又 兵衛

残 御上様江御引上ケニ相成候由被申聞誠ニ以奉驚入

差添人 五郎右衛門

候、右様之儀被申立難洩至極差支候間不願恐奉愁訴候、

石川大隅守知行所

何卒以厚御思召質地御引上被成下、并滞米共取調相片付

同郡尾羽村

候様被御召出、御吟味之上御取調濟方被仰付被下置候様

權方惣代 三左衛門

偏ニ御仁恵之程幾重ニも奉願上候、猶別紙証文之写奉差

差添人 久五郎

上候、

右願之通被為聞召決濟方被仰付被下置候様乍恐以書付奉願

御知行所同郡西久保村

相手方
孫右衛門

同郡尾羽村

禮方惣代

三左衛門印

差添人

久五郎印

右訴訟人名主又兵衛并禮方惣代三左衛門奉申上候は、相手孫右衛門江相懸り候儀ニ付龍雲院の御願可申上之処、此節

本市場御役所

(朱カ)御米印之儀ニ付御公儀様江も御苦勞相懸、猶又御地頭所様

江も御苦勞相掛ケ奉恐入候儀ニ付、無抛兩人左ニ奉願上候儀は、

奉差上濟口一札之事

一天保二卯年十二月、金六拾五両貳分壹朱孫右衛門江龍雲

一御知行所完原村役人江御願立仕候菊治郎外七人之者、熊

院の借金仕、拾ケ年季証文ニ而別紙証文之通り質地受取

七糸治郎右之者共乙治郎婚禮ニ付一件差起シ、双方御呼

申同人方小作賄罷在候、然ル処去酉戌兩年作徳利米相渡

出し相成追々御吟味嚴重ニ相成、此上御吟味詰ニも相成

シ不申候ニ付、數度及掛合嚴敷催促仕候得共何分ニも相

候得は如何様之御答被仰付候も難計奉恐入候間、拙僧罷

渡シ不申難儀至極仕候間無抛今般奉願上候、何卒同人被

出双方江得と利解申惠候所、怪我人親兄弟并二相手方親

御召出御吟味之上滞利米并質地御引上ケ被下置候様、格

兄弟共の趣意立を以折入而相願候ニ付、拙僧并二両宿罷

別之御仁恵を以御取調被成下置候様乍恐以書付奉願上候、

出奉歎願候所、格別之御慈愛を以御下ケ被成下難有仕合

以上、

ニ奉存候、右趣意として村役人江は是迄心得違之仕未双

御知行所庵原郡西久保村

願人名主

又兵衛印

差添人

五郎右衛門印

石川大隅守知行所

方連印詫書差出し、乙治郎相統方之儀は媒善兵衛江は菊

(ママ)

書を写結添を仕、家内數日大勢ニ而踏あらし候つくるゐ

呉候様詫書差出し、猶又乙治郎方江は右善兵衛請取候詫

代として詫書并ニ包金差遣シ是ニ而内得ニ相成、菊治郎熊七之儀は御吟味詰ニ相成候而は如何様之御答被仰付候(も脱カ)難計奉存候間、菊治郎疵所受候所聊之儀ニ而養生いたし候所當時平愈(癒)仕痛所平生体ニ相成、片輪は勿論農閑稼等之障ニも不相成、能々聞糺候得ハ元来意趣遺恨等有之儀ニは無御座、全酒狂之上心得違仕候儀ニ御座候間、已来遺恨等相残不申候様拙僧も被為請是ニ而内得仕、雜費之儀は村方ニ而掛り候雜費は不殘菊治郎掛り合之者ニ而相拵候筈、当所ニ而之雜費は相互ニ其宿限り之掛ニ仕候筈、今般医者参礼之儀は菊治郎方ニ而仕候筈、謝礼之儀は熊七方ニ而致し是ニ而内得仕、右場所携候者一同申分なく出入内濟仕、偏ニ御威光と難有仕合ニ奉存候、然上は已来右一件ニ付双方々御願之筋毛頭無御座候、依之双方并ニ村役人共扱人連印濟口証文差上申処如件、

御知行所庵原郡完原村

当人

嘉永二酉年二月十八日

乙治郎印

組合差添

治郎三郎印

親族

佐平印

当人 桑治郎印

当人 熊七印

組合差添 金五郎印

同 市郎衛門印

相手 菊治郎印

同 佐藏印

組合差添 善兵衛印

同 茂平印

相手 重太郎印

同 千代之助印

組合差添 嘉平印

同 吉五郎印

相手 市太郎印

同 権太郎印

同 惣兵衛印

同 円藏印

組合差添 庄吉印

同 初五郎印

村役人
半 兵 衛印

太右衛門印

平 兵 衛印

扱人
福聚院

豐 傑(花押)

宿
好 五 郎印

同
半右衛門印

御吟味御下ケ被成下候様一同奉願上候、然ル上は右一条之儀ニ付重而御願之筋聊無御座、依之双方連印濟口証文奉差上候処、仍而如件、

嘉永七年寅二月

伊左布村
(佐)

源兵衛煩ニ付代
願人

親類
儀 左衛門印

親類
源 七印

組合
清 左衛門印

相手方
淺右衛門病氣ニ付
彌 左衛門印

親類
庄 藏印

組合
作 左衛門印

名主
利 八印

草ヶ谷村

取扱人

同 勇 藏印

同 定 吉印

完原村

同 源 左衛門印

奉差上内濟濟口証文之事

(ケ脱)
草谷御役所様

一 御知行所伊佐布村百姓源兵衛△同村淺右衛門江相懸り候

一 件御吟味中ニ御座候所、御日延奉願上私共立入内濟熟

談仕候趣意左ニ奉申上候、

一 源兵衛妹しけ義、淺右衛門方江奉公中主人ニ不似合不正之召仕方有之、殊ニ愚昧と悔り駿府廻り方下役之者相雇事柄之弁へも無之無筋を以源兵衛義を見掠、加之妹しけ身分難相立始末全淺右衛門申訳無御座、手段を以詫入候ニ付納得熟談相調候間偏ニ御威光難有仕合奉存候、何卒

草ヶ谷御役所

覚

一質屋株

敷金五両也

但冥加永五百文宛壹ヶ年分

右は稼人弥右衛門質屋稼相願候ニ付、故障も無之趣相聞令免許候、然ル上は此度敷金五両相納冥加永五百文は当酉分其年々極月廿日限可相納候、右免許有之候上は稼方入念、置主品物等如何と相心得候ハ、夫々相糺受人等相立取引可致もの也、

天保八丁酉年二月 石川役所

駿州庵原郡山切村

願人

弥右衛門

右村

名主

丈右衛門

与頭

源左衛門

乍恐以書付奉願上候

一御知行所草谷村百姓源左衛門奉願候儀は、去ル天保八酉

年私儀質屋稼仕度奉願候所、御取調之上願之通御聞濟被

成下置 御免許御書附頂戴是迄年々御冥加上納仕来候

所、此度勝手ニ付熟談之上当村組頭文七江讓渡当亥年ノ

文七名前ニ而御冥加上納仕質屋稼仕度奉存候間、何卒右

名前替御聞濟被成下置候様奉願上候、右願之通御聞濟被

成下置候ハ、一同難有仕合ニ奉存候、以上、

御知行所草谷村百姓

嘉永四亥年二月

讓渡人

源左衛門印

同村組頭

讓請人

七印

同名主代

定 吉印

草谷御役所

(中扉)

(朱)

「二四九号」

〔付箋・朱〕
「三輪村武蔵左門出訴一件」

取 調 書 写 し

」

〔付箋・朱〕
「示談御願下ヶ書面写」

乍恐以書付奉願上候

駿州志太郡三輪村三輪明神主武藤左門并ニ左之名前之も
の共奉願上候、先般右左門忤登ト同人弟久米之助江相懸り
不容易義を申立奉出訴候ニ付、右久米之助義御召捕之上揚
屋入被仰付置御吟味中、左門ト登ト不孝跡之始末ヶ条書を以
訴出候ニ付、同人義も同様揚屋入被仰付猶御吟味中之処、
厚御利解之趣恐入奉承伏左門ト御慈悲奉願上候ニ付、右両
人共揚り屋御免被仰付難有仕合ニ奉存候、依之親類共立入
御吟味御猶予奉願上篤と内実承糺候処、登義親共存意不相
叶弟久米之助江家督相譲り候積りニは候得共、右は兄弟之
間柄不和合ニ而は相統無覺束、兎角家事治り方不宜故左門
及老年甚心痛罷在候折柄今般之次第ニ至り候ニ付、以来之
仕置嚴重之御吟味奉願上度、前書夫々ヶ条書を以御吟味奉
請候処、右は不容易筋強而御吟味奉願上候ハ、忤共義ハ勿
論、一同何様之御沙汰可被仰付義も難計趣御利解被仰付初
而發明奉恐入、全家事相統方專一と相心得右体奉申上候義

ニ有之、且又久米之助（登脱力）兩人共畢竟平日不和合故之義今般之

次第二成行、此上御吟味奉請候而は何様之御仕置可被仰付
哉も難計先非後悔重々恐入、兩人義以來孝道相励候義は勿
論、互ニ兄弟和睦敷仕候旨を以親左門江只歎相詫候上は、

是迄心得違之段ハ勘弁致し遣尤相統方之義ハ右兩人共相除、
登身分は五郎左衛門方江引取、久米之助身分ハ浅井帶刀方
江引取、家督之義は左門目鑑を以他ト貫請相統取極候苦、

然ル上ハ前書之始末此上御吟味奉請候而は何様之御沙汰可
奉請哉一同先非後悔重々奉恐入候間、何卒以 御慈悲御
吟味是迄ニ而御下ニ被成下置候様偏ニ奉願上候、以上、

石川大隅守知行所

駿州志太郡三輪村

御朱印地三輪明神

天保十亥年六月

神主 武藤 左門
同人忤 同 登

同 久米之助

本多豊前守領分

同郡八幡村

御朱印地青山八幡宮

社家

浅井帶刀

岸本十輔御代官所

遠州榛原郡飯淵村

名主

五郎左衛門

寺社御奉行所様

前書之通示談之上 青山因幡守様江奉差上候処、御聞届

ニ相成候ニ付写相渡申候事、

亥八月廿九日

武藤 左門

同 登

同 久米之助

浅井帶刀殿

五郎左衛門殿

一札之事

(付箋・朱)

「登る兩親江差出候一札写」

一登る弟久米之助江相掛り先般出訴仕候より事起り、今般

之次第二成行御吟味奉請候而は、何様可被仰付哉も難計

先非後悔仕、以来心底相改孝道相励候義は勿論兄弟合睦

敷仕候様一同及示談今般一件御下ケ願奉差上候ニ付、登

心底相糺候処実以相違も無之、然ル上は当人身分は五郎

右衛門方江引取篤と心底相改候迄は三輪村江為立入申間

敷候、万一心得違之義仕出候ハ、我等共引受御兩親御苦

難相掛間敷候、尤壺ケ年式人扶持は不拘当人御差遣し被

下度段御願申上候処御承知被下難有仕合奉存候、且亦兩

親共及老年介抱人無之候而は不相成候ニ付、久米之助義

実家相続方見届候迄は実家江立戻り、兩親介抱いたし呉

候様登申之候ニ付、久米之助義当分実家江立戻り兩親介

抱可致候、依之為後日一札入置申処如件、

当人

天保十亥年六月

武藤 登

引請人

五郎左衛門

浅井帶刀

武藤左門様

御 母 様

〔付箋・朱〕
「左門再出訴ニ付江戸旅宿々書状到来之写」

一筆致啓上候、甚寒之砌ニ御座候得共各様益御勇健ニ被成御座大悦奉寿候、然は今般武藤左門様御義、先般一件御子息登様御事兎角議定不相守、依之何れニ成共御願立仕嚴重之御吟味願致し度由御申被成候得共、当八月中一件御下ケニも相成間もなく再論ニおよひ候而ハ、対 御奉行所様江恐入候義ニ付、可相成候事ニ御座候ハ、御願止之上御帰村被遊候様再応御異見申上候得とも何分御承引無之、無抛去ル十日 青山因幡守様江欠込御訴被遊候処願書御預リニ相成、十二日御呼出し之上豊前五十助様御掛ニ而御利解被仰聞候は、右一件之義は格別之思召を以当八月中御下被成下置候処、帰国之上及再論候而は対 御奉行所江容易不相成就而ハ此上引合之もの共をも被召出嚴重之御吟味も可被仰付之処、左候而は武藤家及断絶候義何共歎敷旨被仰聞、乍去篤と勘弁を以右之段親類共江も及示談決着可申立旨被仰聞恐入候義ニ付、同日御日延奉願上帰宅之上、左門様江も再応御異見申上候処、何れニも相続方出来候ハ、宜御座候間、右之舎を以取扱呉候様被申聞候、去ル十五日 御

奉行所様江罷出国許親類中江及懸合候上は否哉奉申上度、然ル上ハ右示談中、正月十五日迄御日延奉願上候願書御預り中ニ御座候、前以申上通り強而御吟味御願被成候上は事六ヶ敷御事ニ御座候間、私存寄ニハ此上之義は各様御両所思召を以篤と御示談被成下、御相続方ニ付登様故障無之様仕度早々御取極有之上ハ、左門様御義御帰国可被遊哉ニ奉存候、左候ハ、 御奉行所ハ願書御下ケ切奉願上候、左も無之左門様強情之御願相成候ハ、各様始御親類御一同迄御難渋ハ扱置左門様御家は断絶可及哉、左候上ハ迎も容易之御沙汰ニは無之実以御難渋之御義は眼前之至ニ奉存候、右之段深く御勘弁被成下早々御示談之上、御相談御決着次第左門様為御迎御咎人御出府被下候、(可脱力) 猶巨細之義は勝五郎様ハ御聞取可被下候、呉々も御勘考被成下一大事之御義ニ御座候間、私義も当夏以来右一件御世話申上何事も御家大事と存実意を以御取扱申上候義ハ各様御承知之上ニ御座候間、此上迎も向能御示談相成候哉と心痛罷在候、無御捨置月迫御繁多ニハ候得共片時も御取急被仰越可被下候、先ハ右之段申上度如此ニ御座候、早々敬白、

十二月十七日

上州屋
源

助

親類衆中

浅井帶刀様

杉本五郎左衛門様

御一同中様

〔付箋・朱〕
「左門の帯刀方江書状写」一札
〔付箋・朱〕
「登の同職親類江差出一札写」

私実家武藤左門家相統方之義、去亥十月中旬親類御同職方御出会御相談被仰聞候処勘弁行届兼、其節決着之御挨拶不申上猶又追々被仰聞も御座候ニ付、十月下旬佐倉迄御挨拶申上居候内親左門義出府仕 御奉行所様江御訴訟ニ罷出候段奉驚入候、右ニ付猶又今般各様御出会御相談被仰聞候間、去亥十月中御相談被仰聞候通り相統方之義無相違承知仕候間、右之趣を以宜敷御取計被下親左門義帰国仕候様御頼申上候、勿論以来相統方之義ニ付差障候義無御座候、依之一札差出申処如件、

天保十一子年正月

武藤 登

御同職衆中

一筆致啓上候、弥春寒之節ニ御座候得共益御家内御揃御堅勝之由奉賀候、然ハ江戸表帰国仕候自分江之一札勿論御公儀江御請証文差上候義違変ニ及ひ候、悴登段々身持心底不宜後難之程も難計、先達而親類同職中御出席被下候節委細談事候通り、家ニは難被替勘当可仕存否之由申上候処、其元ニも存寄も無之由ニは候得共、登再勘当之義ニ付存寄御座候哉否今一応其元御存意之程承り度奉存候、御公辺ニかゝわり候義ニ候ヘハかきりて御返事可被下候、以上、

正月九日

武藤左門

浅井帶刀殿

〔付箋・朱〕
「左門の再び帯刀方江書状写」

一筆啓上仕候、余寒之時節益御安泰可被成御座珍重奉存候、然ハ登勘当之義ニ付存寄御座候哉否之由御存意之程承度先達而書状差上候処、何共御返事無之五郎左衛門談事之上御

挨拶も被成候由御伝聞候得共、五郎左衛門病死仕候義ニ而
有之、殊ニ其元存意承度右登勘当之義ニ付存寄御座候哉、
存寄無御座候哉此義と而已限りて御返事可被下候、段々延
引ニ被及候ニ付、石橋御氏相頼差上候間何分早々御返事可
被下奉願上候、以上、

正月廿七日

武藤左門

浅井御氏

(朱)
「二五〇号」

天保十三寅年七月晦日

一御書院番頭石川大隅守方ハ断、私知行所駿州志太郡三輪
村明神神主左門忝武藤登と申四拾壹歳ニ罷成候もの、元
来身持不宜不行跡ニ付親左門并親類共度々異見差加候得
共不相用候ニ付、久離仕村方人別相除申度旨申出候間、
願之通申付候段文政十三寅年八月廿七日御達申置候処、
七ヶ年以前後悔いたし実体ニ相成候趣相詫候間、久離差
免村方人別江認入度段左門始親類共一同相願候間、願之
通申付其段天保八酉年二月廿二日猶又御達申置候処、其

後又候身持不宜寺社奉行衆江不容易儀申立候間、村方江
不為立入積ニ而遠州榛原郡飯淵村名主五郎右衛門方江預
置候処、度々村方江立帰り不法之儀申候間、右体不埒も
のニ付此上於先ニ如何様之悪事可仕出も難計御座候間、
尚又此度親左門始諸親類一同久離いたし度村方人別相除
申度段願出候間、願之通申付為後日相達候由使者清水文
次郎申来候、

人別除書替写

〔石川大隅守殿 遠山左衛門尉〕

(朱)
「二六〇号」

駿州志太郡村良村と同国同郡子持坂村秣山并河原其
地論裁許之事

村良村訴出趣前山寛文五年子持坂村と及出入、隣郷取扱之
上当前地内相極秣は入会ニ為刈取候、其場所之内見取畑植
置百姓墓所之松杉子持坂ハ濫伐採旨申之、子持坂村答候は
破山寛文中ニは新林計を村良村江附々、其余地は何も入

会秣場ニ相定立木も先規レ伐採候、且山麓朝比奈川原添之入会其地江村良レ私ニ新畑起田申之、右争論遂レ糺明処前山之儀立合絵図并寛文之扱証文令吟味候得は村良地内ニ無紛候、子持坂者共立木伐採場南之方山裾迄を居村地内ト損積カといへとも峯亘リ之限を越地内ト申条難立候、殊ニ立木従前々伐採之証拠會而無之、村良ニ墓主百姓共銘々有之上は墓所たる事明白候、次ニ子持坂村朝比奈川原芝地を井溝筋故入会ト雖申、渡り瀬を打越村良地内之川原迄入会ト申事甚無謂、依之今度裁断之趣子持坂林と村良入会山之境は水落峯亘リ限りたるへし、是レ朝比奈川渡り瀬之道筋を見通し、北平之方は村良地内たりといへとも如前々子持坂入会秣可刈取、向後両村共ニ新開立出一切停□□、只今迄之荒畑も為高外之間起返不可致之、右之外渡り瀬上之方江は子持坂入会禁之、水引来ル井筋は有来通り不可及異論、仍而為後証絵図面山境引墨筋令裏書各加印判双方江下置条永不可違失者也、

享保十年巳十二月四日

御用方無加印

稲 下野

久 大和

御用方無加印

寛 播磨

駒 肥後

諏 美濃

大 越前

小 信濃

太 備中

黒 豊前

〔中野 相州鎌倉郡〕

坂之下村外二ヶ村文書八六通之内

以書付御願奉申上候

一 永高五拾文百姓きゑ義、忰熊藏和三郎都合三人暮ニ而百姓宮罷在候所、此度親子親類示談之上家屋敷家財等忰熊藏江譲り渡、きゑ義同村百姓仁兵衛忰長藏妻ニ縁付申度段懸合行届、組合親類一同納得之上きゑ義身上熊藏相渡候上ハ、以来同人身上ニ差構無之旨対談仕右長藏方江きゑ身分引受、向後御役人中江御苦勞相懸ケ申間敷旨取

極候間、何卒格別之以御慈悲きゑ義右仁兵衛俸長蔵女房
と人別御帳面江御差加江被成下度、依而八同人百姓壹軒
分熊蔵江被仰付被下置候得は、御年貢諸役等聊御差支無
之様仕家名御建申度一同以連印ヲ以御願奉申上候、右御
聞濟被成下置候得は難有仕合奉存候、以上、

村方御役人中

跡引受人 熊蔵親類
久 七印

御請申一札之事

坂之下村

慶応四辰年六月

百姓 忍印
 千多俸 蔵印
 熊 蔵印
 同人俸 和 三 郎印
 組合 勝 右衛門印
 同 弥 平 次印
 同 平 五 郎印
 千多引受人 蔵印
 仁兵衛俸 長 蔵印
 仁兵衛親類 善 兵 衛印
 長谷村 喜 右衛門印
 千多家族親類 長谷村 喜 右衛門印
 千多姉嫁 十 吉印

右之者共儀、漁業ニ罷出帰船不仕全クは沖合ニ而大風水死
流失仕候哉ニ奉存候ニ付、右之趣江戸御役所江御訴被下候
ニ付、当十九日ノ来ル卯五月十九日迄百八十日之間相尋可
申旨被仰付、則御請繼書を以御請印被下候由、右ニ付尚又
私共一同江三十日六組相尋可申旨被仰付奉畏候、若尋中見
当り候ハ、早速御訴可申上候、尚以行衛相知レ不申候ハ、
来卯五月十九日組合以惣代江戸御役所江御届ケ可申上候、
以上、

百姓 船主直乘 宗 四 郎
 百姓 水主 喜 右衛門
 百姓 水主 源 四郎俸 吉
 重
 長谷村百姓 水主 銀 蔵
 水主

右宗四郎組合惣代

勘三郎印

親類惣代

重右衛門印

喜右衛門組合惣代

伝兵衛印

親類惣代

弥平次印

重吉組合惣代

長吉印

親類惣代

富五郎印

銀藏組合惣代

嘉右衛門印

親類惣代

武兵衛印

坂之下村

長谷村

御役人中

差入申一札之事

一今般私家内相続之義ニ付組合親類立合之上評議致候処、

私厄介きた義留守居ニも無覚束候故、外合々相応之者貴

請相続致度存候、就而はきた義は当時奉公為致若相応之

望て有之候ハ、私妹ニ致縁付ケ申候、譬奉公中は不及申

行末共右之者之義何れ之事ニ相成候共、万事私方江引受

村御役人中江少しも御苦勞相掛ケ申間敷候、為後日一札
依而如件、

明治二巳年三月

相続人

喜太郎印

組合惣代証人

清八印

親類惣代証人

友八印

村方御役人中

差上申一札之事

一当村百姓長左衛門跡式喜助と申者相続方之義ニ付、御領

法相違之廉々御座候趣、御役所様江入御聴、先達而中各

々方被召出御尋御座候処、懸り合一(言九)之申訳無御座

候、然ル上は格別之越度ニ被仰付候も難計奉恐入候所、

御憐愍之蒙御沙汰難有仕合奉存候、尤当人義は先方江早

速引渡被仰付候、奉畏早速私共立合引渡申候、勿論前条

之義出来候段全当人組合親類共心得違より事起り、各々

方江種々御苦勞相懸ケ申訳無御座候間、此義ニ付御願ケ

間敷義は相成兼候処、差当長左衛門方相続人無之潰ニ相

成候義歎敷、殊ニ右喜助義是迄心得違之所業御座候段前

非後悔仕、此上御詫出来候得は向後 御領法急度相守農

業出精致農間商ひ等ハ不及申都而村方江仕来り相背不申

万端各々方御差 (因カ) 二隨可申候、是迄之始末御宥免被下長

左衛門方相続出来候様頻ニ相願申候、尚又右喜助実家村

役人より如何様之一札ニ而も差出可申候趣申聞候間、何

卒前段御憐察被下格別之御勘弁ヲ以右喜助当村人別入相

成、長左衛門跡式相続出来候様御願被下度偏に願上申候、

右御願之上御聞濟ニ相成一家相続行届候得は私共一同難

有仕合奉存候、依之当人加判親類一札差出申所如件、

ヲ以御執成被下右御願出来候様御願申候、以上、

嘉永二酉十二月

長谷村

名主

半五郎印

年寄

儀兵衛印

百姓代

新兵衛印

惣代衆中

以書付御願奉申上候

一永高五拾文 五郎右衛門明屋敷

右潰五郎右衛門義、式拾ヶ年程以前退転致右地所組合之者

預り置候処、此度兵吉悻若松義右地所引受五郎右衛門名跡

相立申度御願奉申上候、尤五郎右衛門儀親類縁者等一切無

之相談可致者無御座候間、右之段御聞濟被成下候得は家作

仕度御願奉申上候、且又右地所兩隣組合之者共故障等一切

無御座候間一同連印を以御願奉申上候、以上、

長谷村

五人組

嘉右衛門

同新助

同徳次郎

親類

喜右衛門

当人

喜助

村御役人衆中

前書之通り私共方江数度罷越相願申候へ共、先達而中不

届之義仕候間 御役所江御願申上兼候ニ付、此段御勘弁

嘉永七寅年八月

若松父

百姓

兵

吉印

組合

市郎兵衛印

村方御役人中様

	東隣	西隣	同	同	同	同
	孫	弥	寅	寅	源	源
	伊右衛門印	七印	吉印	三郎印	吉印	七印

以書付御願奉申上候

一伊右衛門倅辰之助卯廿八歳、右之もの儀家督可仕筈ニ御座候処、同人ハ勿論両親并親類組合相談ヲ以伊右衛門相続人之儀は妹しけ、つる兩人之内江掣相尋相続為致申度、此度一同納得一決之上御願奉申上候、右御聞濟置被成下置候得は辰之助儀他家江相続人ニ罷越候、他所江店借住宅仕候共両親并親類共ニおゐて世話致遣候積り、且又辰之介ニおゐてハ家名相続可致身分として致成長、他所江罷出候儀大恩打捨候様成行候てハ不相濟儀ニ付、両親存生中案否相伺、就而は妹相続ニ付養子有之候得は、同人

も別段組合親類中江幾重ニも御世話之程相頼候、対談無相違決而掣養子ニ付故障違乱等申間敷候、依而両親并辰之介組合親類一同連印を以御願奉申上候、右被仰付候ハ、早々掣養子相尋伊右衛門家督相尋可申候、依之以書付御願奉申上候、以上、

安政二卯年四月

百姓
伊右衛門印
組合
市郎右衛門印
同
又四郎印
同
勝五郎印
親類
又右衛門印
伊右衛門倅
辰之介

御役人中

以書付奉願上候

一豊治郎儀、伝兵衛娘すゑ姫合勘十郎名、相続御願申上則家作為致罷在候処、すゑ義病死後豊治郎右相続難出来今般居屋敷家作共伝兵衛倅三五郎江譲り渡、実父作右衛門方江引取申度双方親類立会之上一同御願申上候処、以来

右ニ就而は故障等無之精々御糺御座候得共、譲り渡ニ付候而は向後違乱申者無之依而御聞濟被下難有奉存候、然ル上は勘十郎相統三五郎ニ相極メ、百姓一軒分御用は勿論村役等急度為相勤可申候、此段以書付奉願上候、已上、

安政貳卯年八月七日
右譲り渡人
豊治郎印
豊治郎実父
作右衛門印
勘十郎名引受人
三五郎印
三五郎実父
伝兵衛印
親類
七
組合
鶴
蔵印
松印

御役人衆中

譲り渡申証文之事

一勘十郎名跡相統御願申上候、家作致候処女房すゑ義病死後趣意柄有之相統難相成ニ付、此度以好身勘十郎居屋敷并家作共譲り渡申処実正也、然ル上は御年貢は勿論諸役老軒分其元ニ而御勤可被成候、且又女房すゑ年回向等營被下候積り、依之右地所家作等ニ付違乱申者無之、若

六ツケ敷申者有之候得は加判一同相談之上埒明可申対談相違無之、為後日譲り証文仍而如件、

安政貳卯年八月

三五郎殿
実父
伝兵衛殿
組合
鶴
親類
七
蔵殿
松殿

以書付御願奉申上候

譲り渡人
豊治郎印
実父
作右衛門印
組合
十郎兵衛印

高三拾六文五分
百姓弥平次相統人
弥平次伴岩吉改
弥平次
未三十四歳
同人女房
つる
未四十四歳
同人弟
茂吉
未二十二歳

同人弟

松次郎

未十三歳

四人

安政六年二月

高百壹文潰源左衛門相統人

弥平次娘

未九歳

ま

同人倅

忠蔵

未二歳

父弥平次改

清

未五十一歳

同人女房

はま

未三十四歳

四人

右弥平次改

清

右組合

又四郎印

勝五郎印

松次郎印

伊左衛門印

彦右衛門印

岩吉改

弥平次印

組合

熊太郎印

勝右衛門印

平五郎印

仁兵衛印

右親類惣代

七郎兵衛印

村方御役人衆中

以書付御請申上候

右は潰源左衛門義、弥平次親類ニ付家内一同相談之上人分
ケ致潰源左衛門名跡相統仕度御願申上候処、御聞濟被成下
古木を以棟行四間半桁行式間半家作仕暮方別宅仕、人別宗
門帳前書之通り御書分ケ被下度候様御願申上候、然ル上は
村方棟別役ハ勿論、旦那寺宮方相勤候様被仰付難有承知奉
畏候、為後日一札入置申候処如件、

勘兵衛名 相統人

百姓 万 藏

右は勘兵衛相続人万藏老人暮、実父惣五郎儀は惣左衛門名
 (ママ)人ニ而三人暮ニ罷在候所、惣五郎病身ニ相成、亀次郎義は
 生立る病氣依之暮方出来兼候ニ付、是迄相続致居候惣左衛
 門名跡并家財共親類弥八弟浅次郎江相譲り、老人暮ニ罷在
 候実子万藏方江引移り度御願申上候処御聞濟被成下候ニ付、
 前書之通り人別引分ケ御請書奉差上候間、御帳分ケ御願奉
 申上候、尤同旦方之事故旦那寺江ハ加判候もの一同々可申
 上候、御政事向其外五人組御取極等は不及申ニ両組并親類
 共ニおゐて決而故障筋無御座候、為後日一札御請書奉差上候、
 以上、

安政六未年二月

右

万

藏持印

同人父

惣五郎印

同人父 五郎
 同人母 惣
 同人兄 亀次郎
 惣左衛門名相続人
 百姓 浅次郎
 同人妻 惣五郎印

御役人衆中

差上申一札之事

一私儀(惣)想領ニ御座候処、両親并兄弟共相談之上清八家名弟

佐吉江相渡私義は他家相続ニ罷出度示談仕候、依而は兩

親孝養佐吉江相頼、家督向之儀ニ付向後私ニおゐてハ申

右組合 利右衛門印
 同 彦三郎印
 同 市五郎印
 同 くら
 右 浅次郎印
 右組合 惣右衛門印
 同 鉄五郎印
 同 貞藏印
 同 長五郎印
 同 与四郎印
 右親類 弥八印
 小坪村 三郎右衛門印

分無之、縦他家相統致候とも両親江無沙汰決、而仕間敷候、稼之余分等有之候得は追々相貢可申候、以来両親江は勿論組合親類江苦勞相掛申間敷候趣申極候間、此段御聞濟置被下度御願申候処御聞届被下難有奉存候、為後日差上申候処如件、

安政六年末十月

清八悴
長右衛門摺印
組合惣代
利八印

御役人中様

以書付御願奉申上候

十郎兵衛悴
甚

吉

右之者惣領ニ而十郎兵衛相統可仕之処、多病ニ而百姓當難出来次第江戸表伯父捨次郎方江厄介ニ引取、十郎兵衛家督之義は両親以存意ヲ弟之内江相統為致度、親類組合和談之上御願奉申上候、右御聞濟被成候ニおゐてハ当人は勿論組合親類ニ而も向後違乱申もの無御座難有仕合ニ奉存候、乍恐此段以書付御願奉申上候、以上、

文久二戊年六月

右

甚

吉印

村方御役人衆中

差上申対談書之事

父
十郎兵衛印
組合惣代
作右衛門印
同
新兵衛印
親類惣代
定藏印
(神丸)
江戸桜田鍛冶町
五人組持地借
捨次郎印

一 潰百姓与右衛門為相統熊太郎夫婦共是迄睦鋪百姓一軒分
營罷在、子供三人出生致無難ニ渡世罷在候処、昨未年中
ハ夫婦不合ニ相成候ニ付、組親類ハ種々取扱候得共弥以
て夫婦中落合不申、無是非今般左之通り対談を以双方組
親合差添夫婦離れ御願奉申上候、
(子)
一 三供三人之内熊藏和三郎式人はきゑ方へ引請、栄次郎義
は熊太郎引請候事、
一家財并畑壺ケ所、子供式人為養育きゑ方江引請候事、
一 熊太郎并子供壺人は自分着類而已ニ而実家久七方江引取

候事、

右之通対談を以人別分ケ御願奉申上候処相違無御座候、然ル上ハ潰与右衛門名跡家財畑共き多并熊蔵和三郎江譲り受熊太郎并栄次郎は久七江引受離縁仕候、且熊太郎并栄治郎他家江養子ニ参り候共き多方ニ申分無之、且又き多何辺ノ夫實請候共熊太郎ノ申分無之、将又熊蔵和三郎実体ニ成人致候得は与右衛門相続人ニ可致、前書之通離縁之上親子因ミ引分ケ候上は、向後双方共構無之旨対談を以人別分ケ御願奉申上候処御聞濟被下難有奉存候、為後日組親類加判仍而如件、

安政七年二月

当人	熊	太	郎	摺印
組合	友	蔵	印	
親類	勘	三	郎	印
実家	久	七	印	
当人	久	七	印	
組合	平	五	郎	印
同	勝	右	衛門	印
同	仁	兵	衛	印

村方御役人中

乍恐以書付ヲ奉申上候

相州鎌倉郡乱橋村名主善右衛門、扇ヶ谷村名主伊織、淨妙寺村名主惣右衛門奉申上候、当村ニ鶴岡社領人別之者欠落勘当帰住願等御料御役所江御届申上候例、其外公事出入宗門人別夫錢帳等之儀御尋ニ御座候、

一当村々宗門人別之儀、往古ノ御料寺社領共一同御料御役所江差上来り申候、

一勘当帳外帰住願欠落人等、往古ノ之儀は不相弁御座候得共、当村々寺領百姓之儀は御料御役所江御願申上候、且鶴岡神領百姓之儀は不相弁御座候得共、当村勘当帳外帰住願欠落人等有之候得は、鶴岡江相願可申は心得居候所近来右様之儀無御座候、
一神領百姓身分之儀、往古之儀は不相弁候得共、近来御料所百姓ノ神領百姓江相掛り候ハ、公事出入之節御料御役

同 弥平次印
親類物代 四郎兵衛印

所江罷出御吟味受来り候、且神領百姓ノ御料社領百姓江相掛り候公事出入、鶴岡江相願御札之上寺社御奉行所江以添便ヲ被差出候、尤往古之儀は不相弁候へ共拾五六ヶ年已前別而相改メ、以来鶴岡神領之分致手切ニ候旨嚴敷被申渡候へ共、前々ノ宗門人別夫錢帳等御料御役所へ差上御改ヲ受来候儀ニ付、御料百姓ノ神領百姓江相掛り候公事出入之節は、御料御役所江罷出御吟味ヲ受候儀ニ奉存候、

一 乱橋村名主役之儀、往古ノ御料所ニ罷在村役相勤来候、

神領之者名主役相勤候類例無御座候、尤年寄百姓代之儀は神領百姓ニ而も相勤申候、

一 扇谷村名主役之儀、御料寺社領入会之村方ニ付、其時々役義相勤り候人体見立村役為相勤候儀ニ御座候、

一 浄妙寺村名主役之儀、御料寺領社入交り住居仕り候儀ニ付、其時々役義相勤り候人体見立村役相頼、尤浄妙寺村之儀は鶴岡少別当配当地重之儀ニ付、右少別当添簡を以御料御役所江御願申上候仕来りニ御座候、

一 乱橋村扇ヶ谷村神領年貢往古ノ直取立仕来り候間、村々

名主方ニ而は年貢筋ニ拘り候義は一向取扱不申候、尤右神領之内神主方配当之儀は前書同様直取立仕来り候所、去ル寛政之度年貢筋ニ拘り出入有之、其後同四巳年ノ村々名主方ニ而取立相納候、

右は御尋ニ付奉書上候通り区々ニ而、村役人取調方迷惑仕候儀間々有之候得共、村役人共之取調行届候儀ニ無御座候間、無抛其時宜ニ寄取計候間何分 御賢察奉願上候、以上、

文政八酉年十月五日

相州鎌倉郡乱橋村

名主

善右衛門

同州同郡扇ヶ谷村

名主

伊織

同州同郡浄妙寺村

名主

惣左衛門

中村八太夫様御役所

〔中座〕
相州鎌倉郡

扇ヶ谷文書二七〇通之内」

売渡シ申田地之事

一 鶴ヶ岡恵光院様御領分佐助ヶ谷ニ而永高四百七拾六文田、
來寅年々亥年迄拾年ニ相定金子貳両壹分貳朱ニ売渡シ申
所美正也、御公儀様反錢御年貢其外諸役等は此方ニ而相
勤可申候、尤年季相過候而金子返進いたし候ハ、右田地
御返シ可被下候、且又於此田地横合々少も構無御座候、
為後日証文加判仍而如件、

扇ヶ谷村

売主

利左衛門印

享保十八年丑ノ十一月

同所

請人

嘉兵衛印

庄左衛門殿

相渡申田地之事

一 梅ヶ谷ニ而鶴岡神主様御領分永高四百五拾文之田、辰年
々丑年迄中年拾年季ニ金子壹両貳分ニ而相渡申所美正也、
此田ニ付未進一切不仕候、拾ヶ年御手作之内此方江請取

中間敷候、御年貢其元ニ而御上納可被成候、十年季明右

之金子返進申候ハ、無相違御返シ可被成候、右之田ニ付

諸親類不及申横合々少も構無御座候、若構申者御座候ハ

、我等共埒明其元江少も御苦勞懸申間敷候、尤右之田反

錢無之御検見ニ而御座候、為後日加判手形依而如件、

扇ヶ谷村

売主

利左衛門印

享保二十年卯十一月

請人 伝左衛門印

同 伊右衛門印

次郎兵衛殿

売渡シ申山之事

一 佐助ヶ谷山ニケ所永高貳両之所、代金壹両貳分相極め廿年
季ニ売渡申所明白也、右之山ニ所共未進掛一切無之其外
横合々少も構無御座候、廿年相立本金御返進申候ハ、右
之山土山ニ而御帰シ可被下候、御しはいなされ候内ハ御
年貢此方へ可被遣候、為後日之仍而証文如件、

寛政三年ノ極月

売主扇ヶ谷

彦

助印

坂之下村

久四郎殿

請人 幸

助印

建長寺前

住吉屋儀兵衛殿

村役人 年寄小左衛門印

前書之通相違無御座ニ付加判如此二候、

名主 利左衛門印

売渡申田之事

売渡申田地之事

一扇谷(於九下九)猶会家小路ニ鶴岡浄国院様御知行之内永高七拾八文

田數貳枚、代金壹兩三步ニ相定只今慥ニ受取申処実正ニ

御座候、此田地ニ付反錢高無御座別而古未進無之山付ニ

御座候、亥年ノ申年迄拾年季ニ古証文差添相渡シ申候、

此田ニ付横合ノ違乱申候者一切無御座候、然上は御年貢

諸役之義ハ其元ニ而御勤可被成候、万一本金出来致候ハ

御無心可申上候間右之田御帰シ可被下候、為念請人村

役人加判仍而証文如件、

明和四年亥ノ二月

扇谷村

名主 売主 彦 助印

請人

善左衛門印

寛政七年乙卯二月廿日

田地売主 利左衛門 名主加印 三郎右衛門

長兵衛殿

一永高檢見百五拾七文田壹口 但シ此金壹兩三分
一永高定納七拾七文山付田壹口 但シ此金貳兩也

右之田地鶴岡浄国院様御領分会下小路ニおいて拙者明田

ニ御座候処、此度書面之通り二口ニ而代金三兩三分只今慥

ニ給取、当卯之秋作ノ其元江有合ニ売渡申候所実正ニ御座

候、然上は御年貢諸役等其方ニ而大切ニ御勤可被成候、尤

此田地ニ付反錢無之、諸親類ハ不及申横合ノ違乱妨申者無

御座候、万一六ヶ敷出入等有之候ハ、拙者罷出急度埒明貴

殿江少も御苦勞懸申間敷候、尚又元金返済之節ハ何時成リ

共田地此方江御返シ可被成候、為後日一札如件、

前書之通り相違無之、名主加印ニ付仍而奥印無御座候、以上、

預り申金子証文之事

一金拾両は 但シ文字金也

右は今般頼母子講落圍ニ付預り申候処実正也、返済之儀は来酉年々満会まで毎会金式歩(分)ト拾匁宛掛送り可申候、此質地として於梅ヶ谷 神主様御知行之内永高三百文之田壹口入置申候、万一割合金及遲滞候ハ、右之質地を以加印方ニ而急度返并可仕候、為後証之加印一札仍而如件、

文化九年十月

預り主

政右衛門印

証人

久右衛門印

利左衛門様

御世話人中

差上申御請状之事

一此六助と申御中間慥成者ニ御座候ニ付私共御請罷在、当

卯六月十三日ヨ来ル辰三月五日迄御奉公差上申候、御給

金式両壹分ニ相定只今為御取替金壹両御渡慥ニ請取申候、残金之儀は当九月壹分式朱、同十二月三分式朱当人江被成下候御約(束)速之事、

一御公儀様御法度之切支丹宗門ニ而は無御座候、宗旨ハ代々一向宗ニ而、寺は市谷柳町長願寺且那ニ紛無御座候、宗旨手形私共方江取置申候、御用之節は差上可申候、

一御公儀様御法度は不及申上、御家之御作法堅為相守可申候、万一此者取逃欠落仕候ハ、当人早速尋取出逃之品相改差上可申候、若病氣ニ而永々御暇奉願候(敷力) 又は思召ニ不相叶永々御暇被下候ハ、御給金成共人代成共差上可

申候、常々引込等不仕都而御後闇義等不仕御奉公不依何事大切ニ為相勤可申候、看板等見苦敷無之様可為仕候、

此者何方ヨも構無御座候、若構之者ヨ申者御座候ハ、私共罷出埒明ケ可申候、

右之条々私共御請ニ罷立候上は、自今如何様之義仕候共私共江可被仰付候、私共宅替仕候ハ、御届可申上候、仍御請状如件、

裏六番町山田

文化四年六月十三日

請人 直 助
人主 吉 藏

森川孫右衛門様

御用人中様

乍恐以書付奉願上候

一湯島切通片町伊兵衛店浪人三橋郡藏奉申上候、私実娘さちと申当十式歳罷成候女子、九年已前寛政六寅年十二月四歳之節、四ッ谷伝馬町三丁目庄八店源藏義実子無御座候ニ付右さち儀達而所望仕候間、為着代金子少々相添難等迄附遣シ為念証文取之、右書面ニ遊女妾賤奉公等為致申間敷趣之世話人加判証文取差遣申候処、当春以来度々見舞旁罷越候処娘さち儀相見江不申候間相尋候処、田舎江逗留遣候と偽之義申候間合点不行儀とは奉存候得共先其日は罷帰、其後四五日過又候罷越源藏ニ面談之上右始末得と承札候処、先達而私妻田舎江逗留ニ差遣候由申候は全偽ニ而、実は内藤新宿仲町家主旅屋佐助方江出入拾四ヶ年季ニ金高八兩之積リ証文ニ而右之内金五兩請取、

尤加判人右同所新八店岩藏と申者兩判ニ而買渡候由申候ニ付、早速先方江罷越相札候処相違無御座候、右体賤奉公等為致候義私并親類一流甚歎敷奉存候間、為養育金少も差出可申候間取戻シ呉候様度々及相談ニ候得共潤濟不申、却而不法之事杯申勝手次第可致旨申に一向取合不申候間、尚又源藏家主庄八江相頼度々罷越懸合取戻シ呉候義源藏得心不仕候、尤さち養女遣候節世話加判人七右衛門と申者は先年病死仕候、源藏妻も其節之妻ニ而は無御座候、四ヶ年程以前ニ先妻は離縁仕、猶又源藏当妻ニ罷成り男子出生仕候而私娘さち義甚(ママ)致シ差置候得共、一旦養女ニ差遣候儀故致方も無御座差置候処、全源藏当妻ニ実子も出生仕候故実子養育金ニ仕右体不実之義仕候義と奉存候間無是非御訴訟奉申上候、何卒御慈悲左之名前者共被召出御吟味之上、娘さち義取戻シ相返シ呉候様偏ニ奉願上候、以上、

湯島切通片町伊兵衛店

享和二年八月

浪人(訴訟人) 三橋軍藏印

家主
伊 兵衛印

四ツ谷伝馬町三丁目庄八店

相手
源 藏

内藤新宿仲町家主

旅籠屋
同 人方二居候
佐 助

同 人方二居候
当 人
き ち

御奉行所様

初而御訴訟

一女子取戻出入

右は私娘さちと申者、九ヶ年以前四歳之節相手源藏方へ養女ニ差遣置、其砌如何敷奉公ニ差出申間敷証文(マコ)候処、当春食売奉公ニ差出候ニ付差戻シ之義掛合候得共、彼は難渋申相返シ不申候間無是非御訴訟、

湯島切通片町伊兵衛店

戊八月廿九日

浪人
願 人
三 橋 軍 藏

四ツ谷伝馬町三丁目庄八店

相手
源 藏

内藤新宿仲町家主

旅籠屋
同 人方二居候
佐 助

同 人方二居候
当 人
き ち

乍恐以書付奉願上候

一湯島切通片町伊兵衛店浪人三橋軍藏奉申上候、私実娘さちと申当拾貳歳ニ罷成候女子、九年以前寛政六寅年十二月四歳之節、四谷伝馬町三丁目庄八店源藏儀実子無御座候ニ付、右さち儀以世話人達而所望仕候間、為着代金子少々相添難等迄附遣為念証文取之、右書面ニ遊女妾賤奉公等為致申間敷越之世話人加判証文取差遣申候処、当春以来度々見廻旁罷越候処娘さち儀相見へ不申候間、折節源藏は留守ニ而妻ニさち儀相尋候処、田舎江逗留ニ遣候由偽之儀申候間合点不行儀とは奉存候得共先其日は罷帰其後四五日過又候罷越源藏ニ面談之上右始末得と承糺候処、先達而妻田舎江逗留ニ差遣候由申候得共全偽ニ而、

内藤新宿仲町家主旅籠屋佐助方江出入拾四ヶ年季ニ金八両之積り証文ニ而、右之内金五両請取、尤加判人右同所新八店岩藏と申者両判ニ而売渡候由申候ニ付、早速先方江罷越相糺候処相違無御座候、右体賤奉公等為致候儀私并親類共一統甚敷敷奉存候間、為養育金子少々も差出可申候間取戻候様度々及相談ニ候得とも聞濟不申、却而不法之事抔申勝手次第可致旨申之一向受合不申候間、尚又源藏家主庄八江も相頼度々罷越懸合候得共取戻候儀源藏得心不仕候、尤きち養女ニ遣候節世話加判人七右衛門と申者は先年病死仕候、且又源藏妻も其節之妻ニ而は無御座候、四ヶ年程前先妻は離縁仕、猶又源藏当妻ニ罷成り男子出生仕候而私娘さち儀甚邪魔ニ致し差置候得共、一旦養女ニ差遣候儀故致方も無御座差置候処、全源藏当妻ニ実子も出生仕候故実子養育金ニ仕右体不実之儀仕候義と奉存候間、無是非先月廿九日御訴訟奉申上候処、当月五日之御裏書頂戴相附当日双方罷出相手方々返答書差上其後御吟味ニ相成奉恐入候、然ル処右きち義四歳之節養女ニ差遣、勿論其砌如何敷奉公体ニ差出申間敷一札取

置候処、源藏儀久々相煩難渋ニ付無是非当春中食売奉公ニ差出候得共、是迄八ヶ年も養育仕候義ニ付此度郡藏の源藏方江為養育金八両差遣シ、尤源藏のは佐助方江さち給金相償、きち義郡藏方江引取申候上は郡藏の此上又々如何敷奉公抔ニ差出申間敷一札源藏方江遣、熟談之上以来双方無申分出入内濟仕度奉存候間、何卒御慈悲ヲ以御吟味御下ヶ被成下置候様一同奉願上候、以上、

湯島切通片町伊兵衛店

浪人願人

三橋郡藏

家主

伊兵衛

五人組

忠藏

名主八郎右衛門忌中ニ付

代久四郎

久四郎

四谷伝馬町三丁目庄八店

相手

源藏

家主

庄八

五人組

八

名主

内藤新宿仲町家主

相手

佐

当人

き

五人組

名主

ち 助

伊東岩丸様御内

長坂武兵衛様

〔中扉〕
〔信濃国筑摩郡〕

麻績町村文書 第一二九〇通之内

御番所様

養子貰受議定証文之事

一 貴公様御末子当子三歳ニ罷成文蔵殿事、我等実子無之候
ニ付実子ニ貰受候所実正也、且成人致候上ニ而も御取返
シ被成間鋪相定、尤親子出入被為致間鋪議定ニ而世話人
立合実子ニ貰請候上は、成人之上如何様義出来仕候共貴
公様江少も御苦勞相掛ケ申間鋪候、為後日養子貰請証文
仍如件、

牛込若松町

家主銀蔵店

養子親

惣

八印

文化元年三月

同所元破損町

家主源兵衛店

世話人

長

八

〔朱〕
「三一号」

相渡シ申畑之事

一 下々畑(歩)
一六畝拾貳分分粗六升四合目之所、代金貳両壹分三百文請
取右畑慥ニ相渡シ申所実正也、楮役拾壹わ出シ可申候、
縦御国替徳政其外何様之儀御座候共少も違乱申間敷候、
為後日仍而如件、

下いほり村

かり主

吉

之 丞印

請人

善 右衛門印

庄屋

加 兵 衛印

正徳式年辰ノ三月四日

おミ町

彦左衛門殿

〔朱〕
「二三六号」

奉公人請狀之事

一同郡上井堀村喜曾八妻まきと申者、当申二月の酉二月迄
為永代金子貳両之御約束ニ而、内金壹両唯今御借申御奉
公仕候処実正ニ御座候、若此者永煩仕候敷亦是取逃欠落
仕候ハ、人代成り共金子ニ而も御望次第二請人立合急
度相濟、貴殿ニ少も御損相掛申間鋪候、此者宗旨之儀ハ
法善寺旦那那ニ紛無御座候、為念依而請狀如件、

寛政十二年申二月

上井堀村

奉公人夫

喜曾 八印

請人 八郎 治印

麻績町

七左衛門殿

〔朱〕
「二五四号」

規定一札之事

一 今般我等妻きと儀病死仕候、付而は早々後妻相迎家内和
熟相続心掛養父母孝道可仕は勿論ニ候得共、自然御両親
御気分ニ不応不和合出来隠居被為成度節は、為隠居免左
之田畑徳分差出シ居所造営別居可被成候段取極左ニ、

一 中田 字六田
中田 壹反八畝歩

一 上田 字薬師免
上田 貳畝歩

一 畑 横倉道下
畑 三畝歩

一 畑 勘七畑
畑 四畝歩

一 裏畑 溜り西の方
裏畑 壹畝歩

一 桑畑 うち丸屋敷続
桑畑 半分

一 荒神堂
同式 畝歩

外ニ家具不自由無之様差出シ可申候、

但シ百年之後御両人之内養父相關候節は右徳分半減ニ
相成申候事、万ニ養母先へ相果候節は減少不致候事、

尤御存命限跡々建不申定候也、猶隱宅ニ質入壳渡シ等
之儀急度不致様取極申候、

右之通り取定相整候上は、後日ニ至リ御隱居候節違論毛頭
無御座候、依之親類加印取極証書仍而如件、

相統人

白井市三郎印

親類

白井立三

同断

白井善五郎印

同断

白井脩作印

同断

石黒寿一

養父

白井里翁殿

母 殿

〔二五五号〕
(朱)

議定

当白井七左衛門嗣子無之、先般養子いたし白井市三郎と相
改、七左衛門ハ里翁と改名、市三郎家頭ニ相成罷在候処、
父子之間差纏前両度之取定も有之候得共、猶又云々出来親
類打寄熟談之上今般更ニ取極候ケ条左ニ、

一持地田畑山林ニツ割、一ツハ養父ニ分、一ツハ市三郎之
所有ト可致事、

但向山ヲ養父之分ト定、入山ハ市三郎分ト致候事、別
紙仕訳書相仕立候事、

一家財三分ノ二市三郎所持、三分ノ一養父へ相渡可申事、

一養父母居所東ノ蔵卜定、側へ四坪間之居家相建、右普請

出来次第養父母引移リ可申事、

但普請入用金トシテ金貳拾円市三郎へ差出し候上ハ、

父里翁心之儘普請致し、余金何程相掛リ候共市三郎へ

相掛ケ申間敷事、

一居住所出来候迄ハ二階ヲ養父母居所ト定、家事市三郎夫
婦江相渡し可申、尤食事ハ両親之意ニ任セ可申事、

右之通相定候上ハ親子之道相尽し聊不人情之儀有之間敷候、
依之親類一同規定いたし候処如件、

明治七年十月十八日

父

白井里翁

仲

同 市三郎

親類

石黒寿一

同

白井立三

〔朱〕
「二五六号」

規定書之事

当家曰井里翁夷子無之、当市三郎養子ニ貫請家頭市三郎ニ
候処、親子之間差縫先般分ケ地等之取定も有之候得共、今
般市三郎孝道を心掛、五ヶ年之間他へ出稼營業相勵ミ辛抱
いたし立戻候事ニ親類一同打寄決議致し候ニ付テハ、先達
テ之取極ニ基キ尚又仕訳相定候処左ニ、

一 田畑山林仕訳之儀別帳之通各引分ケ支配可致事、

但 弐ツ割

一家財總テ二ツ割之事、

但市三郎儀出稼中ハ余分之品無之候テ宜敷、乍併当今

入用之品、并夜具三人前、外同人所持之品ハ可為勝手

事、

一 穀物有合之分二ツ割之事、

外適宜ニ任セ候事、

同 同
白井修作
白井善五郎

右之通仕訳相定候得共、素ヨリ一家之儀ニ而一時無余儀取
極候儀ニ付、此上市三郎不埒之始末有之上ハ親類打寄離縁
等之取計可及、且又不始末等無之辛抱相見へ候ハ、五ヶ年
之内ニ而も召寄同居可致、不凶災害之外田畑山林ハ勿論家
財等ニ而も私ニ売却双方決而致間敷候、依之親類一同連印
規定為取替如件、

明治八年四月十七日

白井里翁摺印

白井市三郎印

親類
石黒源六

白井敬三摺印

同 白井善五郎印

同 白井藤五郎印

同 白井伝作印

同 白井立三印

〔朱〕
「二五七号」

〔朱〕
「一千号」

〔朱〕
〔勝屋〕
規定書之事

当家白井里翁実子無之、当市三郎養子ニ貫請当時家頭ニ候
処、親子之間差纏先般分ケ地等之取定も有之候得共、今般
市三郎孝道ヲ心掛、五ケ年之間他へ出稼營業相励ミ辛抱い
たし立戻候事ニ親類一同打寄決議致候ニ付而ハ、先般之取
極ニ基キ尚又仕訳相定候処左ニ、

一 田畑山林仕訳之儀ハ別帳之通各引分ケ支配可致事、

但式ツ割

一家財総テ二ツ割之事、

但市三郎出稼中ハ余分之品無之候テ宜敷、乍併当今入
用之品并夜具三人前外同人所持之品ハ可為勝手事、

一 穀物有合之分二ツ割之事、

外適宜ニ任セ候事、

右之通仕訳相定候得共、素ヨリ一家之儀ニ而一時無余儀取
極候義ニ付、此上市三郎不埒之始末有之上ハ親類打寄離縁
等之取計可及、且又不始末無之辛抱相見へ候ハ、五ケ年之
内ニ而も召寄同居可致、猶又不凶災害所之外田畑山林ハ勿

論家財等ニ而も私ニ売却双方決而致間敷、依之親類一同連
印規定為取替如件、

明治八年四月十七日

白井里翁摺印

白井市三郎印

親類
石黒源六

同 白井善五郎印

同 白井立三印

同 白井敬三印

同 白井藤五郎印

同 白井伝作印

〔朱〕
「明治八年十二月廿二日

筑摩県参事並六等判事高木惟矩閣〔高木〕」

〔中身〕
「信濃国筑摩郡

麻績町村文書 第二三四七通之内」

〔朱〕
「三〇二号」

差上申済口証文之事

筑摩郡麻績町村仙助後家すい奉願上候は、同村音八悴久七私養子ニ貰受相統中、去ル子年同人妻貰請候節婚礼入用として同村丈輔手代惣右衛門より奥印証文差入金子式両式分借請候所、其後返金差滞候ニ付、惣右衛門より今般村役場江被願出候得共其節久七より私江一向礼事も無之、殊ニ同人養子中心得違之義有之、去卯年中離縁ニおよひ候節も右等之儀も承知不仕、借金は勿論私年貢差出借請候山井家財之道具等迄私欲いたし居候故、今般相返し候様被仰付被成下置度段申之、久七申立候ハ、惣右衛門より借請候金子式両式分之義ハすい養子ニ罷成私妻貰請候とハ乍申、離縁いたし候上は私より返金仕候謂無之、并ニ借山諸道具等之儀は離縁之節主意として請取候由申之、双方証拠等も無之等閑ニ致方より事起り既ニ越向(ママ)ニも可相成所、年寄忠兵衛立入双方江異見差加へ内濟仕候趣意左ニ、

内

一惣右衛門より借請候金式両式分

金壹両壹分

すいゝ出金分

金壹両壹分

久七ゝ出金分

御取締様

一すいより久七江遣置候家財道具之義は、年来相立候事故其儘久七所持可仕事、

一すい年来借置候年貢山、離縁後久七支配いたし居候得共、当年より立木は勿論すい方江引渡可申事、

右之通双方無申分熟談内濟相整候は、全御威光と難有仕合奉存候、然ル上は右一件ニ付重而御願ケ間布義毛頭無御座候、依之訴答連印濟口証文奉差上所如件、

筑摩郡麻績町村

安政四巳年十二月

願人 仙助後家

い印

親類

甚右衛門印

相手

久七 七指印

同人親

音八 八印

丈輔手代

惣右衛門印

年寄 異見人

忠兵衛印

〔三〇九号〕
(朱)

差上申濟口証文之事

麻績下村円助の彦市へ相掛り奉願上候ハ、円助祖父彦右衛門代旦那場之内、上井堀村丸山耕地は隠居手当として彦市方へ分ケ遣候、下井堀村三拾軒余は円助家内之世話彦市方ニ而いたし呉候義御座候間、配分ニは無之候得共世話料之心得ニ而收納取集め勝手ニ為致置候処、当時円助家内厄介多ニ而及難儀候間、下井堀村旦那場差戻候様致度段申立、彦市相答候は全世話料と申義ニハ聊無御座、尤円助と私儀は別判ニ無御座候得共別居仕来り候も当彦市迄三代何事なく過来り候を、此節ニ罷成差戻し候義難出来段申之、御取調中甚兵衛幸右衛門江立入取扱被仰付候ニ付、兩人ニ而双方及異見ニ熟談内濟相整候趣意左ニ奉申上候、

一 円助申立候は、下井堀村收納場三拾軒余彦市へ世話料之心得ニ而預ケ置候得ハ差戻し候様致度段申立、彦市ハ世話料之心得ニ無之殊更多年過来り候事故難戻段申之、互ニ心得方齟齬致し候へは自然と不和合之基、已来無隔心

為睦ミ合立入兩人取計共^(ママ)糶子壹石五斗、来ル十一月限り彦市の円助へ相渡し可申、然ル上ハ收納場是迄仕来り之通りニ而円助ニおゐても申分無之事、

前書之通熟談内濟相整候ハ全 御威光と難有奉存候、然ル上ハ右一件ニ付重而御願ケ間敷義無御座候、依之訴答立入人一紙連印濟口証文差上申処如件、

文久三亥年四月

御役元

願人下村 助印
相手 彦 市押印
立入人 幸右衛門印
同 甚兵衛印

〔四三三号〕
(朱)

乍恐以書付奉歎願候

筑摩郡麻績町村佐重郎養女かつ奉歎願申上候、元来私義ハ同組合矢倉村米七娘ニ而、去ル文政十亥年同人方江引越候へ共、兎角家内和合等も不仕義ニ付無抛別宅いたし候得共、右屋敷地面之儀は当町村惣左衛門方へ買請并ニ家作普請差

支、上田御領分田沢村秀藏方(ママ)の金子拾三両証文ニ仕立、当町村問屋七郎右衛門加判相添江借用仕候所、最早佐重郎義も老末と申元來難渋故未々返済相滞候得共、右金子之儀は格別にも恩借之義ニ付如何共返済致度段常々心掛居候得共、返済不仕候折柄病氣ニ取付但々当惑仕、厄介いたし呉候者も更ニ無之、僅女之手沓ツニ而手を尽し候へども、母万事行届キ不申去ル寅年死去いたし候へハ、家頭久四郎義如何之義ニ候哉佐重郎存命中とは対談規定も奕心(変)いたし私を女と見込種々取掠、買入候畑取揚干シ物等之義迎も一切相成不申様家岸迄段々切縮メ、其上強勢ニ任セ追払度段申当地住居難相成、(然カ)ル処右借用金迎も中々女之手沓ツニ而は返済可致手段無之、尚更日々暮方夫喰等ニも差支漸々世中之惑を以聊露命を相繼罷在候所、右秀藏方カ被及催促ニ候ニ付、無余儀其節右金子ニ而買入置候屋敷地所之分并ニ家作諸道具等を取片付、借用金返済仕度段申出候所、尤隣家組合ニ而も実意を以一同取掛り呉候へ共、久四郎義右借用金之儀ハ私ニ偽言杯と存外之義を申暮、一切取般(敢)不申候共当惑仕候、勿論秀藏義ハ御他領と申私之縁者故格別ニも

不実増重(長)いたし候なども、右金子之儀前書奉申上候通り印書証文急度差出置候へは、私之場ニ而損毛可掛ニは相成り不申誠ニ難渋仕候、殊ニ久四郎并ニ家内之者共迎も右体不実之訳柄故当地住居は難相成往々難儀至極ニ付、不願恐大キも無是非今般奉歎願申上候、何卒御上様格別之御慈悲を以、養子久四郎被召出御吟味之上、前書買入地所之分并ニ家作諸道具私共取扱置候分夫々取片付、右借用金返済仕、其上少々も相残り候ハ、難渋之私江夫喰料として故障無之早速相渡呉候様被仰付被成下置候ハ、御憐愍之御沙汰広太之御慈悲と偏ニ難有仕合ニ奉存候、尚御尋之儀は乍恐口上を以可奉申上候、此段宜敷御取次可被下候、以上、

筑摩郡麻績町村

佐重郎義女
願人
か

つ拇印

安政六末年九月廿四日

名主

七左衛門殿

同

仁右衛門殿

前書之通願出候ニ付取次奉願上候、以上、

松本御役所

名主
七 左衛門印
与頭
与 右衛門印

治右衛門殿まいる

借り主
与 次兵衛印
証人
名主
弥 七 郎印
証人
半 右衛門印

〔中屢〕
信州伊那郡
中越村文書一一五通之内

〔朱〕
〔二号〕

借用申金子之事

一金子壹両は 江戸小判也

右是は亥ノ御年貢ニ指詰り借用申所実正也、為此質物我等
扣之内六反田と申田相渡シ申候、御年貢之儀御繩成役儀共
ニ御勤御手作可被成候、年季之義は亥ノ暮より寅之暮迄中
年三年季ニ相定申候、年季参右金子相濟シ申候ハ、質物之
田地御返シ可被下候、若相濟不申候ハ、右之質物永代相渡
シ可申候、其内御国替御代官様替何様之新御法度御座候共
少も相違申間鋪候、為後日仍而一札如件、

中越村

〔朱〕
〔三号〕

質物ニ相渡シ申田地之事

一金子四両壹貫文借用仕、此質物ニ向田壹ツ堀田と申田式
ケ所拾年季ニ相定相渡申候、年季参候ハ、右之金子ニ五
分廻二年々利足ヲ掛相濟申候ハ、右之質物無相違御返し
可被下候、若相濟不申候ハ、永代相渡シ可申候、此田地
ニ付脇より構無御座候、縦御国替御代官替其外何様之新
御法度御座候共少も相違申間敷候、為後日一札如件、

元禄九年子ノ二月廿八日

中越村

かり主

次郎右衛門印

証人名主

弥 七 郎印

同組頭

文 四 郎

治右衛門殿まいる

(朱)
「四号」

質物手形之事

一米四斗右ハ子ノ御年貢指詰儘ニ借用仕候而御蔵江相納申所実正ニ御座候、為此質物と我等扣之内原畑藤山沓ケ所南原沓ケ所右式ケ所合式反沓畝四歩之処ハ繩成御手作可被成候、年季之儀ハ丑ノ春々戌之暮迄拾年季ニ相定置申候、年季参候而右米相濟シ申候ハ、質物之畑無相違御返シ可被下候、其内御国替御代官様替其外何様之義御座候共於此儀ニ少も相違申間敷候、ケ様ニ相定申上ハ脇ニハ不及申毛頭相違申間敷候、為後日如件、

元禄拾年丑ノ三月十三日

中越村

売主

清

口入

兵 四郎印

証人

彦 三郎印

同名主

惣右衛門印

同村

長 兵衛殿

(朱)
「五号」

借用申金子之事

(一脱力)
合三両沓分は 江戸小判也

右是は丑之御年貢ニ指詰り借用申処実正也、此質物に六反田と申田沓ケ所相渡し申候、年季之儀は八年季に相定申候、年季参右之金子ニ年々利足を掛相濟申候ハ、右之質物無相違御渡し可被下候、か様相定申上は脇より少も構無御座候、若其内御国替御代官様替其外何様之御法度御座候共少も違議申間敷候、為後日仍而手形如件、

元禄十一年寅ノ二月廿六日

中越村

かり主

与 治兵衛印

証人名主

惣右衛門印

組頭

文 四郎

彦 三郎印

治右衛門殿

(朱)
「四九号」

下請証文之事

一我等忤常右衛門儀女房共ニ今度其御地へ罷越候ニ付、何方へ奉公ニ御有付ケ被下候共、又ハ店借御差置被下候共、貴殿思召被成可被下候、先様何分ニも御請合頼入申候、貴殿御手前我等共請合申所相違無御座候、尤此者共ニ付何方少も構無御座候、然上ハ何様之六ヶ敷義仕出シ候歟、或ハ死失候様成儀旁イカ様之悪事御座候共早速此方へ引取埒明可申候、

一御公儀様被仰付候御法度趣何ニ而も為相背申間敷候、一此者宗旨之儀代々浄土宗ニ而当村円浄寺旦那ニ紛無御座候、何時ニ而も御用次第寺請証文取進可申候、

右之通貴殿御請合頼入申上ハ、何様之儀出来申候共本人ハ不及申ニ加判立合早速引取埒明ケ、貴殿江毛頭御苦勞掛ケ申間敷候、且又何年ニ而も貴殿方先様御請合被下候内ハ、貴殿御手前之儀我等共請合申候上ハ証文之通急度埒明少も相違申間敷候、為後日下請証文、仍而如件、

享保十五年戊ノ二月

中越村
本人
同所
五人組頭
次 右衛門印
平右衛門

同所
名主
藤 右衛門

上徳町
彦 助殿

伊左衛門殿

(朱)
「五七号」

入会山定之事

一流し木拾間同七間同五間同三間三石以下は老間宛

此分持高見合ニいたし渡場ニ而相改可申事、

右流し木之義は当年は惣止ニいたし、来ル辰年ニ定之通

入会可申候、

一檜樫は不及申何木ニ而も他所売一切致間敷事、

附少々之脊負木成其他所出シ致間敷候、若隠持運候者

候ハ、見付次第取徳ニいたし其上役元江相断以来山入

相留可申候、尤隣宿ハ申談置相互改決而通し不申候事、

一脊負(木カ)ニ而も無高之者ハ一切不相成、尤銘々遣ひ用等ハ

村役人江断書付を請取所持可致候、惣而無高たる者泊り

山稼村内たりとも薪売買致間敷事、

一高持ニ而も書付無之山入致候ハ、切いたし候木数は勿論、定ニ違ひ候ハ、為過代と錢三貫文宛其村名主へ請取可申事、

附何れ之村々之者ニ而も見付候者江褒美として相渡可

申候、若書付月日等相違候ハ、何方之者成共無斷取徳

ニ可致候、惣而何木ニ而も不応分限切出シ申者有之候

ハ、其過木ハ勿論其外切出シ木迄取徳ニ可致候、都而

右定之通相互吟味仕合実意ニ差はまり、手前限料作之

間々ニ山入いたし、料作ニ差かゝり候節雇伐木は決而

致申間敷候事、

右之趣前々々相定置候得共近来連々と猥ニ相成候ニ付、今般入会村々立会猶又相定申上は弥以来堅く相守可申候、為後日為取替連印証文、仍而如件、

寛政七乙卯年正月

上種村庄屋

長 蔵

組頭 源 蔵

百姓代 嘉 吉

御預り所名主

弥右衛門

組頭

弥 吉

御用ニ付出府作五郎代印

中割庄屋

組頭

勘兵衛

南割庄屋

組頭

市郎治

同代印善五郎

光前寺庄屋

組頭

利右衛門

赤須町名主

組頭

与市衛門

南下平名主

組頭

次郎三郎

南下平名主

組頭

伝三郎

百姓代

伊右衛門

百姓代

符左衛門

宮田五ヶ村御役衆中

〔六六号〕

差出申一札之事

一私義実子無之候ニ付貴殿弟繁藏殿十ヶ年以前申請田畑山林家屋敷相渡世話頼ミ候処、此間内借等も増家内六間敷(陸)からず、松之内しの義ハ不埒ニ而家出いたし、繁藏殿ハ孫を連被致不縁老衰之私殊外迷惑致候、就夫丹島殿礖右衛門殿ヲ偏ニ無心申孫三七を貫請被下候様ニ頼候へハ早速御承知三七を被遣被下忝存候、然上ハ田畑山林隠居之外不殘相渡可申候、しの義ハ此家ハ不及申宮田八ヶ村へハ足踏為致不申候、其段御心易可被思召候、繁藏殿ハ親子之義候へハ出入可被成候、三七後見之義喜太郎殿并礖右衛門殿、諸事引廻指南差図ハ三右衛門并和藏殿、村役人衆中ハ不及申万事頼置候故ハ間違有間敷候、万一三七義短命ニ而世統(継)ニも不相成外ハ他人養子致時ハ金子貳拾両世話人村役人立合致調達急度相渡シ可申候、為後日世話人役人加判連印証文如件、

享和元辛酉年十月 日

宮田北割

本人

源右衛門

請人 喜太郎
同断 和藏
同断 三右衛門
組頭
同断

大山村

安兵衛殿

同

繁藏殿

〔裏書〕

表書之通少も相違有之間敷候、

〔六七号〕

為取替一札之事

一礖右衛門厄介ふさ儀六ヶ年以前ハ表祖父竹田平右衛門殿方ニ而養育被成候処、右手当等之儀彼是入組候ニ付此度

名主 祖右衛門

池上本右衛門、春日又左衛門立入双方熟談之上取極候処
左之通、

一米八俵也 但御藏米三斗三升入

右前書之通是迄平右衛門殿方ニ而養育被成候為挨拶、此
度礮右衛門ノ平右衛門殿江差遣候事

(様脱之)

一右ふさ儀此度改而平右衛門殿江預ケ御世話被成候申談取
極候、然ル上は同人十六歳之春ニ相成礮右衛門忝新五郎

江妻合候節迄為養育料、来卯之年ノ之分取極候処左之通、

一壹ケ年米五俵宛

右之通年々二月中三俵、十月中式儀礮右衛門方ノ平右衛

門殿江差遣可申事、

一右ふさ儀十六歳之春ニ相成新五郎江妻合候節は、平右衛

門殿方ニ而致支度礮右衛門嫁ニ差遣可申候、尤右為支度

料金五両也、礮右衛門ノ平右衛門殿江差遣可申事、

但平右衛門殿方養育年限相濟礮右衛門方江引取候上は、

ふさ儀生涯深切ニ世話可致事、

右之通双方致熟談候上は前書之通実意を以取扱可申候、尤
平右衛門方ニ而御預リ被下候内ふさ儀ニ付臨時物入等有之

候共御同人方ニ而御取賄被下候(旨)宗申談候、依之懸り合之者
加印為取替一札、仍而如件、

中越村

本人

礮 右衛門

証人

清 右衛門

同断

忠 左衛門

下牧村

同断

加納与右衛門

立入人

池上本右衛門

同断

春日又左衛門

竹田平右衛門殿

(朱)
「六八号」

差出申一札之事

一貴殿厄介ふさ儀ニ付去ル寅年池上本右衛門、春日又左衛

門取賤を以去年迄五ケ年之間預リ置、当年貴殿忝新五

郎妻ニ差遣候約諾之処、此度不熟ニ付縁談之儀双方申談

之上致破談改而自分方へ厄介ニ引取、追而何方江縁付候

共申分無之段致示談候、右ニ付兼而引合之通支度金五兩

但し此卷通は此度無拋儀ニ付借用
ノ四通也

也、只今慥ニ受取申候処実正ニ御座候、猶又此上ふさ儀

右は要用ニ付格別之御懇意を以私借用仕候処実正ニ御座候、

貴殿方年忌法事其外出入之儀は是迄之通為致可申候、

尤先年御預ケ置申候証文質地よりは御切手多分ニ相成申候

右之通双方納得之上致示談候上は以来ふさ儀ニ付貴殿江少

間出精仕、当十一月限りニ成丈御返納可仕候、為後日証文

も厄介懸申間敷候、為後日為取替一札仍如件、

仍如件、

弘化四丁未年二月

竹内平右衛門印

天保二年三月

万取喚入
春日又左衛門印

(卯カ)
借主
魚かし
現金屋

池上本右衛門印

長兵衛印

中越村

礮右衛門殿

(朱)
「一九八号」

田地相渡敷金請取証文之事

(中扉)
「三河国渥美郡

一田畑五反式畝八歩 清須新田之内

村々文書三七九通之内」

畑式反八畝歩 所は寺西通 盛十ヲ
内田老反七畝拾三歩 右同断但シ 畑方御免三ツ七分九厘三毛
畑六畝廿五歩 所は庵後 田方御免四ツ卷分七厘式毛

田畑合掛金五拾兩也

(朱)
「九号」

右之地所相渡敷金慥ニ請取申候所実正ニ御座候、御年貢之

御切手借用添証文之覚

儀は御定免之通并諸役入用懸物は村並ニ御出シ可被成候、

一三ノ御丸御切手三通番付
子正月廿六日借用

若シ早損水損有之候而御檢見御引被下置候ハ、其通引可進

一同 卷通 三ノ廿五

候、此田地ニ付脇ノ何之構無御座候、金子返済仕候ハ、此

証文共ニ御返シ可被下候、金子返済相済不申内は何ケ年も御支配可被成候、為後日仍而如件、

文化十二年亥三月

清須新田地主	権兵衛印
同所請人	藤次印
同所請人	十郎兵衛印
同所庄屋	又八印

羽田野相模様

〔二〇〇号〕

田方相渡敷金証文之事

所は小屋西通之内天水ニ而
一田方四反四畝廿九步 盛十ヲ
御免四ツ壹分七厘貳毛

此掛金五拾両也

右之田方相渡敷金請取申候所実正ニ御座候、御年貢之儀は御定免之通并諸役入用掛物之分は村並ニ御出シ可被成候、

若シ水損日損有之候而御檢見御引被下置候ハ、其通引可進候、此田方ニ付脇々何之構無御座候、金子返済仕候ハ、此証文共ニ御返シ可被下候、金子不相済内は何ケ年も御支配

可被成候、為後日証文、仍而如件、

文政五年午二月

羽田野上総様

清須新田	地主	権兵衛印
証人	藤次印	
証人	十郎兵衛印	
庄屋	又八印	

〔中歴〕
甲州都留郡

上谷村文書 第一二八六通之内

〔八号〕

預り申小作証文之事

戸沢村御高内字中之久保ニ而
一畑大表貳斗五升貳

右は貴殿御所持之畑地此度我等小作ニ相預申処実正ニ御座候、然上は御年貢諸役我等方ニ而相勤候儀勝手宜敷、依之右段御無心申入我等方ニ而御年貢諸役相勤メ、壹ケ年ニ作徳金三兩三分ツ、差出申候筈ニ相定、当子年より来申年迄中九年季ニ相定申上は此証文ヲ以小作年季中は御預ケ可被

下候、若又小作金少も相濟候ハ、立毛共地所御殿上ケ可被
成候、其節一言之違乱申間敷候、為後日小作証文、仍而如件、

而如件、

寛政四年子九月

寛政四年子九月

戸沢村

小作人

喜兵衛印

小作人
熊井戸
常

八印

同所証人

甚

同断
利右衛門印

同村

証人

源左衛門印

上谷村

伊右衛門殿

(上脱カ)早
谷村甲馬町

伊右衛門殿

(朱)
「一四号」

預り申小作証文事

玉川村御高内

字下ノ田

上田老反拾八步

字下あらた

下田老反式畝八步

分米壹石三斗六升九合
但田數四枚

分米壹石三斗七升七合

但田數三枚

合反別式反式畝式拾六步 此分米式石七斗四升六合

一熊井戸村高内八原ニ而田壹斗式升蒔、同村高内ははじ下
二兩大麦四斗蒔之處、当子ノ我等預り小作致候処実正也、
尤我等勝手宜ニ付御無心申入御年貢諸役御年貢諸役我等
方ニ而相勤候積りニ而、壹ケ年金七両式分差出可申候、
若小作金相滞候ハ、右地所ハ勿論仕付置候作毛不殘御取
上ケ可被成候、少も違背申間敷候、尤我等預り小作いた
し候内ハ年々此手形御用可被下候、為後日小作手形、仍

右は貴殿御所持之田地此度我等御無心申入小作ニ預り申処
実正也、然処我等方ニ而御年貢諸役相納候儀勝手宜敷、依
之右段御無心申入我等方ニ而御年貢相勤、壹ケ年ニ作徳金
三兩三分宛差出申候筈ニ相定、当丑年ノ来ル申年迄丸八年
季ニ相定申候上ハ此証文を以小作年季中ハ御預ケ可被下候、

(朱)
「一二号」

小作手形之事

若又小作金少も差滞候ハ、立毛共地所御取上ケ可被成候、其節一言之違乱申間敷候、為後日小作証文、仍而如件、

(川脱カ)
玉村

寛政五丑三月

小作人
惣 七印

同

親類
甚右衛門印

同

証人
七 兵衛印

同

組合
幸 内印

上谷村

清 七殿

(朱)
「一六号」

小作証文之事

一 小野村御高内字宝院地中丸大麦三斗蒔畑式ケ所高壹石式斗四升壹合、貴殿御所持ニ相成候処我等御無心申上小作仕候処実正也、然ル上ハ御年貢諸役我等方ニ而相勤候義

ニ勝手宜敷、依之右段御無心申入我等方ニ而御年貢諸役相勤、壹ケ年ニ小作入上金三兩三分宛差出し申候筈ニ相定、当丑ノ三月ヨ来ル申年迄中年七年季相定メ申候上ハ此証文ヲ以右年季中ハ御借可被下候、若又入上金三兩三分少も相滞り候ハ、右畑地御取上ケ可被成候、其節一言之違乱申間敷候、為後日小作証文、依而如件、

寛政五年丑三月

小野村 借主
武 七印

同所

証人
伝 兵衛印

上谷村

伝 七殿

(朱)
「一九号」

小作証文之事

一 上谷村御高之内字家中跡泰安寺と申所ニ而大麦六升蒔之所也貴殿御所持ニ相成候所我等御無心申上小作仕候所実正也、然ル上ハ御年貢諸役之義ハ我等方ニ而相勤候義勝手宜敷、

依之右之段御無心申入我等方ニ而御年貢諸役相勤、壹ヶ年ニ小作入上金壹両三分式朱ツ、差出し申筈ニ相定メ、当丑ノ暮より来ル未ノ暮迄七年季ニ相定申候上は此証文ヲ以右年季中は御借し可被下候、若又入上金少も相滞候ハ、田畑御取上ケ可被成候、其節一言之違乱申間敷候、為後日小作証文、依而如件、

寛政五年丑ノ九月

借主

武 兵 衛印

証人

只右衛門印

同

重 兵 衛印

同

太郎右衛門印

同

七 兵 衛印

同

五郎右衛門印

今木や
清 七殿

(朱)
「二三号」

預り申小作証文之事

大幡村御高内字丹保二而

下田式畝廿八歩

同所二而

御高式斗九升三合

御高三斗三合

同所二而
下々田式畝式歩 御高壹斗式升
同所二而
下々田三畝歩 御高式斗四升

此反別老反壹畝四歩
分米九斗五升六合
家屋敷三而

畑麦壹斗蒔

字上ノ田原ニテ

畑麦壹斗三升蒔

二口メ麦式斗三升蒔

右は貴殿御所持之田畑此度我等御無心申小作ニ預り申所実正ニ御座候、然処我等方ニ而御年貢諸役之儀勝手宜敷候ニ付右段御無心申我等方ニ而御年貢諸役相勤、壹ヶ年ニ金三両三分宛差出候筈ニ相定、当丑ノ来ル申迄八年季ニ相定申候上は此証文を以て年季中御預ケ可被下候、若又小作金少も滞り候ハ、立毛共地所御取上可被成候、其節一言之違乱申間敷候、為後日小作証文、依如件、

寛政五年丑十一月八日

田畑小作人

久左衛門印

証人

文右衛門印

(上脱カ)

谷村

今木屋

清 七殿

(朱)
「二五号」

小作証文之事

一上谷村高内字どうじ笹原おこしニ而舂式斗蒔合田高四石七升式合之田地、当丑々来未迄六年季ニ我等預り小作致候処実正也、尤勝手ニ付御無心申我等方ニ而御年貢諸役相勤候而、壹ケ年ニ小作金七兩式分宛差出可申候、若御年貢諸役ハ勿論小作金相滞候ハ、右田地ハ不申及仕付置候作毛共御取上被成候共少も違背申間敷候、為後日小作手形、仍而如件、

寛政五丑年十一月

上谷村
小作人 源 兵衛印
証人 源 七印

今木屋
清 七殿

(朱)
「二八一号」

借屋証文之事

一上谷村御高之内新町西側間口三軒奥行町並之通、此度貴殿御所持相成候所我等御無心申上借屋仕候処実正也、然ル上ハ御年貢諸役我等方ニ而相勤候儀勝手宜鋪、依之右

段御無心申入我等方ニ而御年貢諸役相勤メ、壹ケ年ニ屋質七兩式步宛差出申候筈ニ相定、当亥年々来ル未ノ年迄中八ケ年季ニ相定申候上は此証文を以借屋年季中は御借家可被下候、若又借屋金少も相滞候ハ、屋鋪御取上ケ可被成候、其節一言之違乱申間鋪候、為後日借屋証文、依而如件、

寛政三亥十月

借屋借主
清 兵衛印
証人 善右衛門印

今木屋
清 七殿

(朱)
「二八二号」

借家証文之事

一上谷村早馬町西側間口武間半裏行町并 但建家共

上谷村早馬町
質主 与 兵衛印

右は貴殿御持所之家屋敷此度我等借家ニ相預り申所実正ニ御座候、然上は御年貢諸役我等方ニ而相勤候儀勝手宜鋪、依之右段御無心申入我等方ニ而御年貢諸役相勤メ、壹ケ年

に為借家賃金三両三分宛差出申管相定メ、当巳年々来ル西暮迄五ケ年季ニ相定メ申上は此証文ヲ以借家年季中ハ御貸可被下候、若又家賃等少も相滞候ハ、加判之者罷出急度埒明ケ貴殿江御損毛掛ケ申間敷候、為後日借家証文、仍而如件、

上谷村早馬町

借家主

寛政九年巳九月

利兵衛印

同所

証人

甚右衛門印

同所

同断

茂兵衛印

質主

与兵衛印

今木屋

清七殿

伊右衛門殿

(朱)「二八三号」

一札之事

原源左衛門家裏地四間ニ六間之所、当暮々八年季ニ相定七

(丸脱カ)

平借地仕、此内ニ式間半四間之家建掛り申候地隣之田主銅

屋伝七殿ハ彼家地境迄押詰建候てハ田地之木下ニ罷成候由御構被成候故、普請指扣御見分ニ入レ候所、惣じて田畑之辺ハ式三間も遠慮可仕管ニ御座候所境まで押詰、隣田地之木下ニ成り候も弁無之普請取立候段不届之由御吟味之趣何分ニも申分ケ相立不申候、然共建掛り候家ニ御座候故御有免を以右伝七殿江御わひ被成下、七平裏之方雨落ハ田境まで八尺余も明ケ候て年季之内家作り候様ニ被仰渡御用捨之段忝奉存候、八年相立候以後ハ此場所ニ立置申間敷候、尤年季之内ニ而も日指雪隠等我儘ニ作り出シ申間敷候、殊更向後は屋敷之内ニ如何様成家作り候共本田之隔ニ成り候場所ニ御座候得ハ何時成共御差図ヲ請家作可仕候、為後日一札差出し申所、仍而如件、

上谷村原

享保九年辰十一月廿七日

源左衛門

同所

七平

上谷村

名主衆中

〔朱〕
「裏書」

表書之通証文為致本証ハ我等方ニ取置申候、以上、

名主
伝 左衛門印

〔朱〕
「二八五号」

借家預り申居屋敷手形之事

但シ表間口沓間半之処沓ケ所

〔朱〕
「二八四号」

家賃証文之事

一上谷村上町西側ニ而間口式間裏行中川迄之屋敷建家沓軒、

当寅ノ九月ノ御無心申我等借屋致候処実正也、尤御年貢

諸役我等相勤候儀勝手宜敷ニ付御無心申入御年貢諸役我

等方ニ而相勤、其上屋賃として沓ケ年ニ金三両三分ツ、

急度差出し可申候、万^(滞乙)一借家金借申候ハ、右家屋敷御取

上可被成候、少も違背申間敷候、為後日家賃証文、仍而

如件、

文化三寅年九月

上谷上町

借家人

同断
証人
藤 左衛門印

治 左衛門印

清 七殿

候処、右年季中滞候ハ、居屋敷御取上被下候而も其節一

言之儀申入間敷候、為後日差出申借家手形、仍而如件、

文化五年辰十二月

上谷村
借家主
証人
繁 右衛門印

同断
久 兵衛印

上谷新町

伝 七殿

〔中扉〕
「甲州巨摩郡証文一五九通之内」

〔朱〕
三七号

遺 居跡証文之事

一山梨郡西油川村百姓嘉兵衛弟元助と申者慥成者ニ付、井之口村清兵衛殿世話ヲ以其御村方徳左衛門殿跡式相続ニ遣申処実正ニ御座候、然上ハ御公儀様御制禁之儀ハ不及申ニ御村方御掟之儀は不依何事急度相守可申候、万一此者不埒之義仕候ハ、加判証人引請急度埒明ケ御村方江少も御苦勞掛ケ申間敷候、為後日遺跡証文差出申処、仍而如件、

天保二卯年

西油川村

百姓

嘉兵衛印

遺跡

元助印

中村

親類

太右衛門印

井之口村

世話人

清兵衛

成島村

御名主中

〔朱〕
裏書

表書之通相違無御座候、以上、

西油川村

名主

儀左衛門印

〔朱〕
三八号

遺跡証文之事

一巨摩郡乙黒村百姓新右衛門後家倅作右衛門と申者慥成ものニ付、其御村方藤右衛門殿世話を以妻子召連半兵衛後家跡式相続ニ遣し申所実正ニ御座候、然上は御公儀様御制禁之儀は不及申御村方御掟之義不仍何事急度相守可申候、万一此もの不埒之義仕候ハ、加判之証人引請急度埒明御村方江少も御苦勞掛申間敷候、為後日遺跡証文差出申処、如件、

天保三辰年三月

乙黒村

親

新右衛門後家印

遺跡

作右衛門印

親類

常兵衛印

成島村

成島村
世話人

藤 右衛門印

成島村

御役人中

御名主中

〔朱〕
〔四〇号〕

遺跡証文之事

一 巨摩郡長沢村惣兵衛忒茂兵衛と申者慥成ものニ付、其御村方伴助殿世話ヲ以同所権右衛門跡式相続ニ遣申候処実正ニ御座候、然ル上は 御公儀様御制禁之義は不及申御村方御掟之義不依何事急度為相守可申候、万一不埒之義仕候ハ、加判之証人引請急度埒明御村方江少も御苦劳相掛申間敷候、為後日一札差出シ申処、仍而如件、

嘉永二酉十二月 日

遺跡人
藤 兵衛印

長沢村

親元
惣 兵衛印

下河東村

引請人
忠右衛門印

世話人
伴 助印

〔朱〕
〔四一号〕

遺跡証文之事

一 当村平右衛門妹〔あさ脱カ〕と申者慥成者ニ御座候ニ付、同村甚右衛門世話ヲ以同村市左衛門殿跡式相続ニ遣申所実直ニ御座候、然上は御公儀様御法度之儀は不依何事急度為相守可申候、万一此者御作法相背候〔歟脱カ〕亦は不埒成儀仕候ハ、加判之証人罷出急度引請御村方江少も御世話懸申間敷候、為後日之遺跡証文差出申所、仍而如件、

一 宗門之儀は市右衛門方引越候上は先祖同宗ニ罷成可申候、為念如此ニ御座候、以上、

安政五年午三月吉日

平右衛門印
甚右衛門印

あ さ印

〔朱〕
〔四二号〕

差上申一札之事

一此度私忞国蔵と申者南組作兵衛世話ヲ以伊兵衛跡相統為仕候様御村方へ御願申上候処、未夕家作等出来兼当分之内私同居罷在候、然上は御公儀様御法度之儀ハ勿論御村方御作法不依何事急度相守可申候、尤御村御用等は申ニ不及出捨其外諸人足之義御触当次第急度相動可申候、尤家作之義は来ル子之九月迄ニハ無相違取建可申候、万一此もの不埒之義有之候ハ、私共引請御村方へ聊御厄介相掛申間敷候、何卒家作取建之義子之九月迄御延引被成下候様奉願上候、為念一札差上申処、仍而如件、

文久三亥三月 日

成島村本郷組

甚右衛門印

作 兵 衛印

御年番所

御役人中

〔四三号〕
〔朱〕

〔遺〕
送跡証文之事

一甲府一連寺町孝兵衛忞半兵衛と申者慥成者ニ付、我等引

受当御村方重兵衛殿後江跡式ニ相統被仕申候処夷正ニ御座候、然ル上は御公儀様御制禁之儀は不及申御村方御

法急渡相守可申候、若此者不埒之儀御座候ハ、証人罷出

直様埒明御村方江少も御苦勞相掛申間敷候、為後日送跡

証文、仍而如件、

証文、仍而如件、

甲府一連寺町

親本

孝 兵 衛印

慶応元乙丑年九月

巨摩郡当村

世話人

平右衛門印

一連寺町

送〔遺〕跡人

半 兵 衛印

成島村

御名主衆中様

〔朱〕
〔四五号〕

遺跡証文之事

一巨摩郡飯喰村百姓吉右衛門忞善兵衛等申者慥成者ニ付、

我等引請其御村方助左衛門後家跡式相統ニ遣し申候処夷

正ニ御座候、然ル上は 御公儀様御制禁之儀ハ不及申御
村方御作法堅相守可申候、万一此もの不埒之義有之相続
相成兼候得は世話人立会親元へ引取御村方へ聊も御世話
相懸申間敷候、為後日一札、仍而如件、

慶応四年辰五月

飯喰村

親

吉右衛門印

成島村本郷組

世話人

伊右衛門印

元組

御名主中

〔四六号〕

差出申居跡証文之事

巨摩郡極楽寺村要右衛門弟三太郎と申もの、成島村徳兵衛
殿世話ヲ以其御村方半三郎跡相続ニ差遣し候処相違無御座
候、御村方御^作左法を以人別御差加江然は此もの義御法度筋
ニ^(差カ)達^(敷脱カ)隙候 亦は不恙成は仕成候ハ、御沙汰次第早速引取御
村方江少も御厄介相懸申間敷候、為後日居跡証文差入申候、

如件、

明治二年巳正月

成島村

御役人中

前書之通相違無御座候、以上、

極楽寺村

名主

太郎兵衛印

〔四八号〕

遺跡証文之事

一巨摩郡乙黒村和吉悻福太郎と申者慥成ものニ付、我等引
請当御村方浦右衛門後家りう跡式相続為仕候処実正ニ御
座候、然上は 御公儀様御制禁之儀は不及申御村方御法
度筋堅相守可申候、万一此もの不埒之儀有之候ハは請人
罷出急度埒明御村方江聊御苦勞相懸申間敷候、為後日遺
跡証文、仍如件、

極楽寺村

要右衛門印

成島村

世話人

徳兵衛

明治三年午三月

巨摩郡乙黒村

組合人
文 後印

同成島村本組

世話人 善次郎印
相統人 福太郎

成島村

御役人中

〔朱〕
〔四九号〕

差出申居跡証文事

一 巨摩郡西花輪村百姓与七弟市右衛門申者慥成者ニ付、其

御村方弥兵衛殿跡式相統ニ罷越御百姓相立申候、依之私

共受負人ニ罷立万端引受候所相違無御座候、然ル上は

御公儀様御法度之趣ハ不申及御村方御掟之義相背キ申間

敷候、尚又御村方御役中御意ニ随ヒ違背申間敷候、

一 博奕惣而賭之諸勝負一切仕間敷候、右宿等堅為仕申間敷候、
〔脱カ〕 養母ニ孝行仕夫婦兄弟諸親類睦シ敷、常ニ勤行大切ニ相

慎可申候、

一行衛不知者ニ夜之宿もかすへからす并ニ何ニ而も預物
等決而為仕申間敷候、縦親類縁者要敷者等兄弟多ク共差
〔原書ノママニ付箋〕

置申間敷候、

〔脱カ〕 常々火之本大切ニ可仕候、夜中他出不仕様心掛可申、万

一 無拠義ニ而他行仕一夜泊り之義其段組頭相断罷出早速

宿元へ立帰り長居仕間敷候

一 此者宗旨之義は代々禅宗西花輪村長徳院旦那二紛無御座
候、為其寺受状私共方取置御入用次第差出申可候、
〔ママ〕

〔脱カ〕 此者家業之義耕作之外何ニ而も渡世稼キ之品無御座候、

一 此者親類縁者は不及申何方誰へ成共少シも構無御座候、

若六ヶ敷義出来候ハ、加判人引受急度埒明御村方へ少し

も御世話相掛申間敷候、

右之趣逸々承知仕、ヶ条之義市右衛門申間得心仕候ニ付私

共引受仕急度為相守可申候、万一御掟等相背キ候ハ、御詮

儀之上如何ニ被仰聞候共一言之申分無御座候、為後日受負

証文、仍而如件、

巨摩郡西花輪村

受負人
与

七印

明治三年午四月

成島村

仲人

勘左衛門印

西花輪村

当人

市右衛門印

成島村

御役人中

前書之通相違無御座候間奥印仕候、其御村方御人別ニ御差加へ奉願上候、以上、

明治三午年四月

成島村

御名主中

西花輪村

名主

九右衛門印

〔朱〕
「五〇号」

差出申一札之事

八代郡白井河原村権左衛門弟儀助義、巨摩郡成島村坂本喜重郎世話ヲ以其御村方仲兵衛娘おのふ江掣ニ差遣し御百姓相続為仕候処実正也、然ル上は御法度向は不及申御村方御

作法不依何事ニ為相守可申候、万一御百姓不精ニ而相続方

相成兼候ハ、何時成共右口入人立会早々引取御村方江少も

御世話相掛申間鋪候、為後日之加判ヲ以一札差出申処、仍

如件、

明治四年未如月 日

八代郡白井河原村

当人

中沢儀助

同

同人兄

中沢権左衛門印

同

親類惣代

土屋吉左衛門印

巨摩郡成島村

世話人

坂本喜重郎印

巨摩郡成島村

御名主所

右村

名主

角田太郎左衛門印

前書之通相違無御座候、以上、

〔朱〕
「五一号」

差出申一札之事

一 巨摩郡第拾八区上笹尾村百五番住居坂本久左衛門養父和吉儀、同郡第二区成島村古屋保右衛門媒を以其御村方五拾三番住居農乙黒うめ殿相続人ニ遣し御百姓相続為仕候処実正也、然ル上は御法度筋は不及申御村方御作法不寄何事為相守可申、万一農業無精ニ候敷又は御法度筋ニ携御百姓相続相成兼候は、何時成共右媒人立会早々引取御村方へ少も御世話相懸ケ申間敷候、為後日証人加判一札差出申処、如件、

明治五壬申年六月

巨摩郡第拾八区上笹尾村

戸主

坂本久左衛門印

組合
親類
惣代

坂本藤兵衛印

同郡第二区成島村

媒人

古屋保右衛門

同郡第二区成島村

御役人中

〔五四号〕
(朱)

差出し申一札之事

一 私女房親嘉七と申者板垣村出生慥成者ニ御座候、然処右女房貫請申候節末々ニは見届ケ可申候対談致置候間、最早及老衰ニ殊ニ一兩年病身ニ相成申候ニ付私方江引取世話致孝心仕度候間、右之趣御年番所江奉願上候所村御役人中御相談之上御聞濟被成下忝奉存候、然上は御公儀様御制禁之儀は不及申ニ御村法之儀何事ニよらす急度為相守可申候、万一嘉七身上ニ六ヶ敷出来仕候ハ、加判之者(儀脱力)罷出引取御村役人中江少も御苦勞懸申間鋪候、依之一札証文差出し申処、仍而如件、

文化九年申二月

成島村

宅兵衛印

宮原村

請人

国五郎印

同村

御村役人衆中

〔七〇号〕
(朱)

差出申一札之事

一私儀独身殊ニ病身ニ付農業稼も出来兼候ニ付、市川大門村彦之丞儀は兼而知人ニ御座候間同人方へ罷越商売向助合罷在候処、最早村元江立戻り御百姓相続仕度存候得共、素より病身ニ御座候得は農業も出来兼且商売向心掛ケ候ニも田舎之事ニ御座候へは旁差支申候間、私義右市川ニ而行々商売渡世仕度存候間何卒御聞濟被下候様願上度、然上は跡式之義親類平次右衛門子長重郎ヲ以御百姓相続為仕可申候、仍而如件、

当村

天保十年亥三月 日

両 助印

同

親類惣代

平次右衛門印

御村役人中

一前書之通相違無御座候間依之奥印形仕候、以上、

組頭

軍 藏印

〔朱〕
「七二号」

差出申一札之事

一当村百姓八百藏儀幼年之節父ニ相別れ、下河東村采兵衛伯父ニ付同人方ニ而引取是迄養育仕候処、今般右采兵衛一子之悴死去ニ付右八百藏事馴候ニ付相続ニ貫請度段再応及無心候得共、同人儀は相続人ニ付右様難相成挨拶致し候処、達而無心ニ付此段御役所江願上候処格別之御勘弁を以御聞濟被下難有奉存候、然上は弟彦藏ヲ以御百姓相続急度為仕可申候、依之親類組合并組頭連印引請証文奉差上候処、如件、

天保十四卯年十月廿五日

組頭

軍

藏印

組合

吉右衛門

下河東村親類

采兵衛印

同断

平次右衛門印

御年番所

〔朱〕
「七四号」

差出申一札之事

一私娘きんと申者先年御村方善八相続人ニ遣し御百姓相続仕居候得共、吞水身不相応ニ候哉追々病身ニ相成殊ニ忝

人之女子有之候得共未幼年ニ付旁修覆其外等も難出来義
は勿論、日々暮方ニも差支極々困窮ニ落入候ニ付、御役
元江御願申兩人共私実家江引取申候間、跡相統人之義は
御村方思召ヲ以御取極被下候共聊申分無御座候、為後日
一札差出申候所、仍而如件、

上小河原村

享和四子三月

当村

嘉永二年酉四月

茂兵衛印
証人組合
長十郎印

当村

証人
甚右衛門印
同断
勘五郎印
軍藏印

成島村

御役人中様

〔裏書〕

御村役人衆中

表書之通少も相違無御座候、以上、

名主
儀
助印

〔朱〕
「一四二号」

壳渡申屋敷土蔵之事

一屋敷老畝拾貳步 分米老斗六升八合

一土蔵 老ケ所 但四間
貳畝廿四歩之内勝右衛門割

〔朱〕
「一二号」

乍恐以書付御訴訟申上候

右は成島村分私所持之屋敷并土蔵為代金甲金拾両慥ニ受取、
書面之屋敷甲貳両土蔵代甲八両ニ而壳渡し申所実正ニ御座
候、但年季之儀は当子三月々来ル寅暮迄三年記相定申候、

武州足立郡上村名主七郎兵衛親
訴訟人
源 七

一拙者弟弥七儀七年以前辰年親之申渡之通田地分ケ仕相渡百姓ニ仕立申積り申渡候処ニ、百姓望無之由申切り村方之組頭并親類共を頼右可請取田地売候而江戸江罷出商仕度由達而願候ニ付、右親類村方之者共是非と差留候得共承引不仕右田地売払金子請取御当地江罷出式三ヶ年罷有候処ニ右之金子遣切江戸店仕廻、又々去ル午ノ暮拙者方江参り候得共致方も無御座差置候御事、

一拙者儀耕作之間ニ雜木商売仕候、弥七儀不埒者ニ御座候故商之方江手伝為致不申候得は、一分立不申候なと、我儘を申強勢ニ拙者を殺し可申と仕かけ候儀村方ニ而隠レも無御座候、然共万一心さしも相直り可申哉となため候様ニ致商等をも為手伝申候御事、

一当八月廿一日拙者留主之内弥七儀家来共江筋なき儀を申懸ケしかり申候ニ付、倅七郎兵衛申分ケ致候得は殊外立腹致脇指を抜キ倅を両日追出申候、(謝)誤も無之事ニ寺入仕候、拙者妻も余り不届ニ存家来共之申分ケ致候得ハ悉ク

悪口致、家中踏ちらし宿ニ居候事不罷成親之方江立退可申と仕候得は、村方組頭百姓并親類共立会弥七至極諷申

候間其通りニ致、倅七郎兵衛儀をも寺ヲ引かへし候様ニと達而詫言致候ニ付、無是非其通ニ罷有候御事、

一九月六日之夜右弥七儀拙者妻ニ対し悉ク悪言を申懸ケ候得共相構不申家内不残ふせり申候、弥七儀も一応ふせり候而早速起申候間脇指のそき見申候得ハ、脇指を抜拙者妻寢所之口ニ罷有候故拙者妻夜中裏口ヲ逃し申候、倅七郎兵衛儀も他所ヲ罷帰り右之様子承母之親之方江参り今以罷帰り不申候御事、

一弥七儀如何様之巧ミ御座候哉当夏成金取立之節ハ御年貢取立過御座候由度々申之、其上村方ニ而名主方ニ非分之致方有之様ニ申なし候故、百姓之内組頭方江参り取立ニ過有之由及承候至極手支候間取立過之分ニ而差替くれ候様ニと願出候ものも有之候、曾而取立過なと不仕惣而大切ニ相勤候、七郎兵衛儀を非分者ニ申成シ実体成百姓共之心さしも破れ候而ハ向後名主役之儀も難成様ニ奉存候御事、

右之通弥七儀我儘強勢成も前々危キ事共数度之事ニ御座候得共、あたを致ものニ御座候故拙者を始村中ハ不申及親類

之内ニ而も強ク異見を致候者も無御座己と我儘募り、只今

ニ罷成候而ハ御条目を破り候徒ものニ罷成難儀ニ奉存候、

忝人之悪人ニ而大勢之者流浪仕身上相立不申、其上名主役

儀も相統難成候得は村方も治り不申、殊更真劍ニ而数度拙

者妻子江手向致候儀、拙者をも殺シ可申と前方申候儀も有

之候得は此上存命之程も危ク迷惑至極仕候、妻子之儀拙者

しうと同国埼玉郡台村名主金左衛門方江逃隠レ罷有候、右

弥七常々不屈之儀ハ村中組頭百姓も其わけ存知罷有候、御

慈悲ニ拙者身上相統仕忝名主役も相立候様ニ被為仰付被下

候ハ、難有奉存候、以上、

武州足立郡上村

享保十五年戌十月

同国埼玉郡台村

鈴木平十郎御代官所

七郎兵衛親
源
七
七郎兵衛祖父
金左衛門

伊奈半左衛門様

御役所

〔朱〕
二九号

乍恐以書付ヲ御訴訟申上候

村松町貳丁目吉右衛門店

訴訟人
仁兵衛

同
喜兵衛

武州騎西領台村名主

相手
太郎兵衛

一此度御訴訟申上候儀は当拾七ヶ年以前午ノ年迄騎西領台

村ニ拙者共親太兵衛名主役仕罷有候処ニ、身上不罷成候

ニ付田畑壹町三反余伯父忠兵衛方へ質物ニ相渡シ、残る

田地屋敷居名共ニ九反歩余之所ヲ伯父忠兵衛を頼御年貢

諸役入目等迄田地屋敷之作毛以埒明ケ申様ニ頼置、親子

共ニ江戸へ罷越奉公仕候内ニ、右之私田地屋敷居名共忠

兵衛不儀之心ニて我等ニ隠しち物ニ入度由申候共、当名

主太郎兵衛前々之様子乍存知取申筈ニは無御座候得共、

右之田地居名望御座候故我等をかすめ一言之儀も不申忠

兵衛方々我儘ニ買取申義不屈ニ奉存候、就夫六年以前ニ

台村へ罷越田地屋敷請取可申と存候処ニ、忠兵衛台村ニ

不罷有候ニ付名主組中へ様子尋申候得は、其方田地屋敷居名共ニ忠兵衛如何様之証文ニ而当名主太郎兵衛ニ売申候哉、又ハしち物ニ入申候哉誰老人も分(誤)ケ不存候と申ニ付、太郎兵衛方へ尋申候へハ其方田地屋敷居名共ニ忠兵衛ニ証文為致我等買取申候故其方へ返シ申事不罷成と申事、

一先御地頭松平伊豆守様御役人衆へ六年以前午ノ五月御訴訟仕候得ハ遂穿儀可被仰付と被仰渡候故、去年迄相待罷有候内右御地頭様御替り被遊候ニ付、御代官守屋助治郎様へ去年七月十日ニ御訴訟申上、同九月廿二日ニ台村当名主太郎兵衛、相名主次郎右衛門、年寄共可罷出御裏書被懸御意則付置申候処ニ、御指図之日限相延十月六日双方助次郎様へ罷出御裁許被遊候得共極り不申、重而御穿鑿可被遊之由被仰付候ニ付相待罷有候、其後度々御裁許相願申上候得共其儀無御座、其上先御地頭様以來之事ニ候間何方へ成共御訴訟申上候様ニと守屋助次郎様御手代山本平内殿被仰渡候間無是非御訴訟申上候、拙者親太兵衛義は当四年以前病死仕候、

一地主太兵衛拙者共判形不仕候田地太郎兵衛我儘ニ買取申候証文御詮議被遊、我等先祖代々之田地屋敷ニ御座候間返シ申様ニ被仰付可被下候事、

右之条々忠兵衛方買取申候太郎兵衛并判形之者共銘々被為召出、証文御穿鑿之上何分ニも御慈悲ニ被為仰付被下候は難有奉存候、以上、

元禄八年亥二月

訴訟人
仁兵衛
同喜兵衛

御奉行所様

(朱)
「裏書」

如此目安指上候間致返答書来ル廿五日評定所へ罷出可対決、若於不參可為曲事者也、

亥二月五日

撰津
出雲
志摩
下野
美濃
紀伊

能登 伊賀

〔三〇号〕
(朱)

乍恐以書付御訴訟申上候御事

武州埼玉郡台村

訴訟人

質地出入

金左衛門

同村

相手

与次右衛門

一与次右衛門と申者十五年以前午ノ年兄太郎兵衛方江中畑

壺反壺畝拾歩之処質ニ入申候、然処ニ太郎兵衛去未ノ五

月相果其節右之質証文紛失仕候、此儀与次右衛門存請返

シ申度由去年中ノ段々拙者方江申候、拙者申候ハ年久敷

儀ニ而訳も不存殊更流レ地ニ罷成候間、村中は不及申近

郷迄之悪例ニ罷成候間返候儀成間敷由申候、

一組頭善兵衛方江右之畑小作ニ入年久敷作り候処ニ、去未

ノ秋中善兵衛拙者方江申候ハ与次右衛門質地之儀当暮ニ

ハ是非請返可申候、麦仕付候而も費ニ可罷成候間無用ニ

致候様ニ与次右衛門相断候間某作り候事成間敷由申候、
依之拙者方ニ而麦仕付申候、然処ニ当四月中御普請願ニ

拙者御内寄合江罷出候を幸ニ右之畑江大豆半分木綿半分

与次右衛門仕付申候、拙者自江戸罷帰右之趣承候間組頭

善兵衛六郎兵衛并最寄之百姓兩人江、此方之畑へ仕付候

間大豆も木綿も此方江收納可致由申断、麦ハ拙者方江苧

取申候、右之趣先御地頭松前伊豆守様御家老中様迄再三

申上候得共其殿様御役替御屋替ニ而取込候、相延候而

も不苦候間延引仕候様ニ右御役人様被成御意候ニ付相延

罷有候、

一其節与次右衛門内証ニ而佯言仕候ハ、其方御年貢諸役相

勤殊ニ麦仕付被置候畑江某大豆等仕付候儀あやまりニ御

座候、往々相談次第ニ可仕と申候故拙者も安堵仕罷有候、

然処ニ当所御引替御料処ニ罷成候由承七月十六日夜中未

青ク御座候大豆引取申候、其節も右之者共へ相断七郎右

衛門殿江申談木村忠助様迄申上置候、郷村等も相濟不申

候故御訴訟も不申上候、

一当月初ニ当麦仕付之儀此方ニ而可仕由申断候得は我儘を

申仕付仕候故、又候右之者共江致斷置申候、右之畑年久敷儀ニ御座候得共拙者訳を不存殊更証文紛失仕候由承、

右之通我儘仕迷惑ニ奉存候、証文は紛失仕候得共拙者方ニ而御年貢諸役相勤御年貢勘定帳面拙者所持仕候、太郎兵衛と以相對流地ニ仕候証拠ニハ七年以前寅ノ年細給ニ相渡リ名寄帳わかり候節、与次右衛門高を抜拙者名田ニ入与次右衛門惣百姓判形仕、殊更松前伊豆守様御家老安田藤助殿奥書ニ而御印形有之候、右之實地之類村中ニも多ク御座候、然処ニ此畑以相對相返候得は村中は不及申上ル近郷迄之騒動ニ罷成候故無是非御訴訟申上候、御慈悲ニ右与次右衛門被召寄御詮議被為遊被下候ハ、難有可奉存候、以上、

右之通御尋之上口上ニ可申上候、

宝永元年申十月

一七 離縁出入につき返答書

(表紙)

嘉永六丑年

村方喜三郎縁家下内間木村

岡右衛門娘江戸表江嫁し離縁

相成候節及出入返答書之写

七月

乍恐以返答書奉申上候

勝田次郎様御代官所武州新座郡下内間木村百姓岡右衛門并同人母とよ兩人煩ニ付代岡右衛門悴平五郎奉申上候、今般深川富吉町家主彦兵衛店条助ノ私共江相掛リ不実出入之旨申立 当御奉行所様江奉出訴当拾二日一同可罷出旨御裏書頂戴被仰附、乍恐始末左ニ御答奉申上候、

一訴訟人文助申立候は当三月中同人并武州新座郡下内間木

村組頭勘左衛門、深川万年町貳町目家主幸七店七郎兵衛、右三人媒ニ而私妹とくを同所富久町家主半兵衛店七兵衛倅新次郎妻ニ世話致し候処、其後四月廿四日とく儀不斗家出致し候ニ付存当り所々相尋候得共見当り不申候ニ付、翌五月八日右丈助新次郎兩人同道ニ而勘左衛門方江罷越とく家出之儀相漸候処、勘左衛門申聞候は松平大和守様御領分武州入間郡宗岡村百姓喜三郎同長藏兩人ニ而隠置候由ニ付、勘左衛門一同喜三郎長藏兩人方江罷越とくニ面談為致呉候様及掛合候得共、不当之挨拶而已ニ而面談為致呉不申、猶又私方江罷越候而も同様不取留儀申之取敢不申、右は全私祖母とよ儀新次郎方江罷越とくを連出し且無断も着類并金五兩余持出候ニ付、私共被召出右着類金子共取揃新次郎方江相返し呉候様被仰付度旨其外品々申立候、

此段右平五郎奉申上候、私妹とく儀去子九月中前書勘左衛門倅龜吉世話を以御船手方小川国三郎殿後妻ニ呉遣し候得共不熟ニ付、同人方由緒之もの北新堀ニ而家主不存伊藤幸藏と申易者之方江預ケ置、其後十一月中の同人を請人ニ相

頼ミ本所四ツ目家主藤八店源次郎方江月雇奉公ニ遣し置候処、前書新次郎当丑二月拾九日夕刻七郎兵衛を以龜吉名前ニ而口上書致、似せ手紙相認源次郎方江持参りとくを呼出し、新次郎始丈助七郎兵衛其外面体不存者四五人一同に而とくを声不立様手拭に而口をしげり無体ニ取囲、七郎兵衛方江連行隠置候由幸藏方為知来候ニ付、直様出府七郎兵衛方江罷越預り書一札取之候処、新次郎儀幸藏を以龜吉相頼とくを新次郎妻ニ貰請度旨申来り候ニ付、一旦私方江返し呉候ハ、当人心底を承り糺し執心有之儀ニも候ハ、呉遣し可申旨相答候処、丈助儀新次郎妻ニ貰受候対談相整候ハ、可相返、左も□^(無)之上は相返候儀難儀之旨申之ニ付無余儀とく身分呉遣し候処、其後四月廿四日同人不斗新次郎方家出致し、松平誠丸様御領分武州入間郡宗岡村百姓喜三郎儀は私姉嫁之由緒を以同人方江参り候得共、喜三郎病症ニ而養生のため上州草津江湯治ニ罷越留主中ニ付、同人兄長藏は隣家ニ而殊ニ本家之事故同人方江預ケ置候由喜三郎方為使を以為知来候ニ付、直様龜吉方江其段申越同人の新次郎方江沙汰ニおよひ候得共、五月八日ニ相成同人并丈助同道

二而龜吉方江罷越、同人共三人一同二而右長藏方江参りとく
 二面談為致呉候様申之候得共、新次郎丈助共脇差等帶し居
 候二付方一間違之程難計存龜吉而已面談為致候処、とく儀
 心底龜吉江申聞候は私身分ニ不儀不埒等毛頭無之処、右様
 強勢之仕方ニ而七郎兵衛方江被連行無詮方途方ニくれ罷有
 候処、新次郎方江被貰請候而是親兄之存意を相背候筋柄ニ
 相当り、外聞旁氣之毒之儀片時も安心難成、親兄江申訳可相
 立と存駈出し候始末ニ而如何様共熟縁之儀断り貰度、乍然
 着類等も私江呉新次郎方江無事ニ帰居候様親共不被言聞
 候而是同人方江相帰り候存寄無之旨とく申之候進、猶龜吉
 丈助兩人私方江参り元来とく所持之着類等貰請度旨申之ニ
 付、其儀は此節ニ而は難相成尤とく儀は新次郎妻ニ呉遣し
 候者ニ付連立帰り呉候様及相談候処、丈助申候は着類等不
 殘呉不遣候而是とく儀連立帰り不申、父岡右衛門并祖母と
 よ其外親類共迄一同相手取出訴致候旨ニ而、新次郎丈助村
 役人江罷出性名書貰受度由ニ付、猶又穩便ニ致度掛合候得
 共更ニ聞入呉不申無余儀性名書差出候始末ニ相成、終ニと
 く儀右次第聞請驚入五月十三日右長藏方を不斗罷出(候ニ)付

所々心当り私方迄尋來候ニ付、猶又私方ニ而も相尋候混雜
 之折柄、鎌倉松ヶ岡御役所とく儀御所江駈込ミ離縁御寺
 法相願候ニ付、尋候儀有之間可罷出旨 御書付到來仕候ニ
 付早速罷出候処、兼而七郎兵衛儀はとくを新次郎方江縁談
 之砌仮親ニ相成候由ニ而同人儀も被召出候処、新次郎儀も
 七郎兵衛同道ニ而罷有、松ヶ岡ニ而双方掛合、とく儀新次
 郎方ニ罷居候節同人調呉候着類を家出之砌着服致居候ニ付、
 帰村之上右之品新次郎方江相返シ、且同人方ニとく所持之
 拾壹ツ単物其外小道具等差置候ニ付右は私方江可受取管之
 対談致相互ニ品書為取替、新次郎并七郎兵衛兩人離縁状差
 出候ニ付一同帰国被仰付、其後早速右対談之品七郎兵衛方
 江持參致相互ニ受取渡共致度旨申之候処、同人申聞候は丈
 助申候ニ鎌倉江参り候難用として金三両岡右衛門と不差出
 候而是着類受取渡致候儀は迷惑至極仕候、決而受取聞敷旨
 強被申候得共、丈助方江掛合同納得之上対談相整候儀を
 今更仲人方ニ而故障いたし金子可差出杯不都合之儀と相心
 得候由申之候処、龜吉儀右金三両不差出候而是右品相互ニ
 為引替候儀丈助不承知之趣龜吉申之候得は、彼是行届兼罷

有候折柄 御裏書頂戴奉恐入候得共、右は全七郎兵衛新次

郎承知之上対談相調候儀丈助工ミを以て故障いたし、私祖

母とよ儀は当年七拾五歳ニ相成江戸表其外遠方出歩行等難

相成もの、とくを連出且新次郎壳溜金致紛失候杯無跡形も

不法被申掛難渋至極ニ奉存候間、何卒以 御慈悲逸々御

吟味之上前書対談之品々相互ニ受取渡出来、金子等紛失致

候杯無謂難題不申掛様被 仰付被下置候ハ、難有難有仕合

奉存候、以上、

勝田次郎御代官所

武州新座郡下内間木村

嘉永六丑年七月拾二日

百姓岡右衛門
井同人母とよ
右兩人類ニ付兼
岡右衛門粹
平五郎
差添人
名主

弥右衛門

御奉行所様

一九 嗣子目見願

拙者家督同名正之助拾七歳ニ罷成候、此度 御目見得被

仰付被下置候様ニ奉願候、拙者儀江戸御勘定御組ニ御座候、

可然様御披露被下度奉存候、以上、

天和元年十一月十五日 松木半兵衛総常(花押)

湯村長右衛門殿

白土六左衛門殿

湯村長右衛門殿

浜田利左衛門殿

二〇 隠居・家督相続願

松木半兵衛儀当年六拾七歳ニ罷成候間、隠居被 仰付跡式

御切米三兩御扶持方七人分増養子同氏彦兵衛当年三拾七歳

罷成候ニ被下置候様奉願候、右彦兵衛儀天和式年二月家督

並之 御目見被 仰付候、半兵衛儀御塩方上廻御用相勤申

候所、老衰仕右御用相勤兼申付右御用御免被成下度旨願申

上候所、去年二月願之通被仰付半兵衛儀は御城番支配被仰付、彦兵衛儀為名代御番入被 仰付難有仕合奉存候、御

憐愍を以如願之被成下度奉存親類連判を以奉願候、已上、

元禄十四年五月

松木半兵衛

松木庄左衛門

主 殿 殿

小右衛門殿

庄左衛門殿

新九郎殿

二二 平原久兵衛跡式相統証文

現米四拾式人扶持方親六兵衛跡式被 仰付、其方唯今迄被

下来候金三両式人扶持江御加、都合四拾三両四人扶持被成

下候付、証文遣候者也、

宝永七年十二月九日

漆戸玄蕃 印

檀山弾正

野田典膳 印

江刺舍人 印

漆戸石見

二一 平原六兵衛扶持方証文

平原久兵衛殿

現米四拾式人扶持方右之通被下来候付、今度証文遣候者也、

二三 目々沢三内跡式相統一件書

宝永四年六月廿三日

在江戸

奥 瀬 内 記

漆 戸 主 膳 印

毛馬内九左衛門 印

中野吉兵衛 印

目々沢三内病死跡式知行八貫四百式文嗣子与物右衛門ニ無御相違被下置候条、御本牒相直候様可被申渡候、跡目之願書指出候趣遂披露候処、右「被」

平原六兵衛殿

外「」

松岡新左衛門殿

野村 靱 負殿

清水 主 税殿

岡元 監 物殿

右之通首尾可被申候、以上、

同年同廿日

監 物
主 税
靱 負

新左衛門

御勘定奉行衆

右之通御書付請取置書替如此候、以上、

享保元年八月廿七日

平 大 八 郎 (花押)

本内五郎八郎

目々沢与惣右衛門殿

二四 聶養子眞請許可願

乍恐奉願上事

私儀五拾歳ニ罷成候得共男子無御座女子老入御座候、依之恐多申上様ニ御座候得共、私遠親類野辺地忠左衛門末之子忠兵衛廿一歳ニ罷成候、此者聶養子ニ仕度奉願上候、以御慈悲願之通被 仰付被下置候は難有可奉存候、此旨御家老中様迄宜被仰上被下度奉願上候、以上、

享保七年

平原久兵衛

御目付中様

二五 伊達安芸養子一件書

亘理彦七郎

安芸殿存生之内願被 申上候通、安芸殿養子ニ被 仰付候

旨 御意之事、

苗字伊達ニ相改、服忌弥以如実父母可被相請候、以上、

三月

此度安芸殿御存生之内御願之通養子ニ被 仰付候間、忌明候ハ、御家督被 仰付に而可有之候、尤忌日數ハ五十日、安芸殿死去之日々被相請儀ニ御座候間、此段共ニ為御心得申達候様ニと御奉行衆被申候、右之上使山路五郎左衛門殿、御悔之上使布施孫衛門殿享保廿壹年三月廿九日之朝五ツ時御下着也、

二六 平原久兵衛由緒書

覚

一五拾石

平原久兵衛

年六十六

徳雲院様御代部屋住ニ而御側被 仰付御能御相手相勤罷有候所、壹両壹歩式人御扶持為部屋住料被下置相勤罷有候、

御逝去後御側御免

靈巖院様御代御配膳被

仰付相勤罷

有候、御能御相手仕候付為御加増御切府壹両三步被下置、

都合三両式人御扶持方ニ而部屋住中相勤罷有候、

靈徳

院様御代宝永七年九月親六兵衛病死繼目被 仰付、此節部

屋住料被下置候三両式人御扶持方ハ指上、親六兵衛身帶四

拾式人御扶持方ニ而相統仕候、同年十一月忌御免被遊急ニ

江戸表江被為 召罷登御能御用被 仰付候、其節部屋住中

被下置候三両式人御扶持方直々被下置、合三兩卜四拾四人

御扶持方ニ被成下御配膳役御能御相手共被 仰付、靈徳

院様御代享保九年十月御能御相手相勤候ニ付、壹駄片馬御

加増被下置、都合五拾石御軍役相勤候様ニ被 仰付、

嫡子 忠 四郎 年三十六

野部地忠左衛門三男、享保九年掣養子願上願之通被 仰付、

嫡孫 定 四郎 年十三

右之通御座候、以上、

元文三年二月

平原久兵衛判

築田物集女殿

布施浅右衛門殿

二七 隠居・家督相統願下書

乍恐奉願上事

私儀六十八歳罷成候、段々ロウスイ仕歩行自油ニ罷成候

(由)

得其御番等は押而相勤罷有候所ニ、去月始々み、遠罷成御奉公相勤可申体無御座候、依之恐多申上様ニ御座候得共忤忠四郎三十九歳罷成候、此者家督被 仰付被下置度奉願上候、御慈悲を以願之通被 仰付被下置候ハ、難有仕合奉存候、此旨御序之節御家老中迄宜被仰上被下度奉願上候、以上、

元文五庚申年二月八日

平原久兵衛

御目附衆中

同年二月廿八日定四郎初御目見得申上ル、
忠四郎名久兵衛ト改願上候所早速被 仰付、
隱居家名同日早速被 仰付ル

二九 隱居引移りにより隱居分等につき申渡

一 我等隱居分御格之通先住指上候、通北川内村并於本宮崎指上候様可被申候事、

一下屋敷普請為料除屋敷明屋敷畑年貢是又先住指上候通酉年々丑年迄指上可被申候事、

一 隱居附家老耆人并下屋敷江引移候ハ、用人耆人小性耆人
家内定詰夫々加力表役人同様隱居方勤仕中被下候様可被

申候事外徒之者草り取ハ其時々入用之節遣候様可被申事、
一 中間式人は是又給金格之通為相渡相廻候様可被申、兩人之内一人は只今々相廻候様可被申、一人は引移之節已後相廻候様可被申付候事、

一 引移已後は朔望節句時候不順天変地妖之節其身亦ハ家老用人を以附家老用人迄機嫌伺可被申上候事、

文政九年七月吉日

実徳(花押)

古内幸次郎殿

三〇 跡式相統願写

乍恐奉願上事

私儀五十三歳罷成候処疝積相煩色々養生仕候得共昨今存命不定之体罷成候、依之恐多申上様奉存候得共嫡子金蔵二十九歳罷成候、万一之儀も御座候ハ、此者跡式被 仰付被下置度奉願上候、以御憐愍願之通被成下置候ハ、難有仕合奉存候、此旨御家老中迄宜御口上被下度奉願候、以上、

天保三年閏十一月

平原庄兵衛印

御目付衆中

三二 今朝之進据物切取立願

御町同心徳藏嫡子兵三郎江被下置候御切米式切御扶持方三人分、兵三良嫡子今朝之進江直々被下置候様被成下度奉願候、且兵三良義天保七年三月の当年迄引続拾七ヶ年之間拙者弟子ニ仕置御据物切家業稽古為仕罷有、尤天保拾二年十二月御雇ニ被召出其後引続出精仕執行相備申候間、不残相伝仕候方御用ニ相立候由ヲ以、天保拾二年十一月廿八日御見分被成下候上本進退ニ被成下候而、旧同役熊藏明間江被召出候様御吟味罷成度奉願候処、御吟味中ニ可被為有只今ニ御下知無御座候処、右兵三郎義去月廿日薬用不相叶病死仕其段相達申候、右兵三郎悴今朝之進当拾歳ニは御座候得共兵三郎存命中の家業稽古取扱居候処、未幼年ニは候得共元来業道方相好居候故幼年相応ニ稽古仕居候間、是迄之通り今朝之進江被下置候得は拙者義此末取扱末々御用為相勤候様仕度、尤耆人家業之儀ニ御座候得は、万一病氣等ニ

罷成候節は見得渡り御用支ニ罷成候処も難計、扱又年齢相応之者早速奉願候者も心当り無之、尤業道方一円相心得不申者取立候而も仁ニ善悪も有之是亦見詰難計、拙者儀当四拾八歳ニ罷成未家督迎も無御座方右今朝之進幼年ニは御座候得共兼々相好居候方此末両三年も取扱仕候ハ、宜敷手分ニ罷成可申存候、且徳藏義は極難渋ニ而渴々御用も相勤居候故自分入料ヲ以稽古可被為仕様無之者ニ御座候間、前文之通今朝之進江御雇稽古人ニ被成下度奉願候、御時節柄右様奉願候儀恐入遠慮至極ニ御座候得共、御先代様

の被相立置候御据物切伝授施伝仕候も難計奉存候条、御憐愍を以如願御吟味被成下度不願憚如斯奉願候、以上、

嘉永五年六月

組扱御据物切

鈴木三弥印

(花押)

甚太夫殿

三太夫殿

三二 弟の養家先養子除き願書

奉願候口上之覚

拙者儀弟岩山佐太夫儀、先年願之上同苗七郎右衛門養子罷在 御見聞被成下候通拙宅同居罷在、御当地御用等も被

仰付難有仕合ニ勤仕罷在申候之処、同人儀幼少之折（ママ）至而病身、中年ニ至リ少々快方且亦去年中（ママ）弥々持病再発仕候得共、当春中出羽争動御非常之折柄ニ付押而本服為被仕御境目江も出陣相勤候得共、日ニ増持病重リ候而末々引統

養家相統の見詰無御座候ニ付、其段岩山七郎右衛門方江も打合候得は、長病之儀ニ而不及是非ニ候段申聞、同人（ママ）も養子除之願指出候様と之答ニ御座候間、前文之次第長病之儀ニ而迎も養家相統の見詰無御座候段拙者方迄度々申聞候ニ付無抛奉願候条、右等之趣御取組被成下同人養子被相除候様被仰下度奉願候、以上、

慶応四年六月廿六日

佐藤有見信秀（花押）

広 人殿
求 馬殿
勝 見殿
清七 郎殿

三三 名跡相統願

（包紙）

奉願口上之覚

大臈官兵衛

奉願口上之覚

私儀病氣罷在候処以 御威光緩々養生仕難有仕合奉存候、然処次第差重存命之程難計奉存候、依之急養子可奉願儀座候得共差当相応之者無御座候付、自然之儀も御座候は名跡相統之儀追而親類共（ママ）可奉願候、其節以 御慈悲願之通被 仰付被下置候は難有仕合奉存候、此段不苦思召候は宜御沙汰被成可被下候、奉頼存候、以上、

九月六日

小泉長門様

松本多宮様

大島官兵衛[㊦]

高橋牧太殿

三五 養女差遣わし願書

三四 縁組願書

願書

願書

私儀妻縁組仕度奉存候処御藩内相応之縁女も無御座候、依之西丸御留守居川村対馬守様御家来御給人相勤罷在候板垣昇平娘妻ニ仕度右縁組之儀奉願上候、此段何分宜御執成被仰上可被下候、奉頼候、以上、

私娘儀御勘定奉行石谷因幡守様御家来、目安方相勤罷在候小島富三郎養女ニ仕度旨申聞候ニ付差遣申度奉願上候、此段何分宜御執成被仰上可被下候、奉頼候、以上、

巳十二月

奥田養浩[㊦]

二月

榎本万平[㊦]

松田 翁殿

山田幸右衛門殿

松下市右衛門殿

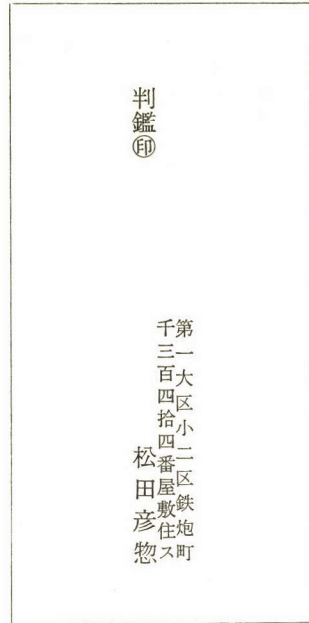
近藤 保殿

石畑蝠之助殿

関 俊殿

山田幸右衛門殿
石畑蝠之助殿

三六 松田彦惣判鑑札



三七 世襲の卒を士族編入の太政官布告の廻状

市井

一 等戸長

各府県貫属卒之内従前番代之節抱替等之称ヲ以其倅等江禄高ヲ給与し自然世襲之姿ニ相成居候分ハ、自今士族ニ被仰付条調書ヲ以大蔵省江可伺出、尤家禄儀は従前之通可相心得事、

但、新規則一代限抱之輩は平民ニ復籍せしめ、給禄は是迄之通可遣事、

壬申五月

太政官

(明治五年)
（以上は『法令全書』第五卷ノ1（明治五年）五二一五三頁所収の正月二十九日付太政官布告とほぼ同文）

右之通御達相成候条、自今卒之分総而士族ニ被仰付給禄是迄之通下賜候条、得其意無洩可相達事、

壬申五月

宮城県

右之通今夜中可触知旨御達相成候条、大至急伍中々々江無洩可相触候事、

壬申五月九日暮半時

針生彦三郎

二日町伍長衆中

尚以名印之上時付ヲ以相廻、留々今夜中可指戻事、

九日五ツ時

九ツ半時

福井清兵衛印

吉岡由治印

菊地栄助印

庄司八十次印

九日夜四ツ時

松江亀吉印

九日夜九ツ時

九日夜四ツ半時

涌井源兵衛印

関林助印

同日同刻

千坂兵郎治印

八ツ〇時 大和庄玄印

同日八ツ時半

細田銀十郎印

同

同日明半時受取直ニ相廻
 佐藤庄兵衛印
 同日ノ朝半時
 安藤新之助印
 十日夜四ツ時相廻シ
 古沢太郎兵衛印
 十一日朝ニ相廻リ
 福田井蔵
 同日朝相廻シ
 毛利大吉印
 同日五ツ時相廻
 内ヶ崎万兵衛印
 十一日明口時相返ス
 高橋喜右衛門印

三八 離婚につき条約書

条約書

一 今般伊東祐信旧妻君送籍之儀右同人ノ依頼担当相請居候間、来ル六月四日迄必然区務所ヨリ除籍相受差上可申候事、

一 およう殿之儀ニ付今後伊東家より故障等之事故有之候節ハ、私屹度保証ニ相立何時も埒明可申候事、

一 伊東家之名前を借何様之儀申出候哉も難凶人ニ先般伊東ノ少敷委任致居候廉も有之候間、右同人ノ必相断候へ共未委任状取戻不申候ニ付明廿八日取戻候得共、為御含之如斯、

一 伊東家之御家族へ被相贈候金円御請取証、明廿八日持参

仕可差上候事、

右四ヶ条 前理書之通御条約仕候上は無御違約保証担当致候、万一右事件ニ付苦情ケ間敷儀出来候節ハ私ニ於テ右事件引請御迷惑無之様埒明可申候、為後証之条約書如件、

明治十一年五月廿七日

伊東祐信保証人
 右

氏家竹之助印

熊谷升直代理
 高泉庄覚殿

尚以印紙貼用可差上之処、最寄ニ壳捌所無之ニ付貴殿ニテ御貼用被下度候事、

前頭之理書委曲承置候事、

明治十一年五月廿七日

伊東祐信印

三九 離婚につき送籍請証

〔後筆〕
 「見合ノ為メ」
 (朱)
 「第二拾号」

請証

第二大区八小区宮城郡仙台
東三番丁六十六番地土族伊
東一翁長男祐信妻

よ
二十七年二月

右老名今般離縁致候間、第二大区十三小区宮城郡春日村三
十六番地実家土族熊谷升直方エ指戻候、送籍御申越之所致
承知入籍之上受証如此候也、

明治十一年七月五日

戸長

船越孝里 ㊦

八小区戸長御中

四〇 土族高泉兼広家戸籍

陸前国宮城郡仙台道場小路百五拾番地居住氏神 亀ヶ岡八幡社、寺 曹洞宗冷松寺

土族

当県土族武田郷輔二女

当県土族菊地至堅二女

父直記亡 高泉兼広

天保八年三月十六日生

文政四年一月十二日生

嘉永三年一月四日生

長男

長女

二女

明治七年八月十九日生

文久三年九月十二日生

明治五年二月廿四日生

〔後筆〕
「右八名全戸転籍也」

三女

明治九月二十月廿八日生
文久三年八月三日生

第二大区七小区道場小路

式百五拾番地

明治十一年八月

高泉兼広

四一 分地制限などの公儀触請状

覚

一百姓田畑持高三拾石迄は向後家督相続之子之外一切わけ
申間鋪候、雖然無抛子細有之は其旨郡奉行迄相達可受差
図、持高三拾石以上たりといふとも断なくわけ候儀堅無
用事、

一田畑死後にわけ候心得にて遺言証文残し置候は存生之内
名主組頭加判之書付を以相願へし僉議之上役人より証文
可出之、自今以後役人証文無之遺言証文は相立申間敷事、

附り、只今迄所持之遺言証文たりといふとも其ものゝ
 名判并名主与頭加判無之分は取上申間敷事、

一家屋敷山林売買之儀前々定置通郡奉行江相達可任差図、

田畑永代売買之儀弥令停止之、年府銀売買之儀は名主与

頭吟味之上双方江加判之証文取かわさせ可申候、尤買主

より年貢諸役等相勤可申候、名主与頭加判無之売券之状

は一切取上申間敷事、

一町在々にて死人有之節取置之儀そまつなる仕形有之様に

相聞候、向後死骸あらわれざる様に念入可申候、且又為

吊寄合之もの共酒一切給申しき事、

一前以定置通諸役人村廻之節馳走かましき儀一切不仕、料

理香物共ニ一汁三菜に過へからず、向論其所に有合候も

のにて可出之、麁菜なる分は不苦事、

右之通堅可相守之、若違有之族有之は当人は不及申名主五

人組迄僉儀之上急度可申付者也、

元禄五年申ノ七月日

被 仰出候御書付之趣急度相守候様ニ大小之百性并門家水

吞、且又御倉江 御下知相窺候寺社方 御朱印所迄申渡候、

尤御書付銘々写取名主与頭方ニ所持仕、以後迄油断不仕候

様ニ為仕可申候、仍如件、

元禄五年申ノ七月日

下総国相馬郡何村

名 主印

組 頭印

同 断

御奉行所様

右 御公儀御条目之趣村中惣百性并水吞門家迄寄合させ急

度被仰渡銘々無油断堅相守可申候、若相背者有之は上々様

江被仰上いか様之曲事にも可被仰付候、仍而為後日如件、

元禄五年申ノ七月

伝 兵 衛印

庄 兵 衛印

徳 左 衛 門 印

三 郎 兵 衛 門 印

伝 右 衛 門 印

五 郎 右 衛 門 印

次 兵 衛 印

作兵衛後家印
 喜左衛門印
 正右衛門印
 源兵衛印
 吉兵衛印
 与右衛門印
 清右衛門印
 源右衛門印
 助右衛門印
 源太郎印
 利右衛門印
 惣右衛門後家印
 意的印
 善兵衛印
 治左衛門印
 喜兵衛印
 七兵衛印
 二郎兵衛印

勘三郎印
 清兵衛印
 六左衛門印
 忠右衛門印
 久右衛門印
 七右衛門印
 半右衛門印
 六兵衛印
 源左衛門印
 徳右衛門印
 忠兵衛印
 八郎兵衛印
 与惣左衛門印
 権兵衛印
 左右衛門印
 賀左衛門印
 新四郎印
 兵左衛門印

当村名主
五郎 兵衛殿
組頭
久 兵衛殿
同
与 次 兵衛殿
同
与 五 兵衛殿

四二 跡式相続出入和談につき一札

歌津村からの浜屋敷与左衛門と申候者持高田畑四百五拾三文所持仕子共小平次と申候、并同村いなふし屋敷甚十郎弟三次と申候者式歳之時分々小平次弟分ニ与左衛門養子ニ仕置申候所ニ、嫡子小平次儀宝永三年正月鱈胤船ニ而流相果申候、親与左衛門儀も去年四月病死仕小平次子共実弟も無御座養弟三次計ニ罷成候、三次儀当年式拾歳ニ罷成若年と申妻も于今無御座候、且又小平次実母ハ先年病死仕當時之後家ハ与左衛門後妻ニ御座候而何も向筋無之者ニ罷成候儀、親類共無把奉存与左衛門四番目之弟長三郎と申候者中兄小左衛門格米ニ而、小左衛門屋敷之内進退相立罷有候を妻子共与左衛門方江取移与左衛門家督相続為仕、三次ニハ

与左衛門高四百五拾三文之内田畑百五拾文分ケ地仕面御百姓ニ相立可然候得共、与左衛門存生之内借金六拾切余御座候ニ付、長三郎家督ニ相立候而も持高少分ニ有之、借金連々ニも相済相続可申様無之候ニ付、兄与左衛門処江孝行之ため并弟をも取立候儀ニ御座候ニ付、中兄小左衛門持高之内田地式反ト三拾疋之所拾ケ年無年貢ニ而長三郎ニ借地ニ仕与左衛門借金為相済候様ニ吟味仕、親類共連判仕長三郎人頭ニ相立申度願、当春大肝煎熊谷太兵衛殿江持參仕候処ニ、右三次儀人数御改牒ニ養子之訳ケ相見得不申候得共養子実正ニ御座候ハ、三次実父之方兄弟親類連判為仕候様ニ御指図被成下御尤至極ニ奉存候ニ付、兄甚十郎并親類弥兵衛ニ其段為申聞候得共、最前内々吟味仕候節不念仕右兩人江一円不申通候ニ付請合仕兼埒明不申候ニ付、長三郎儀中兄小左衛門所江格米請候儀ハ親小左衛門存生之内兄与左衛門も引添、小左衛門地形之内三ヶ疋長三郎所江分ケ渡可申由ゆい言仕置候間、三ヶ疋分ケ取申度由覺書を以肝入善左衛門方へ申出、善左衛門手前ニ而小左衛門所江申渡候得ハ、地形三ヶ疋分ケ渡申管之儀ゆい言不承候由申出候ニ付、何

- 角吟味も有之穿鑿延引仕候内大肝入熊谷太兵衛殿江直訴指出申度、氣仙沼町江長三郎相詰太兵衛殿江申達候ニ付、覺書長三郎ニ被渡置候上急ニ御穿鑿可被成下と被思召、歌津村肝煎檢断小肝入并拙者共無残被召寄御穿鑿ニ御取付可被遊候所ニ、兄弟之出入ニ御座候ニ付理悲^非被仰付候而ハ間柄不便ニ被思召何も様御取扱被下置候趣品々承届、此度三手前和談仕候ニ付各被仰含候首尾左ニ書立御請合仕候覺、
- 一 小左衛門持高町屋敷并屋敷統之畑代之外惣高八百六拾八文之内三ヶ壺田畑割合本代式百八拾九文分來年作りと与
- 一 左衛門持高江永代相加、与左衛門高江右分ヶ地之高三ヶ壺取合長三郎持高二仕、与左衛門跡目江取移後家介抱仕、与左衛門借金拾五兩余段々相済与左衛門家督相続可仕候由被仰含候事、附、居久根山有來通三ヶ壺相分ヶ可申事、
- 一 三次所江ハ兄扱之通与左衛門持高之内ノ田畑割合頭高百五拾文永代分ヶ渡面御百姓ニ相立、三次身分之儀ハ実兄甚十郎取立申筈被仰含、尤家財牛馬借金等も一円分ヶ不申筈ニ御座候御事、
- 一 長三郎儀当年一円手作も不仕妻子飢申仕合之由申出候ニ付、前々兄小左衛門借置候田畑三拾七文之所、小左衛門方ニ而仕付置申候を長三郎方江かり取申筈ニ申含候、麦作ハ最早小左衛門所江取仕廻可申候間、其畑ニ応組合小肝入指積り候而小左衛門方ノ麦為相出申筈ニ被仰含候、尤右三拾七文之外之物成ハ当年ハ一円小左衛門方ニ而所務仕、御年貢諸色ハ小左衛門上納仕筈ニ御座候御事、
- 一 右小左衛門持高ハ御伝馬高二御座候ニ付、三ヶ壺分ヶ渡候高之分御伝馬三ヶ壺何様ニも長三郎方ノ相勤申筈ニ相済申候御事、
- 一 与左衛門高之当年分御年貢諸色ハ当作三次仕付置候間三次相済申道理ニ御座候得共、兼而困窮故敷田ニ仕置候由ニ候、來年地ハ長三郎方江受取申事ニ候故三次自分ニ壳付申儀も成惡御座候間、此段御和段^談仕候上ハ長三郎并兄弟中共ニ指加り吟味仕指支等無之様ニ首尾可仕由被仰含候御事、
- 一 右御扱之通兄与左衛門後家ニも為申聞可然由被仰含候間、小肝煎甚右衛門を以後家并親類共ニも為申聞候処ニ御取扱之通少も違背仕儀ニ無御座候、何様ニも御扱次第二仕

度由後家御請合申上候御事、

右之通被仰含趣御尤至極ニ奉存候、弥拙者共間柄之儀被思召御取扱被下置、剩惣領兄与左衛門跡目相立申儀ニ御座候間難有奉存和談仕度段御請仕候条、地形割分ケ之儀ハ肝入衆檢断衆小肝入衆御見分之上御指図次第当毛仕廻以後境相立分ケ可申候条、右地形出入之儀自今以後三手前共二少も申分無御座候、長三郎御請仕兼候得其中兄与伝次弟与三郎御請仕候上長三郎も連判為仕、以来出入不申上候間此度直訴相仕候儀御捨免被成下内々ニ而和談仕候様ニ被成下度奉存候、為其連判を以如此御座候、以上、

宝永六年七月七日

歌津村居里前町

小左衛門 助 印

右小左衛門子

七 之 印

右小左衛門弟

長 三 郎 印

右長三郎兄にらのはま

与 伝 次 印

右長三郎弟にらの浜

与 三 郎 印

にらの浜与左衛門養子

三 次 印

右三次実兄いなふし

甚 十 郎 印

右甚十親類ひの江屋敷

弥 兵 衛 印

右之通何も被仰含候品々承届内々ニ而和談仕度由連判を以申上候間、地形分ケ渡申候儀ハ拙者共立合高下無御座候様ニ首尾可仕候条、太兵衛殿ニ而御穿鑿被成置候儀被相除長三郎直訴仕度由申上候段御免被成下、各御取扱之通内々ニ而和談仕候様ニ被仰上被下度奉存候、以上、

同年同月

歌津村小肝入

甚右衛門 印

同村居里前町檢断

三 郎 平 印

同村肝入

善左衛門 印

新城村肝入

利兵衛 殿

松崎村同

平 作 殿

岩月村肝入代

権之丞 殿

吉岩村肝入

平 内 殿

氣仙沼町

成兵衛 殿

岩尻村肝入

与兵衛 殿

四三 村方取締触書

一父母に孝行を專一にいたし、次にハ妻子兄弟其外近き親

類を親み愛し、他人にも無偽様交り、縦其身并妻子等衣食ハ乏鋪候とも父母の養を肝要に可仕事、

附、兄弟伯父伯母ハ不及申、其村之肝入組頭并年寄候者を敬ひ慮外成ル為体仕間敷候、且又凡下式に候共男、女之別無之不儀之事在之候而ハ禽獸同然之事ニ候間、色を好み不作法成義無之様急度可相慎事、

一農業に精を出し疎に仕間敷候、惣而百姓の家業ハ田畑之持に候間、縦手前宜敷百姓に而も下人計に不為仕田畑の働を大切ニ勤可申事、

一御蔵入御年貢并給所年貢ともに年々不可滞候、百姓持高面々田畑耕作せしめ作出候米穀等ニ而も年貢之分ハ急度相備置、其余ならてハ自由仕間敷事にて、御蔵入御年貢上納ハ不及言に地頭之年貢たりとゆふとも精を出其時節をたかへず皆済可仕、且又小進并軽き地頭たりとゆふ共(身)かろしめあなとるへからさる事、

一惣而被 仰出候御法度之事急度可相守并対 公義に偽申事ハ勿論、百姓中間ニ而も毛頭偽ケ間敷義不仕、其外理外之事を工ミ地形谷地山等之境論堅仕間敷候、且又利

欲ニひかれ商売物等大体利分之外手苦勞売抜不仕諸事正路に可仕事、

附、手前宜敷百姓共何事ニよらすまつしき百姓共江非義をなし連々痛候義を不顧、或ハ金銀米穀等高利ニカシ置取忝候様成ル義堅仕間敷事、

一諸侍に対し不礼慮外仕間敷候、於途中に出会候節ハ下馬仕片付可相通候、尤小進成者ハ無僕体ニ而も歩行可申事ニ候間心懸候而慮外仕間敷候事、

一諸役人江振舞音物一切無用たるへく、尤妻子并内之者方江之進物ニ而も堅仕間敷事、

一於宿場ニ御家中之者は不及申他所往還之者たりとゆふとも人馬遅滞仕間敷候、尤兼而被 仰出候趣を以(恥)訖度可申付事、

附、御家中之者ハ不及申他所之者たりとゆふとも病氣等之節ハ一入籠略不仕、尤侍ハ不及申下々等ニ至迄看病等無疎意可仕事、

一百姓耆人前持高五貫文々上之持添仕間敷由兼而被相定候通堅可相守候、且又地形分は不及申売田買田之儀前々々

御停止之事ニ候、併不相叶儀有之ニおゐてハ御代官江可申出事、

附、妻子兄弟下人等迄合持高に応し持人数差積り扶持

せしめ、其外無用之人数召抱間敷事、

一衣類之儀縮類ハ従前々御停止之事ニ候間、男女共ニ布木綿計を用ひ縮類ハ帯廻り等ニ而も堅無用たるへく、但大肝入山伏禰宜神主之類ハ其身并妻子等まで縮袖令着不苦候事、

一家作之事他国之者往還之宿をも仕候者ハ相応ニ可仕候、

ふすま等にも唐紙之類不苦候、其外脇往還ならひ惣百姓ハ随分(租)鹿相ニ可仕候、大肝入村肝入ハ表向板鋪迄之義ハ不苦候、天井長押等堅可為無用事、

但、只今迄有来ル作事ハ其通ニ仕、自今以後新規ニ仕分ハ右之通可相守事、

一嫁入掣取之祝儀随分輕ク可仕候、取遣等も成程輕き物を可相用、且又振舞之儀常々は不及申縦令嫁入掣取其外おもき祝儀ニ而も一汁一菜肴一種之外可為無用、惣而少しも奢ケ間敷義不仕朝晩之食物ハ先年々被仰出候(殺)通雜石

ヲ用べし、尤百姓に不似合諸道具を用間敷事、

一肝入檢断を始惣百姓男女共ニ乗物駕籠等に乗候事一切御停止之事、

一百姓共家内病氣之節か又ハ公用にて遠所江相詰、其年之作毛仕付成かね或ハ取仕廻成兼候節ハ其村にて互に助合候様可仕事、

一神事祭礼随分輕ク仕、退転不仕様可仕事、

一葬礼法事等随分輕仕、布施等(贈)の送り物等迄至而輕ク可仕事、

一花火あやづりかふきの類堅御停止之事、

附、あやづりかぶきのまねを仕、惣而百姓に不似合なきみ仕間敷事、

一徒党を結び或ハ誓約をなし、所を噪し或ハ喧嘩口論を好ミ、惣而所之あたをなし候者於有之は其所之肝入檢断組頭等御代官江申出へく候事、

附、公事争論をすゝめ、書物等を調候様成義仕候者有之候ハ、是又可申出事、

右之通迄度可相守候、且又右御法度之ケ条相守候哉否五人

組切相改、若不用者有之候ハ、意見を加へ其上ニも不改候ハ、早速五人組之内より其所之肝入檢断組頭方江可申出候事、

享保四年二月

四四 離縁につき人別帳返却願

乍恐書付ヲ以奉願候

一私兄庄三郎と申者去ル子五月四日ニ病死仕、兄庄三郎妻年廿八、男子次郎吉と申年七ツニ罷成候者御座候、右庄三郎妻土岐丹後守様御知行所撰州川辺郡潮江村小右衛門娘ニ而御座候、夫庄三郎相果候以後潮江村親方江男子次郎吉召連歸り度申候ニ付、何とそ家相続いたしくれ候様ニと頼申候得共是悲罷歸り度願申候、尤田畑壹畝壹歩も無御座候、其上御未進又ハ借銀等も御座候得ハ渡世ニ迷惑仕候故達而離縁願申候、潮江村江罷歸り候得ハ勝手ニ罷成候義も御座候由申候間難差留奉存候、尤金銀出入無御座候、当村人別御帳面御返シ被遊被下候様ニ奉願候、

右願之通少シも相違無御座候願之通被為仰付被下候ハ、難有可奉存候、以上、

享保十八丑年三月

山川仁兵衛様

右願之趣吟味仕候処相違無御座候、願之通被仰付可被下候、以上、

大庄屋上ノ島
平治左衛門印

四五 養子賞請証文

養子手形之事

一おすて事去年丑十二月ノ手前ニ里預り致有之候処、此度兵右衛門殿御世話ニ而我等養子ニもらひ申候所実正也、尤持参銀として銀子百目慥請取申候、成人之上自然奉公ニ遣シ申候義御座候共遊女かましき方へハ遣シ申間敷候、

大西村願主
伝三郎印

同村庄屋
惣右衛門印
同村年寄
左兵衛印
同断
五郎兵衛印

若病氣など出申候ハ、為御知せ可申候、右不通ニもらひ
申候上ハ此方々辰申間敷候、為後日証文仍如件、

延享三寅十一月六日

上ノ島村

武 兵 衛 殿

同所
世話人

兵 右 衛 門 殿

かぎや
久左衛門殿

四六 養僧につき持参金調達証文

一札

一 貴僧御儀此度摂州河辺郡山本村西宗寺了瑞養僧ニ仕、則
持参として金六拾兩被遣候約束仕候、然ル所右金子調達
之為国元江 御帰リ被成、来ル八月中ニ右西宗寺へ入寺
被成候契約ニ仕候所実正也、然ル上ハ八月中□急度相待
可申候、万一八月過候節此方宜鋪儀有之候は勝手ニ可仕
候、然レハ此証文可為反古候、為後日一札仍如件、

寛延四年未閏六月

山本村西宗寺

門徒中名代

山本村 太右衛門 殿

同

ぬり屋市兵衛 殿

同
山本屋源右衛門 殿

為 本 老
為本老轉分今宮村
光 受 寺 様

四七 不通養子賞請証文

〔端裏書〕
「捨子養子証文」

不通養子手形之事

一 此岩松と申者其御村加右衛門挨拶ニ而不通ニ貫申所実正
也、則為樽代銀八拾匁被遣髓ニ請取申候、我等実子出来
候共惣領ニ立可申候、如何様之義御座候共悪敷方へ奉公
ニ遣シ申間敷候、尤不通ニ申請候上は重而出入仕間敷候、
為後日仍而如件、

宝曆六年子七月

吉 兵 衛 殿

ふかい村
甚 右 衛 門 殿

四八 傾城奉公人請狀

相定申書物之事

一我等身上成不申候ニ付、実子娘小さよと申今年七歳ニ罷
 成候当辰七月マ来ル戌ノ七月迄丸年十八年限リ其方江傾
 城奉公ニ遣シ申所実正也、其為給銀卅目被下慥請取申処
 紛無御座候、此小さよニ付我等マ外ニ諸親類兄弟ハ不及
 申脇マ違乱妨ケ申者無之候、若何角と構申者有之候ハ、
 此印形之者共何方迄も罷出急度埒明可申候、又ハ取逃欠
 落仕候ハ、其品々相弁此方マ尋出シ急度手渡し仕定之通
 リ奉公致させ可申候、若又其方不勝手ニ候ハ、何国何方
 之傾城奉公は不及申、茶屋風呂屋其外如何様之奉公成共
 御仕替可被下候、其節給銀之高下何程御座候共其方江御
 引取可被下候、無異儀印形致替可申候、またハ誰人ニ不
 寄縁付ニ身請被成候仁御座候ハ、其礼銀何程ニ而も御
 取被成隙御出可被下候、親請人迄大慶ニ可存候、其礼銀
 ニ付違乱申間鋪候、
 一御公義様御法度之宗門ニ而も無御座候、宗旨ハ代々西本

願寺宗ニ而寺請狀別紙ニ遣シ申候、自然万一煩ニ而も不
 慮之儀ニ而も相果申候ハ、夫ハ両損ニ而互ニ申申分無之
 候、此方江御届迄も無之其方ニ而御取置頼申候、重而申
 分無之候、此ものニ付如何様之六ヶ敷義出来仕候共印形
 之者罷出其方江少も御難義懸申申間敷候、為後日傾城奉
 公人請狀如件、
 宝曆十年辰七月

実母親 大和屋とめ
 請人 さかい屋新兵衛
 奉公人 小さよ

万屋吉兵衛殿

四九 傾城奉公人家出のため結銀一部返却につき受

取証

一札之事

一其方殿口入ニ而結銀九百匁ニ而相抱置候傾城奉公人まさ
 家出仕候ニ付、所々相尋候得共居所相知レ不申及難渋ニ
 候ニ付、右結銀九百匁之処銀子五百匁奉公人居所相知レ

候迄此方へ取替可被下相對ニ而、右之銀子唯今慥ニ請取
預リ申所実正也、右まさ居所相知レ候ハ、其節相對可仕
候、為後日一札仍如件、

河州西村
吉村五郎右衛門殿

馬町村証人
伏屋権右衛門

明和元年申十二月

木本屋つき◎

大坂屋八三郎殿同家
吉兵衛殿

五一 金子調達中の扶持方跡式相統願

但右奉公人まさ居所相知レ不申候ハ、預リ置候銀子五百
匁ニ而相済可申相對ニ相極メ申候、以上、

明和元年申十二月

木本屋つき◎

拙者兄瀬兵衛儀去々年御前金御本入金三百両調達仕候ニ付、
右年数中御扶持方拾八人分被下置候、然所此度右瀬兵衛儀
病死仕候ニ付拙者儀跡式相統仕候間、右御扶持方御焼印御
引替被下置候、御首尾被成下度如斯相達申候、以上、
(可脱力)

明和貳年八月

柳橋屋瀬兵衛

青山五左衛門殿

大町三丁目柳橋屋瀬兵衛弟
伴助事

五〇 養女貰請証文

一札之事

一 おさな儀我等方養女ニ申請候、依之養育仕候諸賄飯料と
して沓ヶ年ニ米五石宛被下候筈ニ相極候、おさな此方ニ
罷有候内ハ年々無滞御渡可被下候、右之外ニ少シも申請
間敷候、為後日一札依而如件、

明和元年申十二月

上村
和田平治◎

五二 一生不通養子貰請証文

養子移り証文之事

一 其元実子当年式歳ニ罷成候百吉等申者私等方江一生不通
ニ養子ニ致候所実正也、為持參銀百五拾目相添請取申候、
(と)

然ル上は右百吉儀野良其外悪敷方江遣申間敷候、万一不縁致候ハ、右持参銀子相添差戻し可申候、為後日之仍而如件、

明和三酉戊年正月 日

河州河内郡
ぬかた村しやうほうし

庄 兵衛 衛印

山田屋
喜兵衛殿

五四 傾城奉公人請状

相定申書物之事

一我等身上成不申候ニ付、実娘はると申者今年八歳ニ罷成候者、当子八月廿一日の来ルむまの八月廿一日迄九年十八年切其方江傾城奉公ニ遣シ申所実正也、為其給銀百拾目被下唯今慥ニ請取申処紛無之候、此はるニ付我等より外諸親類兄弟ハ不及申脇の違乱妨申者無御座候、若何角と構申者有之候ハ、此印形之者共何方迄も罷出急度埒明可申候、又ハ取逃欠落仕候ハ、其品相弁此方尋出急度御手渡シ仕定之通り奉公致させ可申候、若又其方不勝手ニ候ハ、何国何方之傾城奉公ハ不及申、茶屋風呂屋其外いか様之奉公成共御仕替可被下候、其節給銀之高下何程御座候共其方江御引取可被下候、無異儀印形致替可申候、又ハ誰人ニ不寄縁ニ付身請被成候仁御座候ハ、其礼銀何程ニ而も御取被成隙御出可被下候、親請人迄大慶可存候、其礼銀ニ付違乱申間敷候、

一御公儀様御法度之宗門ニ而も無御座、宗旨ハ代々浄土宗

五三 一生不通養子貰請証文

一札之事

一此幼児義子細在之ニ付、石蓮寺村興法寺殿御世話を以一生不通之約束ニ而利倉村善右衛門方へ貰請申候ニ付、私共今日つれ帰り申処実正ニ御座候、然ル上は右幼児成人之後たり共其許へハ一切不通ニ仕万事善右衛門へ引請世話可仕候、為後証之一札如件、

明和四丁亥年九月廿四日

世話人利倉村

長 兵衛 衛印

右同断同村

治 左衛門 衛印

小會根村

弥市兵衛殿

二而寺請狀別紙遣シ可申候、自然万一煩ニ而も不慮ニ相
果候ハ、両損ニ而五ニ申分無御座候、我等江御届迄も無
之其方ニ而御取置頼申候、重而申分無之候、此者ニ付い
か様之六ヶ敷義出来仕候共印形之者罷出其方江少も御難
儀掛申間敷候、為後日傾城奉公人請狀、仍而如件、

明和五子年八月廿一日

大和屋平兵衛実父印

妻 し け印

請人

平兵衛印

同

木村たいさん印

口入

井筒屋新兵衛印

奉公人は る印

大坂屋八三郎殿

五五 一生不通養子賞請証文

養子手形之事

一くまと申当歳之女子此方江一生不通之養子ニ貰イ申所実
正也、為持参銀五枚相極メ手形之上半銀今日被遣慥受取

申候、残り半銀は来ル八月ニ請取申約束ニ御座候、然ル
上ハ随分太切(大)ニ養育可仕候、且成人之上遊女かましき奉
公は為致申間敷候、若不縁ニ付戻し申候ハ、右銀子無相
違急度相添戻し可申候、其上此子ニ付六ヶ敷義出来仕候
とも其元へ少も御難儀相懸申間敷候、為後日一札、仍而
如件、

安永三甲午年六月十九日

振州島上郡上田辺村
源 七印

請人吉の屋

吉 兵 衛印

城州八幡橋本町

小間物屋小四郎殿

五六 不通養子証文之事

不通養子証文之事

一我等実子良助と申廿七歳成候者此度貴殿方江不通養子遣
申候処実正也、右良助儀息女きぬと夫婦御取結ひ被下候
段承知仕候、然ル上随分貴殿(方丸)万是迄定法之儀急度相守御
両親へ孝行ニ仕らせ可申候、身体御見定之上家督相統被
仰付可被下候、右之通不通ニ仕遣シ候上は如何様之儀仕

出シ御損銀掛ケ申候敷御両親江不孝ニ相当り家督相続不仕候ハ、此方江御届ニ不及勘当被成候とも又は如何様ニ御取計ひ被成候とも我等方々申分少も無御座候、右之通不通ニ仕遣シ候得は宗旨等ハ猶以御家之通急度相守ラセ気儘ニ替宗等不致申間敷候、右忝良助儀不通養子掣ニ被成候上ハ実体ニ而相続仕候共、我等無拋儀杯と申金銀無心は勿論何事によらず少も相拘り申間鋪候、為後日不通為取替証文、仍而如件、

安永甲午年九月八日

実父 新藤 真 慶印
実母 つね

良助弟

新藤 祐 助印

証人 永原屋徳兵衛印

高池九兵衛殿

五八 捨子発見につき届書

(袋表書)

天明四甲辰年五月十五日夜

平野屋嘉兵衛借屋今宮屋

又兵衛軒下捨子一件

東

塩町四丁目

(端裏書)
「捨子有之即夜御断」

乍恐口上

塩町四丁目

平野屋嘉兵衛

一私借屋今宮屋又兵衛軒下二三歳計之女子捨置御座候処、今夜九ツ半時頃右借屋之者見付早速取入介抱仕罷在候、尤身ニ疵等も無御座丈夫ニ相見江申候、依之乍恐御断奉申上候、以上、

天明四辰年五月十五日

平野屋 嘉 兵衛印

年寄病氣ニ付月行司

平野屋 伊 兵衛印

御奉行様 東御番所江出ス

如斯御断奉申上候処、致養育置貫人有之は請人を取御断申上候様、且又明日四ツ時夜番人召連罷出可申旨被 仰渡候事、

五九 夜番人同道出頭届書

〔端裏書〕
「捨子有之夜番人御召ニ付御断」

乍恐口上

塩町四丁目年寄 病氣ニ付月行司
平野屋伊兵衛

一 町内平野屋嘉兵衛借屋今宮屋又兵衛軒下ニ三歳計之女子昨夜九ツ半時頃捨御座候付、早速取入介抱仕御断奉申上候処、今日夜番人召連罷出候様被為 仰渡奉畏候、依之

夜番人丁内丸屋吉兵衛借屋播磨屋勘助召連罷出申候付、乍恐此段奉申上候、以上、

天明四辰年五月十六日

平野屋 伊 兵衛印

御奉行様

如斯東御当番所江書上候処、夜番人勘助ノ口上書別紙ニ差出候様被 仰渡候事、

六〇 捨子一件につき夜番人詫状

〔端裏書〕
「捨子之儀御尋ニ付夜番人口上書」

乍恐口上

塩町四丁目丸屋 吉兵衛借屋 播磨屋勘助

一 昨夜丁内平野屋嘉兵衛借屋今宮屋又兵衛軒下ニ三歳計之女子捨有之候段所之者御訴申上候付、私今日被 召出様子御尋ニ御座候、同夜私儀同町夜番ニ被相雇宵々繁々相廻り候処別条も無御座、九ツ半時頃相廻り候節右之仕合

ニ付早速所之もの江為相知候儀御座候、乍然捨子之儀ニ付兼而御触渡も有之候処、右之通捨子仕候者有之を不存罷在候段、不調法之至奉誤候、^(謝)此度之儀御聞濟被成下候様奉願上候、以上、

天明四辰年五月十六日

播磨屋

助印

家主丸屋

吉兵衛印

年寄病氣ニ付月行司

平野屋

伊兵衛印

御奉行様

如斯東御番所江書上候処於 御前勘助不念之段急度

御叱置、所之ものも致承知候様被仰渡、猶又御当番所

ニ而請証文惣代読聞、勘助并家主月行司印形相濟候上

罷歸り候事、

六一 捨子養子に賞請願書

〔端裏書〕
〔御番所様書上〕

乍恐口上

塩町四丁目

平野屋嘉兵衛

一当月十五日之夜私借屋今宮屋又兵衛軒下江三歳計之女子捨置御座候付同夜御断奉申上候処、養育仕置實人有之は御断申上候様被為 仰付奉畏候、然ル処此度撰州東成郡四天王寺領分東久保町油屋弥兵衛借屋綿屋三郎兵衛請人ニ而、大屋四郎兵衛様御代官所撰州東成郡天王寺村堀越町百姓仁兵衛借屋和泉屋平右衛門と申者養子ニ貫申度由申之候付相糺候処、右平右衛門ニ子供尅人も無御座勿論身元見届候之処慥成者ニ御座候付、養子ニ差遣シ度乍恐右兩人召連御願奉申上候、以上、

天明四辰年五月十八日

平野屋

嘉兵衛印

年寄病氣ニ付月行司

尾張屋

東藏印

右願之通御聞届被為成下候ハ、難有奉存、末々龜抹無御座候様大切ニ養育可仕候、以上、

貫人和泉屋

平右衛門印

請人綿屋

三郎兵衛印

御奉行様

如斯東御当番所江書上候処願之趣御聞届被為成候間随分大切ニ致養育、猶又塩町四丁目ノ貫人所之ものへ相届候様、御役人寺西儀左衛門様被仰渡相濟候事、

六二 捨子養子に差遣わすにつき一札

〔端裏書〕
「御年寄江之一札」

一札

一私借屋今宮屋又兵衛軒下江当月十五日之夜三歳計之女子捨置御座候ニ付、同夜東御番所江御断被下私方ニ養育仕罷在候、然ル処此度摂州東成郡四天王寺領分東久保町油屋弥兵衛借屋綿屋三郎兵衛請人ニ而、大屋四郎兵衛様御

代官所摂州東成郡四天王寺村堀越町百姓仁兵衛借屋和泉屋平右衛門と申者方江養子ニ差遣シ申処実正也、万一養育致し兼候而差戻シ候儀も有之候ハ、早速御町江相断可申候、為後日仍如件、

天明四甲辰年五月十八日

平野屋嘉兵衛印

年寄

今宮屋伝兵衛殿

六三 捨子貰請につき一札

〔端裏書〕
「貫人并請人連印一札」

一札

一其許殿借屋軒下ニ捨有之候三歳計之女子此度我等養子ニ貰申処実正也、右女子為養育料銀貳百三拾目御添被下慥請取申候、尤今日 御番所様江御断被下則私共江被為仰渡候越慥奉承知候、随分末々龜抹無之様大切ニ養育仕病氣之節は早速其許殿江相断可申候、且又勝手ニ付致宅替候共是亦相断可申候、万一養育致し兼候共無断外江遣シ申間鋪候、勿論右銀子貳百三拾目之外後々ニ至リ決而

無心ケ間鋪儀毛頭仕間鋪候、若不縁ニ候ハ、養育料之銀子無相違右女子ニ相添差戻シ可申候、自然平右衛門銀子不調達ニ候ハ、請人三郎兵衛ノ急度相弁可申候、為後日捨子貰請連印一札仍如件、

天明四甲辰年五月十八日

大屋四郎兵衛様御代官所
撰州東成郡天王寺村
堀越町百姓仁兵衛借屋
和泉屋平右衛門印

塩町四丁目
平野屋嘉兵衛殿

撰州東成郡四天王寺領
東久保町油屋弥兵衛借屋
請人
綿屋三郎兵衛印

六四 捨子貰人へ差遣わすにつき丁内廻状

〔端裏書〕
「丁内知七廻状」

当月十五日之夜町内平野屋嘉兵衛殿借屋軒下ニ捨有之候三歳計之女子、貰人有之候而銀式百三拾目養育料相添今日差遣シ申候、尤御番所表無異儀御聞□被遊候付此段御知セ申候、以上、

〔天明四年〕
五月十八日

年寄

六五 賀出奔につき離縁一件吟味願書

乍恐以書付奉願上候

長狭郡寺門村

利右衛門

一私共村方組頭弁右衛門賀權藏儀は同郡北風原村六郎右衛門弟ニ御座候、私共仲人ニ被頼世話仕候、然処同郡前原町江致店借弁右衛門右權藏親子相談之上兩人替々罷越米其外商内仕罷在候処、右權藏儀去年中不斗何方江敷罷出今以罷歸り不申候事、

一右弁右衛門娘おねい当三月三日ニ私共方江節句ニ罷越留り、翌四日ニ罷成私共江申候ニは夫權藏儀相見へ不申迷惑ニ御座候、仲人之儀ニ御座候間私と權藏之中相立引分り候様世話いたし呉候様頼ニ御座候、私共申候ニは夫權藏いまた相見へ不申候事故早速縁段之片付可申様無之趣申聞候処、おねい申候ニは何分此儀訳合相立不申候内は

何日ニも不限罷居宿元江は歸り不申候、又子老人有之候、此子を捨置何方江成共欠落可致候と申差支罷在候事、

一右之趣ニ而差支罷居候故弁右衛門方江人を以申遣候ニは、其元娘おねい儀権蔵と之中引分ケ呉候様頼ニ有之候、然

共当時権蔵相見江不申候故早速離縁之相談調がたく御座

候、依之おねい江被申聞御引取可被成候と再三申遣シ候得共引取不申候、四五度ニおよひ私共申遣シ候ニは是悲^(非)

ニく引取可被成候、欠落も可致扨と申儀故一夜成共差

置候儀無心元候、再三相断申候上ハ難渋ケ間鋪儀被申聞敷候と相断候、然処弁右衛門申候ニは私掛り子ニ有之候

得は欠落扨致候願不依何事ニ難心得と存候儀ハ申分有之候旨申越候、右難渋仕候答ニ御座候故早速村方名主迄右

之段相達候処、名主方々弁右衛門方江娘おねい引取候様被申付候得共、訳合相立不申候内は引取不申候と一円承

知不仕今以差支罷在候事、

右申上候通弁右衛門名主之申付をも不相用私共江難渋申懸難儀至極仕候、殊ニ私共儀峯岡御牧場御弘木等御請負仕罷

在候処、右難渋ニ付他出も難仕御場所之御差支ニも相成、

其上御屋敷様御長屋御用木等心掛可仕候処是以差支難儀至極仕候、何卒弁右衛門御召出之上御吟味被成下候様奉御願上候、尚又御尋之上委細口上ニ而可申上候、以上、

天明七未年三月

利右衛門^印

六六 実父病身につき親里への引越許可願

乍恐以書付を奉願上候

御百姓久右衛門後家

ま 年四十九

か 年拾六

と 年七ッ

一久右衛門後家奉申上候、私儀同人後妻ニ罷越同人五ヶ年

以前相果見暮シ候処、私親里野々井村嘉兵衛至而病身ニ付私并娘兩人とも貰返シ申度私方へ相談有之候、猶又私

儀も此方ニ罷居候処久右衛門至而少高之御百姓ニ御座候

故ニ当時紺屋商売仕候得ハ一向手馴不申、幸へ野々井村

嘉兵衛引取申度、依之娘兩人ともニ野々井村江引越相懸

り申度奉存候、尤悴茂八儀も実体ニ而身上向取計も随分

取賄候間忝江相談仕候処親之事故ニ難遣シ申ニ付、諸親類組合江相談仕候処任望呉候筈ニ申ニ付此度以書付を奉願上候、偏ニ以御慈悲を願之通被 仰付被下候ハ、野々

存候、然上は此末如何様之儀御座候とも野々井村ハ書付を受取、私とも加判仕差上可申候間、願之通被仰付被下置候ハ、一同難有仕合ニ奉存候、以上、

井村嘉兵衛井村役人ハ奥書を以書付差上可申候間、願之

五人組
徳右衛門 印

通被 仰付候ハ、難有仕合ニ奉存候、以上、

七右衛門 印

寛政十年四月

久右衛門後家
ま つ

親類
半右衛門 印

半左衛門 印

伝右衛門 印

右母儀野々井村嘉兵衛病身ニ付引取セ話致貫度、猶又母私方江度々相談ニ付差留メ候得とも達而罷越度申ニ付、母望

御村役人衆中

事故ニ諸親類組合江相談仕候処、母之任望ニ為引越申度、

依之前書御願之通御聞濟被成下候様被 仰付候ハ、縦へ

六七 下質送議定一札(裏面村内取締触書)

引越候而も親類儀御座候間折節見舞等大切ニ可仕候、依之

願之通り被 仰付候様奉願上候、

差入申一札之事

忝

茂 八 印

一私共儀質商壳体仕候処、自分金子ニ而ハ相廻り兼申候間

貴殿江下質相送申度頼入候所御承知被下、則左之通議定

相定申候、

諸親類組合とも一同奉申上候、忝茂八方ハ度々私とも方へ相談ニ付、引越之儀後家江差留メ候得とも野々井村ニ而も

一質物八ヶ月限無断流し申筈、

達而引取申度旨ニ私とも方江相談ニ付、任望為引越仕度奉

一道具類一切送り申間敷候、

一私共所持之元帳二両印無之品是又決而送り申間敷候、隨分念入取置可申候、

一利足定

老ケ月 金壹両ニ付錢百文
錢百文ニ付老文五分

一質物持参之節代物之外質物江掛外借御無心申入致候節は、其返濟定

月ニ勘定相滞申候ハ、右外貸勘定不仕内は外出質御差留

可被成候、

右之通議定相定申候、惣而 御公儀様御法度之儀ハ不及

申上堅相守、殊ニ前書定之通所持之元帳二両印無之質物は

決而送り不申候、万一下質ニ差遣候質物之義ニ付六ツケ敷

義出来候ハ、我等面々引請貴殿江御難渋相掛申間敷候、

為後証印形入置申所如件、

酒詰村

寛政十一未年正月

宮和田

同 直 七

茅場村

同 幸 助

台宿村

五良兵衛殿

柴崎村

同 茂 八

我孫子

同 清左衛門

鷲ノ谷

同 要 助

根戸

同 武 七

岩井

同 平左衛門

布瀬村

同 市左衛門

折立

同 勘左衛門

荒木村

同 忠兵衛

下質送人

八左衛門

浪人体之もの村々を徘徊せしめ、合力止宿を乞あるひは悪

口難題等申掛、又は旅僧修験警女座頭物貴之内ニも押而宿
をとりねたり事いたし候類は、所之穢多非人等ニ捕へさせ

其向々へ召連出へきとの趣安永三年相触候処、近来帯刀い
たし候浪人体者所々江大勢罷越村々ノ手に及かたく令難義

候段相聞候、以来右体之もの於相越は御料私領共早々最寄
陳屋役所所江申立させ不移時日捕方之もの差遣、若地支配

他領江立退候といふとも手延なく御料私領相互ニ付入不取
逃様召捕可申候、

右之通可被相触候、

六月

六八 不縁帰村につき宗門帳除籍依頼状

不縁受取之事

一

当村庄九郎娘
はる

右之者先年其御村方武右衛門方江縁付参り候所此度不縁ニ

付当村方へ罷帰り申候、然ル上は当酉之宗門御改御帳面其

御村方御除キ可被成候、当村御帳面ニ書載可申候、為後日
請取如件、

寛政十三年酉正月

濃州不破郡表佐村

庄屋
与左衛門
年寄
太四郎

彦根御領分

坂田郡下坂中村

御役人衆中

六九 久右衛門後家他方へ再婚につき取戻吟味願書

乍恐以書付奉願上候

一 高八石七斗七升

百姓久右衛門事
妻 茂 年廿九
と
悻 年廿九
常 年廿九
娘 年七歳
と 年七歳
と 年五歳

右久右衛門親類組合奉願上候、久右衛門茂八兄源次郎方江
 十三年已前中相馬郡柴原村吉左衛門方より妻とめ貰受、右源
 次郎九ヶ年已前病死仕弟茂八兄妻とめ八ヶ年已前見合婚
 礼仕、右茂八病氣ニ而去七月廿七日相果、妻とめ後家暮ニ
 而子供兩人有之相応之人ニ而も引入久右衛門家督相統為仕
 度親類組合共決着仕罷有候処、右後家里吉左衛門去暮参り
 若後家之事故人見付候迄預り申度、依之吉左衛門方江相
 頼、尤忤常八は村方親類半左衛門方江預り置申候所、右後
 家 本多作左衛門様御知行所青柳村四郎右衛門と申者方
 江嫁入仕候間、右四郎右衛門方へ私共罷越懸合仕候処、同
 人挨拶ニはせわ人同以吉田村嘉右衛門と申者仲人ニ而貰受
 候間、右嘉右衛門方江懸合呉候様申之ニ付、同人方江罷越
 如何訊ニ而世話致候哉相尋候処、右嘉右衛門私共へ申聞候
 は世話仕候ニ相違無之、仍而何方江成共勝手次第第二可相願
 と利無尽之挨拶而已仕強勢申募候ニ付無抛此度御願申上候、
 (理不)
 何卒吉田村嘉右衛門被御召出シ御吟味被成下置、後家とめ
 取戻久右衛門家督相統為仕度奉願上候、尤吉田村嘉右衛門
 と申者鶏卵買渡世仕候間日々久右衛門方江罷越、右とめ方

江悪進内拵等仕親元江為引取候も嘉右衛門全之工、殊ニ貧
 救愚前之私共故ニ見掠右体利無尽之挨拶仕不得其意奉存候、
 (窮) (昧)

右後家とめ取戻し不申候而は久右衛門跡退転仕候間、以御
 慈悲嘉右衛門被為召出し御吟味之上後家とめ取戻し久右衛
 門跡御百姓相統相成候様奉願上候、右願之通被為 仰付被
 下置候ハ、親類組合一同難有仕合奉存候、

享和二年戊三月

組合 徳右衛門 ㊦

同 作右衛門 ㊦

親類 伴左衛門 ㊦

九左衛門 ㊦

次左衛門 ㊦

杉浦縫右衛門様

右当時久右衛門親類組合之者とも奉願上候間、奥印仕奉差
 上候、已上、

七〇 相統養子賞請証文

養子一札之事

一此小秀と申娘其御許実子ニ御座候処、此度此方江相続養子ニ貰請申処、則為樽代銀式拾枚慥ニ請取申候処実正也、然ル上は大切ニ養育可致候、若万一不縁ニ相成候ハ、乳伝母入用之分貰ひ請、残之分急度相添返弁可申候、為後日仍而証状如件、

文化式丑二月

龜城河原町

垂水栄治郎殿

川原尻村

茨木甚三郎 印

七一 離縁につき出産養生・小児養育料請取証

一札之事

一我等娘くめ義其元様と内縁取組懐胎ニ相成候処、此度相對得心之上離別被成下、(追カ)随而出産之養生并小児養育料として銀子貳百目被下之慥ニ請取申候、然ル上はくめ如何様之義御座候共貴公様へ対し一言之申分無御座候、且又出産之小児生長之後ニ其元様江親子之名乗いたし合力無心ケ間敷義決而為申間敷候、為後日詔立一札如件、

文化式年丑七月廿五日

和泉屋

好兵衛

田中市兵衛殿

七二 離縁につき出産養生・小児養育料受取証

一札之事

一我等娘なか義其元殿と内縁取組仕懐胎ニ相成候処、此度相對得心之上離別被成下、追而出産之養生并小児養育料として銀子貳百貳拾五匁被下之慥ニ受取申候所実正也、然ル上は右なか義ニ付如何様之六ケ敷義出来候共貴殿へ対シ少も申分無御座候、且又出産之小児生長之後無心ケ間敷義決而申間敷候、為後日詔立証文、仍而如件、

文化式年丑七月

摂州東成郡下津村

芳兵衛 印

娘 芳兵衛

証人 芳兵衛

同村人 源

証人 源 七 印

娘 八 め
世話人 八
北条屋 八

田中市兵衛殿

七三 相続人幼少につき大工職印札ならびに仕事場

先村々預け証

一札之事

一我等先祖より大工職御印札申受世渡仕来罷在候処、其元弟子ニ召遣イ右職仕似セ致相互ニ働来り候得共、此節我等老歳ニおよひ其上倅佐助病死仕末夕孫与市儀幼少ニ付、右職仕覚江候迄御印札并是迄我等致来り候仕事場先キ村々共其元方へ預ケ置申候処実正也、然ル上は右孫与市改身之後右職仕覚へ候節は早速当方江御戻可被下候、為後証文取替一札、仍而如件、

文化七年午三月廿日

襄輪村

大工

徳兵衛印

同村

弟

証人

万右衛門印

菱江村大工

与兵衛殿

七四 大工職印札ならびに仕事場先村々預り証

一札之事

一此度其元大工職之儀老年ニおよひ罷在候処、子息佐助殿病死ニ付、孫与市幼少ニ而右職働キ相成不申、暫之間御印札并右職仕事場先村々共我等方へ預り置申候処実正也、然ル上は右孫与一右職仕覚へ候ハ、何時ニ而も右御印札場先村々共無違乱急度差戻可申候、依之為後証取替一札如件、

文化七年午三月廿日

菱江村

大工

与兵衛

同村

証人

善之助

襄輪村

大工

徳兵衛殿

七五 養親死去につき不通養女・遺物金引渡し一札

一札

一我々共親類木屋源藏方江其元殿のきさと申女子不通養子
ニ置ひ置候所、右源藏夫婦共相果跡式相続人も無御座、
依のおきさ殿我々共江引取世話いたし罷在候所、此度本
人并源藏のおきさ殿江之遺物金五両共其元殿江御引渡申
候所実正也、然ル上は右おきさ殿之儀ニ付故障申立候者
毛頭無御座候、万々一後日ニ至彼是申立候もの御座候は
我々兩人罷出其元殿江少シも御難渋相懸ケ申間敷候、為
後日依而一札如件、

文化十年酉十二月

伊丹屋宗八印

八文字屋半左衛門殿

小野屋文六印

七六 養親死去につき不通養女・遺物金請取一札

一札之事

一其許殿方御親類木屋源藏殿方江きさと申者不通養女ニ差遣シ置候所、右源藏殿夫婦共被相果死跡相続人も無御座候故きさ義其許殿方江御引取御世話被下候処、此度御頼

ニ付本人私方江引取候所実正也、右ニ付源藏殿のきさ江之遺物金五両御差添私江御渡し被下慥ニ請取申候、尤御願之通きさ儀身之納り見定候上私了簡ニ相叶候ハ、右金差遣シ源藏殿宿坊相勤させ可申候、万一私了簡ニ相叶不申聊マニ而も在之候ハ、右金子私方江止メ置此方の宿坊相勤可申段委細承知仕候、然ル上は右金子并きさ儀ニ付如何様之難渋出来候共其許殿方江聊厄介相掛申間鋪候、為後日之一札、依而如件、

文化十年酉十二月

八文字屋半左衛門印

伊丹屋宗八殿

小野屋文六殿

七七 不通養子貰請証文

一札

一此出生之女子銀子百目相添不通ニ而私養子ニ貫申候処実正也、尤銀五十目ハ慥ニ受取申候、残り五十目ハ六ヶ月相立候ハ、御渡し可被下候、万一相互ニ子細有之候而若不縁之儀も御座候ハ、被遣候銀子相添御戻し可申候、此(小)少兒ニ付如何様之儀有之候共セ話人引受埒明可申候、為後日一札如件、

文化十五年寅六月

世話人
稲八妻村

兵衛印

南都下三条林小路養子親
安兵衛印

多賀村

八左衛門殿

七八 捨子不通養子貫請証文

養子証文之事

一頃日其御丁内江捨置有之候出生日数凡百日計と相見へ候男子、此度拙者方江養子ニ仕度申談候処、御役所様御表御窺之上養子ニ被遣不通ニ貫切候処実正ニ御座候、

尤養育料として金貳両被相添是又慥ニ受取申候、然ル上は右男子(大)太切ニ養育いたし成長之後法外成奉公等ニ決而差遣申間敷候、勿論不通ニ貫ひ切候上ハ此後右男子ニ付如何様之儀出来仕候共御丁内江少も御世話相掛ケ申間鋪候、為後日養子証文差入候処、仍而如件、

文政六未年十一月廿五日

三栖村之内六軒町
養子親

百姓庄兵衛印

右同丁
請人

百姓清五郎印

材木丁組過書町
御年寄

御丁中

七九 荒道具質改所よりの借銀返済一件出訴願下げにつき返済方一札

一札

当町内丹波屋与兵衛義先達而同所新高倉ニ王門下福本町菱屋四郎兵衛相統致居候節、其御改所荒道具質代金壹両貳分式朱永百廿五文借り請罷在候処相違無之、然ル処右与兵衛

義は去酉年九月不縁ニ付當時町分近江屋五兵衛家ニ借宅仕候処、右金返濟等閑ニ付此度被及 御出訴ニ候得共、右金之義は先達而不縁之節跡相続人もと江申繼濟方可致規定致置候ニ付、今日御出訴之処御願下ケ被成下、是日數十日之間相待被下候は町分も俱々致世話濟方為致対談可申候旨御頼申入候処御承知被下、然ル上は日限中ニ無相違立可致候、万一相違之義有之候は如何様共被仰立此一札を以被及 御出訴候共一言之申分無御座候、為後証濟方一札、依如件、

文政九戌年十一月

二条川東讚州寺町
年寄長兵衛
五人組

五兵衛[㊦]

丹波屋与兵衛[㊦]

荒道具質改所

八〇 聿養子先不縁の次男再縁につき実父よりの

一札

入置申一札之事

一拙者次男重藏義部原村太郎左衛門殿方江去ル申年御所望ニ付聿養子ニ差遣候処、熟縁相成兼御相談之上去戌年離別可及談入置重藏儀は江戸表へ罷歸り居候処、重藏夫婦之内縁有之候ニ付背本意候訳ニは候得共、右太郎左衛門殿孫息女おすみ改而重藏妻ニ貫請度其御両所様江御世話之儀御頼入候所、御引請之御世話ヲ以太郎左衛門殿方へ精々御談被下右御頼申候通り御取計被成下候ニ付、則此度江戸表江拙者同道仕候、尤追而重藏夫婦之者別家為致候所存ニ有之候へ、縦令向後家業体之儀ニ付因窮^(困)ニ成行候共、すみ事売女奉公は勿論都而非常之迷惑相掛候様成儀は決而為致申間敷候、遠路相隔候事故御心配之段御尤承知致候故為御安心一札入置申候、尤重藏当地ニ罷在候節借用金之儀は拙者方々返濟可致管、此度夫々致対談置候儀別紙之通り相違無之候、為後日親類加判一札、依而如件、

江戸日本橋西川岸

文政十亥年二月 日

松本十三郎[㊦]

上総国松部村

新官村

親類
源

藏印

上村常右衛門殿

部原村

江沢縫殿介殿

小谷屋新右衛門殿

同村口入請合
熊

吉印

八一 年季奉公人請状

年季証文之事

一三太郎儀当 (ママ) 歳ニ罷成申候処、此度其御店様江当町熊

吉才覚を以御奉公ニ指置申候所衷正ニ御座候、右之者切

支丹類族御金山定判持ニも無御座候、

一御公儀様御法度ハ不及申御店様御家法之儀為相背申間敷

候、右之者病氣指合等何カ品有之候節は人元方ニ而引受

始末仕御店様へハ少も御苦勞相懸申間敷候、仍人元請合

連判を以始末如件、

文政十三年閏三月

苦竹村原ノ町奉公人

三 太郎印

同村人元

万 五 郎印

八二 不通養子手形之事

不通養子手形之事

一私孫久吉と申者当寅三歳ニ相成候処、因縁有之候而此度

其元江不通ニ御引取被下実子同様ニ御取計可被下筈ニ御

座候、然ル上ハ此以来相互ニ親類縁者之因不仕私方ハ他

人と相成候間、縦令双方ニいケ体之義有之候共私は勿論

一家親類共々も縁者ケ間敷交り決而致不申約束ニ御座候、

尤右久吉成人之上ニ其元跡目相統致候共、又は外方江養

子ニ御遣し被成候共、右約束不通ニ相成候上は其先々

逆も右同様親類之交り決而仕間敷、猶又双方ニ何程難渋

之筋有之候共右久吉之縁を以故障申参り候者有之候ハ、

左之判人共罷出何方迄も急度埒明其元江毛頭御損難相懸

申間敷候、為後日不通養子手形、仍而如件、

文政十三年寅十二月

樽原村祖父

嘉 七印

名柄村
島屋徳兵衛殿

一家惣代
佐兵衛
七話人同村
兵四郎印

八三 喜六養子喜太郎不縁一件落着につき一札

一札之事

一其元殿養子喜太郎殿不縁一件此度落着ニ付金子取引方其外万端懸ケ引有之候故、小山屋御手代并御縁家之内新之介半五郎并儀之介善兵衛右四人之内罷出候様其元御住文(注)ニ候へとも、右ハ嘉吉殿証拠ニ相立則同人ノ書状カセ屋治兵衛宛ニ而取置其元殿江御渡申置候、

一喜太郎殿妻ハ離縁、子供衆ハ縁絶之儀御申出し被成御尤ニ存候、右ハ元来養父より養子不縁不調ひ候上ハ妻子縁切当前(然)ニ御座候間、後日故障有之候ハ、此方ノ申披キ可仕候、

一右不縁一件我等取暖夫々取捌いたし事済出来候上ハ後日御双方ニ故障無之筈、若又彼是申出候ハ、罷出申披キ可

仕候、為後日一札差入申所、仍而如件、

天保三辰年八月十四日

大安寺村
取暖人
喜兵衛
油留木町
御前屋
同断
次郎兵衛印

芝新屋町
堀屋喜六殿

八四 養子不縁につき取替証文

為取替一札

一私実弟喜太郎儀先年其元へ養子ニ差遣置候処、其元思召ニ不相叶義有之今般不縁之趣被仰下承知仕候、則里元此方へ引取候上ハ已来不縁之義ニ付此方ノ其元へ対し聊申分無之、尤不縁之義ニ付彼是相互ニ是まで行違之義とも有之候得共万端取捌明白ニ事相済、然ル上ハ養子喜太郎違背無之承知仕候、宗旨并荷物等慥ニ受取右品物之義ニ付而も申分無之、右一件ニ付故障申出候者有之候ハ、私とも罷出急度埒明可申候、為取替一札差入申所如件、
天保三年辰八月

大坂南久太郎町三十日
小山屋重郎兵衛印

芝新家町
堺屋喜六殿

本人
喜太郎

八五 養子不縁につきこれまでの旧功料請取証

覚

一金六拾五両也

右は私弟喜太郎此度不縁ニ付是迄之旧功料被遣繼ニ請取申候、已上、

天保三年辰八月

堺屋喜六殿

小山屋重郎兵衛印

八六 堺屋一件取決めにつき書状

(封書表書)

かセ治様

用事

京加

(封書裏書)

八月八日

弥御堅勝大悦奉存候、然は堺屋一件之義如何様子ニ而取引
 延引相成候哉、小山屋安兵衛殿両三日跡に相待居候、此間
 申遣し候通ニ而為取替一札下案出来候哉否御返事可被下候、
 尚又四人之内老人罷越候様安兵衛殿江申聞候所、同人被申
 候ハ右一件ニ付先達而新兵衛半五郎江引合被成候ハ、百両
 之示談ニ而意返^(ママ)ニ相成候間、私ともハ得参り不申候段不申
 ニ付、何卒く安兵衛殿ニ而差引可被下様御執計可被下候、
 此段安兵衛殿も訊ケ而御頼入被成候、宗旨送り下書被下
 候ハ、受込は喜太郎殿御持参可被下候、且又弥治兵衛殿も
 御申ニハ一両日中ニ埒明候様致度由御申ニ御座候、今日ニ
 も否哉御返答可被下候、用事御座候ハ、私何時ニ而も参上
 可仕候、弥治兵衛殿も同様ニ被申候、早々埒明候様御勘弁
 頼入候、大坂安兵衛殿待セ候、き之毒ニ存候、日々此方へ
 様子尋参り候、先ハ右申上置早々、以上、

八月八日

治兵衛様

嘉吉

八七 品物不足につき伺状

(封書表書)

まつ屋

利兵衛様

急用事

京屋

嘉吉

(封書裏書)

八月十六日

今朝申遣候ハ品物不足之義御調へ被下候哉如何之事ニ候哉、
私事も今朝ハ只今迄留主ニ付此段御尋可申候、何卒只今宿
大喜方江御持セ遣シ可被下候、此段御頼申候、已上、

八月十六日

八八 不通養子貰受証文

不通養子証文之事

一此かめと申武歳ニ成候もの此度我等方江不通養子ニ貰受
候ニ付、為養育料銀式枚ニ相極不殘御渡被成下慥ニ請取
申処実正也、然ル上は我等実子同様太切ニ養育致成人之
上たとへ奉公ニ出し候共遊女其外悪敷筋合之方江は決而
差遣申間敷、向後右かめ身分ニ付而は不及申我等方難洪
等申立一錢目之御無心ケ間敷義一切申懸ケ間敷、勿論右
体不通養子ニ貰受候上は理不尽ニ差戻し申間敷、若無抛
義ニ付差戻シ候節ハ右持參銀共差戻し申候、尤此後かめ
義ニ付如何様之出入懸り合難洪出来候共、我等方江引受
埒明其元殿江少も御難儀懸ケ申間敷候、若相違之儀在之

候ハ、請人罷出急度相捌可申候、為後日之仍而如件、

天保八年西四月

下立亮御前通東へ入

扇屋金治郎印

妻 ぶ し印

請人

檜皮屋弥八印

大坂屋常七殿

八九 不通養子貰受証文

不通養子証文之事

一此かじと申当歳ニ成候者此度我等方江不通養子ニ貰受候
付為養育料と錢八貫文ニ相極不殘請取申処実正也、然上
は我等実子同様太切ニ養育いたし成人之上奉公ニ出候共
悪敷筋合之方江ハ決而差遣申間敷候、向後右かじ身分ニ
付而ハ不及申我等方難洪等申立一錢目之無心ケ間敷義申
懸ケ間敷候、右体不通養子ニ貰受候上は不理尽ニ差遣シ
申間敷、勿論此後右かじ(ト)身分ニ付如何体之六ヶ敷出入懸
り合難洪出来候共我等方江引受埒明可申候、若相違之儀
在之候ハ、請人罷出急度相捌可申候、為後日依而如件、

天保八酉年五月

夷川小川西入町
大石屋安兵衛印

妻 一 子 二

丸太町小川西入町
丹後屋十兵衛印

大坂屋常七殿

九一 不通養子賞請証文

不通養子一札之事

一其許殿実子当歳惣估と申もの此度河内屋久兵衛仲人ヲ以我等方へ不通養子ニ賞請、則養育料として銀百五拾匁御添被下慥ニ受納仕申処実正也、然ル上は我等如何様之難渋仕候とも本人惣估差戻し杯申立無心合力ケ間鋪儀決而申出間敷候、尤惣估成人以後歛舞妓役者等ニは決而差出申間鋪候、為後日不通養子賞請申為取替一札、仍如件、

天保十亥年四月

加島村浜ノ町
養父 大和田屋彦三郎印
受人 枚方屋善八印

八百屋庄七殿

九〇 不通養子一札之事

不通養子一札之事

一我等実子当歳惣估と申もの此渡河内屋久兵衛仲人ヲ以其許殿へ不通養子ニ差遣申、則養育料として銀百五拾目相添差遣申候所実正也、然ル上は右惣估成人以後如何様出精致候とも無心合力ケ間鋪義決而申出間敷候、尤不通養子ニ先以後とも歛舞妓役者等ニは差出し不申約定ニ御座候、為後日不通養子差遣し申為取替一札之事、

天保十亥年四月

実父 八百屋庄七印

取替 大和田屋彦三郎殿
写シ

九二 奉公人年季中解雇により同商売等差留の請状

差入申一札之事

一田辺やたつ忰安兵衛義と申者我等々共請人ニ相立先達而

より其許殿方へ年季奉公ニ差遣シ置候処、此度不奉公仕候ニ付安兵衛義ハ暇被下候、尤年季中之義ニ付其許殿方同商売御差留被成候趣被仰聞候段御尤之御儀委細承智仕候、然ル上は安兵衛義此後養子ニ差遣シ候敷、又は御差支ニ相成候方江養子又は奉公日雇等ニも差遣シ申間敷、勿論下職被致候方江も急度為立入申間敷候、右之趣相違之義有之候敷不筋之取計等仕候ハ、此一札を以如何様之御取計被成候とも一言之違背申間敷候、為後日連印一札差入置申処、仍而如件、

天保拾年亥九月

請

井筒や伊助^印

浄福寺通長者町上ル

親 田辺やたつ^印

奉公人

安兵衛(花押)

主人
俵屋万兵衛殿

九三 跡式処分出入につき願書

乍恐以書付奉申上候

御知行所房州長狭郡北風原村永井幾右衛門代倅名主伝右衛門奉申上候、今般向坂清之助様御知行所同郡細野村勘右衛門死失跡孀百姓やつゝ私親幾右衛門江相懸り右清之助様へ奉出訴候一件、左ニ奉申上候、

此段私親幾右衛門儀高拾石余所持、代々牧士御役相勤永井と苗字被下置、殊ニ御地頭所も代々村々取締のため在役被 仰付相続罷在候処、右幾右衛門弟新五郎儀世話人有之文化八未年相手やつゝ之祖父勘右衛門娘ひで方江養子ニ罷越候処、同十四年中新五郎江女子壹人出生いたししげと申、其後同十四丑年中右ひで儀死去致、其後養父勘右衛門儀ハ文政元寅年中病氣付養生不相叶死去仕、依之右新五郎義勘右衛門と相改家督引受相続罷在候後、同三辰年中新五郎事勘右衛門義東条村百姓半平娘とわを媒人有之後妻ニ貰受候処、翌四卯年中今般之訴訟人やつ儀致出生相続罷在候処、天保二卯年中右勘右衛門娘しげを私方へ貰請度旨申間候処、勘右衛門申候はしげは惣領之儀ニ候得共伝右衛門儀我等実家之儀ニ而、殊ニ甥之子ニ付しげを姪合候得ば重縁ニ罷成幾々双方内外のため宜敷

候間任望ニ可申旨ニ而、横尾村名主五左衛門は縁類之儀ニ付同人を媒人ニ相立、同年十二月申しげを私方江遣し候後、翌辰年正月申中右勘右衛門は追々病氣付差重り迎も本服無覺東存候哉、勘右衛門儀同村本家吉野五郎兵衛同村百姓小平次并私親幾右衛門私共夫婦を病床江呼寄一同江申聞候は、我等儀最早存命無覺束依而は外ニ申殘候儀無之候得共養家相統方之儀無心元、依之若死去之後は惣領しげ之夫ト伝右衛門儀致世話、夫夕幼年之やつを見立家名行立候様相頼同年七月三日死去仕候ニ付、葬式相經營親類共打寄勘右衛門後家とわを為立合家財取調候処、借入金百七拾五両式分程有之猶用立金廿七両式分程有之ニ付、右を差引候得ば金残而百四拾八両余借用有之ニ付打驚候得共、一旦勘右衛門存生中被頼候遺命も有之旁以難黙止、依之私儀も十方ニ暮罷在候処右五郎兵衛并小平次兩人儀何分ニも勘右衛門遺命之通其許世話致吳候様、若又行立兼候節は此上我等共立合ニ不及候間家財ハ勿論勘右衛門所持之田畑等實地ニ入候而も外々違乱申者無之候間、何れニも引受世話致吳候様相頼候間無拋私儀右

勘右衛門跡引請、同年〆翌巳年六月迄諸事世話致罷在候処、右五郎兵衛〆私江申聞候は我等儀勘右衛門江存生之内金子五両用立遣し候間相返し候様申之ニ付、以之外之儀と存右様之次第二候ハ、勘右衛門死去之後家財取調之節可申聞処、無其儀今更ニ相成申聞候は一円難心得旨申聞候処、是非〆相返し候様申ニ付纔之金子相返し不申候而は親類共不和之基と存任其意遣し候得共、親類共之内ニ而右様之取計へ被致候而は私儀勘右衛門跡身上向世話致候而も骨折之甲斐も無之儀と存、後家とわへ右之趣申聞是迄之借財方は我等引受候得共、家内賄方之儀は行届不申候旨相断候処、猶又右五郎兵衛〆とわへ申聞候は、勘右衛門存生中式拾ヶ年前と覺用立米式表^(俵)三斗余有之候間相返し候様度々及催促ニ、天保五午年は諸国一体之稀成凶作ニ而既ニ露命も難立行候時節ニとわ難儀之中を不顧五郎兵衛右米式俵三斗余引取候間、其後とわ義追々金七拾兩余借財仕右金返済方ニ差支、同人義本家五郎兵衛并小平次江賄方相頼候得共同人共義世話致不申候ニ付、女子之身分ニ而取詰候哉去ル戌年八月中致家出立返り不

申候ニ付、右五郎兵衛忰郡藏并小平次兩人ニ而とわの借財方片付候趣ニ而勘右衛門所持之田畑共質地ニ入候旨ニ而不残手放、其後右身上向は死去致候勘右衛門之養母ニ而当年六拾歳余ニ相成候老母ニ為賄候間、猶追々借財等相嵩殊ニ孫やつ儀も我等儘而已ニ而老母も殊之外心痛いたし罷在候儀之処、当春中横尾村右五左衛門掣養子庄藏儀私方へ參申聞候は、勘右衛門娘やつ儀最早当亥十九歳ニも相成候得ば掣養子をいたし老母之心をも相休メ度、就而は勘右衛門存生之内咄シ有之候は其許弟米次郎を夫婦ニ致度由ニ付、可相成義ニ候ハ、是非く米次郎を貰請度旨申ニ付、私儀米次郎江右之始末申聞候所、同人申候は我等幼年る病身勝ニ而中々農業迎も難出来候ニ付、勘右衛門方掣養子之儀は無覺束候間其段及断吳候様私へ申聞候故右庄藏へ其旨及断候処、無程右郡藏小平次兩人ニ而猶又私方へ參申聞候は、今般米次郎を勘右衛門方掣養子ニ致度申入候処米次郎不承知之趣、左候而は勘右衛門存意も不相立依而は無詮事ニ候之間米次郎同様之人物を撰候上金百両相添、米次郎之人代りニ掣養子為致候旨

不法之懸合ニ付、私儀以之外驚挨拶致兼候処、猶郡藏小平次申聞候は右之趣意出来不申候ハ、勘右衛門跡掣養子ハ我等共方ニ而何れ之者をも見立可申候間、其許より勘右衛門跡式為見繼壹ケ年ニ米三拾表ツ、可相送旨申ニ付、是又法外之儀と存挨拶不仕候処、其後扱人共立入何分ニも勘右衛門方相続之儀一旦世話取計へも致シ吳候程之事故、是非く此上共行立方世話請度由申ニ付私共儀得と勘弁仕候処、勘右衛門儀は重縁之儀ニ付然上は是迄之懸合ニ而は不行届私方る為見繼金子貳拾兩遣し可申旨扱人共へ申聞候所、右懸合中やつ儀欠落いたし 御地頭所江御訴訟申上候儀之旨承り奉恐入候、依之猶扱人共追々立入種々懸合候得共當時ニ至り候而は郡藏小平次兩人ニ而やつへ品々申聞故障致居候儀と相見、見繼金貳拾兩位ニ而は迎も不承知ニ付見繼金ニ候ハ、多分之金子遣吳不申候而は行届不申旨申之、右ニ付勘弁仕候処右郡藏小平次兩人儀如何存候哉勘右衛門跡掣養子ニ事寄私方江難題申懸、勘右衛門家財押領可致心底る前書之通法外之儀共申聞候ニ相違無之、依而は此上私江何様之難題申懸候義

も難計私儀相続方ニ差支難儀当惑仕候間無是非右之段始
未有体奉申上候、何卒以 御慈悲訴訟方御地頭所様へ御
懸合之上私儀無難相続相成候様被仰付被成下置度奉願上
候、以上、

御知行所房州長サ郡北風原村

永井幾右衛門代
仲名主

伝右衛門

天保十亥年九月

御地頭様

御役所

九四 不通養子賞請証文

不通養子一札

一当歳之女子小梅と申候者此度我等方へ不通養子ニ賞請候
処実正也、然ル上は小梅義大切ニ養育可仕候、若又奉公
ニ差遣シ候共茶屋遊女其外悪敷筋へ奉公ニ出シ間敷候、
小梅義ニ付何体之事出来致し候共其元殿へ御敷義掛ケ申
(難)
間敷候、且又不如意ニ候共金錢之義御互ニ沓錢も取引不

仕候事、為其我等請人ニ相立申候、為後日之不通養子一
札、仍而如件、

天保十一年庚子四月九日

元誓願寺七本松東へ入町
貫主

和久屋岩治郎^印

元誓願寺千本西へ入町
請人

万屋長治郎^印

北野梅林坊殿

九五 不通手形之事

不通手形之事

一私娘もんと申者当丑ノ廿歳ニ相成候所、因縁有之候而此
度其元江不通ニ御引取被下実子同様ニ御取計可被下筈ニ
御座候、然ル上ハ此以来相互ニ親類縁者之因不仕私共ハ
他人と相成候間、縦令双方へいか様之義有之候共私共ハ
勿論一家親類共ども縁者ケ間敷交り決而致不申約束ニ御
座候、右もん之見之上ニ付其元いか様ニ御取計被下候共、
(身)
私ハ申不及一家親類共ども決而故障申間敷候、縦令脇^ら
故障ケ間敷義申出候共私加判之者共罷出急度埒明少シも

其元江御損難相懸申間敷候、為後日之不通手形、仍而如件、

天保十式丑八月

娘親小取村

長兵衛

引請人同村

藤四郎

衛印

印

島屋
よし殿

九六 養子娘証文之事

養子娘証文之事

一我等娘とくと申当年拾七歳ニ相成候者行末世話難相成候

ニ付、我々共本人得心之上其許殿江養子娘ニ差進申候処

実正也、然ル上は向後其許殿実子同然ニ御掛可被成下候、

且又此者ニ付親類兄弟又は言名附之夫先主人杯と脇外(許嫁)

違乱妨申者忝人も無御座候、御公儀様御法度之宗門

ニ而も無之候、宗旨は代々浄土宗ニ紛無御座候、向後其

許殿御宗門ニ加入可被成下候、万一此者病死頓死不慮ニ

相果候共我等方江御届ケ被下候得は早速罷出立会之上其

許殿御差図を以取計可仕候、若在宿不致候得は其許殿御

家風之通何方江成共御葬被下御取置可被成下候共、我々共跡ニ而承り候共一言之申分無御座候、右之外娘とく儀ニ付如何様之六ヶ敷出入故障出来候共、連印之者早速罷出引請其埒明其許殿江少シも御損難御厄介相掛申間敷候、為後日之養子娘証文、依而如件、

天保十三年寅十二月

二条川東新生洲町

父 升屋源次郎借屋

山形屋 磯吉印

母 妻 い わ印

歎屋町九太町下ル町
親類

山形屋 甚助印

妻 ミ ほ印

井筒屋 喜六印

播磨屋 宗兵衛印

養娘 と く印

伊勢屋 喜助印

岩井屋 おまき殿

九七 娘養女に差遣わすにつきこれまでの養育料請

取証

別紙一札之事

一金三拾七兩壹歩(分)

右は我等娘とくと申者此度本紙証文を以双方相對得心之上其許殿江養子娘ニ差進申候処実正也、然ル上は其許殿御勝手ニ付何国何方江成共如何様ニ賤敷給金先借奉公ニ差遣し被成候共一言之申分無御座候、其節我等方江御引合被下候得は親印形を以差遣し其給金如何程ニ而も為養育料多少ニ不限在儘急度相立可申候、若又其許殿親印形を以御遣し被下候得は我々共印形御入用之節は何ケ度ニ而も調印可仕候、其外何事ニ不寄御差凶ニ相任可申候、前書之金子御無心申入候処是迄為養育料と前書之金子忝慥ニ受納申候処実正也、以後無心ケ間敷義一切申入間敷候、為後日之差入申別紙一札、仍而如件、

天保十三年寅十二月

山形屋儀吉印

妻 い わ印

山形屋甚助印
妻 ミ ほ印

井筒屋喜六印

播磨屋宗兵衛印

と く印

伊勢屋喜助印

岩井屋おまき殿

前文之通相違無之候、然ル処此度御頼申入養子証文表少シも相違無御座候得共、無抛儀ニ付折入而御頼申入来ル戌十二月晦日ニ養子不縁之上差帰し被下候約定ニ御座候、則為取替一札申受候、何事も相任申候、為念奥書仍而如件、

九八 帳外娘の水死体取片付入費引受書

差入申書付之事

一其御村方ニ去ル天保五年家出仕り帳外ニ相成有之候も

んと申者此度其御村字葛城池ニ而水死仕候、右之者ハ私

之身寄之者ニ御座候得共、前書帳外ニ御座候得は其御村方々其筋々江御届被下御片付可被下候、右ニ付諸人用何程相掛り候共私共江引受急度出銀可仕候、其御村江少も相掛申間鋪候、為後日之差入申書付、仍而如件、

天保十四年卯六月二日

葛上郡名柄村
親類

徳兵衛印

同郡南郷村

善兵衛印

同郡井戸村

証人

九右衛門印

同郡朝妻村
御役人中

九九 養子差遣わすにあたり両家往來音信の取決め

(端裏書)

「久目治郎一件酉八月九日初メ小間龜下坂三度、小間市

二度、作兵衛三度登り、久左衛門壹度下坂、久目治郎

三度登り、日数廿八日計り拾式度引合ニ相成り、人

足此方々九兵衛二度、寅壹、与八二度、五度、同十月

十七日事済、

家請立会」

為取替養子規定証文之事

一我等忝余治郎義其方殿江養子遣シ候所実正也、然ル所往來音信等之義左之通約定ニ御座候、

一権次郎婚禮之節此方出席可仕事、

一御息女此方呼入之節内々質素ニ御遣シ可被下候事、

一親之往來之儀御互ニ勝手ヲ見合質素ニ往來可仕御事、

一貴家吉凶之節は内々質素罷出可申候事、

一諸親類往來之儀は遠方之事故御互ニ相止メ可申候事、

右之通規定相違致ス間敷候、其外金銀諸出入或は無心ケ間

敷義は勿論之事其方殿御家江対シ諸親類之末々迄も諸事故

障ケ間敷義一切申間敷候、為後日之為取替約定証文、依而

如件、

嘉永二年酉九月

橋本

鍵屋久左衛門印

大坂

小橋屋作兵衛印

大坂

小橋屋権右衛門殿

一〇〇 養子貰請にあたり兩家往來音信の取決め

為取替養子規定証文之事

一其元殿子息余次郎殿此度権次郎と相改我等方江養子ニ貰請候所実正也、然ル所往來音信等之儀左之通約定ニ御座候、

一権次郎婚禮之節其元殿御出可被下候、并我等娘質素ニ而其元殿江差遣シ可申候事、

一親之往來之儀は御互ニ勝手ヲ見合質素ニ往來可仕候事、一年礼盆礼之義は権次郎差遣シ可申候事、

一吉凶之節右同人差遣シ可申候、并無抛用向有之節は差遣シ可申候事、

一諸親類往來之義遠方之事故御互ニ相止メ可申候事、右之通規定相違致ス間敷候、其外金銀諸出入或は無心ケ間鋪義は勿論之事、其方殿御家江對シ諸親類之末々迄も諸事故障ケ間敷義一切申間敷候、為後日之為取替約定証文、仍而如件、

嘉永二年西九月

橋本

鍵屋久左衛門殿

大坂 小橋屋権右衛門印

証人 小橋屋作兵衛印

一〇一 養子貰受証文

養子一札之事

一此式歳ニ成候男子此度我等方へ養子ニ貰受候付、養育料として銀四枚御送被成下千万忝慥ニ受取申候、然上は我等実子同様太切ニ養育いたし、成人之上たとへ奉公ニ差出候とも悪敷筋合之方江は決而差遣申間敷、此後右男子ニ付如何様之義出来候共我等方へ引受可申、勿論右男子ニ付而は不及申我等方難渋等申一錢目之御無心申間敷候、自然病氣等之節は早速御知セ可申候、尤一旦養子ニ貰受候上は理不尽ニ差戻候杯不仕候、万一如何之義御座候ハ、請人罷出急度相捌可申候、若養育仕兼無余義差戻候節は右銀子取揃相渡可申候、依之差入申一札、仍而如件、

嘉永三戊年十一月

大宮仏光寺下町
丹後屋平兵衛借屋
大坂屋伊三郎^印

妻 ぶ み^印

仏光寺大宮西入町
請人
丹波屋吉蔵^印

尾張屋定七殿

一〇二 離縁につき人別受取状

嘉永四年人数帳引合

曾根良左衛門^印

其御拔牡鹿郡湊村御百姓熊谷長右衛門妹翠林兵衛当三拾歳ニ相成候者、先年私拔宮城郡高城□□御百姓善作男子縁組遣置候処、不熟ニ付離縁ニ罷成去年中右親元善作方へ引取候段申出ニ付、当人別御改々私方出人之首尾致候条、其御村欠人之御首尾可被成候、尤右之者御法度之宗門ニも無之、他郡拔御暇之上御村弘証被相送候分見届致し無相違人元請取申候、依而受証如此ニ御座候、已上、

嘉永四年正月

宮城郡高城本郷肝入
喜兵衛^印
杜鹿郡湊村肝入檢斷
清左衛門殿

尚以仮弘証ハ指留置返達致し不申候、已上、

一〇三 不通養子賞請証文

不通養子手形之事

一其元殿実子当年三歳之女子此度不通養子ニ貫請候処実正也、右為養育料銀式枚被差添髓ニ致入手候、右不通ニ貫請候上は毛頭差戻シ申間敷候、尤向後大切ニ養育いたし候、且又成人之後茶屋遊女其外不筋之方へ奉公等ニ一切差出し申間敷候、将又如何様之難浪出来候共決而無心ケ間敷義共一切申出間鋪候、為後日不通養子証文、仍而如件、

嘉永四年辛亥三月

室町頭風呂之辻子
養子親
伊勢屋甚助
木之下架抜町
請人
松屋伝七

和久屋
伊三郎殿

一〇四 親類との縁切状

縁切一札之事

一我等儀先達而ぐ親類之好ミを以厚御世話様相成千万難有仕合ニ奉存候、然ルは又候此節難渋之儀申立中人を以御無心之義段々と御頼入候処、最早是迄數ケ度事故無御聞入等も候処押而御頼申此度は親類之縁切被下成候趣被仰畏り承知仕候、夫ニ付今般為助力金子貳両送り被下難有體ニ請取申候、勿論此上以來ニおゐて如何体之難渋出来仕候共、決而御無心ケ間敷義は不及申、尤縁切申候上は末々之子孫ニ至迄重而少シも立寄申間敷旨、若又彼是等自然心得違仕右体之義申出候ハ、請人之もの罷出急度埒明仕其許殿へ少も御難渋相懸ケ申間敷候、為後日一札依而如件、

嘉永四亥年五月

本人 河内屋き く 印
同 悴 常治良 印
同 弟 松之助 印

河内屋忠兵衛殿

一〇五 助成銀請取につき一札

差入申一札之事

一私義是迄心得違仕金錢多分遣引捨親跡相続難出来候ニ付他国ニ而一家相立度、夫ニ付元手銀御仕分ケ相頼候処、親跡払底ニ仕候上仕分ケ杯有間敷候義ニ付容易ニ御聞入無御座候得共、御旦寺方之御取暖ヲ以双方熟談之上縁絶之義定仕候付無余義家明替旧宅巷ケ所残り道具迄御売払都合銀拾五貫目并世帯道具等も御恵被下候処相違無之候、然ル上ハ跡式相続筋之儀ニ附一切故障ハ勿論、聊無心ケ

同 弟 龜治良 印
同 娘 む め 印
同 宇津屋清吉 印
請人 木屋 久 七 印
請人 嵯峨屋定吉 印
請人 升屋半兵衛 印

間敷義ハ申出候得ハ如何体ニ被成下候共一言之申分無之候ニ付、御暖人様之御愛憐ヲ以毎年一兩度限仏參氏神之神事而已立入ヲ相頼、去ル午年三月義定一札差入候義相違無御座候、然ルニ昨戊年三月実母死去之節縁絶義定之私ニ付遺物杯乞受可申存寄毛頭無御座候処、不埒之私御愛憐被下改心渡世遺精仕候ハ、道具拾五品遺物ニ遣し候様御遺言ニ御座候趣、御慈憐之程千万難有忌明後ニ早速御渡シ被下候趣御座候得共、何分私義暮方不取締ニ而右体大金漸四五年中ニ喰込渡世取続難出来候ニ付、其元殿所持向イ屋敷住居仕度其段御頼申上候得共、縁絶私住居可為致訳無之勿論莫大之大金遺果し候様成私ニ付、隣家住居為致候てハ如何体之義仕出シ可申義難計旨ニ而御聞入無之御尤之御儀承知可仕候、乍併何分私身分立行方難渋ニ付心得違ヲ以旧臘中甸御番所様江御訴訟申上候処、私町内御年寄利右衛門殿代組頭喜兵衛殿私兩人共中三日間公事宿差扣居候様被仰付、四日目ニ兩人共御召出しニ相成、合力頼談筋之義付下方おいて其町内ノ相手喜六方へ引合致遣し候様被仰付願書御下ケ相成候ニ付、当春ノ

年寄利右衛門代組頭源八殿ヲ以段々御引合被下候処、其元殿相続方六ツケ敷御仕法御定質素儉約御暮方乍蔭推察慎方可仕処、以前御且寺御暖濟縁絶義定一札ヲも不顧輕々敷御上様江御訴訟ニ罷出候様成不所存之次第御腹立之段一言申披無之、向後義定通急度相守如何体之身分難渋ニ陥り候共聊之無心助精等申間敷、此度限り助精被下候様段々縋り源八殿ヲ以御頼申上候処、格別御勘弁之上當年ノ拾ケ年を限り毎年銀貳百目ツ、御惠被下候様厚思召之程ハ難有奉存候得共、一時ニ御出銀不被下候而ハ私家内仕法立難出来候ニ付、尚又当町組頭源八殿証人ニ相立段々御頼申上候、依之母遺物として残し置候道具拾五品商売人直積ニ而代銀五百目之由ニ附、右五百目ヲ足し合都合銀貳貫目一時ニ御惠被下忝慥ニ請取申候処実正也、然ル上ハ先年差入置候義定一札面相守候儀ハ勿論、此度ハ誠ニ以六ツケ敷御中格別之御勘弁ヲ以色々御心配御才覚被成下御助精被下候銀子故業体出精仕当地ニ而急度取続キ可仕候、已求御役界筋ハ不及申聊故障之義毛頭中間敷候、自然義定ニ相背キ候ハ、是迄御承知置被下候年々

兩度立入之義も御差留被下候共一言之申分無御座候、為後証差入申一札、依而如件、

嘉永四年辛亥九月

郡山柳町三丁目
本人
堺屋覺兵衛
同町
証人
細屋源八

堺屋喜六殿

同妻 おのふ殿

右堺屋

御親類中

御且寺

教行寺様

一〇六 不通養女につき一札

不通一札

一 貴殿方江娘かめ養娘ニ指遣し申候事実正明白ニ御座候、

此者之儀ニ付脇(異)意變指構申もの之在之候ハ、此方何方迄

罷出少しも貴殿懸御難義不申候、為後日不通一札、仍而

如件、

嘉永五年子七月

津野熊次郎

萩野三四郎殿

一〇七 養子持參銀分配方につき一札

差入申一札之事

一 其許殿御子息佐助殿此度広瀬故治助為養子相続貫請、善七跡御番代被仰付候付、御奉公御大切被相勤呉候義は勿論之事ニ候、尤當時実家方被致出勤候へ共、広瀬相続ニ相違無之候付、同家先祖之年回其外仏事等之義も大切被相勤呉候付而は、此度持參銀四貫三百目之内式貫目右等之為手当御預ケ申候、残り式貫三百目之内式貫百目は善七養父庄右衛門方江差遣、残り百目当分拙者方江預り置申候、尤広瀬家相続之上は以来何事も親類同様可致は勿論之義ニ而、其宿坊より之送り一札も慥ニ請取、自然此後万々一其御方ニ相続人無之、拙者共之内又は他向相続人見立養子差進候節は持參銀式貫三百目可差進積り約束申処実正也、然ル上は拙者共一統後日故障ケ間敷義一切無御座候、仍為後証一札如件、

嘉永五子年九月

菱屋忠兵衛[㊦]新井孝之助[㊦]

菱屋忠助事

禪門常悦[㊦]

新次郎殿事

広瀬佐助殿

米田万三郎殿

一〇八 丑松智養子不縁一件訴訟書

乍恐以書付奉願上候

轟村名主五右衛門煩ニ付代悴名主見習五郎左衛門奉申上候、
 私弟丑松義去丑年四月中村内年寄吉左衛門媒を以針貝村百
 姓七郎次方江智養子ニ差遣候処、追々家内も陸間敷農業出
 精仕候ニ付、其後雜穀諸道具并農馬板藏等迄差送相統方世
 話仕罷在候、然ル処右丑松女房ニ相成候まきは七郎次養子
 娘ニ有之、同人実子之悴は病身之処此節全快罷成候ニ随ひ
 丑松江種々難題申掛ケ打擲等をも被致、相統相成兼候義と
 心得違仕離別状下書相認所持箱江入置候を、去月中七郎次
 見出し幸ニ相謀、下書ニ候とも右体相認置候上は離縁可致

心底ニ相違有之間敷間早々親元江可立戻旨嚴敷被申聞、無
 致方相戻候段申之候処、承候得は女房まき義懷妊をもいた
 し居候趣ニ付可相成は再縁為仕度、媒吉左衛門其外之もの
 を以再応申談候得共七郎次義我意申募、再縁は勿論丑松持
 参之品々とも一切難差戻旨勝手儘之儀申居取敢不申候ニ付、
 無抛同村役人江申出候処品々利解等申聞取扱呉、衣類は其
 節受取候得共私方々差遣し候板藏沓ケ所膳捨人前并丑松の
 貸金式両肥代金沓両沓分錢沓貫八百文不相戻候ニ付、右之
 分取揃候上離別状本書引替可相渡旨及懸合候処、右村役人
 共の品物金錢之内勘弁方之儀申談御座候間、可成丈ケ内濟
 仕度厚勘弁差含申談候故夫々示談相成候処、離別状江懷妊
 之子供出生之上男子ニ候ハ、七日限り丑松方ニ而急度可引
 取旨書加へ可差出趣法外之難題申聞候間、先方之相統人江
 出生之子供可引取謂無之、殊ニ乳人も無之上は人命ニも相
 拘り候次第旁右体之文面難書加間通例之文言ニ而可相渡旨
 申談候処、望之離別状不差出候上ハ前書品物金錢とも難相
 渡間、此上何れニも勝手ニ可致旨不法之我意申張濟方相成
 兼当惑難洩至極仕候間無余儀奉願上候、何卒 御慈悲之

思召を以右七郎次義被 召出丑松持参之品物金錢早速相戻、
 出生之子供七郎次相続人ニ取極実意之対談仕候様被 仰付
 被成下置候様、此段幾重ニも奉願上候、以上、

轟村

嘉永七寅年閏七月朔日

名主五右衛門領ニ付代
 同人姓名主見習

五郎左衛門印

差添
 年寄

吉左衛門印

御奉行所様

一〇九 婚礼の三々九度合盆の作法を伝授されるに

つき一札

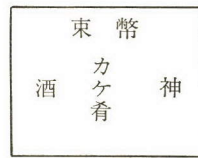
此度婚礼之卷ニ立入夫婦陰陽三々九度合盆之次方御遜申請
 候上ニは他言堅ク仕間敷、万一舌代ニ相出候而は諸神之イ
 マシメヲコウムル者也、依而心証如件、

安政二年正月十五日撰

菊地屋他吉

始善(花押)

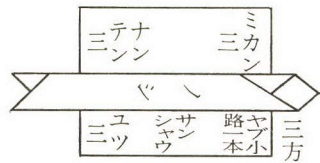
千田屋久兵衛様



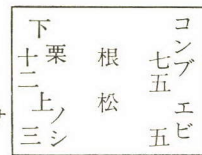
フクテ
 雌蝶

三方

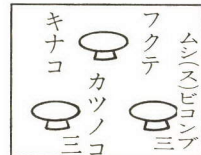
雄蝶



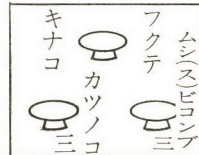
三方



白米上サ



膳



一三々九ト合盆一女先ニハ男先ニハ女先盃ワキイヲキ、

一ミナシコ餅カツ五百八ツウシニツノ間聳ニテモ嫁ニテモ通

リヅ、バ、餅付、

一 婿嫁入取、

一 水引白左男赤左女(カカ)
左ナワ男、
右ハ女

一一〇 縁組につき人別送り状

私扱御百姓丑松娘さき当拾六歳ニ罷成候所、其御扱鹿妻御百姓善十郎姫ニ去年十二月中縁組仕候段申出候間、当人数御改々此方欠人ニ相立候間其御元出人之御首尾可被成、且右之者御法度之宗門ニも無御座候条、弘証御見届之上受証可被仰聞候、已上、

安政二年正月

湊町肝入検断

長南丈八殿

石浜肝入

仁右衛門門印

一一一 離縁につき人別受取状

安政高分人数帳江引合

三浦源左衛門門印

私内よし嘉永元年秋中其御扱与頭善内妻ニ縁組遣置候処、

去年中離縁ニ相成私方へ引込申候、依而当御改々其御元減人之首尾可被成私方出人之首尾いたし候、尤も御法度之宗門ニも無御座弘証御見届之上受書如斯ニ御座候、以上、

安政二年二月

湊村肝入検断

長南丈八殿

組拔置

平原喜惣衛門門印

一一二 養子賞請につき道具料等受取一札

一札

一 此やすと申女子今般船越嘉治郎殿御世話を以我等養子ニ申請候ニ付、為配分銀五拾貫目為道具料金百両御添被下髓ニ受取申所実正也、然ル上は往々婿養子貫ひ前段銀子を以分家為致可申候、尤其節は其元殿へ可遂相談候、為後日依而如件、

安政三辰年正月

田中屋清三郎門印

田中屋清兵衛殿

一一三 離縁状ならびに諸道具送り状

(離縁状)

貴様御娘おりわたの事此度不縁ニ付暇相出申候、此後何方
江縁組被成候共指支無御座候、以上、

安政三年十月三日

藤塚 糧介

志賀理十郎殿

(離縁につき諸道具送り状)

寒冷相催候得共御揃御安泰奉賀候、然はおりわたの事逆も
不縁ニ付氣之毒千万ニ奉存候得共返上仕候間左様御承知被
成下度候、依而諸道具左ニ

一長持 壹棹

一簞笥 壹棹

一洗足ばち 壹ツ

一手水鉢 壹ツ

右之通送リ上候間御受取被下度奉存候、扱々氣之毒千万ニ

奉存候得共、是非ニ不及如此ニ御座候、匆々不備頓首、

十月三日

藤塚式部

志賀理十郎様

二白、忝方ニ離縁状相添指上申候、以上、

一一四 遊女奉公人請状之事

(封書表書)

安政三辰年十月吉祥日

丹後屋 政吉

遊女奉公人かな請状入

母 まさ

梅中屋政右衛門

(封書裏書)

代々禪宗摂州

八部郡兵庫津

福嚴寺旦那

遊女奉公人請狀之事

一我等実娘かなと申当拾貳歳ニ相成候者、当辰十月より来ル
 已十二月晦日迄九年拾三年三ヶ月之間給金八兩と相極、
 則受状之上右給金不殘先借仕慥ニ請取其許殿遊女奉公ニ
 差遣シ申候処実正也、宗旨之儀は 御公儀様御法度之
 切支丹宗門ニ而も無之代々禪宗ニ紛無御座候、則寺請狀
 別紙ニ御渡シ申置候、然ル上はかな諸親類兄弟言名附之
 夫先主人杯と申違乱妨申者壹人も無御座候、此者取逃欠
 落等仕候ハ、早速本人尋出シ急度御手渡シ仕、若行衛難

相知候ハ、右本人ニ不拘先借之給金無滞相立可申候、
 勿論取逃之品も有之候ハ、無異儀相弁可申候、尤年季之
 内立金杯と申無体之暇乞請申間鋪候、就而はかな不奉公
 仕候敷金子御入用之儀出来仕候ハ、本人私シ共方へ引取
 同体之奉公ニ有附替、其給金為身請金と不殘其許殿へ御
 渡シ可申候、年明之節引負借金等有之候ハ、御所仕来り
 通り為相濟召連レ歸り可申候、自然かな身請被成度望之
 人有之候ハ、其礼金如何程成共御請納被成何方成共年季
 之外末々迄御遣シ可被成候、本人出世之儀ニ御座候ハ、
 決而申分毛頭無御座候、尤年季無難ニ相勤候後此印形之
 者相果候敷居所難相知候ハ、下女ニ成共御召遣ひ置被下
 候而、其後相応之縁談も有之候ハ、其許殿御勝手ニ御取
 計可被成下候、此儀聊差構申分無御座候、万一かな病死
 頓死不慮之儀等ニ而相果候共其許殿御見届之上何方へ成
 共宜鋪御葬置被下、其様子跡^(後)ニ而承り候共一言之御恨申
 分決而無御座候、右之外此者ニ付如何様之六ツケ鋪出入
 出来仕候共我等何方迄も罷出急度埒明其許殿へ少シも御
 難儀相懸申間鋪候、為後日之遊女奉公人請狀、依而如件、

安政三辰歳十月

撰州八部郡兵庫津和田崎町家持

兄親

丹

後屋政吉印

実母

まさ印

同国同所同町家持

請人

梅中屋政右衛門印

京五条橋下平居町扇屋芳治郎かしや

清水屋清兵衛印

奉公人 かな

京扇屋栄治郎殿

一一五 縁付につき人別加入受込状

請込一札之事

一 当村甚大夫方へ其御村丹六娘梅のと申者年式拾八歳二而

縁付ニ参り候由送り一札御差越し候付、自今当村人数帳

面へ加入可仕候、依之受込一札如件、

名草郡山口組谷村庄屋

吉左衛門印

安政四巳二月

那賀郡山崎組中島村
村役人衆中

一一六 地震の節住居向大破又は皆潰につき御救金

請取書

請取申金子之事

金五拾両

右は去々卯年十月地震之節住居向大破又は皆潰ニ相成候ニ
付、出格之訳を以社僧社家巫女一同江此度限為御救被下候
間、書面之通請取申処仍如件、

安政四巳年四月

星野一郎兵衛殿

今井一郎左衛門殿

小島利太夫殿

所谷左市郎殿

加藤次三郎殿

山王社家巫女物代

小川織部

同社僧惣代

宝蔵院

一一七 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等実娘りうと申当年拾壹歳ニ相成候者、我等身上不如意ニ付行末養育セ話難相成、依之諸親類兄弟一統我等本人得心之上其許殿江一生不通養子娘ニ進申候所実正明白也、然ル上は此者ニ付脇外ニ違乱妨ケ申者壹人も無之候、向後其許殿御心任実子同然ニ御取計可被下候、此方ニ聊差構一言之申分毛頭無御座候、御公儀様御法度之切支丹宗門ニ而も無之、宗旨ハ代々浄土宗ニ紛無之候得共、則寺請状別紙ニ取之可進候、以来其許殿宗門ニ御加入可被下候、且又右娘此後ニ至り心得違致我等方江逃帰り候共一夜も止置不申早速其許殿江差戻し可申候、万一此者病死頓死不慮之儀ニ而相果候共此方江御届ケニ不及其許方にて何方江成宜敷御葬可被下候、其様子跡ニ而承り候とも恨不足決而申入間敷候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷出入出来仕候共、右娘是迄之儀ニ御座候得は我等何方迄も罷出埒明其許殿江少も御難儀相懸ケ申間敷候、

為後日之一生不通養子娘証文、依而如件、

安政五年午五月

富小路通綾小路下ル町東側裏

大坂屋七兵衛かしや
実父

若狭屋栄助 印

同母 妻 な か 印

同祖母 同居 り き 印

右同町西側裏

大坂屋友次郎かしや
実伯父

若狭屋庄兵衛 印

証人 妻 ひ で 印

祇園南町金屋伝七かしや
七話人

播磨屋茂兵衛 印

養子娘り う 印

八百屋おとよ殿

一一八 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで

の養育料受納書

別紙一札之事

一金拾兩貳歩也

右は我等実娘りうと申者本紙証文之通其許殿江一生不通養子娘ニ進申候所、我等身上不如意ニ付相統難相成、依之無抛金子御無心申入候処御承知被成下、則是迄之為養育料前書之金子送り被下忝慥ニ受納仕候処実正也、然ル上は此後我等方ニ如何様之難渋有之候共重而尅錢目も無心等決而申入間敷候、且又右娘成人之後其許殿御勝手ニ傾城遊女ハ不及申ニ、如何体之賤敷給金先借之何奉公ニ御遣シ被成候共、此儀最初々得心之上親子兄弟之縁ヲ切不通養子娘ニ進申候上ハ、行末御勝手ニ御掛り被成候共其節毛頭違背申入間敷候、為後日之別紙一札、仍而如件、

安政五年午五月

- 実父 若狭屋栄助[㊦]
- 同母 妻 なか[㊦]
- 同祖母 同居 りき[㊦]
- 実伯父 若狭屋庄兵衛[㊦]
- 妻 ひで[㊦]
- セ話人 播磨屋茂兵衛[㊦]
- 養子娘り う[㊦]

八百屋おとよ殿

一一九 年季奉公人請状之事

年季奉公人請状之事

一 初太郎事千太郎義当申拾四歳ニ相成慥成ものニ付、当申年三月々来ル巳年三月迄中年九ヶ年年季相定、御給金尅兩ニ唯今御渡し被下慥ニ請取申処実正也、尤御仕着之儀は夏冬両度ニ可被下候事、

一 御公儀様御法度之儀は不申及何事も御家風為相背申間敷候、何様之儀有之候共年季中勝手ニ御暇願申間鋪候、尤不奉公仕候敷又は思召ニ相叶不申候節は何時ニ而も本金相立当人引取候義は勿論ニ御座候、万一取逃欠落等仕候ハ、引負之品々人主請人之者々相償、当人尋出シ貴殿方江少も御迷惑相掛申間敷候、

一 宗旨之儀は代々同村天台宗坂永寺且那紛無御座候、一 当人身分ニ付何様之出来候共我等共引請何方迄も罷出貴殿江御苦勞相掛申間敷候、為後日年年季奉公人請状依如件、

安政七年申三月

新田村
人主 治右衛門[㊦]

部原村
江沢潤助殿

親類
万右衛門 印

二二〇 夫と死別につき人別送り戻し一札

送り戻し一札之事

一其御村菊右衛門娘くかのと申者、当村喜兵衛方へ縁附有之処、右同人義病死ニ付無拠帰村相成り、此節送り戻シ之義願出任其意戻シ遣申候間、宗旨ハ真言ニ而当村西明寺且那紛レ無御座候、向後当村人数相除キ申候、其御村人数ニ御加入可被下候、則且寺ニも加判被致候、依而送り戻シ一札如件、

安政七年申閏月

相谷村庄屋
丈左衛門 印
同村
西明寺 印

中島村
御役人衆中

御 且 寺

二二一 村内風儀不良につき取締方仮議定一札

仮議定一札之事

一近年村内風儀不宜候ニ付、諸事取極坪々組分大杉囃休日ニ至る迄、万事村中不為ニ不被相成様今度議定連印御取被成候ニ付、右之段被仰聞承知仕候、一同連印之節聊以私共相拒候儀無御座候、依之仮議定御請差上申処如件、

台本村

万延元庚申年五月

- 忠右衛門 印
- 佐右衛門 印
- 伊兵衛 印
- 弁藏 印
- 久左衛門
- 吉兵衛
- 庄左衛門 印
- 利右衛門 印
- 七右衛門 印
- 半左衛門 印

甚之丞印

六左衛門印

徳右衛門印

幸助印

彦右衛門印

勘左衛門印

平左衛門印

如件、

万延元年申五月

大坂屋宇八印

女房 たち印

和泉屋伊兵衛印

近江屋常七殿

一一三 養子賞請につき人別請込証

一一三 一生不通養子娘に差遣わすにつき樽代・追

加樽代受納証

別紙一札

一我等身上不如意ニ付、娘こまと申者養育難相成候ニ付、

相對得心之上其許殿へ一生不通養子娘ニ差進申候処、則

樽代として金子拾両御恵被成下難有請納仕候処実正也、

然ル所無抛差支之儀御座候ニ付、猶又金子貳両御無心申

上千万忝受納仕候、已後如何様之難渋仕候共決而無心合

力ケ間敷儀は申入間鋪候、為後日之受納別紙一札、依而

請込一札之事

一其許村内喜右衛門弟庄八と申もの、当年式拾九歳ニ而当

村田端新左衛門方江養子ニ賞請、当村人別江差加へ申候、

一切支丹類族ニ而は無之慥成者之由ニ付、送り通り請込一

札如件、

万延元年申六月

高野領荒河小路村
庄屋 田中清右衛門

海士郡日方組鳥井
村役人衆中

一二四 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等娘ふさと申当年八歳ニ相成候者我等身上不如意ニ付養育難相成、依之親類双方相對得心之上其許殿へ一生不通養子娘ニ差進申候処実正也、然ル上は此者ニ付外々違乱妨申者老人も無御座候、後ニ至いか様ニ相成候共我等方ニ申分決而無御座候、其許殿御心任せニ実娘同様ニ御取計可被成候、

一御公儀様御法度之切支丹宗門ニ而も無之、宗旨は代々本願寺門徒宗ニ而御座候得共、以来其許殿御宗門ニ御加被可被成候、則寺請状差遣し可申候、其外此者ニ付いか様之六ツケ敷出入致出来候共、我等共何方迄も罷出急度埒明ケ其許殿へ少しも御難義掛ケ申間敷候、万一此者病死頓死不慮之義ニ相果候共、一生不通養子娘ニ差遣し申候上は我等方へ不及御届ケニ其許殿勝手ニ御葬可被成候、後ニ而其様子承り候共恨り不束ケ間敷義少しも申間敷候、為後日之一生不通養子娘証文、仍而如件、

万延元年申十二月

仏光寺通岩上東へ入

実親 丸屋 ゆか

新町通松原下ル

請人 丹波屋安五郎

同 妻 にう

町内 大和屋吉蔵

世話人 養子娘ふ さ

高台寺門前鷺尾町 井筒屋さく殿

別紙一札之事

一我等娘ふさと申者、此度其許殿へ一生不通之養子娘ニ差進申候処実正也、然ル上は此度我等不仕合ニ付致難義候間無抛金子之御無心申上候処、是迄之為養育料ト而金子三兩御送り被下忝慥ニ請納仕候、重而右体之無心ケ間敷義毛頭申間敷候、且又後ニ至其許殿不勝手之義も御座候而いか様之賤敷給金先借奉公は不申及、遊女出見セ市掛ケ等ニ御遣し被成候共我等方ニ一言之申分無御座候、初め得心之上一生不通養子娘ニ差遣し申候上は行末いか様ニ相成候共差構無御座候、其許殿御心任せニ被成御掛り

可被成候、為後日之差入申別紙一札、仍而如件、

万延元年申十二月

丸屋 ゆか ㊦

丹波屋安五郎 ㊦

妻 に う ㊦

大和屋吉蔵 ㊦

養子娘ふ さ ㊦

井筒屋きく殿

生国書印

丹州桑田郡そのへ海道

なみか村百姓清七娘ゆか

右ゆか夫仁兵衛義は

丹州桑田郡亀山之

北馬淵村百姓太蔵せかれ

仏光寺通岩上東入南かわろうじ
醒ヶ井通四条下ル
梓屋武兵衛殿

かしや二

丸屋 ゆか

申四十八歳

むすめふ さ

申八歳

新町通松原下ル
町内杉原さこん殿

かしや二

丹波屋安五郎

申四十二歳

妻 に う

申三十一歳

右之通御座候、以上、

おほへ

一金三両也

右之通慥ニ請取申候、以上、

丸屋 ゆか ㊦

丹波屋安五郎 ㊦

妻 に う ㊦

井筒屋きく殿

一二五 不通養子貰受証文

不通養子証文之事

一 此式歳ニ成候男子、此度我等方江不通養子ニ貰受候付、

為養育料銀三枚御添被下忝慥ニ受取申処実正也、然ル上

は我等実子同様太切ニ養育いたし、成人之上たとへ外方

江養子等ニ差遣候共、野良其外悪敷筋合之方江は決而差

遣申間敷、此後右男子ニ付而は不及申我等方難渋等申立

一切御無心等申間敷候、尤右男子如何様之六ツケ敷出入懸り合難渋出来候共万事我等方江引受、勿論病氣等之節は何時ニ不限直様御知セ申上、尤御助成等決而御頼申上間敷候、万一養育致兼候ハ、前書養育料銀共ニ取揃御戻し可申候、若又右約定相違仕候ハ、請人引受急度埒明可申候、為後日不通養子証文如件、

万延貳酉年正月

黒門丸太町上ル町

武蔵屋市三郎

妻 ぶ さ

小川組実相院町
証人

松屋 栄 吉

尾張屋定七殿

一二六 縁組につき人別送り状

万延貳年人数帳へ引合

庄子栄治

私支配遠田郡中津山村御百姓忠松次女ふき、当貳拾七歳ニ

罷成候者、御扱牡鹿郡湊村御百姓作右衛門妻ニ縁組度候義

申出候ニ付、御暇願之上永代之御村払証指進候間、右之者御法度之宗門ニも無御座候間当御改々出人之首尾可被成候、否人請証被遣度候、已上、

万延貳年正月

遠田郡中津山村肝入

伝 四 郎

牡鹿郡湊村肝入検断
長南丈八様

一二七 捨女子丁内にて養育方下命につき伝達書

覚

一昨夜丁内菱屋吉兵衛代判忠右衛門殿軒下ニ当歳計之女子捨有之候ニ付、東 御番所様江御断奉申上候処、丁内江養育被為 仰付候間、此段御承知可被成候、以上、

但、御最寄ニ貫人有之候ハ、是所江御申出可被成候、

西九月五日

年 寄

丁 人 中

家 守 中

一二八 捨子預け賃等請取証

寛

一式貫八百四十八文

九月四日同廿二日迄

日数十九日分預ケ賃

又式百七十四文

葉代

〆三貫百式十六文(二九)

右儘ニ請取申候、以上、

西九月廿三日

樽屋 万

助印

文久元酉年九月

御渡被下忝儘ニ請納仕候、然ル上は末々大切ニ相育聊龜抹無之様可仕候、勿論後々ニ至リ候共右ニ事寄無心合力ケ間敷儀決而申掛間敷候、万一年数相立心得違仕彼是申出候共此一札ヲ以御取敢被成間敷候、其外何事よらず故障ケ間敷義出来候は、我等罷出急度埒明御丁内江少しも御難義相掛ケ申間敷候、為後日一札仍如件、

屋代増之助様御代官所
摂州河辺郡小中島村
貫人 菊次郎

同村 請人 安

吉印

一二九 捨女子養女貰請につき一札

一札

一其御丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛殿軒下ニ当五日曉当歳計之女子捨有之ニ付、同日御訴之上御丁内江養育被為 仰

付罷在候、然ル処私女房なみ義去申十一月出産仕、右小

児病死致し其乳沢山ニ御座候故、此度南農人町式丁目但

馬屋安兵衛請人ニ取相談之上御断奉申上、右女子私方養

女ニ貰請候処実正也、仍之右養育料として銀式百七拾目

右之通致承知候、以上、

庄屋 茂兵衛印

大坂塩町四丁目 年寄

丸屋藤兵衛殿

門主 菱屋吉兵衛

代判忠兵衛殿

一三〇 捨女子の養女口入料銀受取証

覚

一銀六拾目也

右は摂州小中島村菊次郎方江御丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛

方捨女子差遣し候口入料として慥ニ受取申候、以上、

文久元年酉九月

南農人町式丁目
但馬屋

御丁役人中

安兵衛印

一三一 捨女子一件ならびに病死届

(捨女子届書)

乍恐口上

一今曉六ツ時過夜番人引取候跡丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛

軒下ニ当歳計之女子捨有之候ニ付、早速取入介抱仕罷在

候ニ付乍恐此段御断奉申上候、尤惣身ニ疵所一切無御座

候、以上、

文久元酉年九月五日

御東

(捨女子養女貫請願書)

乍恐口上

一当月五日曉六ツ時過丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛軒下当歳

計之女子捨有之候ニ付早速取入、同日其段御断奉申上候

処、丁内江養育致し置貫人有之候は御断奉申上候様被為

仰付奉畏候、然ル処右女子屋代増之助様御代官所撰州河

辺郡小中島村菊次郎貫請養育仕旨申之候付、同人身元相糺右村方江及

掛合候処菊次郎当三拾五歳同人女房やす当ハ、歳去申十一

月出産致直様病死致其乳沢山御座候趣ニ付、右村方江及

掛合候処右之通相違無御座承知之旨申之候ニ付、同村安

吉請人ニ取右捨子遣し度奉存候ニ付右兩人召連乍恐此段

御断奉申上候、何卒御聞届被為 成下候ハ、難有奉存候、

塩町四丁目
年寄病氣ニ付
月行司
近江屋政七

以上、

文久元酉年九月廿二日

塩町四丁目
年寄病氣二付
月行司

小橋屋喜兵衛

右之通相違無御座何卒被為下置候ハ、龜抹無之様養育仕度奉存候ニ付乍恐此段奉願上候、御聞届被為 成下候ハ、難有奉存候、以上、

屋代増之助様御代官所
摂州河辺郡小中島村

實人 菊次郎

同人 安吉

右之通相違無御座候ニ付乍恐奥印仕候、以上、

小中島村

茂兵衛

御東

(捨女子貰請願人引合書)

屋代増之助様御代官所
摂州河辺郡小中島村

實人 百姓菊次郎

三十五歳

印請人

安吉

申十一月出産 菊次郎
西八月病死 女房なみ
廿八歳

右は当月五日丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛軒下ニ捨女子御訴之上丁内江養育被仰付罷在候処、前書之通申出捨女子貰請度旨ニ付御引合申上候、右申出候通相違無御座候哉否奥書ニ御調印可被下候、以上、

文久元酉年九月

大坂塩町四丁目
丁役人印

右之通無相違致承知候、以上、

小中島村

庄屋 茂兵衛印

(養女病死につき届書)

乍恐口上

屋代増之助様御代官所
摂州河辺郡小中之島村

菊次郎

一塩町四丁目菱屋吉兵衛代判忠兵衛軒下ニ先月五日曉六ツ時過当歳之女子捨有之候ニ付、私江貰請養育仕度段先月廿二日当 御番所様江奉願上、御聞届之上私江被為下置ふさと名付養育仕罷在候、然ル処当月七日頃右小兒

口中たゞれ乳得吸不申ニ付早速医師ニ掛ケ薬用介抱仕居候処、昨曉六ツ半時頃虫熱強ク急驚風差発相果申候ニ付乍恐此段御断奉申上候、尤惣身ニ疵所一切無御座候、以上、

文久元酉年十月十九日

菊次郎

同村 請人

安吉

庄屋

茂兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛

右之通為相知候ニ付早速罷越及見候処病死ニ相違無御座候ニ付乍恐申合此段御断奉申上候、以上、

御東

塩町四丁目 年寄病氣ニ付

丸屋藤兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛

(病死の養女死骸片付につき一札)

差上申一札之事

一塩町四丁目菱屋吉兵衛代判忠兵衛軒下ニ先月五日曉六ツ

時過当歳之女子捨有之、同月廿二日私貫請養育仕罷在候処病死仕候ニ付今日御訴奉申上候処、猶又病中之様子御尋ニ付乍恐左ニ申上候、

右捨子貫請候後ふさと名付養育仕罷在候処、当月七日頃口中たゞれ乳得吸不申ニ付、早速医師ニ掛ケ心を付介抱仕罷在候処、昨日曉六ツ半時頃虫熱強ク急驚風差発相果候ニ付早速其丁江相知らせ私共一同立会相改候処、病死ニ相違無御座候ニ付其段御訴奉申上候処、死骸片付被為 仰付奉畏候、尤不埒之取計有之後日相顕候ハ、如何様共可被仰付候、仍如件、

文久元酉年十月廿九日

屋代増之助様御代官所 摂州河辺郡小中島村

菊次郎

同村 請人

安吉

同村庄屋

茂兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛

塩町四丁目 年寄病氣ニ付

丸屋藤兵衛 兵衛 兵衛 兵衛 兵衛

和泉屋弥七

御奉行所

一三三 捨女子を賣主へ遣わした際の諸入用控

内 代百八匁八分九厘

百式十七匁壹厘

預ケ賣并ニ訴之節支度開合入用先□之通門
主丁内式ツ割

文久元酉年九月四日夜丁内菱屋吉兵衛代判忠兵衛殿軒下ニ
捨女子有之、摂州河辺郡小中島村菊次郎江養育ニ遣し候諸
入用左之通、

右式ツ割

一三百六拾目

養育料
井口入料共

六十七匁九分五厘

門主
菱吉殿
丁内

一四貫三百五十文

九月四日夜ニ同廿二日迄日數廿日之間預
ケ賃茶代共

惣高差引

六十七匁九分五厘

一金壹歩ニ壹貫八百文

右村方開合之節入用

四百廿七匁九分五厘

七十二匁五厘代十八匁壹厘

右三拾役三步之割

一三貫貳百六十六文

最初御訴之節支度代并賣請斷之節支度村
方□合九人諸入用高

壹役ニ付

一金貳朱三百文

古着三枚
しめし切代

十四匁一分三厘

代九匁

銀三百七十七匁壹厘

壹三 十八匁三分七厘

錢^八九貫七百貳十貳文

壹四 十九匁五分八厘

^{十一式}代百八匁八分九厘

壹六 廿五匁三分貳厘

合四百九十五匁□

壹八 廿貳匁六分一厘

壹二 廿五匁四分三厘

九貫七百貳十貳文

貳 三十一匁九厘

貳 廿八匁貳分六厘

三 式十式匁三分九厘

四 五十六匁五分式厘

五 七十匁六分五厘

一三三 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一私実娘当年六歳ニ相成候ゑんと申者我等方ニ而養育難相成、依之親類相談双方得心之上其許殿江一生不通ニ而養子娘ニ進シ申候処実正也、且此ゑん義ニ付外方も違乱妨申者老人も無御座候、尤後々ニ至り如何様ニ相成候共御心儘御実子同様御取計可被成候、猶此方之差構無之一言之申分無御座候也、御公儀様御法度之切支丹宗門ニ而も無御座、宗旨は代々門徒宗ニ紛無御座候、則寺送り別紙ニ差入申候、尤以後其許殿御宗旨ニ御加江可被下、我等親子縁切不通養子ニ指遣シ申候上は、此娘ニ付違乱妨申者有之候ハ、我等之何方迄も罷出急度埒明、其許殿江少も御難儀相懸申間敷候、為後日一生不通養子娘証文、

依而如件、

文久元年酉十一月

老貫町松原下ル下長福寺町

越後屋安次郎 印

(付箋)「兄 惣助 印」

実親 妻 よね 印

祇園町切通し西江入 万屋し け 印

安井前月見町 加賀屋久七 印

養子娘 ゑん

柳屋おやすとの

一三四 一生不通養子娘に差遣わすにつき樽代受取

証

別紙一札之事

一私実娘ゑんと申者本紙証文通養育難相成候ニ付其許殿江一生不通養子娘ニ進申候処実正也、然ル処為樽代金壹兩送り被下忝慥ニ受納仕候、然ル上は本紙証文表通り何事ニ不限少も違背無御座候、譬如何様成賤敷給金先借之奉公ニ被遣候共、我々得心之上ニ候得は一言之申分無御座

候、且又何事ニ不寄多ん義ニ付御届ケニ不及御勝手宜敷
様御取計可被成候、猶又是迄之儀ニ付如何様之六ケ敷出
入出来候共其埒明仕、其許殿江少も御難儀相懸ケ申間敷
候、尤此後無心ケ間敷儀決而申入間敷候、右之趣幾年過
候共相違無御座候、依之後日樽料として受納一札、依而
如件、

文久元年酉十一月

越後屋安次郎印

(付箋)「兄 惣助印」

妻 よね印

万屋 しげ印

加賀屋久七印

養子娘 ゑん

柳屋おやすとの

一三五 樽代受取証

覚

為樽料 金子壹両也

右之通儘ニ受取申候、以上、

文久元年酉十一月

(ママ) 兄
越後屋安二郎印

(ママ) 父

宗 助印

柳屋やす殿

一三六 妹智養子との財産相続争いにつき歎願書

乍恐奉願上口上

一私儀両親の家財譲り受相続仕百姓方成丈ケ粉骨仕暮シ居
候、然ル処私儀兩人之妹有之候ニ付高野山御表 平等
院様御内栄吉殿と申入、当庄上野村西熊之助殿并当村内
鉄之助殿兩人之御世話ニ而妹さく江養子ニ貫請、右ニ付
愚母聊田地有之ニ付右田地所持ニ而当所上之島と申所へ
別宅致シ有之事ニ御座候所、昨戌九月掣栄吉と愚母聊口
論いたし候ニ付栄吉儀世話人西熊之助殿江罷越し直様野
山へ登山被致候、夫ニ付愚母私江被申聞候ニは掣儀聊
脱カ之争ひニ而も右等之振廻故行末も難計、依之小婦所持之

田地其方へ相譲り候間末々頼入と被申聞、其後去十二月暫時之煩ニ而相果愚意之私故途方ニ暮レ親類もの共之世話ニ成り葬式相宮候事ニ御座候、其後亡母存生之内ニ貴請有之且ツは当方所持田抔と横領申立栄吉方々毎々掛合有之候得とも前件始末故取合不申、尤愚父へ相尋候所昨戌九月妻々其方へ相譲り候々外無之勿論地庄屋へ相達し他方へ名越等一切無之旨被申聞候ニ付、再三栄吉々人ヲ以テ申來候へ共取合不仕罷在候所、又候不幸ニして当四月愚父病死仕り、未タ忌中相守居候処、御上様之不憚恐妹共并ニ鍊之助殿々出願被仕候次第何とも奉恐入候、乍恐御上様之御威光ヲ以テ右之もの共へ前条始末被為仰聞、是迄通り私相続仕様被為仰付被為成下候ハ、广大之御慈愍難有仕合奉存候、以上、

文久三亥五月

小路村

清 蔵

親類惣代同村

田中清右衛門

地方御奉行

観智院様

真蔵院様

一三七 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等実娘元と申当九歳ニ相成候者世話難相成候ニ付、此度親類一統得心之上其許殿江一生不通養子娘ニ御貫被下候様御頼申入候処、御承知被下候ニ付其許殿江一生不通娘ニ差遣申候処実正也、然ル上ハ此者ニ付御上納諸名目金銀貸会所等之義別懸一切無之、并言名附之夫又ハ親類兄弟抔と申脇外々養子娘之妨申者老人も無御座候、此者御公儀様御法度之切支丹宗門ニも無之、代々門徒宗ニ紛無之、則寺請狀別紙可進候上ハ其許殿宗門ニ御加入被下候、勿論身分之義ハ其許殿江不通娘ニ進候得ハ、任御心御取計被成下御勝手宜敷様心儘御懸可被下候、譬如何様之義有之候共毛頭違背無御座候、且又後ニ至其許殿御勝手ニ付如何体之賤敷奉公ニ御遣被成候共、私共江不及御届ニ其許殿実子同前ニ御取計可被成下候、孝心ニも相成殊ニ成行之義ニ而有之候ハ、聊不足ケ間敷義決而

申入間敷候、万一病死頓死不慮之義ニ而相果候共不及御
知其許殿御勝手宜敷様御葬被下、此義跡ニ而承り候共恨
ケ間敷義決而申入間敷候、右之外娘是迄之義ニ付如何様
之六ヶ敷出入出来仕候共、我等何方迄も罷出急度埒明其
許殿江御難義相懸申間敷候、為後日之一生不通養子娘証
文、依而如件、

文久三年癸亥十月

城州伏見墨浦組枡屋町

実父

越前屋清次郎 ㊦

同母

妻 い し ㊦

同兄

忝 安太郎 ㊦

同州同所組七瀬川町

家持

榎屋太兵衛 ㊦

受人

妻 と く ㊦

祇園町北側

世話人

大坂屋弥助 ㊦

養子娘 も と ㊦

川村屋万助殿

一三八 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで
の養育料受取証

差入申別紙一札

一金四兩貳歩也

右は此度我等実娘元と申当九歳ニ相成候者、双方相對得心
之上其許殿江本紙証文ヲ以一生不通養子娘ニ差遣申候処、
我等近年身之上不如意ニ付相統難相成、依之無拠金子御無
心申入候処御承知被下、則是迄之為養育料と前書之金子送
被下忝慥ニ受納仕候処実正也、然ル上ハ此後重而右体之無
心決而申入間敷候、且又娘成人之上其許殿御勝手ニ付如何
様之賤敷給金先借之奉公ハ不及申、又ハ親類家江不通娘ニ
御讓被成候共此義最初心得心之上ニ御座候得ハ何国何方へ
成共実子同前ニ御取計被成下候共、我等差構一言之申分毛
頭無御座候、為後日之御無心申入候ニ付差入申別紙一札、
依而如件、

文久三年癸亥十月

実父

越前屋清治郎 ㊦

同母

妻 い し ㊦

川村屋万助殿

同兄 安太郎㊦
同伯父 樽屋 太兵衛㊦
受人 妻 とく㊦
世話人 大坂屋 弥助㊦
 養子娘 もと㊦

一三九 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等妹ふさと申当年廿武歳ニ相成候者、我等身上不如意
 ニ付行末養育セ話難相成、依之諸親類兄弟一統我等本人
 得心之上其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処実正也、然
 ル上ハ此者ニ付脇外ニ違乱妨ケ申者一人も無御座候、向
 後其許殿御心任実子同然ニ御取計可被成候共聊差構一言
 之申分無之候、 御公儀様 御法度之切支丹宗門ニ而
 も無之、宗旨ハ代々門徒宗ニ紛無之、則寺請狀別紙ニ取

之可進候、以来其許殿宗門ニ御加入可被下候、且又右娘
 此後ニ至リ心得違致我等方へ逃帰リ候共一夜も止置不申
 早速其許殿へ差戻可申候、万一病死頓死不慮之儀ニ而相
 果候共此方へ御届ケニ不及、其許殿ニ而何方江成共宜敷
 御葬可被下候、其様子跡ニ而承候共恨不足決而申入間敷
 候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷出入出来仕候共、右娘
 是迄之儀ニ御座候へハ我等何方迄も罷出埒明致、其許殿
 へ少しも御難儀相掛申間敷候、為後日一生不通養子娘証
 文、仍而如件、

慶応元年丑十月

大坂大宝寺町中橋筋南江入山崎町

実兄

阿波屋安右衛門㊦

女房 ま さ㊦

同所道頓堀元伏見坂町

請人

井筒屋善助㊦

本人 ふ さ㊦

播磨屋茂兵衛㊦

紅屋龜次郎殿

おちか殿

一四〇 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで

の養育料受取証

別紙一札之事

一金八拾両也

右ハ我等妹ふさと申者、本紙証文之通其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処、我等身上不如意ニ付相続難相成、依之無抛金子御無心申入候処御承知被成下、則是迄之為養育料前

書金子送り被下忝慥ニ受納仕候処衷正明白也、然ル上ハ此者ニ付脇外ハ妨ケ申者無之、且又此後我等方如何様之難渋有之候共、重而一錢目も無心等決而申入間敷候、勿論右娘成人之後其許殿御勝手ニ寄如何体之賤敷給金先借之奉公ニ御遣し被成候共、此儀最初ハ得心之上親子兄弟縁ヲ切其許殿へ不通養子娘ニ進申候上ハ、行末御勝手ニ御掛り被成候共其節毛頭違背申入間敷候、為後日之別紙一札、仍而如件、

慶応元年十月

実兄

阿波屋安右衛門^印

女房 ま さ^印

請人

井筒屋善助^印

本人 ふ さ^印

播磨屋茂兵衛^印

紅屋亀次郎殿

おちか殿

一四一 養子娘につき人別送り状

人別送り一札之事

一丁内梅淵栄助支配借屋阿波屋安右衛門方同居妹ふさ当丑式拾貳歳、右老入此度其御丁内紅屋亀次郎方へ養子娘ニ差遣し候段申出候間、任其意人別差送り申候、尤ふさ義是迄諸懸り合無御座候、已来貴町人別ニ加入可被成候、為後日人別送り一札、仍如件、

大坂山崎町

丁役人^印

慶応元年十月

京都祇園町

丁役人御中

一四二 唐人屋跡式讓り請一札

讓請一札

一上野山唐人屋忠五郎跡相統として家屋鋪并世帯道具一通り相揃私共へ御讓渡被下、則忠五郎跡家名相統仕候処実正致承知候、然ル上は実体ニ相勤可申段兼而相心得可申候、万一身持不行跡不埒等御座候ハ、請人之者罷出急度異見仕、猶不相用候節は早速右名跡切替御差図之方江讓り戻可申候、右之趣我等并親類は不及申脇々違乱妨申者有之間敷候、為後日一札、仍而如件、

慶応二寅年極月

讓り請主唐人屋

忠 七印

請人親類唐人屋

安 吉印

証人組頭福浦屋

勘 七印

喜多村松次郎殿

一四三 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等実娘たねと申当年八歳ニ相成候者、我等身上不如意ニ附行末養育世話難相成、依之諸親類兄弟一統我等本人得心之上其許殿江一生不通養子娘ニ進申候処実正也、然ル上ハ此者ニ附脇々違乱妨申者咎人も無御座候、向後其許殿御心任実子同然ニ御取計可被成候共此方々聊差構一言之申分無御座候、宗旨之儀ハ 御法度之切支丹宗門ニ而ハ無之、代々門徒宗ニ無紛、則寺請狀別紙ニ取可進候、已来ハ其許殿宗門ニ御加入可被下候、且又右娘此後ニ至リ心得違致我等方へ逃帰リ候共一夜も止置不申早速ニ其許殿へ差戻し可申候、万一病死頓死不慮ニ相果候共此方江御届不及、何方江成共宜敷御葬可被下候、其様子跡ニ而承リ候共恨不足決而申入間敷候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷出入出来仕候共、右娘是迄之儀ニ御座候得ハ我等何方迄も罷出其埒明仕、其許殿江少しも御難儀

相懸申間敷候、為後日之一生不通養子娘証文、仍而如件、

不明門通五条下ル上平野町

慶応四辰年六月

大黒屋八郎右衛門借家
実父

清水屋長右衛門^印

同母

妻 た き^印

同弟

悻 専次郎^印

右同所同町家持

親類惣代
証人兼

板屋市郎兵衛^印

妻 ま つ^印

下河原南町

金屋伝七借家
肝煎

播磨屋茂兵衛^印

養子娘 た ね^印

東井屋おいを殿

後見三吾殿

一四四 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで

の養育料受取証

別紙一札之事

一金拾五両也

右ハ我等実娘たねと申者、本紙証文之通其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処、我等身上不如意ニ付相続難成、依之無抛金子御無心申入候処御承知被成下、則是迄之為養育料前書之金子送り被下忝慥ニ受納仕候処実正也、然ル上ハ此後我等方ニ如何体之難渋有之候共重而無心等決而申入間敷候、且又右娘成人之後傾城遊女ハ不及申、如何体之賤敷給金先借奉公ニ御出し被成候共、此義最初得心之上ハ親子兄弟之縁ヲ切不通養子娘ニ進申候上ハ、行末御勝手ニ御懸り被成候共其節毛頭違背申入間敷候、為後日之別紙一札、仍而如件、

慶応四辰年六月

実父

清水屋長右衛門^印

同母

妻 た き^印

同弟

悻 専次郎^印

親類物代
証人兼

板屋市郎兵衛 ㊦

妻 ま つ ㊦

肝煎

播磨屋茂兵衛 ㊦

養子娘 た ね ㊦

東井屋おいを殿

後見 三 吾殿

一四五 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等実娘みつと申当年九歳ニ相成候者我等身上不如意ニ
付行末養育セ話難成、依之諸親類兄弟一統我等本人得心
之上其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処実正也、然ル上
ハ此者ニ付脇外ル違乱妨申者咎人も無御座候、向後其許
殿御心任実子同然ニ御取計可被成候共此方ル聊差構一言
之申分無御座候、宗旨之儀ハ 御法度之切支丹宗門ニ
而ハ無之、代々禪宗ニ無紛則寺請狀別紙ニ取可進候、已

来其許殿宗門ニ御加入可被下候、且又右娘此後ニ到り心
得達致我等方へ逃帰り候共一夜も止置不申早速其許殿へ
差戻可申候、万一病死頓死不慮ニ相果候共此方へ御届ニ
不及何方江成共宜敷御葬可被下候、其様子跡ニ而承り候
共恨不足決而申入間敷候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷
出入出来仕候共、右娘是迄之儀ニ御座候得ハ我等何方迄
も罷出埒明、其許殿へ少しも御難儀相掛申間敷候、為後
日之一生不通養子娘証文、仍而如件、

慶応四辰年八月

押小路通富小路東へ入町

林屋清助

後家 ゑい ㊦

東洞院通押小路上ル町

松葉屋長兵衛 ㊦

下河原南町

肝煎(磨)

播磨屋茂兵衛 ㊦

養子娘 みつ ㊦

広島屋おまつ殿

一四六 一生不通養子娘に差遣わすにつき樽代受取

証

別紙一札之事

一金老両也

右ハ我等実娘みつと申者、本紙証文之通一生不通養子娘ニ其許殿へ差進申候処、為樽代前書之金子送り被下忝慥ニ受納仕候処実正也、然ル上ハ此後我等方々重而無心等決而申入間敷候、且又右娘成人之後其許殿御勝手ニ寄傾城遊女ハ不及申如何体之賤敷給金先借奉公ニ御遣被成候共、此儀最初心得心之上親子兄弟縁ヲ切不通養子娘ニ進申候上ハ、行末御勝手ニ御懸り被成候共其節毛頭違背申入間敷候、為後日之別紙一札、仍而如件、

慶応四辰年八月

実母
林屋清助

後家 ゑい 印

証人

松葉屋長兵衛 印

肝煎

播磨屋茂兵衛 印

養子娘 みつ 印

広島屋おまつ殿

一四七 一生不通養子娘に差遣わすにつき請書

一札

一私実娘みつ義此度其許殿へ一生不通養子娘遣候義ニ付、右みつ兄弟之者後日彼是故障申出候者有之候ハ、我等何方迄も罷出引受埒明いたし其許殿へ少しも御迷惑相掛申間敷候、為後日之差入申一札、仍而如件、

慶応四年辰八月

実母
林屋清助

後家 ゑい 印

証人

松葉や長兵衛 印

広島やおまつ殿

一四八 調達金献上そのほか奇特筋につき褒美金下

賜・苗字御免状

覚

名張町

福喜多太兵衛

一金百疋
一代々苗字

一昨年調達金之議被 仰出候処、調達并献金等いたし、其
(奇)余奇特之筋も有之候ニ付、御褒美被下右之通苗字指免し候、

辰二月

一四九 縁組につき帯代・手当金請取一札

差上申一札事

一 国卜申者我等実娘ニ御座候処、此度御貴殿方江縁組差上
申処実正也、右ニ付帯代金千疋別段御手当ト而金六兩貳
分被成下難有頂戴仕候、然ル上は此後無心ケ敷事一切申
(間脱カ)間敷候、為後日仍如件、

午九月

実母すて

同新町三丁目

越前屋鐘吉印

赤坂田町五丁目

細田新次郎印

井口繁平様

一五〇 葬式の仕方・片身わけ等につき遺言状

(遺)「云言申」「事」

一 拙者儀病苦之取附今度浄土往定一蓮託生仏之御本ニ而目

出度相待申候、誠ニ未_(未カ)来一大事御大切ニ可被成候、浮世

之事ニは偽も世見並之事ニ被存ても往生之一大事ニは御

無用ニ心得被成候、乍憚皆々様往未_(未カ)御安事被下間敷候、

我等衣喰として従先祖金拾五両也被下忝時之亭主次郎左

衛門殿預置候、

一 葬式之入用左ニ申印候、葬式之儀は念入見事被成下候様

頼上候、各別花等は見事被成下候、
(可脱カ)

一 石堂切立但金高三分位立処は浦山杉原に致し被下候様頼

上候、

一片身分申進候、

父上様江参銭候ハ、三兩也

(根脱カ)

下曾御伯母江ちゞミ一まい

坪山江ミかん葉_(葉カ)の布一筋

大月江郡内合着一ツ

和田江青目島わた入一ツ

千才茶布

富岡左太郎江とうらん一ツ

腰布一筋

是ハ返濟モの外ニ金式分也
米岡江羅紗之たはこ入一ツ

同人江脇さし一腰

水吉江八地八丈地布二品

右片身如斯

松岡栄吉江三両也

茂次郎羅紗之土蘭一ツ
紙入

羽織間ツ藤一ツ

絹島一ツ

布式筋

木綿わた入

単物等

紋付単羽織

同人江紋付松頭一ツ

島一ツ

嘉十郎江こうし島合着一ツ

墨郡内羽織

手半一枚

一我等存生之時頼母子一本取則鬮金式拾兩也、右金子下會

根村平七殿江預ケ置申候、今年ハ拾三年過候得ハ平七殿

ハ式十兩返濟候筈ニ御さ候、右金子を一割三分利ニ而兄

弟衆江預ケ置、右金子以廿七廻忌相勤御執行被成下様頼

上候、扱又廿七廻忌迄は十四年も御座候間金子間違も不

合見へ御座候ハ、兄弟衆之内他人成とも実体之人江右

金子取立御預ケ被下候様頼入候、且又年季相当り之月日

一日も延引御無用ニ御さ候、申迄ニは無御さ候得共年廻

取ませは御無用ニ頼上候、右金子等廿七年忌ニ利勘定致

し候へは元利共百六兩式分式朱也、年忌ニは右金子ヲ以

御執行被下候、忌日ニは村中不残様御執行可被下候事、

一御法事ニは御院主衆様御諸蔵并教願寺等其外和田貞庵米

岡本覚寺村義輪是等之寺内之坊主衆不殘招可被下候、

一布施高下之次第、

小墨

御院主様

布施五両也
永代経拾両也
如斯

教願寺様

同貳両也
同五両也

貞庵様

同壹両也
同壹両也

本覚寺様

同壹両也
同壹両也

義輪様

同 断

番僧

壹分

草履取

四厘

三寺之当主

壹分ツ、

捨弟子共同

貳朱ツ、

残而

金六拾六兩貳朱也

残金ニ而田地いたし置可被下候、

但、田地六百六拾貳束五分苅

若又田七百苅都合ニいたし度候ハ、少々宛之儉約致候

而都合宜敷候ハ、是又可然と察置候、

一此田地如何様之事出来候とも質地ニは決而無用ニ御座

候、則此田地ニ而先祖之仏事法事之諸入用ニ可致候事、

若又時之亭主不埒ニ而仏事執行出来不申候ハ、此田

地請取惣兄弟衆ニ而御執行被下候様頼上候、

月日

云言繁太郎印

父 上 様

七郎右衛門様

三右衛門様

貞 庵 様

本 覚 寺様

栄 庵 様

栄 吉 様

茂 次 郎殿

前書之通亭主不承知候ハ、坪山村七郎右衛門様方ニ而死人

引請葬式仏事執行被成下候様頼上候、以上、

一五一 一生不通養子娘証文之事

一生不通養子娘証文之事

一我等娘みきと申当年拾壹歳ニ相成候もの、我等身上不如意ニ附行末養育セテ話難相成、依之諸親類兄弟一統我等本人得心之上其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処実正也、然ル上ハ此者ニ付脇外ニ違乱妨申者壹人も無御座候、向後其許殿御心任実子同然ニ御取計可被成候共、此方ニ聊差構一言之申分無御座候、宗旨之儀ハ 御法度之切支丹宗門にても無之、代々 (ママ) 無之候得共、則寺請状別紙ニ取可進候、以来其許殿宗門ニ御加入可被下候、且又右娘此後ニ至り心得違致我等方へ逃帰り候共一夜も止置不申早速其許殿へ差戻し可申候、万一病死頓死不慮ニ相果候共、此方へ御届ニ不及何方江成共宜敷御葬可被下候、其様子跡にて承り候共恨不足決而申入間敷候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷出入出来仕候共、右娘是迄之儀ニ御座候得ハ我等何方迄も罷出埒明、其許殿へ少しも御難儀

相懸申間敷候、為後日一生不通養子娘証文、仍而如件、

明治二年巳八月

上京式拾三番組
新シ町三条上ル東側裏上一文字町

井筒屋源助借家

養父

祖母

母

いと

いと

下京壹番組
新シ町錦小路上ル町

親類惣代
証人

亀屋 治 助

妻 た み

下京廿七番組
八坂法観寺門前金園町

竹村屋惣兵衛借家

肝煎

播磨屋 茂 兵 衛

譲り養子娘みき

万屋おふき殿

一五二 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで
の養育料受取証

別紙一札之事

一金拾五兩也

右ハ我等娘みきと申者、本紙証文之通其許殿へ一生不通養子娘ニ進申候処、我等身上不如意ニ付相續難成、依之無拠金子御無心申入候処御承知被成下、則是迄之為養育料前書之金子送り被下忝慥ニ受納仕候処実正也、然ル上ハ此後我等方ニ如何様之難澁有之候共重而壹錢目も無心等決而申入間敷候、且又右娘成人之後其許殿御勝手ニ寄傾城遊女ハ不及申、如何体之賤敷給金先借奉公ニ御出し被成候共、此義最初心得心之上不通養子娘ニ差進申候上ハ、行末御勝手ニ御懸り被成候共其節毛頭違背申入間敷候、為後日之別紙一札、仍而如件、

明治二年巳八月

養父

山崎屋嘉七印

祖母

いと印

親類惣代
証人

龜屋次助印

万屋おふき殿

妻 肝煎 播磨屋茂兵衛印
養子娘 みき印

一五三 一生不通養子娘身元引受につき一札

一札

一我等娘みきと申者、此度双方得心之上其許殿江一生不通養子娘ニ差進候処実正也、然ルニ元来右みき義三歳之砌我等方へ養子娘ニ貫請是迄養育仕来候へ共行末セ話難成、依之我等方ニ成替り其許殿へ相譲り申候上ハ、以来実子同然ニ思召御養育可被成下候、尤実親ハ大宮通仏光寺下ル大坂屋甚兵衛妻まさ実子ニ相違無御座候、勿論慥成養子証文我等方へ取置候へ共先年類焼之節外書物諸共紛失致候、致度無之乍去右みき兩親共被相果兄弟縁者身寄之者一切無御座候、若又此後縁者身寄兄弟杯と申故障申出候者有之候ハ、早速我等引受何方迄も罷出急度埒明其

許殿江少しも御迷惑相懸申間敷候、為後日之別段差入置
引受一札、仍而如件、

明治二年巳八月

みき養父

山崎屋嘉七印

同祖母

いと印

親類惣代
証人

亀屋治助印

妻 たみ印

万屋おふき殿

一五四 縁組につき人別送り状

私扱百姓弥市郎女子うん式拾九歳ニ罷成ヲ、其御元御支配
湊村本町百姓三浦屋金作地借儀蔵女房ニ去年中掾組致候段
申出候間、当人別御改々此方欠人首尾仕候条、其御元当改
々出人^(縁)之御首尾可被成候、尤右之者御法度之宗門ニも無御
座候、依而村払証如此ニ御座候、以上、

明治三年正月

南境村肝入

保 蔵印

湊村肝入檢断
志摩屋清六殿

一五五 茶立女奉公人請状之事 (年季給金受取証・
印鑑証共)

(封書表書)

茶立女奉公人てる請状入

山野屋久吉
山野屋磯治郎

呼名千代松

(封書裏書)

明治三年午

二月吉祥日

口入池田屋平兵衛

茶立女奉公人請狀之事

一我等娘てると申者当午二月ハ來ル寅十二月晦日迄九年八年十一月限給金三拾五兩ニ相究、則請狀之上右給金不殘先借仕慥ニ受取其許殿江茶立女奉公ニ差遣候処実正也、然ル上は此者ニ付諸親類兄弟言約速(束)之夫先主人抔と申脇ハ奉公之違乱妨申者壹人も無御座候、尤仕着之儀は夏冬共相応之物壹宛可被下約速ニ御座候、御上様御法度之宗門ニ而も無之、宗旨ハ代々西門徒善照寺旦那紛無之候、則寺請狀別紙ニ取進可申候、自然此者取逃欠落等仕候

ハ、早速本人尋出シ失物之品有之候ハ、相改弁置手渡仕極之年季無滞為相勤可申候、勿論我等方ニ如何様之勝手筋有之候共年年中途ニ無休之暇乞請申間敷候、若又不奉公仕候敷其許殿御勝手ニ寄何国何方之何奉公成共給金立替之暇被遣候ハ、請人方江引取、其給金多少之銀有之儘急度相立可申候、其節我等印形御入用次第無異儀継替可申候、万一病死頓死又ハ不應に相果候共相互ニ一言之申分無御座候、其外此者ニ付如何様之六ヶ敷出来仕候共我等何方迄も罷出急度埒明、其許殿へ少しも御難儀相掛申

間敷候、為後日之茶立奉公人請狀、依而如件、

明治三年午二月

実父

山野屋久吉印

親類

山野屋磯治郎印

口入

池田屋平兵衛印

奉公人てゐる印

近江屋常七殿

別紙一札

一我等娘てると申者、此度年季給金相究其給金不殘先借仕慥ニ受取、其許殿江茶立女奉公ニ差遣し申候処実正也、然ル上は年季中何方之誰人ニ不寄妻妾ニ成度御望之仁有之候ハ、先方御相對之上年季之外末々御遣し可被下候、縁辺出世之儀ニ御座候へは我々迄も大慶ニ可存候、其砌樽代礼金何程御受納被成候とも毛頭貪ケ間敷儀一切申入間敷候、猶又奉公中我儘諸借金御取替物出来仕候ハ、年明候節勘定可仕候、若不調達ニ御座候ハ、請狀表相改替末ニ而年月差入同体之奉公無滞為相勤可申候、為後日之

別紙差入申一札、依而如件、

明治三年午二月

実父

山野屋久吉印

親類
受入人

山野屋磯治郎印

口入

池田屋平兵衛印

奉公人 てる印

近江屋常七殿

印鑑

摂州勝間村百姓七兵衛借家

印 実父 山野屋久吉

同村山野屋佐兵衛借家

印 受人 山野屋磯治郎

印 口入 池田屋平兵衛

印 奉公人 てる

宗門は代々西門徒

善照寺

一五六 相続人送り手形之事

相続人送り手形之事

江州坂田郡新庄馬場村

文藏内
式歳

長次郎

一
右之者其御町丹波屋藤右衛門方江相続ニ参リ申候処実正也、
尤此もの宗旨は代々浄土真旨にて当村誓伝寺旦那御座候、
就夫当村ニ罷居候内悪事不屈之筋毛頭無御座候、万一他所
へ不屈之筋有之由訴人御座候ハ、拙者共罷出急度申訳可仕
候、依之来ル未ノ宗門御改御帳面ニ其御町ニ而御書加江被
成下候、当村宗門御改御帳面相除可申候、為後日之相続送
り手形、依而如件、

江州坂田郡新庄馬場村

明治三年庚午十月

庄屋 半右衛門印
横目 太左衛門印

御町代衆中

一五七 一生不通娘証文之事

一生不通娘証文之事

一我等娘つると申当歳拾五歳ニ相成候者、我等身上不如意

ニ付養育世話難相成、依之諸親類一統我等本人得心之上

其許殿江一生不通娘ニ進申候処実正也、然ル上は此者ニ

附脇外ニ違乱妨申者壹人も無御座候、向後其許御心任実

子同然ニ御取計可被成候共、此方ニ聊差構一言之申分毛

頭無御座候、御上様御法度之切支丹宗門ニ而は無

之代々一向宗ニ紛無之候得共、則寺請狀別紙ニ取之可進

候、已来は其許殿宗門ニ御加入可被下候、万一此者病死

頓死不慮ニ相果候供此方江御届ニ不及、其許殿ニ而何方

江成共宜敷御葬可被下候、其様子跡ニ而承候供御恨不足

決而申入間鋪候、若又本人心得違ニ而我等方江立帰候節

は、一夜泊も不為致本人早々差送可申候、尤此者ニ附我

等方ニ而金錢等之印形掛合等一切無御座候、其外如何様

之六ヶ敷出入出来仕候共、右娘是迄之儀ニ候得は我等何

方迄も罷出其埒明仕、其許殿江少しも御難相掛申間敷候、

為後日一生不通娘証文、仍而如件、

明治四歳未二月

東江州坂田郡長浜横町

実父

実母

桐畑儀平印

妻 つね印

弟 梅次郎印

同所大谷市場町

乍伯母
請人

植木屋まさ印

下京廿六番組

建仁寺門前団栗下ル博多町

多 七印

つ る印

土田喜兵衛殿

一五八 一生不通養子娘に差遣わすにつきこれまで

の養育料受取証

別紙一札之事

一金式拾兩也

右は我等娘つると申者、本紙証文之通其許殿江一生不通娘進申候処、我等身上不如意ニ附相統難相成、依之無掘金子御無心申入候処御承知被成下、則是迄之養育料前書之金子被送下忝慥ニ請納仕候処実正也、然ル上は重而右体之無心決而申入間敷候、且又右娘成人之後其許殿御勝手ニ附、傾城遊女ハ不及申如何様之賤敷給金先借之奉公ニ御遣被成候共、最初ノ得心之上ニ而不通娘ニ進申候上は行末御勝手ニ御掛被成候共、其節毛頭違背申入間敷候、為後日別紙一札、依而如件、

東江州坂田郡長浜横町

明治四歳末二月

実父

桐畑儀平^印

実母

妻 つね^印

弟 梅次郎^印

同所大谷市場町

左伯母
請人

植木屋まさ^印

下廿六番組
建仁寺門前団栗下ル博多町

土田喜兵衛殿

一五九 養男に縁組につき身元受証

多 七^印
つ る^印

右之者切支丹類族ニも無御座候、

右之者数年来拙者手前ニ而召仕居候処、実体正路成者ニ付此度御百姓三郎兵衛養男ニ縁組仕候間、当御改メ出人之御首尾被成下度奉願上候、且人元之義は拙者方ニ而御受合申上候、御村方へ御役介相懸申間敷候、依而与頭衆連名申受人元受証如此申上候、已上、

明治五年正月

湊村御百姓
伊次^印
与頭

市十郎^印

仮肝入検断
清 六殿

最上
南部出生

惣 作
当二十八

一六〇 新戸取立許可願ならびに許可書

小七区二日町八百六拾六番地

商 福田林蔵
長女

福田たり

当十月迄式拾六歳

私義長女たり儀今般更ニ軒戸被立下候様御詮議被成下度奉願候間、無御異儀御座候ハ、如願御聞濟被成下度此段奉願候、以上、

明治七年十月廿二日

右願人

商 福田林蔵 印

戸長 山崎平五郎代理

副戸長 小崎大之丞 印

区长 氏家次章 印

宮城県権令宮城時亮殿

(添紙)

書面願之趣聞届候事、

明治七年十二月廿四日

権令宮城時亮代理

宮城県七等出仕渡辺習 印

一六一 養女貫請につき持参金受取証

貫請一札之事

一 此度上尾幸次郎殿捨弟民十郎殿娘さよと申当歳之もの拙方江養子娘ニ貫請候、為持参と金七円五十銭正ニ入納致候処実正也、然ル上は右さよ義ニ付向後無心ケ間敷義一切申間敷候、為後証差入申一札、仍而如件、

河内国第三大区式小区

讚良郡砂村

福井定次郎 印

明治九年七月

和州北田原村

上尾幸次郎殿

一六三 娼妓嫁ぎにつき約定書

約定証書之事

一 我等妻ノ妹ぢうと申当拾八歳ニ相成候者此度本人真意ノ娼妓相嫁度申候ニ付、親類実父得心之上当十一月十六日

一六四 養女に差遣わすにつき一札

一札之事

〆満年三ヶ年六ヶ月之間右營業願濟之上貴殿席借受、則御約定左之通、金三円宛毎月税金、又金壹円五拾錢宛毎月御組合手数料諸入費、又金三円宛毎月席料、又金三円宛毎月飯料、又金七円五拾錢宛毎月衣類料、但花苞本ニ付代(ヤ)右之通取極置候、然ル処当節無抛金子入用ニ付別紙本証文金高之通其許殿ニ而借用申候処実正也、尤返濟之義ハ毎月稼料之内〆前頭御約定之諸入費御引去之上、其残金を以元金濟方可致候、万一營業願之年申ニ外ケ所へ転席又は休業等致候節は、右借用金一時ニ可致返却候、為後日連印約定証書、仍而如件、

明治九年十一月十六日

第六大区三小区拾番組
上福島邸式百九十七番地
木村音松 印

堺県下
河内国第二大区四小区壹番組
若江郡八尾野村拾九番地
実父
ちうノ

木村ぢう 印
斎藤平蔵 印

江島常七殿

一我方養女よしえと申者儀、此実父当区宮町福原銀兵衛と申去ル慶応式年寅二月六日病(死仕カ)□□、同実母はる儀も去ル

明治五年申九月頃家出いたし候、然ル処右よしえ儀此度親類一同得心之上貴殿方へ養女ニ差遣し候処実正也、然ル上は右本人望ニより娼妓營業其他都而可然御取計可被下候、当方ニ於テ一切故障等無之候、万一後年ニ至り実母はる并ニ外親類身寄之者〆自然彼是故障等申出候節ハ我々共何方迄も罷出急度申披埒明仕、貴殿へ少しも御迷惑相掛ケ申間敷候、為後日入置申一札、仍而如件、

明治九年十一月三十日

兵庫県下摂津国第九区
川辺郡別所村第六十九番戸

親類物代
松本弥平 印
浅田鹿造 印
母 たら 印

第四大区六小区

安治川通上卷丁目卅番地

証人 山野久吉印

義父 江島常七殿

仍而如件、

明治九年十二月一日

親類物代

浅田鹿造印

母 たら印

第四大区六小区

安治川通上卷丁目三拾番地

請人

山野久吉印

一六五 借用金返済方につき約定書

約定申証書之事

一我儀此度真意に娼妓相稼度候二付、親類一同得心之上当

十二月 日満年三ヶ年三ヶ月之間右營業願濟之上貴殿

席借受、則御約定左之通、金三円宛毎月税金、又金〇円

五拾錢宛毎月御組合諸人費定額、又金三円宛毎月席料、

又金三円宛毎月飯料、又金七円五拾錢宛衣類損料、但花

沓本ニ付代 右之通相極置申候、然ル処当節無抛金

子入用ニ付別紙本証文金高之通其許殿ニ而借用申候処実

正也、尤返済之義ハ毎月稼料之内より前頭御約定之諸入費

御引去之上其残金を以元金済方可致候、万一營業願之年

中ニ自然外ヶ所へ転席又は休業等致候節ハ、聊御損難不

相掛借用元利一時皆悉可致返却候、為後日連印約定証書、

江島常七殿

一六六 雇人身元定約

印紙 (割印)

雇人身元定約

仙台区北田町五十三番地

つな女 長女

佐藤こう 十二歳

一金五円也

右ハ我等金円及身元請人ニ相立貴殿へ内廻り小遣ニ雇出

置候処、此度期限相定即十六歳十一月より向六十ヶ月間相

済候ハ、前金円返却不仕、万々一人勝手并病氣等ヲ以期

限不済候節前金子我等方ニテ御返済可仕置之上ハ、向後同

人身ニ付いカ様成儀出来致候トモ貴殿へ御迷惑御損毛相懸
申間敷候、仍テ為後日私共加判ヲ以一札、如件、

北田町五十三番地

明治十六年十一月

佐藤 つな[㊟]

右親類

高橋 国松[㊟]

世話人

加藤 左吉

福田栄治郎殿

一六七 娼妓植田エン私生児病死による火葬取計方

につぎ一札

差入申一札之事

西区□堀江下通り三丁目則貴宅ニ於テ娼妓営業ノタメ同居
罷在候処、植田エン義ハ私之妹ニ在之候処実正也、然ルニ
^(治)
明次十八年二月五日ニ私生ナル女子出産ヲ致し、則サキト
名附候後実家大坂府下河内国若江郡萱振村南中町二百四十
番地植田留二郎方ニ預リ置サキ養育ノ事依頼及候処、留二
郎如何之事故在之候や猶又同国王子村乙吉と申者ノ方ニ相

応ノ賃錢ヲなし養育料ニテ預ケ置候、後ニ留二郎義も其儘
失踪を致し該サキノ養育料も不納ニ附、乙吉も因却ノ義ニ
て本年一月十五日頃ニ乙吉義ハサキ連レ私かたへ養育ヲ依
頼ニ参り候処、不得止事私シニ預リ置養育致居候処、フト
サキ義ニ病氣相カ、リ無抛次第二附、府下江戸堀下通り五
丁目壹番地森豊吉ト申者ノ方ニ預ケ置治療服薬ニ手ヲ尽ス
と雖モ、終ニ養生不叶本日死亡致候ニ附、右ハ無抛次第二
附私し^(シ)取方附致し度候附、本人実母植田エン失踪中ニ候
得共岩崎新田ハ弘社ニ於テ火葬取計ひ致候間、以後苦情と
申者有之候得ハ私し何方迄も罷出申開致ヘク、貴殿ニ聊御
迷惑相懸申間依之一札、如件、
^(敷脱カ)

明治十九年二月廿一日

附り、該植田エンノ相残シ置候サツマ緋禪物壹反私

しニ送り被下正ニ受取申候也、

植田エン実兄

植田安次郎[㊟]

江島常七殿

一六八 離縁につき手切金及び養育料受領証

(割印)

証券印紙

証

一金拾五円也

右は我等娘サン事先年貴殿妻ニ縁組致候処不熟ニ付今般離縁永之暇被遣、格別之御恵ヲ以テサン方へ前金額被下置正ニ請取候、然ル上は該件ニ付異儀毛頭無之候、外ニ乳呑子当式ケ年七ケ月ニ相成候嘉三郎事は手放シ難キ人情有之、是亦熟談ヲ遂ケ壹ケ月金壹円宛養育料、即チ(料里子)トシテ本年本月ノ満二ケ年、明治廿三年七月迄之契約ヲ以育テ候事ニ御承諾ヲ得候上本月ノ改テ御引受仕候、就テは其証トシテ契約証及受領証共併セテ一切如件、

明治貳拾壹年七月十六日

菅原サン

右惣兵衛不在ニ付養父

菅原茂吉

親類

宮城用三郎

今野嘉吉殿

今野正吉殿

一六九 借入金確証ならびに芸者稼業契約書

(封書表書)

明治廿五年五月五日

芸妓松本ウタ借用証

井契約共

歌吉

借入金確証

一金壹百円也 但利息

右之金額正ニ請取借用申候所確實也、返納ノ儀ハ別紙契約書之通松本ウタ芸妓稼業所得金ヲ以テ弁償可(致)到、若シ本人契約ヲ履行シ難キ事故生シ又ハ失跡死亡等之節ハ残ル連帯之者并保証人ニ於引請無異論速ニ皆済可到、若シ之ニ違フ片ハ如何ナル御催促ニ相成ルトモ聊異儀無之、為後証依テ如件、

明治廿五年五月 日

江島常七殿

契約書

一 今般貴殿ヨリ別紙証書之通金壹百円ヲ借用シ芸妓稼業到候付、取締ノ立会ヲ要シ契約スル左ノ如シ、

第一条

借用シタル金員弁償ノ義務ヲ終ヘサル間ハ貴殿ノ承諾アルニ在ラサレハ、廢業又ハ扱所替等到サ、ルハ勿論忘情ニ依リ客ノ招キニ応セサル等ノ所為到ス間敷、又ハ稼業上ニ付テハ貴殿ノ指揮ニ従フヘキ事、

第二条

稼業中不得止事情ニ依リ別ニ金員借用シタル片モ亦此契約ニ従フヘキ事、

第三条

但、金員借用スル片ハ取締ノ承諾ヲ請クヘシ、
稼業揚代金〔日柄包〕ノ内ヲ以テ扱所呼揚貸座敷業ノ手数料并ニ自分ノ所得金トナスノ割合、当廓内一般ノ約定ニ従フヘ

キ事、

第四条

毎月所得金ノ内税金其他諸費ヲ引去、残余ヲ以テ借入金ノ内(ママ)宛毎月無相違屹度返納可到、若金不足ヲ生スル片ハ月送トナスハ貴殿御諾之事、

但、所得ノ内祝金并ニ廓内費引去ノ上御渡相成モノトス、

第五条

病氣(罹)ニ掛リ又ハ稼業スルヲ得サル事故〔父母兄弟姉妹等〕ヲ生シ休業シタル片ハ、所得金僅少ニシテ前条金員引去リ難キ場合ハ別ニ自弁可到事、

第六条

前条ノ場(合脱カ)ニ依リ貴殿承諾ニ依リ仮ニ廢業シタル片ハ、病氣ノ全癒又ハ事故ノ止ミタル日ヨリ十五日以内ニ復業可到事、

第七条

第五条ノ場合ニ於テハ貴殿ノ差図ニ従ヒ稼業上ニ要スル衣類物品ハ貴殿へ相預ケ、仍テ左項目ニ従ヒ証明到スヘキ事、
一 病氣ニ罹リタル片ハ貴殿ノ信用アル医員ノ証明書、

第八条

遠隔ノ地ニ旅行スル片ハ前条第二項ニ從ヒ、又ハ貴殿ヨリ
着先へ御照会信認セラレタル後^(出カ)生發可到事、

第九条

貴殿ノ承諾ヲ得テ扱所替ヲナシタル片ハ既ニ返納シタル金
員ヲ扣、余シ残額ヲ移転扱所ヨリ貴殿直ニ請取可相成事、

第十条

^(安)忘リニ他行シ又ハ失跡等ノ所為アル片ハ新聞紙上ニ広告セ
ラル、モ決テ異論無之、又他ニテ稼業セントシ或ハヒソカ
ニ稼業シ居ル場合、發見セラレタル片ハ故障セラル、ハ勿
論、速ニ復歸シ稼業可到事、

第十一条

稼業中貴殿ニ対シ不当ノ義ヲ申立、又ハ代人等差入苦情ケ
間敷引合ヲナシ、又ハ其筋へ訴へ出ル等ノ義ハ決テ到サ、
ル事、

但、貴殿へ申入へキ正当ノ事由アリト思考シ示談整ハサ
ル片ハ取締ニ申立、仍ホ調和セサルハ総取締ノ解論ヲ請
クモノトス、

右契約ハ貸座敷取締ノ面前ニ於テ連署ノ者立会取結ビタル

モノニシテ、決テ違背到間敷、為後証依テ如件、

明治廿五年五月五日

松本うた^印

木村弥造^印

江島常七殿

^(別紙)

借用金確証

一金拾円也 但利足

右之金額正ニ請取借用仕候処実正也、然ル上返済之儀ハ私
稼業上リ金ヲ以テ明治廿五年七月三十日ニ無相違返済可仕
候、為後日借用証依テ如件、

明治廿五年五月六日

松本ウタ^印

江島常七殿

一七四 東京洋服同業組合所定年期証書・契約証

請人

住所

保証人

殿

参 銭
印 紙

年期証書

府 郡 市 町 村 番 地

弟男

年 月 日 生

右之者今般私共請人保証人ニ相立チ、大正年^(ママ) 月 日

ヨリ来ル大正 年 月 日迄満 年間貴殿方へ洋

服職徒弟ニ差出候事実正ナリ、然ル上ハ右年期中本人身分

ニ付キ如何様ノ儀出来候共拙者共引受ケ、聊カ貴殿へ御迷

惑相懸ケ申間敷候、且又本人病氣療養等ノ為メ永ク欠勤致

候節ハ万事貴殿ノ御指揮ニ從ヒ処理取計ヒ可申候、其他現

行ノ法律命令ハ勿論貴殿御家風堅ク為相守可申候、為後日

差入年期証、仍而如件、

大正 年 月 日 住所

本人 兄 父

東京洋服同業組合指定興信部所定

参 銭
印 紙

契約証

儀本年 月 日ヨリ来ル大正 年 月

日迄貴殿方へ洋服職伝習徒弟トシテ御雇入被下候ニ付

テハ、年期中正実ニ相勤メ可申ハ勿論右年期中自分事故或

ハ親病氣等ヲ以テ下宿致候敷、又ハ万止ムヲ得サル事故出

来貴殿御承諾ノ上御解約被下候節ハ、御指揮ニ從ヒ食費相

償ヒ可申、又ハ本人ノ自儘或ハ不都合ノ事有之契約履行不

致候節ハ一ケ月 円ノ割ヲ以テ伝習料及食費相償ヒ且違

約金 円差出可申、其他御給与被下候品々悉皆返納可仕

候、万一人前記ノ義務相運ヒ兼候節ハ、連署保証ノ者連

帯ノ責ヲ負ヒ該義務必ス速ニ相弁シ可申候、為後日契約差

入証書、仍而如件、

大正 年 月 日 住所

本人

親権者
後見人

住所

保証人

住所

保証人

殿

享保四己亥歲九月六日

黒門通一条上ル町井筒屋

養子親

善 兵 衛 印

松坂屋
請人

三 郎 兵 衛 印

坂本屋
請人

市 郎 右 衛 門 印

川勝寺村出在家町井筒屋

九郎右衛門殿

右之銀子但シ四ツ宝ニテ五貫目分也、為念如此御座候、

一七五 養子賞請狀

養子請狀之事

一 此他之助と申者当年拾壹歳ニ罷成候、我等養子ニ申請候、則為持参銀と銀子壹貫式百五拾目慥ニ請取申候、然上は跡式不殘譲りとらせ可申候、若不縁ニ而其元江戻シ申候ハは右之持参銀無相違相添急度返弁可申候、其上如何様之儀出来仕候共野良悪敷方へむさと奉公ニ遣シ申間鋪候、為後日之一札、仍而如件、

一七六 家内不如意につき暮方差図依頼狀

御頼申口上

一 今般私宅相統一付則惣兵衛殿御世話ニ而貞治郎と申者養子ニ申請ケ置候処、此方家内逐年不如意ニ成リ相統一及兼難相立候ニ付、今般御一家衆様へ御頼申家内之大勘定拾年此方帳面御改被下候様、以来私共之暮シ方任用立御差図被下候様御頼申上ケ候処、御承知被成下偏ニ忝仕合ニ存候、然上ハいケ様共御差図被下候趣無違背承知可仕

候、私ハ勿論家内一統ニ皆様ヘ一言之違義取別ケ申訳ケ
無之親類兄弟共迄相添御頼申事ニ候、何分可然御沙汰御
頼申上ケ度図々御頼申上ケ候、いケ様之御差図ニ預り候
共一言之違背恨不足ケましき事申間敷候、為後日之御頼
状書付、仍而如件、

天明七年未四月

五条新町南入
松葉屋 滝印
同妹

滝娘
ゆ く 印
まさ

九郎右衛門殿

御一家中様

一七七 糸割符店丸屋相続につき縁類・別家連印請

書

〔端裏書〕(糸カ)
□割符中間へ差出し置候下書

寛政九己六月糸割符江養子佐太郎願之一札 別家中

一札

一此度源太郎及重病候処実子無之ニ付縁類別家之者相談之

上、久兵衛倅佐太郎と申拾壹歳ニ成り候者名跡ニ相立テ
申候間、糸割符右之者江名跡之儀御預被下候様一同御頼
奉申上ケ候、右ニ付家業体取締之儀は別家四人之者日勤
取計仕候得は御仲間 御用向等も無滞相勤申候、然は何
角被入御念被仰聞候趣承知仕候、少しも源太郎混難不仕
候様一同申合仕置候処相違無御座候、

一源太郎儀暫ニ而も当役相勤メ候ニ付、佐太郎一代は高三
拾斤外ニ加糸拾斤頂戴之御取計被下一同難有仕合奉存候、
依而連印一札、如件、

寛政九年己六月

縁類
井筒屋
辻井九郎右衛門判
閏七月廿九日判形致置

吉文し屋

吉田 甚兵衛判

飯村 右近判

松は屋
領田 九兵衛判

別家
丸屋 吉兵衛判

丸屋 甚介判

丸屋 治兵衛判

丸屋新助判

倉光弁左衛門殿

(江原丸)

忠七殿

同 甚助印

同 治兵衛印

同 新助印

一七八 糸割符店丸屋相統一件につきあとより印形

依頼につき一札

一札

一此度鎌田家相続之儀ニ付、糸割符御年寄方より以後洩難不仕候様申合相談可仕候段一札差出候由被申候処、其元殿御不快ニ而御引籠被成候砌ニ候故、私共一同連印仕年寄方江一札差出し置申候、其節其元殿印形無之候ニ付一同和合仕相続仕度奉存候故、従跡印形之儀御願申候所御承知之上調印被成下何れも一同和談之儀ニ相成大悦ニ奉存候、右従跡印形御願申候事故為念一札、依而如件、

巳閏七月

吉田甚兵衛印

領田久兵衛印

丸屋吉兵衛印

辻井九郎右衛門殿

一七九 丸屋相続の養子を実父連帰る一件訴訟につ

き口上書

乍恐口上書を以奉差上書附

乍恐奉差上口上

一京都大仏之内翰屋町五条下ル三丁目丸屋源太郎と申者、去ル六月初之比落^{死去}命仕一子も無御座候ニ付、村方之内松尾御旅所社人飯村右近^死悴当巳二十歳ニ相成り候もの右丸屋へ養子相談仕早速右近連レ参り罷在候、然ルニ其後閏月二日ニ如何敷義哉、何之無^(ママ)相對も不致悴を右近連^(ママ)歸り候故数度相戻し可申由一家別家中より申参り候得共不^(ママ)取あへず打捨置、剩今般何之無相對も御奉行所様江願書^(ママ)をヲ上ケ、取分ケ一家別家大勢ヲ相手取り、則当十三日

之御裏印頂戴仕候段驚入候、右御日当対決致し候様被為
仰付候へとも、右御日当ニハ罷出候へとも御聞濟ニ相
成り候、右之趣乍恐口上書を以奉差上ケ候、以上、

寛政九年巳八月

出在家
九郎右衛門
年寄
利右衛門
組頭
平 八

数主税様

一八〇 丸屋相統出入一件につき親類・別家取決め書

〔端裏書〕
寛政九年巳十月廿六日

割符仲間
拵摺ニ認メ出候 証札下書吉兵衛持参

申堅証札之事

一去ル六月鎌田源太郎急病及太切候処、名跡相統之者無之
飯村右近倅佐太郎久兵衛倅ニ致シ糸割符相願家督相立候、
然ル処源太郎膝中陰相成り候跡取締之儀ニ付、右近未決
之事ながら不安心之旨申立及 御公訴候、相互ニ混雜ニ
相成り却而本家相統之筋ニも不相成ら候間、此度親類并
ニ別家猶又一同申堅メ左之通り、

一 久兵衛佐太郎親分ニ相定在之候得共、本家相統之儀一同
及評議壺人立取り計自儘之了簡用不申候事、

一 右近実親ニ候得共佐太郎成人之上たりとも、鎌田家之儀
何ニよらず連判之者有之事無之候ハ、自儘ニ取り計申間

鋪候事、

一 九郎右衛門甚兵衛是又一同評儀之□^(上カ)ならてハ取計申間敷
候事、

候事、

一 別家之者之内吉兵衛後見として万事平日氣ヲ付家事取り
締り可申事、右之外別家之者日勤相詰万事可及相統候事、^(談)

一 佐太郎報方縁類申合可申聞候、自然後年身持不埒不行跡

之儀在之候ハ、無異儀家屋鋪并抱家屋鋪諸道具迄當時
之姿ニ差置キ、本人佐太郎右近方江引取可申事、

一 本家勘定之儀毎月立会取り計可申事、右之通り申堅候上

ハ 御役所江出入之儀申下ケ、後年至候而も氣々違失無
之ため此証札三通相認メ、糸割符方年寄中豊浦町川勝寺

村頭役江預ケ置候事、

一八一 丸屋相続出入以後親類互いに申談すべき旨

の濟状

(別紙)

(端裏書)
寛政十年午二月廿日濟状

乍恐濟状

一私従弟丸屋源太郎病氣及大切私悻佐太郎ヲ名跡養子ニ遣し置候処、相続之義ニ付及出入親類百姓九郎右衛門吉文字屋甚兵衛百姓久兵衛并別家之者共相手取御願申上候処、去八月十三日双方御召合之上御聞懸ケニ相成、其後段々御吟味被成下難有奉存候、然ル処右出入之義此度糸割符年寄中井源太郎町役之もの共より致挨拶呉候ニ付、下ニ而段々対談之上名跡人佐太郎儀ニ付以後銘々啗人立存寄立不申、親類互ニ申談家名相続可致管ニ而申堅、証札取替セ出入下濟仕、以来双方互申分も無御座候ニ付、乍恐連印濟状奉差上候、御慈悲ニ濟状之趣御聞届ケ被成下候ハ、難有奉存候、

寛政十年午二月廿日

右申堅之写共差上ル、

飯 村 右 近

渡 辺 恭 丸

代中村伊織

百姓九郎右衛門

庄屋久左衛門

年寄彦 兵 衛

代利右衛門印

千本五辻下ル町
吉文字屋甚兵衛

年寄武 兵 衛

代佐 兵 衛

日向町
百姓久 兵 衛

年寄 (ママ)

代伊 三 郎

鞆屋町五条下三丁目
丸屋吉 兵 衛

同 治 兵 衛

同 新 介

年寄甚左衛門

五人組 嘉兵衛
 同 重次郎
鞆屋町正面上ル町
 丸屋甚 助
 年寄 又右衛門

一八二 丸屋源太郎死後相続出入一件和談につき届

書

乍恐濟状御届ケ口上書 申上候

一去ル八月以来鞆屋町丸屋源太郎死後相続之儀ニ付御奉行
 所様へ御願申上及争論候処、今般割符仲間年寄源太郎町
 役人中より御挨拶被成下、互ニ和談得心之上御奉行様へ当
 廿日ニ以連印右之通済証札差上ケ候ニ付、乍恐口上書を
 以御届ケ奉申上ケ候、御聞濟被成下候ハ、難有可奉存候、
 以上、

寛政十年午二月

川勝寺村

百姓

伝右衛門印

同

九郎右衛門印

数主税様

庄屋 久左衛門印
 年寄 喜兵衛印
同所出在家
年寄 利右衛門印
 組頭 平八印

右之通京都様御役所江御届ケ申上置候、

則 (ママ)

一八三 吉辰養子引取祝儀につき挨拶状

尚々御老母様始御内室様へ宜御伝可被下候、尚又愚
 妻も私々御嘉詞可申上との御事ニ御座候、以上、

今般就吉辰御養子御引取御祝儀首尾克御調可被成ト目出度
 奉存候、依之目錄之通進上之仕候、誠ニ御祝義之印迄ニ表
 寸志而已御座候、今日は以參上相応之御執持可仕処無拋義
 ニ付乍略以忤御嘉詞奉申上候、此段御光来之御客様始御類
 中様方へ宜御断被仰可被下候、且不調法之忤宜御引廻しを

頼上候、尚万喜期拜顔之時候、恐惶謹言、

四月廿六日

田井九郎右衛門勝延(花押)

辻井九郎右衛門様

具屋市左衛門作二成、仍而帳切手形如件、

享保六年十一月十日

藤井勝之進

一八四 帳切之事

帳切之事

式反四畝廿步 高三石七斗五升

瓜野村

宇左衛門

今八堺馬屋町道具屋

市左衛門

右拙者入方也、

正徳五乙未年十二月五日

坂上隼人

一八六 奉公人請狀之事

奉公人請狀之事

一此治兵衛と申者先祖が能存知慥成者ニ付我等万事之請人罷立、当丑十二月の来寅十二月切、銀銀百拾匁只今慥ニ請取奉公無滞為相勤申所実正也、御公儀様御法度之趣堅為相守可申候、尤御停止之切支丹転人ニも無之候、宗旨ハ浄土宗則寺請狀別紙ニ取進候、若治兵衛不奉公仕候歟又は御氣ニ入不申候ハ、人代相立可申候、万一治兵衛金銀取逃欠落仕候ハ、早速尋出取逃之品々改相渡可申候、其外いケ様之出入懸合出来仕候共我等請人何方迄も罷出急度埒明、御主人江少も御難儀懸ケ申間敷候、為後日奉公人請狀、仍而如件、

一八五 帳切手形之事

帳切手形之事

壹反拾步 高老石三斗三合定

右は遠里小野村四郎左衛門作實物ニ指入、自今堺馬屋町道

明和六年丑十二月

(付箋)
「南大工三町目
奈良屋庄右衛門借屋」

請人 和泉屋松右衛門

親 和泉屋さん

奉公人 治兵衛

道具屋市左衛門殿

一八七 奉公人請狀之事

奉公人請狀之事

一 此新助と申者先祖が能存知慥成者ニ付我等万事之請人罷立、当卯正月の来ル戌十二月迄九年八ヶ年切、給銀四拾九匁只今慥ニ請取奉公無滞為相勤申所実正也、御公儀様御法度堅為相守可申候、尤御停止之切支丹転人ニ而も無御座候、宗旨は浄土宗則寺請狀別紙ニ取進候、若新助不奉公仕候敷又は御氣ニ入不申候ハ、人代相立可申候、万一新助金銀取逃欠落仕候ハ、早速尋出取逃之品々改相渡可申候、其外如何様之出入出来仕候共我等請人何方迄

も罷出急度埒明、其元江少も御難儀掛申間敷候、為後日奉公人請狀、仍而如件、

明和八年卯正月

請人 河内屋五郎兵衛

親 羽瀬義助

奉公人 新助

道具屋市左衛門殿

一八八 奉公人請狀之事

奉公人請狀之事

一 此新助と申者先祖が能存知慥成者ニ付我等万事之請人罷立、当卯正月の来ル戌十二月迄九年八ヶ年切、給銀四拾九匁只今慥ニ請取奉公無滞為相勤申所実正也、御公儀様御法度堅為相守可申候、尤御停止之切支丹転人ニ而も無御座候、宗旨は浄土宗則寺請狀別紙ニ取進候、若新助不奉公仕候敷又は御氣ニ入不申候ハ、人代相立可申候、万一新助金銀取逃欠落仕候ハ、早速尋出取逃之品々改相渡可申候、其外如何様之出入出来仕候共我等請人何方も(迄脱力)

罷出急度埒明ケ、其元へ少しも御難儀懸ケ申間鋪候、為
後日奉公人請狀、仍而如件、

泉州深井安村

明和八年卯正月

請人
南村市郎右衛門 印

親
羽瀬義助 印

奉公人新助 印

道具屋市左衛門殿

右奉公人新助儀去西五月十三日家出仕行衛相知不申候処、

去十二月右新助私方江手寄申候処、其元不奉公残年親義助

相濟被申候由粗承り候故、田原仁左衛門方江奉公ニ差進置

候処、御懸ケ合之上引戻し御願被申上候処双方御召被為

仰付候、然ル処私不埒之段御詫申上候而残年当三月より来亥

十一月迄壹ケ年八ケ月私請人ニ罷立急度為相勤可申候、尤

是迄請人河内屋五郎兵衛印形相加へ候得共、右前段之出入

ニ付向後請人相替り五郎兵衛請判相除ケ申候、仍而奥書如

件、

泉州深井安村

請人
南村市郎右衛門 印

親
羽瀬義助 印

奉公人新助 印

一八九 銀子借用証文

預り申銀子之事

一銀三十拾目也

右之銀子只今慥ニ請取預り申所実正也、返済之儀は来ル十

二月切急度相渡可申候、尤利銀壹ケ月ニ四分五厘ツ、無相

違相渡可申候、万一人滞儀有之候ハ、請負方より右之元利

共急度無相違返済可申候、為後日預り証文、仍而如件、

天明三年卯正月

預り主
河内屋安右衛門 印
請負人
島屋市右衛門 印

道具屋市左衛門殿

一九〇 田畑譲り状

譲り渡シ申一札之事

砂領境東
一上田式畝歩 高四斗

同所
一中畑四畝式拾歩 高六斗

同所
一上畑九畝五歩 高壺石五斗式升

右之御田畑三ヶ所我等所持之名前紛無御座候所、此度以相対ヲ其元へ名前帳面譲り渡シ申所実正也、為其礼物ト銀子四百拾五匁只今慥ニ請取申候、若此御田畑ニ付脇々違乱妨申者在之候ハ、此印形之者共何方迄も罷出急度埒明可申候、為後日御田畑譲り渡シ証文、仍而如件、

天明五年巳正月

御田畑譲り主

山之口

米屋庄右衛門 印

証人

河内屋 弥市 印

道具屋市右衛門殿

双方々届ヶ就有之帳切替致遣シ申候、以上、

庄屋

三十一郎 印

同

喜兵衛 印

道具屋市右衛門殿

一九一 奉公人請状之事

奉公人請状之事

一津国屋てう娘ろくと申者先祖へ能存知慥成者ニ付万事之請人ニ罷立、当午三月々来ル西三月迄九年三ヶ年切、為其給銀百目只今慥ニ請取奉公無滞為相勤申所実正也、御公儀様御法度之趣堅相守セ可申候、御止停之切支丹転人(停止)ニ而も無御座候、宗旨は浄土真宗錦寺町浄因寺旦那御座候、則寺請状請人方へ取置可申候、御入用之節は請人々差遣し可申候、右ろく不奉公仕候敷又は御氣ニ入不申候ハ、早速不相応無之人代成共給銀ニ而も其元御勝手宜敷方ニ而相立可申候、若ろく儀金銀取逃欠落仕候ハ、早速尋出取逃之品改相渡可申候、尤如何様之出入掛り合出来仕候共我等請人何方迄も罷出急度埒明、其元へ少シも御難儀掛ケ申間敷候、為後日奉公人請状、如件、

天明六年午三月

受人

大坂屋利兵衛 印

道具屋市右衛門殿

親 津国屋てう

代判 大坂屋清兵衛印

奉公人ろく印

一九二 銀子借用証文

〔未二月覺老貫目遠里小野村并出作八人連印〕

証文之事

一 銀老貫目也

右は当村去午御年貫小前不納人有之皆濟差支申候ニ付、其元御頼借用申、則只今慥ニ請取申処実正也、来ル五月切利足壹ヶ月ニ銀拾式匁宛差添急度返済可申候、為後日仍而如件、

天明七年未二月

摂州遠里小野村庄屋

喜兵衛印

同 三十一郎印

百姓代

八郎兵衛印

内町貞齋殿

一九三 銀子借用証文

預り申銀子之事

一 銀六拾目也

右之銀子只今慥ニ請取預り申所実正也、然ル上ハ来ル九月切壹歩半之以利足元利共相渡可申候、為後日預り証文、仍而如件、

寛政元年酉四月

道具屋市右衛門殿

島屋新七印

尤右銀子来ル切月ニ相滞候ハ、其元々相納可申御年貢定米

堺出作組頭

同 太郎兵衛印

同 新助印

同 市左衛門印

同 左兵衛印

同 伊兵衛印

五斗ツ、御引取可被下候、且御年貢請取書三枚相添其元へ相渡シ置候間右定米年々御請取可被下候、其上預り銀元利都合并米代差引以勘定ヲ可然算用可給候、為後日御年貢引宛証文、如件、

寛政元年酉四月

島屋新七[㊟]

道具屋市右衛門殿

一九四 帳切手形之事

帳切手形之事

遠里小野村領分字山口堤下水田
一八畝式拾歩 高老石参斗

步代六分五厘

前八堺錦之町山口

和泉屋勘兵衛

今八同山口式丁目

道具屋市右衛門

右之田地今度勘兵衛^〆断申出ルニ付、市右衛門名前ニ相改

遣ス者也、

寛政三年亥九月六日

入方

梅園佐次右衛門[㊟]

一九五 帳切手形之事

帳切手形之事

遠里小野村領分字^ハ山口堤下^ノ南江八枚目
一九畝歩 分米老石壹斗七升

^(マ)堺比馬屋町和泉屋

勘治郎

今八同堺同町道具屋

市右衛門

右此度勘治郎^〆依而断ニ帳面之名前同所道具屋市右衛門名前二切替遣ス、則右帳切此方江取置者也、右帳切手形、依而如件、

寛政三辛亥年九月十日

照洞院[㊟]

一九六 奉公人請状之事

奉公人請状之事

一此利八と申者先祖^〆能存知慥成者ニ付我等万事之請人ニ罷立、当寅十二月廿五日^〆来ル卯十二月廿五日切、為其給銀百四拾五匁只今慥請取奉公無恙為相勤申所実正也、御公儀様御法度之趣堅為相守可申候、御停止之切支丹転人ニ而も無御座候、宗旨ハ融通念仏宗、則寺請状之義ハ

請人方ニ請人方ニ取置可申候、其元御入用之節ハ差進可

申候、若利助義金銀取逃欠落仕候ハ、早速尋出シ其品々

改相渡可申候、万一利介不奉公仕候哉又ハ御氣ニ不申候

ハ、人代相立可申候、其外如何様之出入掛り合出来仕候

共我等請人何方迄も罷出急度埒明、其元へ少も御難義掛

ケ中間敷候、為後日奉公人請狀、仍而如件、

寛政六年寅三月

請人
茶碗屋太兵衛印

河内屋まつ
代印弥兵衛印

奉公人 利助

道具屋市右衛門殿

道具屋市右衛門殿

一九七 銀子借用証文

一九八 御田地引請一札之事

預り申銀子之事

一 銀式貫目也 但シ利八朱定

右之銀子此度村方入用ニ付、只今慥請取借用申所実正也、

来ル卯五月切利足相添返濟可申候、万一連判之内壱人ニ而

御田地引請一札之事

一 反畝合七反八畝式拾八步

分米拾式石八斗七升壹合

も滞もの有之候ハ、残ル者方々元利共相濟可申候、為後日
預り連判証文、仍而如件、

寛政六年寅三月

遠里小野村

庄屋

三 十 郎 印

年寄

嘉 兵 衛 印

惣百姓代

惣左衛門 印

同

五郎右衛門 印

同

七郎兵衛 印

堺出作物惣代

和泉屋

五郎兵衛 印

右之御田地当村甚三郎所持之处此度其元へ被相讓候、

一反畝合七反式拾式步

分米拾石九斗四升六合

右之御田地当村新左衛門所持之处此度其元へ被相讓候、

都合反畝壹町四反九畝式拾步

都合分米式拾三石八斗壹升七合

然ル上は右之御田地ニ付其元御勝手も悪敷御座候へは何時

成共我等方へ譲り請可申候、村方帳面切替次第ニ御田地讓

り代銀三貫四百目相渡し可申候、為後日引請証文、仍而如

件、

御田地引請人金田村

寛政九歳巳十二月

利右衛門印

道具屋市右衛門殿

右之蚊帳壹張借り請申所実正也、然ル上ハ其元入用次第

差戻し可申候、為後日請取一札、仍而如件、

寛政十一年未五月四日

河内屋庄兵衛印

道具屋由右衛門殿

二〇〇 下作請負一札之事

下作請負一札之事

一米式石七斗也

右宛米之通畑地我^(等脱カ)下作仕申所実正也、来十一月晦日限り北

庄村下作定直段ヲ以宛米之通御年貢皆済可仕候、万一相滞

儀在之候ハ、請負人方より未遣共急^(進)度皆済可申候、為後日

下作御年貢請負一札、仍而如件、

寛政十二年申七月

(ヤヤ)印

網屋甚藏印

道具屋市右衛門殿

一九九 蚊帳借用証文

一札之事

一布蔭茅蚊帳壹張

二〇一 蒲団借用証文

借請申一札之事

一木綿菊小紋蒲団三帳

右は其元所持之木綿蒲団三帳我々無抛入用ニ付只今慥ニ受
取借請申所実正也、然ル上は右蒲団損料壹帳ニ付一日一夜
拾式文ツ、毎日無滞相渡し可申候、尤蒲団其元入用之節は
不限昼夜ニ何時成共差戻し可申候、万一印形之内相滞者有
之候ハ、残ル印形之者^(固脱カ)右蒲不申ニ及損料共急度相立可申
候、為後日借請連判一札、仍而如件、

寛政

(マ)

榎並屋藤兵衛印

榎並屋作左衛門印

道具屋由右衛門殿

一畑地壹ヶ所 拾五歩 高三升五合

一畑地壹ヶ所 拾歩 高三升三合

式畝式拾五歩 高合壹斗四升八合
但高槻入七道領並松之西ニ在之

右之御畑地年来我等所持来り申候所此度以相對其元へ名前
帳面譲り渡申所実正也、則為其礼銀子三百五拾五匁只今慥
ニ請取申候、若此畑地ニ付違乱妨申者在之候ハ、左之判形
之者共何方迄も罷出急度埒明可申候、為後日之御畑地譲り
渡証文、仍而如件、

文化元年子十二月

畑地譲り主

河内屋小いさ印

代判清兵衛印

証人 松屋吉左衛門印

右之通相違無御座ニ付奥印仕候、

庄屋

甚 兵衛印

二〇二 畑地譲り状

道具屋市右衛門殿

譲り渡申御畑地之事

一畑地壹ヶ所 式畝歩 高八升

二〇三 本銀返畑地譲り渡証文

本銀返譲り渡証文之事

字ハ口山除ケ下開
一下畑九畝式歩 分米九斗九升八合

右之御畑地我年来所持来り候所此度御年貢銀ニ差詰代銀三百目其元へ譲り渡銀子儘請取申所実正也、然ル上は三ヶ年之内本銀調達仕候ハ、右御畑地此方へ御戻し可被下候、尤切過候ハ、弥永久其元へ譲り渡可申候、為後日之御畑地譲り渡証文、仍而如件、

文化九年申十二月

譲り主
和泉屋庄左衛門印
証人
和泉屋喜兵衛印

前書之通相違無之ニ付奥印如件、

庄屋
庄 兵 衛印

道具屋市右衛門殿

一銀壹貫目也

右之銀子我等儘ニ預り申候処実正也、然ル上は其許殿御入用之節何時ニ而も壹ヶ月ニ拾五匁宛之利足相加元利共無違滞急度返済可仕候、為後日銀子預り証文、仍而如件、

予州岩城

文政四巳年十二月

三原屋長七
代
大神丸吟藏印

道具屋市右衛門殿

(別紙)

預り申銀子之事

一銀壹貫目也

右之銀子我等儘ニ預り申処実正也、然ル上は其元殿御入用之節何時ニ而も壹ヶ月ニ銀拾五匁宛之利足相加元利共無違滞急度返済可仕候、為後日銀子預り証文、仍而如件、

予州岩城

文政四巳年十二月

三原屋長七
代
大神丸吟藏

宿
淡路屋与右衛門印

二〇四 銀子借用証文

預り申銀子之事

道具屋市右衛門殿

和泉屋庄兵衛

一銀壹貫五百目也

二〇五 銀子借用証文

借用申銀子之事

一銀四百三拾式匁也

右之銀子我々中へ借用申所実正也、返済之義ハ当四月切月

壹歩半之利足相添返済可申候、万一連判之内相滞者在之候

ハ、相残印形之者方ハ元利共急度返并可申候、為後日之借用連判証文、仍而如件、

文政七年申二月

住吉丸
由

藏印

和泉屋
喜右衛門

印

道具屋市右衛門殿

二〇六 銀子借用証文

借用申銀子之事

二〇七 銀子借用証文

借用申銀子之事

一銀三貫五百目也

右之銀子我々中江慥ニ請取借用申所実正也、尤返済之義ハ

当九月ハ十二月晦日迄四ヶ月之間月々拾匁五分宛利足計相

渡可申候、然ル上は卯正月ハ壹卜合度二元銀江八拾三匁三

分四厘利足式拾壹匁都合メテ百四匁三分四厘ツ、皆済迄無

滞急度返済可仕候、若印形之内差支之者有之候ハ、相残印

文政七年申二月

住吉丸
由

松印

和泉屋
喜右衛門

印

道具屋市右衛門殿

形之ものゝ無滯急度返済可仕候、万一壹ケ度ニ而も相滯之義有之候節は月壹歩半之利足相加江皆済壹度ニ御取立被成下、其節我々一言之申分無御座候、為後日借用連印証文、仍而如件、

文政十三年庚寅九月

木屋 弥平 印

金屋九兵衛殿

代判 同 ちか
徳 兵 衛 印

二〇八 銀子借用証文

連印借用一札之事

一合銀式百目也

右之通髓ニ受取借用申所実正也、尤返済は何時ニ而も月々壹歩半之利足相添へ元利無滯返済可申候、若印形之内故障在之候ハ、残ル印形之内ゝ元利返済可申候、為後日連印借用一札、依而如件、

天保五年六月

沢之口村 治 介 印

道具屋市左衛門殿

二〇九 銀子借用証文

借用申一札之事

一銀壹貫目也

右之銀子無抛要用ニ付唯今髓ニ受取我々中へ借用申処実正也、尤返済之儀は当七月ゝ引続皆済ニ相成候迄月々拾匁宛無滯急度返済可申候、万一壹ケ月ニ而も相滯義有之候ハ、皆銀一時之御取立被成候共一言申分無御座候、若又判人之内差支之者有之候ハ、残ル判人之者ゝ前書之通返済可申候、為後日借用一札、仍而如件、

嘉永元年申七月

同村 善 介 印
我孫子村 善 左衛門 印
同村 半 七 印

井川 与 三兵衛 印
榎並屋 佐 兵 衛 印
代判 半 兵 衛

柴屋三郎兵衛殿

二一〇 田地質物証文之事

田地質物証文之事

島村領字九町目裏高畑
一畝反六畝歩

高七斗壹升四合

村田富三郎様入

同所

一五畝式拾歩

高三斗九升七合

堀川右衛門様入

同所

一式畝式拾歩

高壹斗八升七合

同人様入

三株壹面也

右之田地我等所持ニ御座候処此度銀子要用ニ付当未五月

(ト)

来申四月ノ限り其許殿江元銀壹貫百五拾目之質物差入、則

銀子只今儘ニ受取借用申候処実正也、然ル上は右限月中右

田地其許殿江相渡シ可置之処以相對ヲ我等直小作仕、御年

貢諸役共此方ノ相勤メ為作徳銀と壹ヶ月ニ銀六匁九分宛相

加へ都合急度返済可申候、万一限月ニ到リ元銀并作徳銀共

聊ニ而も相滞候ハ、右田地其許殿名前之帳面切替無異儀相渡シ可申候、其節自他之差構申者毛頭無御座候、為後日之田地質物証文、仍而如件、

安政六未年五月

質置主

伝

兵衛

請人

新吉

信十郎殿

二一一 奉公人請狀之事

奉公人請狀之事

一新助娘ひでと申者慥成者ニ付我等請人ニ相立、当酉六月

ノ来戌年六月迄壹ケ年之間其元江乳母奉公ニ相極、尤給

銀之儀ハ壹ケ年銀百四拾匁定ニて則壹ケ年分只今不殘慥

ニ受取申所実正也、此者義宗旨は代々浄土真宗金田村光

照寺旦那ニ紛無御座候、則寺請狀之儀は別紙ニ請人方江

取置候、何時ニ而も御入用之節差出し可申候、御公

儀様ノ被為 仰出候御法度之趣急度相守奉公大切為相勤

可申候、勿論右奉公中利不^(理)尽隙乞等仕間敷候、若奉公中

取逃欠落不奉公仕其節紛失之品等有之候ハ、早速尋出し相弁可申候、且又御家風ニ逢不申候歟、亦ハ大病長病ニ奉公勤り兼候ハ、早速親受人方へ引取人代なり共給銀なり共其元思召次第ニて相渡可申候、其外同人ニ付如何様之六ヶ敷義出来候共親受人何方迄も罷出急度埒明、其元殿江少しも御難義相懸ケ申間敷候、為後日之請状、依而如件、

但し、右 (ママ) 重年ニ御召拘被下候ハ、拾ヶ年之間此請状御用ヒ可被下候、且又二季之匳物御着せ可被成下候約定ニ御座候、

文久元酉六月

奉公人親
和泉屋
新
請人
長屋
市
助
樂

二二二 銀子借用証文

差入申証文之事

一合銀百六拾匁七分式厘也

右は御町内兩季配符銀滞相違無之、近年來諸式高直馬荷働等無數故自然と滞ニ相成、御町内ニ而難渋御察被成下是迄ハ御宥免も被成下候ニ付追々不足銀相嵩一統之難義ニ相成候ニ付、御出願可成様被 仰御尤何共可申様無之、依之仲人楠太郎殿相頼濟方相歎候処、御承知被下約定仕候通老ヶ月晦日毎ニ銀四匁ツ、濟込相納可申候、若老ケ度ニ而も不納仕候ハ、此一札を以如何様共御取計被下候とも聊申分無之候、為後日差入申一札、依而如件、

文久三亥年八月

升屋 音吉

右約定仕候処相違無之、若老ケ度ニ而も本人不埒仕候ハ、私々約定之通無相違相納可申候、為其印形差入置候、以上、

御年寄
道具屋市郎左衛門殿

坂田屋楠太郎

二二三 田地建家屋鋪畑質物証文之事

田地建家屋鋪畑質物証文之事

字石原口淨法くろ
一中田式反七畝拾歩 高四石八斗六升八合

内三畝拾歩 高四斗六升八合 地狹引

一屋畑壹畝三步五厘 高壹斗七升九合三勺

一屋畑貳拾九歩 高壹斗五升三合九勺

一居宅壹ヶ所 桁行四間半
梁行三間

尤屋根瓦葺両日差附釘附有姿之儘

一土蔵壹ヶ所 桁行

尤屋根瓦葺也釘附有姿之儘

右之田地建家屋鋪畑我等所持ニ候処、此度銀子入用ニ付当

子正月々来ル十二月限り其元殿江元銀三貫目之質物差入、

則銀子只今慥ニ請取借用申候処実正也、尤限月中右質物其

許殿江相渡し可置処以相對ヲ我等直小作并借家ニ借り請、

為利足銀と壹ヶ年ニ銀貳百匁ヅ、相加へ無滯急度返済可申

候、万一相滯候ハ、右質物其許殿名前ニ村方帳面切替無異

儀相渡し可申候、其節親類ハ不申及自他之差構申者毛頭無

御座候、為後日之田地屋鋪地建家質物証文、仍而如件、

文久四子年正月

質置主

仁 兵衛

請人 市 兵衛

市 兵衛

李太良殿

前書質物高畝無相違承り届與印如件、

庄屋

中野信十郎

二一四 金子借用証文

預り申金子証文之事

一金子拾兩也

代

右金子入用ニ付無拠借用申慥ニ請取申候処実明白也、然

ル上右金子返済之義は何時成共其元御入用之節は月六朱之

利足相添元利共無滯急度返済可申候、為後日金子預り証文、

依而如件、

子三月

梅香院

請ケ人 納

勘 兵衛

綿依講

御世話人中

二二五 金子借用証文

預り申金子証文之事

一金子五両也

代

右之金子入用ニ付無拠借用申儘ニ請取申候処実正明白也、然ル上右金子返済之義ハ何時成共其元御入用之節は月七朱之利足相添元利共無滯急度返済可申候、為後日金子預り証文、仍而如件、

戌十二月

梅香院代
勘 兵 衛 印
掃依講
御世話人中

二二六 地屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持東側地屋敷壹ヶ所、我等死後は娘てん江相讓申処実正也、然上は親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日譲状、仍而如件、

享和貳年戌七月四日

小川通上鍛冶町

年寄庄兵衛殿

五人組町中

譲主
高島屋儀右衛門印

二二七 二二九 二二〇 二二二 二二四 家屋敷
譲り状

譲状之事

一当町我等所持西側家屋敷壹ヶ所、我等死後は倅儀兵衛、娘とも、孫丑之助右三人江相讓申処実正也、然ル上は親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日譲状、仍而如件、

嘉永四亥年十一月廿四日

譲主
高島屋まつ印

小川通上鍛冶町

年寄庄助殿

五人組町中

讓状之事

年寄平左衛門殿

一当町我等所持家屋敷三ヶ所、我等死後ハ忩半次郎、娘た

五人組町中

み兩人江相讓可申旨文政八酉年五月廿四日讓状差出

御割印頂戴仕罷在候処、右兩人共相果候付此度相改我等

讓状之事

死後は忩儀兵衛、娘とも、孫丑之助右三人江相讓申処実

正也、然ル上は親類縁者其外他所ハ違乱妨申者毛頭無之

候、為後日讓状、依而如件、

一当町我等并母まつ兩人所持之家屋敷三ヶ所、此度右まつ
老人之所持ニ讓渡申処実正也、然ル上は親類縁者其外他所
ハ違乱妨申者毛頭無御座候、為後日讓状、依而如件、

嘉永元年申年八月四日

讓主
高島屋まつ印

文政八年酉五月廿四日

讓主
高島屋たみ印

小川通上鍛冶町

小川通上鍛冶町

年寄庄助殿

年寄平左衛門殿

五人組町中

五人組町中

讓状之事

讓状之事

一当町我等所持家屋敷三ヶ所、我等相果候ハ、忩半次郎、

娘たみ右兩人江相讓申処実正也、然ル上は親類縁者其外他

所ハ違乱妨申者毛頭無御座候、為後日讓状、仍而如件、

一当町我等所持家屋敷三ヶ所、我等死後は妻まつ、娘たみ
兩人江相讓申処実正也、然ル上は親類縁者其外他所ハ
違乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

文政八年酉五月廿四日

讓主
高島屋まつ印

文化十二年亥十二月十四日

讓主
高島屋半兵衛印

小川通上鍛冶町

小川通上鍛冶町

年寄平左衛門殿

五人組町中

二二八 家屋敷譲り状

讓状之事

一当町我等所持家屋敷式ケ所、我等死後は娘ふさ、同つる
 兩人江相讓申処実正也、然ル上は親類縁者其外他所も違
 乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

文政四年巳八月十四日

讓主
 高島屋こう印

小川通上鍛冶町

年寄藤兵衛殿

五人組町中

二二二 家屋敷譲り状

讓状之事

一当町我等所持家屋鋪壹ケ所、我等死後は町中江相讓申処

実正也、然上ハ親類縁者其外他所も違乱妨申者毛頭無之
 候、為後日讓状、依而如件、

弘化二巳年九月十四日

讓主
 菱屋喜兵衛印

小川通上鍛冶町

年寄庄助殿

五人組町中

二二三 家屋敷譲り状

讓状之事

一当町我等所持西側北之方家屋鋪式ケ所并同南之方家屋敷
 四ケ所、右六ケ所共我等死後は妻みや、悴吉次郎右兩人
 江相讓申処実正也、然ル上は親類縁者其外他所も違乱妨
 申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

嘉永四亥年十一月廿四日

讓主
 富田屋吉兵衛印

小川通上鍛冶町

年寄庄助殿

五人組町中

二二五 家屋敷・地屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋鋪壹ヶ所并地屋敷四ヶ所共、我等死後は悻善七、同清三郎、同竹次郎右三人江相譲申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

明治三千年三月

小川通上鍛冶町

年寄庄次郎殿

町中

讓主
八文字屋
ゑ

い印

二二六 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋鋪壹ヶ所、我等死後は妻りき、悻清次郎、弟甚吉、娘ちう右四人江相譲申処実正也、尤親類其

外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

明治五年壬申十一月

小川通上鍛冶町

戸長
松田龜次郎殿

町中

二二七 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、我等相果候ハ、妻ふさ、伯母その兩人江相譲申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無御座候、為後日讓り状、仍而如件、

文政八年酉五月廿四日

讓主
石原屋宇八印

堺町通八百屋町

年寄伝助殿

五人組町中

二二八 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、我等相果候ハ、母ふさ江相譲申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申もの毛頭無御座候、為後日譲状、仍而如件、

文政十年亥十二月四日

譲主

石原屋むめ印

堺町通八百屋町

年寄伝助殿

五人組町中

後日譲状、仍而如件、

文政十年亥十二月四日

譲主

石原屋宇八印

堺町通八百屋町

年寄伝助殿

五人組町中

二二九 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、我等相果候ハ、妻ふさ、娘むめ兩人江相譲申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申もの毛頭無之候、為後日譲状、仍而如件、

天保三辰年九月十四日

譲主

石原屋宇八印

堺町通八百屋町

年寄伝助殿

五人組町中

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、文政八年酉五月廿四日妻ふさ、伯母その兩人江死後譲状差出 御割印頂戴仕罷在候処、右その相果候ニ付此度相改娘むめ江譲渡申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無御座候、為

二三一 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、此度兄卯三郎事卯八江讓渡申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

嘉永三戌年六月廿四日

讓主

石原屋むめ印

堺町通八百屋町

年寄彦兵衛殿

五人組町中

二三二 家屋敷譲り状

譲状之事

一当町我等所持家屋敷壹ヶ所、我等死後は妻しほ、忰卯之助、妹むめ三人江相讓申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申者毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

嘉永三戌年六月廿四日

讓主

石原屋卯八印

堺町通八百屋町

年寄彦兵衛殿

五人組町中

二三三 居宅家屋敷再譲り状

譲状之事

一当町我等所持居宅家屋敷壹ヶ所、嘉永三戌年六月廿四日妻しほ、忰卯之助、妹むめ三人江死後讓状差出 御割印頂戴仕罷在候処、右しほ、卯之助、むめ三人共相果候付、此度相改我等死後は後妻いし、忰定吉、娘てる三人江相讓申処実正也、尤親類縁者其外他所違乱妨申もの毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

元治元子年三月廿四日

年寄
讓主

石原屋卯八印

堺町通八百屋町

五人組彦兵衛殿

同 忠次郎殿

町中

二三四 家屋敷譲り状

譲状之事

一 当町我等所持家屋鋪壹ヶ所、我等死後は妻いし、忝定吉、娘てる三人江相讓申処実正也、尤親類縁者其外他所も違乱妨申もの毛頭無之候、為後日讓状、依而如件、

元治元年三月廿四日

年年寄 讓主

石原屋卯八^印

堺町通八百屋町

五人組彦兵衛殿

同 忠次郎殿

町中

二三五 地屋敷売渡につき町中への念書一札

一札

一 我等親類橋本卯八儀其御町内ニ表口壹間裏行拾貳間五寸

三步役之地屋敷壹ヶ所所持罷在候処、此度大辻八兵衛殿

江売渡候付御町中へ被入御念候趣承知仕候、右地屋敷ニ

付借財金銭出入之懸り合等ハ勿論親類其外他所へ出入差

構毛頭無之候、若彼是申出候共我等罷出埒明仕御町中江

御迷惑等相懸申間敷候、為後日一札、依而如件、

明治六年

売請人

鹿島弁藏^印

売主

橋本卯八^印

堺町通八百屋町

戸長

越智忠次郎殿

町中

二三六 実子アル者養女賞請願

実子アル者養女賞請願

北区曾根崎新地二丁目第四十番地

吉川清兵衛

私義長女コマナルモノヲ以テ嗣子トナスヘキ者ニ御座候所、私親戚之内ニテ先年来死跡断絶シ相續イタシ候モノ無之故

ニ私血族ノ内ニテ相当ノモノヲ相撰相統致サセ可申兼而之
存慮ニ御座候、然ルニ相当之モノモ無之儘在再トシテ今日

ニ立至リ候所、幸ハヒ東成郡玉造村東雲町一丁目七十六番
地平民小沢与市妹ニカヤト申モノ有之、聊回縁ニモ有之者

ニ付同人ヲ養女ニ貰請ケ、成長之上絶家再興相統致サセ申
候へハ地下ノ靈魂ヲ慰ムヘキ理由モ御座候ニ付、親族共協

議之上決定仕候間事情御明酌ヲ參ラレ願意御許容被成下度、
戸籍写相添親族連署ヲ以此段奉願上候也、

明治十七年三月十五日

右

吉川清兵衛

西成郡清堀郡廿五番地

親族物代

安藤佐七

東成郡玉造村七十六番地

小沢与市

前書之通申出候条奥印候也、

戸長

高山幸治郎

北区長鹿島弥兵衛殿

〔書面願之趣聞届候事、
(朱)

明治十七年三月十七日 大阪府北区長鹿島弥兵衛印〕

二三七 養女に差遣わすにあたり実家絶家の節は復
籍の積りの連帯約定証

割印

印紙

連帯約定証

一今般拙者実娘カヤ儀貴殿方エ養女ニ差遣シ候処確實也、

然ル上私方ニ於テ跡相統ノ者誰レ啗人モ無之則絶家ニ至
ル杯之際ハ、実意之及頼談双方承諾之上諸芸月謝料并ニ

養育料共其期限之精算相立悉皆済方之上エ復籍可仕候、
万一該金難出来節ハ連印之者誰彼不論相残ル印形之ヨリ

皆済可致償却候、為後証之連帯約定証旁依而如件、

明治十七年三月十八日

実親

小沢佐助印

実兄

小沢与市印

実母

たけ印

親類物代

真辺房吉印

前書之通相違無之候ニ付、保証仕候也、

媒介

田中しげ印

吉川清兵衛殿

二三八 養女に差違わずにあたり実家絶家の節は復
籍の積りの約定証

兼親
吉川清兵衛殿

約定証

一 這回拙者娘誰義貴殿方江養女ニ差シ遺候処実正也、然ル
上ハ私シ方ニ於テ跡相統之者誰也人モ無之、則絶家ニ至
ル杯之際ハ実意之頼談ニ及ビ双方承諾ノ上技芸并ニ諸芸
ノ月謝料及養育料其期限ニ精算相立、悉皆済方ナラテバ
不縁致し不申候、万一該金難出来節は連印之者共誰彼ヲ
不論相殘ル印形者ハ皆済可致償却候、為其連帯約定証、
依而如件、

府下西区松島花園町六拾七番地

明治拾七年申三月

実親
小沢 佐助
実母
同 タケ

府下東成郡西玉造村
東雲町卷丁目七拾貳(ママ)番地
実兄親

小沢 余一

前書之通り相違無之候ニ付、奥印致シ候也、

媒介

二三九 養女芸妓營業希望につき実親連帯依頼確証

連帯依頼確証

一 拙者実娘誰儀某殿媒ヲ以テ分家相統養女ニ罷在ル処、今
般本人心意ヨリ芸妓相當ミ度旨日々申張り候ニ付、実親
子亦は何々親族之間柄ヲ以テ前頭芸妓業止リ可申様御念
之御論シ引合^(被)下候ニ付、則連印之親類共集会協議之上
右娘誰エ段々説論仕候得共達而不聞入、依之両親親類ニ
至リ迄皆々承知致シ候上ハ不^(得)脱力御手數該營業之運ビ御
依頼申上候処無相違故ニ、向後ニ至リ無謂取戻シ候杯ハ
勿論、芸妓之營業ヨリ生スル百事ノ事故并ニ本人相望ミ
ノ縁附ニ於テ本人其許殿へ御承諾ニ候ハ、私共中ハ決テ
異論申上聞敷候、為後証連印依頼方証、如件、

明治拾七年申三月

実親
小沢 佐介
実母
同 タケ

親類惣代

前書之通り御引合無相違ニ付、奥印仕候也、

媒人

養親
吉川清兵衛殿

二四〇 養女芸妓營業希望につき実親依頼連帯確証

(割印)

印紙

依頼連帯確証

一其許殿御息女おカヤ殿儀養女ニ罷在候処、今般本人心意
ヨリ芸妓相営ミ度旨日々申張り候ニ付テハ、実親子之間
柄ヲ以テ芸妓業止リ可申様御念之引合被成下候ニ付、則
親族共集会協議之上右かやエ段々説諭仕候得共達而申張
リ不聞入、依之連印共承知仕候上ハ御手数ナレ右本人
心意之通御取計依頼申上候所実正也、然ル上ハ無謂取戻
シ杯ハ勿論芸妓業ヨリ生ズル百事之事故并ニ縁附ニ於テ

モ私中異議少シも決テ異議申上間敷候、為其連印依頼証、
如件、

前書之通無相違ニ付、依而保証仕候也、

吉川清兵衛殿

実親
小沢佐助 印
実母
たけ 印
実兄
小沢与市 印
親類惣代
真辺房吉 印
媒介
田中しげ 印

二四一 金円借用証文

(割印)

証券印紙

借用金子確証

一金式拾円也 但^{利子壹ヶ月ニ付}金^{三拾錢定メ}
右金額要用ニ付来ル明治十八年十月三十日限り正ニ借用仕
候処確實也、依之毎月廿八日毎ニ但書定メ之通利子御渡可
申は勿論、期日元金何時ヲ不論一時返済可致候、若其際ニ

至リ本人旅行又ハ如何ナル事故有之候トモ請人之者引受元
利取揃悉皆償却可致候、為後証借用金子確証、仍テ如件、

明治十八年酉六月十五日

吉川清兵衛殿

二四二 金円借用証文

(割印)

証券印紙

連帯借用証

一金拾円也

但シ 利子壹ヶ月ニ付
金拾六錢六厘約定

右之金額要用ニ付来ル明治十九年一月三十日限り正ニ借用
仕候処実正也、然ル上は期日何時ヲ不論元利トモ一時返済
可致候、若期日ニ至リ連帯之内旅行又は如何ナル事故出来
候トモ誰レ彼レヲ不論相残ル印形之者ヨリ悉皆返済可致候、
為後日連帯借用証、仍テ如件、

明治十八年十二月三十日

吉川清兵衛殿

二四三 養女の縁にて借金につき取決め証書

(割印)

証券印紙

証

一拙者二女カヤ儀去ル明治十七年三月十八日親族協議之上
貴殿方へ養女ニ差進シ候処、自分儀不幸打続キ夫ガ為困
難仕ニ付本人養女之縁ヲ以テ明治廿一年四月廿七日附之
本紙借用証之金額正ニ借用仕候処確実也、万一カヤ儀不
縁等ニ相成候節ハ結納金及養育料ハ不申及其他別紙証書
之借用金ハ速ニ返済可致、其上ナラデハ本人引取間敷候、
為後日証書、依而如件、

明治廿一年四月廿七日

小沢左助

吉川清兵衛殿

二四四 金円借用証文

(割印)

証券印紙

借用金証

一金四拾五円也 但^{利子}御制限通り

右之金額無抛要用有之正ニ借用申候処確實也、御返済之儀

ハ御約定通り明治廿一年十月三十日限り元利取揃速ニ返済

可致候、為後日借用金確証、依テ如件、

明治廿一年四月廿七日

小沢左助^印

吉川清兵衛殿

二四五 借用金円受取証文

(割印)

証券印紙

証

一拙者養母今般死亡致シ候処、目下自分必至困難之場合ニ

テ葬式仕ニも差支ヘ候ニ付テハ、自分ニ女カヤ儀ハ従前

貴殿方ヘ養女ニ差進シ有之候縁ヲ以テ貴殿方ニ於テ是迄

度々金員之恩借モ有之候成共、他ニ金借仕目的モ無之ニ

付不得止貴殿江金員借用之義御依頼仕候処、早速御承諾

ニ相成金拾五円御差送り被下正ニ受取候処実正也、右金

員ハ別而恩借之義ニ付此義務ハ決而忘却不仕候間、向後

無心ケ間敷義ハ毛頭申出間敷、為後日証書、依テ如件、

明治廿一年六月廿一日

大阪府下東成郡玉造村東雲丁卷丁目百十番地

小沢与一^印

小沢佐助^印

吉川清兵衛殿

二四六 金円借用証文

(割印)

証券印紙

借用金証

一金參拾円也 但^{利子壹ヶ月}御制限通り

右之金額無抛要用有之候ニ付正ニ借用致候処確實也、御返

済之義ハ貴殿ヨリ御請求日ヲ期限ト見做シ其際無相違返済

可致候、万一連印之内旅行或ハ事故有之節は残ル捺印之者

ヨリ元利皆済一時返進可致候、為後日借用金証書、依テ如

件、

明治廿三年三月六日

大阪府東成郡大字玉造町
字東雲町壹丁目百十番屋敷

借用主
小沢与市 ㊦

借用主
小沢佐助 ㊦

大阪市北区曾根崎新地二丁目廿一番屋敷

証人
福井音七 ㊦

吉川清兵衛殿

二四七 借金返済しない内は以後新規借金頼まない

旨差入証

割印

証券印紙

差入証

一拙者儀貴家ニ於テ是迄度々金員借用致シ有之未ダ返済モ不致候処、当時益々困難之場合ニ至リ不得止金員借用之義御依頼仕候処、数度之借用金有之二付御断リニ相成候得共、何分他ニ金借スルノ目途モ無之ニ付押而金員借用之御依頼仕ニ付、寛大之御思召ヲ以テ別紙借用証之金額

正ニ借用仕候処実正也、然ル上ハ此後如何様之義有之候

共以前之借用金返済不致内は金員借用之義は元ヨリ無心

ケ間敷義は決而申出間敷、為後日差入証書、依テ如件、

明治廿三年三月六日

小沢与市 ㊦

小沢佐助 ㊦

証人
福井音七 ㊦

吉川清兵衛殿

二四八 カヤ身請につき芸妓営業中の負債償却金等

受取証写

割印

一銭

証

一金五百円也

右は私者娘カヤ義今回貴殿方御客人様ノ妾ニ相成候ニ付テ

ハ、カヤ芸妓営業中ニ諸負債有之右償却方ヒ及ヒ他ノ諸消

費トシテ御投与被下難有受納候也、

明治廿七年第十二月廿七日

吉川清兵衛印

豊田お艶殿

二四九 養女芸妓廢業の内祝金受取証

御請

一金三十拾円也

右ハ貴殿息女おかや殿今回芸妓業ヲ廢シ正業ニ復サレ候ニ就テハ、御内祝トシテ前記金員御贈り被下難有受納仕候、

吉川清兵衛殿

二五〇 金円請取証

(割印)

証券印紙

証

一封金参拾円也 右は小沢佐助請受

一封金五円也 右は中川コト請受

前書金額正ニ落手仕候者也、

明治廿七年十二月廿八日

右 小沢佐助 印

吉川(清次)吉兵衛殿

二五一 根書

根書

大阪府下東成郡西玉造村
東雲町老丁目七拾貳番地住

印 実兄 小 沢 与 一

同

同妹 か や

同府下西区松島花園町第六拾壹番地
印 実親 小 沢 佐 助

右 中川コト 印

中川先生のことども

遠藤 浩

中川善之助先生が東北大学から学習院大学に来られたのは昭和三六年である。それから七年おられて昭和四三年学習院大学を去られ金沢大学学長となられた。

先生は人も知るとおり、民法、その中でも身分法（家族法）の権威者であられた。「身分法学習の親、新民法生みの親」という先生の墓碑銘（鎌倉東慶寺にある）がそれをよく物語っている。

先生の業績の一つである『相続法』が書きあげられたのは、学習院の研究室であった。「最後の原稿をいま渡したところだよ」という先生の笑顔が今でも忘れられない。

先生が身分法（家族法）の分野で数々の業績を残されたことについては、すでに多くの人がとりあげているので、先生の別の面をとりあげてゆきたい。

身分法学者（家族法学者）は、その研究の対象が家族構成、家族内の秩序、家族間の紛争というところから、身分法（家族法）の研究にあわせて、民族学や社会学の研究、心理学や精神病学の研究をする人が多くなっている。中川先生は、このうちの前者の研究に向われた最初の民法学者であったと思われる。しかも、その研究は実に興行の深いものであった。先生をしてこうした研究に向わしめた直接の動機は、若いときに読まれた、テニース、フィアカントといったドイツの社会学者、メーン、パッホーフエン、フレージャー、マリノフスキーなどの人類学者などの著書の影

響であったと思う。それとともに、先生の旅ずきをあげなければならぬ。社会学研究とか人類学研究は、必然的に実態調査というものを伴うもののものであるが、先生は、これらの著書の影響を受けつつ、日本中隈なく旅行されることになる。ついには足は海外に向われ昭和十三、四年には、マリアナ、カロリン、マーシャルの三群島の調査に出かけられる。そこでの婚姻形態の調査に基づく論考は、民族学にとっても貴重な収穫であったといわれている。

先生は、旅先で、調査されるとともに、その土地の歴史を考えられた。そして、地酒を好まれ、土地の古老から民謡をききそれを覚えられた。こうした旅先で書かれたものをあつめられた本が『民法風土記』である。和綴じの、いかにも先生の人柄がしのばれるような装丁本である。この本は、民法上注目をあつめた判例について、その事件のあった土地を訪ねられ、事件のあらまし、判決のあらましを、その土地の風物を背景に物語られている。そこには、先生の鋭い、民族学的、社会学的見方がある。さらに、その底に、貧しき者、弱き者に対する先生の心のあたたかさが強く流れている。

先生の日本での調査は、身分法的旧慣にあったことはいうまでもない。東北各地は足の至らざるはなしという状態であった、と先生は書いておられる（『北向きの部屋』より）。そこで「姉家督」という相続形態をまとめられるのである。この名称は先生がつけられたもので、最初に生まれた子が女であれば、その後長男が生まれても、その女の婿が家督をとるといふ慣行である。こういう慣行は、東北なら大ていの土地にあったらしい。

ところで、旧法（戦後民法が改正されるまで行なわれていた民法のこと）では、男子優先主義をとっていたから、こういう場合には長男が家督相続人となることになっていた。そこで、長女の婿と長男との間で家督をめぐる争いがおこることになる。先生の表現を借りれば、民法対旧慣の対立である。先生はこの種の争訟の評釈をよく書かれた。この種の評釈で、先生の評釈が一きわ光るのは、このような背景があるからである。

先生のこうした旧慣の調査は、おのずと歴史の研究に向わせる。先生は、万葉集や古事記の歌をこのうえなく好まれたが、そこに、末子相続の形態があり、それが強く心をひきつけることになったのか、あるいは、姉家督の調査・研究を通して相続形態の調査・研究にことに興味をもたれた結果なのか、先生は、昭和八年頃から末子相続の調査・研究を先生が亡くなられた昭和五〇年まで続けられることになった。

末子相続の調査・研究は、まず長野県諏訪地方で行なわれた。そこで、大正時代まで、末子相続の慣行のあったことをつきとめられる。この調査のとき、なかなか、この慣行を客観的に物語るものがでてこないで、新聞で訴えられたそうである。その反響が意外に大きく、いろいろな人が文書をもってこられたそうだが、そのなかに、江戸時代からの代々の医師の家があり、その家の人が家系図を持参され、その家系図はずっと末子相続で、諏訪地方の慣行に従ったものであると書いてあったというものであったそうで、その嬉しさといったらなかつたと先生はいわれていた。学習院に來られて、スタッフの間の研究会をもった時期があつたが、先生はその時、末子相続の話をされ、諏訪の話は大変たのしそうに話しておられた。その後も、先生は各地を回られるたびに末子相続を調査された。とくに、鹿児島、和歌山、香川、奄美大島では収穫が大きかつたようである。その間、幾つかの末子相続の論文を発表されたが、その集大成をおえないままに世を去られた。残された調査史料の量は相当なものである。

先生の構想の中には、末子相続の沿革、その背景（主として経済的貧困地域に多い）、相続形態の中で占める地位、そういう柱があつたと思われる。晩年、先生は、誰か若い人で、有能な人が、私に（中川先生に）協力してくれないものだろうか、この史料を整理して、まとめを書きたいとよくいわれていた。当時、先生のお弟子さんたちは各地に散り、それぞれ責任ある地位につかれ、学習院ではまだ弟子が育つ体制がととのつていなかったということで、先生はその志の果たされないままに世を去られた。

私は、この貴重な史料（末子相続やその他に関する史料）の散逸することを恐れ、学習院大学に史料館が設置されたことでもあり、愛弟子の泉教授とも相談して、史料館に寄贈して頂けないかを先生の奥様にお願ひしたところ、快よく承諾して頂いた。心より感謝の言葉を捧げさせて頂きたいと思う。しかも、史料がこういう形で出版されることになって、地下の先生も必ずや御喜びのことと思われる。

先生は、学習院の木立が大変好きで、夕方よく散歩されておられた。時々、孫のような若い学生と一しよだった。先生ほど、若い学生を愛された人も少ないと思われる。それだけに、学生からも慕われた。

東北大学にある中善並木（中川先生のために植樹された桜の並木）、夏になると、仙台から、東京の中川先生のところまで歩いてくる学生たち、学習院の図書館の前にある中川先生のゼミの学生たちが建てた石碑などみなそれを物語っている。

先生は、教え子の結婚式につとめて出席されたが、その時、万葉の中からとった夫婦愛をうたった歌を自ら書き、わざわざ九谷でそれを皿にして贈るのがつねであった。何をするにも、こまやかに、心のこもった行為をされた。しかも、それをさりげなく、気のつかれないようにされるのがつねであった。

学習院にいられてから旅好きの先生と旅をとにした。宿で大きく先生の民謡はすばらしいものであった。先生の酒はたのしい、いい酒だった。

先生が金沢に去られてからもよく先生と酒をとにし、旅をした。ことに、飯坂、香山、林屋学兄やかつての助手の諸嬢と金沢に先生を訪ね、能登を一しよに旅をした日が忘れられない。たのしい旅であった。学園紛争の終末期であったとはいえ、心身ともに疲れておられた先生にとってもいい旅であったようだ。

私が、先生を知るようになったのは、先生の五五歳頃であるから、先生のやさしさとか研究への熱情とか以外に知るところが少ない。若い日の先生のきびしき、強さは、先生の随筆とか、先生のお弟子さんの語り草から知るだけである。

ともあれ、先生の一生を通じて変らなかつたのは、人への思いやりと研究への熱情であつたと思う。先生は、どこに出られても、ほとんどの場合、一たん研究室に帰られ、机を前にして何らかの仕事をして帰宅された。そこが、先生の心のいいこの場所のようにさえ見えた。

あのように幅の広い学者はもう出現しないのではないかと思われる。私の生涯で、先生と一しよに時を過すことができたのは、それが一〇年であつたとしても、ありがたいことであつた。また、学習院にとつてみても、中川先生を迎えることのできたことは、幸せなことであつた。

昨年、前述した能登へ旅行したかつての助手が中川先生の奥様を招待してささやかな会をもつた。私も相伴にあづかつたが、先生の奥様の御元氣なのに、大変嬉しく思い、先生の思い出話にはながさいたことであつた。

たまたま、その折も、この史料の話が出たが、奥様もいたく喜んでおられた。これを企画して整理して下さつた児玉学長、大石教授、その他の協力して頂いた人に心から感謝の意を捧げたい。

(学習院大学法学部教授)

中川善之助寄贈文書（上）

学習院大学史料館所蔵史料目録 第3号

昭和53年3月30日発行

発行者 学習院大学史料館

代表者 大石慎三郎

東京都豊島区目白1-5-1

（電）03-986-0221 〈内〉569

